
きぬはたっ！

風美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きぬはたっ！

【Nコード】

N9550L

【作者名】

風美

【あらすじ】

学園都市の暗部に潜む非公式組織『サークル』。汚れ仕事を引き受けているこの組織は、構成員一名の解散寸前の状態にあった。宇都宮日向は己の目的のために『サークル』に所属していたが、白井黒子や虚空爆破事件などに関することになり……。

01：虚空爆破（前書き）

【注意事項】

この小説は『とある科学の超電磁砲』の二次創作です。

『とある魔術の禁書目録』も含まれます。

前提として両方とも読んでいないと理解できないところが出てくる
かもしれません。

この小説の主人公はオリ主です。

オリ主が原作キャラ（絹旗最愛）とくつつきます。

あらかじめご了承下さいませ。

01：虚空爆破

宇都宮日向は五本目の煙草に火を付けた。

チエーンスモークだ。これではいけないと思いつながらも、手が勝手に胸ポケットの煙草を探っている。完全にストレスが原因だ。宇都宮が肺癌で死ぬ前に、学園都市には癌の特効薬を開発して欲しいものだ。いや、心筋梗塞というのものもあるか。結局、死にたくなければ煙草をやめると言うことだ。

これが終わったら、ゆっくり風呂に入ろう。とっておきの入浴剤をぶち込んで、温泉に浸るような気分を味わうのだ。

「と言うか、これってやっぱり死亡フラグ……だよな？」

宇都宮はピンク色の看板が踊るビルを見上げ、ぶるつと身を震わせた。

一見してラブホテルに見えないことはないが、実際はただのゲイバーである。無数のテナントが入っているビルで、一階部分がコンビニ、二階部分はモノレールの駅から伸びている通路と連結しており、そこにはカラオケボックスがあった。そして、三階から四階にかけて謎の区画 スキルアウトの連中が経営している、違法シヨップが軒を構えている。そして五階がゲイバーだ。

秩序というものを亜空間に放り出したような謎のビルに、宇都宮は額に手を当てて眩暈を堪えた。

「やつほー、宇都宮。ひとカラですか？ あまりに超可哀想でこっちまで泣けてくるんですけど」

「いいじゃん。一人でカラオケ、略してひとカラ。意外と楽しいんだぞ。入店直後の店員さんの『お一人ですか？』と言う哀れむような言葉が、慣れて来るところゾクゾクつとするんだよな」

「うっわー」

「と言うのは、もちろん冗談だ。冗談に決まってるだろう畜生め！……なんか超必死すぎて、もういいですよ。それでいいですから」

コホン、と宇都宮は小さく咳払いする。

宇都宮の前にいたのは、肩にかかるくらいの髪をボブカットにした少女だった。今日は学校帰りなのだろうか。学校指定のブレザーと、校則をぶっちぎっている短いスカートを着いていた。そこらのビッチとは違うミニスカートだと言っただが、宇都宮には違いがわからない。

中学生の少女の若さは、宇都宮にはまぶしすぎて、思わず目を覆い隠したくなるほどだ。

一方の宇都宮は冴えない青年で、よれよれのカッターシャツと何日も洗濯していないジーンズを着ていた。ちよつとだけ自己主張してみましたと言うようなメタリックな装飾が目立つベルトを巻いているが、ぶっちゃんけ似合ってない。この姿で合コンに行けば、間違いないく女の子が帰ってしまうだろう。

「と言うか『アイテム』が出てくるなら俺じゃないじゃん。もう帰ってもいいよね？」

「なに寝言ほざいてやがるんですか。私はただの監視、頑張って超突入するのは宇都宮ですから」

「面倒だな。ゲーム貸してやるから代わってくれない？」

「エロゲですか？ さりげなく布教活動とかやめてくれませんか？

キモイですから。女子中学生を拉致監禁して言葉にできないあんなことやこんなことをやるゲームなんて超いららないんですけどー」

「お前の中では俺ってそんなキャラなのか……」

断言されるように言われて、宇都宮はガツクリと肩を落とした。

心外な評価に異議を唱えたいところだったが、何時までも駄弁っている訳にもいかないだろう。

「あと、この件については『アイテム』は一枚も噛んでませんよ。

私も超先ほどメールで呼び出されたばかりですから」

「俺も信用されてないのかな」

「日頃の行いが超悪いですからね。援交とかマジでやめた方がいいと思います」

「やってねえよ！」

宇都宮は色々な意味でやれやれと肩をすくめる。

カラオケ店に入ろうとする女子高生の集団が不思議そうに振り返っていた。十九の大学生と十二の中学生の取り合わせは、場違いにもほどがあつた。

腕時計を確認すると、宇都宮は　よし、と気合いを入れる。

「じゃ、行ってくるわ」

宇都宮はビルの横に引つ付いた非常階段を登り始める。

このような場所なのに、何故か監視カメラが取り付けられていた。当たりだ。普通のビルなら、わざわざこのような場所を見張るような理由はない。

やっほー、と手を振るが、当然反応はない。

だが、見ているのだらう。宇都宮は笑顔のままドアに手をかざした。

ゴンッ　と、地底から響くような衝撃が、ビル全体を大きく揺らした。

襲撃を予想していたのだらう。“溶解”したドアの奥は、すでに臨戦態勢に入っていた。

無数の銃弾が宇都宮の全身に浴びせられる。

防衛者たちが構えていたのは自動小銃。

およそ三十発入りのマガジンが空っぽになるまで撃ち尽くされる。外れた流れ弾がコンクリートの壁をも貫いて粉塵が飛び散っていた。視界がうつすらと煙に覆われるが、防衛者たちは冷静にマガジンを交換すると、再び銃口を襲撃者に向けて構える。

襲撃者は、未だに立っていた。

二百発を超える銃弾を浴びても、血液をまき散らしながらぶっ倒れるどころか、敵前だというのに胸ポケットから取り出した煙草を啜え　道具を使わずに火を付けた。

「こいつ、発火能力者か!？」

パイロキネシスト

「確かに見た目は似てるけど、同等のように言わないで欲しいな。俺のは『業火使い(フレアマスター)』だから」

「っ、撃て! 撃ち尽くせ!」

宇都宮はどうでもいいたばかりに室内に踏み込んだ。

防衛者たちが後退りながら銃撃を繰り返すが、弾丸は宇都宮に触れる直前に“蒸発”する。

「亜鉛の沸点は九〇七度。鉄は二七五〇度。言っている意味がわかるか?」

中学の理科の教科書を広げれば、どこかに載っているレベルの問題だ。いや、スキルアウトの連中には無縁の話だったか。

宇都宮は煙草の煙を吐き出した。

「しかし最近のスキルアウトは小銃なんて物騒な物を持つてるのかよ」

部屋を見回すとテーブルには拳銃が収められたホルスターが綺麗に並べられており、壁には映画でしか見ることのないような細長い銃がかけられている。ロケット弾を打ち出すような筒が無造作に床に放られていた。さながらテロ直前の決起集会のような光景がそこにあっただ。

これは、ただのスキルアウトではなさそうだ。

ジャケット

風紀委員なら話は別なのだろうが、宇都宮にはそのようなことは関係ない。彼に与えられた命令は『始末しろ』と言うものである。

背後関係を洗うのも、取り調べを行うのも、すべて別の組織がやることだ。彼らを捕縛する必要がなかったから、宇都宮が呼ばれたのだ。

死の恐怖に泣き崩れそうな顔をしている連中に、宇都宮は優しく微笑みかけた。

「じゃ、死んでくれ」

瞬間、燎原に広がるように炎が部屋中を埋め尽くし、灼熱の業火が男たちの身体を燃やし尽くす。

真っ赤な部屋の中で、切り取られたような安全地帯にいた宇都宮はそつと煙草を床に落とす。

線香のように煙がゆらめき、宇都宮が背中を向けてから二分後、煙草は酸欠によって音も立てずにゆっくりと燃え尽きた。

十

十分後、宇都宮は密室に閉じ込められていた。

「うっわー、宇都宮ラブソングとか超やめて下さいよ。超耳が腐りますから」

「おいこら勝手に俺の曲を止めるんじゃないやねえ……って割り込みかよ！ 死ねよクソビッチ！」

「まさかのマジ切れ！？ 代わりにこの絹旗ちゃんの超美声を聞かせてあげますから機嫌直して下さいよ！」

「……ったく、アニソンはやめると言うから普通の曲にしたのに」
およそ十人を虐殺した後、外で待っていた少女　絹旗最愛に報告を済ませ、さっさと帰宅してエロゲして寝よ、と考えていた宇都宮は、どう言うわけかカラオケボックスに押し込まれていた。『拒否るなら独りでゲイバーに突撃させる』と言う、改めて考えてみると意味不明な脅しに屈した結果だった。

烏龍茶をストローですすり、宇都宮は手慰みにカタログを手繰る。

「どうですか宇都宮！ 振り付けまで超完璧でしょう！」

「暗黒太極拳ですね、わかります」

「宇都宮、ちよつとこっちに来なさいと言うか殺す超ぶつ殺す！」

マイクを振り下ろす絹旗の攻撃を、宇都宮はカタログを盾にして防ぐ。

スピーカーが鈍重な悲鳴を吐き出しているところで、ドリンクの交換にやってきた店員が扉を開けた。二人とも同時に「あっ」と口

を半開きにする。

数分後。

「……まあ、こうなるわな」

「……私もちよつと超調子に乗ってました」

宇都宮たちは外に放り出されていた。

ちやつかり入店時に受け付けで言っておいた時間分の料金をむしり取られ、宇都宮の財布は幾分か軽くなっている。

辺りはすっかり暗くなっていた。看板のネオンやフィラメントが灯り、夜の街を鮮やかにライトアップしている。繁華街を目指しているサラリーマンの集団や、帰宅中の学生たちの波が往来を行き来し、宇都宮たちは示し合わせることなく、人波に乗って歩き出した。しばらく、会話のない時間が続く。

大通りを折れると人気が減り、絹旗はようやく肩から力を抜いた。

「いいですか、宇都宮。一つ窺いたいことが超あるんですけど」

「残念だが答えられそうにないな。脇毛の本数までは流石の俺も数えたことがないから。つかあまりにキモすぎて引くわー」

「そうですね……って、誰がそんなことを超言いましたか!？」

絹旗の腕が振り上げられ、轟ツ、と女子中学生の非力な見た目にはそぐわない爆音が宇都宮の耳の脇を掠める。

オフエンズアーマー

彼女の超能力『オフエンズアーマー空素装甲』は空気中の空素を操り、装甲車の突撃を受け止めたり、数百キロの鉄塊を持ち上げることができる。

「殺す気か！ マジで死んだらどうするんだ!」

「世界の悪が超滅びるだけですこの下衆ネタ野郎!」

「ぜー、はー、と息を荒げる宇都宮たち。」

やがて互いに不毛だ……と肩を落とし、驚いた様子の周囲の通行人をさらりと無視して歩き出した。

しばらく無言で過ごし、やがて絹旗が脇道に逸れる。

「さつき聞こうとしていたことなんですけど」

絹旗は振り返り、手を後ろに回して宇都宮を見上げた。

「宇都宮は、何時まで『サークル』にいるつもりなんですか？」

宇都宮は息を詰ませた。

学園都市には暗部を支える非公式組織がある。

世界最先端の技術を諸外国に売り飛ばそうとする者もいれば、他国から諜報員が送り込まれることもある。

宇都宮たちは学園都市の上層部が“邪魔”だと判断した連中を始末する組織に所属していた。

宇都宮は『サークル』、絹旗は『アイテム』。

「何時まで、か」

「壊滅しちゃったじゃないですか『サークル』は。解体とかそういう次元の話じゃないです。構成員が宇都宮一人だけとか、超笑えない冗談にもほどがありますよ」

「俺にも、よくわからん」

「宇都宮！」

絹旗が叫んだ。今にも泣きそうな顔だ。

結構長い付き合いになるが、新しい発見だった。こいつは、こんな顔もするのか。

「宇都宮なら『アイテム』に……」

「絹旗」

宇都宮が声を挟む。これ以上は言うてはいけないと諭すように。

「ありがとう」

拒絶した。

「ッ！」

背を向けて走り出す絹旗を、宇都宮は追いかけてようとは思わなかった。

「お前まで巻き込むわけにはいかないんだよ」

煙草を口に挟む。そして気付いた。

そう言えば、絹旗といた間は一本も吸っていなかった。

午後三時。

大学の食堂で遅い昼食を取っていた宇都宮は、どう言うわけか女子中学生の詰問を受けていた。

「カレー……. ですか？ 貧乏だったらしい食事ですこと」
「悪かったな、貧乏で」

時間が時間なので食堂自体は混雑していかないのだが、まばらに出入りする学生たちが向ける奇異の視線が、宇都宮のガラスのハートをザクザク抉っていく。

腕組みをしたツインテールの少女が、二百五十円という食堂では素うどんの次に安い飯をかき込んでいる宇都宮を見下ろして嘲笑していた。早漏な男を馬鹿にするようなレベルの悪質な表情だ。あまりの屈辱にスプーンを持つ腕が震える。それでも、カレーは美味かった。

「ジャツジメントと云うか、風紀委員が何の用だ？」

少女は腕に盾をモチーフにした腕章をしていた。

風紀委員とは学園都市の治安維持組織の一つで、能力者の学生によって運営されている。基本的には各学校に置かれた支部を中心に活動しており、もし風紀委員が宇都宮に用があるならば、宇都宮が籍を置いている大学の風紀委員が動くはずなのだが、他校の風紀委員がやってくるとは少々雲行きが怪しく感じられた。

少女は腕組みをしていた片手を動かして、小ぶりな顎に細い指を添えた。

こうして見ると中々の美少女である。もっとも中学生に手を出すほど宇都宮は困窮しているわけではないが、普段は女性とはまったく無縁の生活を送っているため、少女に見詰められると妙に気まずい。後ろ暗いことなど何も無いはずなのに（嘘）、思わず目を逸ら

してしまう。

「未成年の喫煙でとりあえず引つ張っておきますか」

「とりあえず　　って何だよ」

「昨日午後八時、繁華街のカラオケボックス前」

「カランと音がした。宇都宮がスプーンを皿に落とした音だ。」

「ビンゴ……ですの」

しまったと思った時には手遅れで、それで確信したのだろう、少女はニンマリと笑みをつり上げた。獲物が竿にかかった釣り人でも、これほど嫌らしい顔はしないだろう。

「援助交際とは感心しませんの、宇都宮日向さん。ご同行願えます？」

「はい、すいませんでした……って違いよ！ 援助交際って何だよ

！　ここはあれだろ、学園都市の暗部を探っている風紀委員と追い詰められた闇組織の人間って構図になるはずだろ！」

「……何をわけのわからないことを仰っているのやら。錯乱していますの？」

「いや、気にしないでくれ」

「はあ、と宇都宮は肩を落とす。

直後、ポケットの中の携帯電話がブルブルと振動した。

7月17日　15:22

差出人：絹旗最愛

FW：死ね

昨日はよくも超泣かせてくれましたね宇都宮のゴミクス！

豚箱の中で超反省してください！

「……被害届が出たわけか？」

「いえ、今回は目撃証言だけですけれど」

肩を落とした宇都宮に、少女はキョトンとした顔で答える。

宇都宮は溜息を吐いた。知り合いにはめられたと事情を説明する

ことはできそうだ。と言うか、少し調べればわかる。カラオケ店には当然、小部屋ごとに監視カメラが取り付けられているだろう。それを調べれば、援助交際でないことは証明できる。

もつとも無実を証明するには、この場で証言するだけではいささか弱い。

この少女の言うように、取り調べを受ける必要があるだろう。そして、もし宇都宮が無実だと言うことが判明しても、人騒がせな宇都宮はどうせ怒られるだろうし、そもそも誤解されるような行動を取った宇都宮が悪いのだと言われれば反論できない。

「とりあえず、食器を片付けてくる」

「どうぞ、ご自由に」

勝ち誇った笑みを浮かべる少女が憎らしかった。

十

宇都宮に逃げる気がないことは、少女はすでに見抜いているようで、市街地を連れ立って歩いていても少女は宇都宮の方を振り返るうともしない。もしかすると、宇都宮に逃げる気がないことを見抜いたのではなく、逃げ出してもすぐに捕まえられるという自信があるのかもしれないのだが、治安維持組織に所属している知り合いがないため、宇都宮にはどっちが真実なのかよくわからなかった。

「まさか、中学校の支部に突っ込まれるわけじゃないよな？」

「それこそ不愉快な冗談です。もしあなたが常盤台中学の中に入りたいだなんて考えているのなら、両手両足をふん縛ってビルの上から叩き落として差し上げますの」

「誰だこんな奴に権力渡したのは……って、常盤台なのか？」

「あら、気付きませんでした？ この制服を見ればわかると思っていたのですけれど」

宇都宮は首を横に振った。

常盤台中学が能力開発で大きな成績を残していると言うことは、学園都市の常識のようなものになっているが、興味のない人間がわざわざその制服を覚えているとでも思っているのだろうか。ファッションセンスが著しく欠如した宇都宮にとっては、どこの制服もすべて同じにしか見えないのだ。

と、少女が両腕を組んで憮然として振り返る。

「援交なんかやっているのですから、こう言うことには詳しいはずでは？」

「だからやってねーって」

「その小悪党っぽいお顔で言われても、いまいち説得力に欠けますわね。ともあれ話は本部で聞きますから……って、どうかしました？ ただでさえ変なお顔が見るに堪えないものになってますの」

思わず反論しようとした宇都宮だったが、口を開こうとして、怪訝に足を止めた。

右脇にあったレンタルビデオ店から少年が出て来たのだ。こちらをチラリと一別すると、一瞬だけ険呑な形相になった後、そっと目を伏せて小走りに駆け抜けていった。少女は気付いていないようだが、嫌な目をしていた。気になったのはそれだけではない。レンタルビデオ店から、何やら不穏げな気配が漂っている。

直後、少女のポケットから電子音が鳴り響く。

携帯電話だった。何かのマスコットのストラップを揺らしながら少女が一言断って電話に出る。

『白井さん、例の虚空爆破事件（グラビトン事件）です！ 直ちに現場に向かって下さい！』

「観測地点は！？」

『第六学区、レンタルビデオ店のVCDです！』

「……って」

少女が隣の建物を見上げる。

奇しくもそれはチェーン展開しているレンタルビデオ店だった。

「宇都宮さん」

「何だ？」

とりあえず問い返すと、少女は誇らしげに腕章に触れた。

「ここでお待ちになっていて下さいませ。私は ジャッジメント 風紀委員ですから」

店内に突入する少女を見送ると、宇都宮はどうしたものかと周囲を見回した。

これではまるで逃げてくれと言つようなものではないか。信用されているわけではないだろう。ここで逃げれば、後日、本格的に引っ張られるだけだ。

だがそれでも、冤罪とはいえ変態の扱いはこういうものではないと思う。

宇都宮はボリボリと頭を搔いた。

「らしくねえよな」

呟きながら、店内に入り込む。

店内は騒然としていた。悲鳴を上げながら出入り口に殺到しようとする客に押しつけられそうになりながら、ようやくドアの前を潜り抜ける。背後から風紀委員の増援が駆け付けていた。すでに警戒態勢に入っていたのだろう。巡回の数を増やして素早く対応できるようにしていなければ、これほど初動は速くない。

だが、それでも間に合わない。

メタリックで機能的な印象の店内には不似合いな、ファンシーなぬいぐるみが棚の足下に置かれていた。

そして、宇都宮はそのぬいぐるみに気付かない。

ドオンッ　！　と地響きのような轟音が周囲の大気を引き裂いた。

宇都宮を連行していた少女が、驚愕の表情を浮かべている。少女がどのような能力を持っているのかわからないが、あの顔色ではそ

れも間に合わないだろう。

宇都宮は爆発物は見付けられなかったものの、瞬時に危険を判断すると、少女に抱き付いて床に引き倒した。

地面を溶かして穴を作ること考えたが、土の蒸発温度は四〇〇〇度は軽く超える。使用者の宇都宮は高温から身を守る演算を行っているが、少女の方は高熱の気体を浴びてお陀仏と言ったところだろう。できるだけ身を低くして爆風から身を守ることしかできそうにない。

「っ
っ」

宇都宮の背中に衝撃がぶつけられる。

激痛が全身を走り抜け、思わず歯を食い縛った。

「なっ、ど、どうして……！」

「知るかよ」

爆発が収まると、宇都宮は腕の中の少女を手放して立ち上がった。足下に赤いものが垂れているのを他人事のように見詰めると、宇都宮は少女に手を差し伸べる。

「あ、ありがとうございます……じゃなくて、怪我は大丈夫なんですの！？ どうしてあなたが！？」

「とりあえず救急車を呼んでくれ」

「それは、手配いたしますけれど」

「……舐めた真似しやがって」

壊れたカウンターを殴り付ける。

少女がびくりと震えるのを気にも留めず、宇都宮は壮絶な笑みを浮かべた。

十

外気の涼しさに宇都宮は思わず目を細めた。

病院の空調設備は人間のもつとも活動しやすい温度に調整されているが、丸一日も籠っていると空気の生温さに辟易してしまう。

「本当に大丈夫ですか？ 本来ならあと十日は入院しなければいけない怪我ですのに」

「病気も怪我也も気力でどうにかなるものだろう」

「完全に熱血漫画のノリですわね。似合っていないのは自覚しています？」

ちよつとだけ、恥ずかしかった。

宇都宮は苦笑すると、電柱にもたれていた少女を振り返る。

「名乗るのが遅れましたわね。常盤台中学の白井黒子ですの」

「御手洗学院大学の宇都宮日向だ」

「すでに知っていますの」

「だろうな」

肩をすくめて歩き出すと、まだ身体が鈍っているのか足下がふらついた。

気恥ずかしそうな顔をして後ろを歩いていた白井が慌てて宇都宮の腕を掴んで支えようとするが、お互いの体格が違いすぎて、宇都宮は地面に膝を着く。

「ちよつと！ 全然大丈夫じゃありませんの！」

「問題ない、かすり傷だ」

「さらつと嘘を仰らないで下さいまし！ ああもう！ タクシーを呼びますわよ！」

宇都宮は必要ないと言い張ろうとしたが、白井は聞く耳を持たずに病院前に並んだタクシーのドライバーに声をかけた。

その間、ふと気付いて荷物から携帯電話を取り出した。

入院中に心配して電話をかけてくるような知り合いはいないだろうが、学校から何か連絡が入っているかもしれないと思いながら電源ボタンに触れ……宇都宮は頬を引きつらせる。

メールが十二件。着信が五件ほど履歴に残っていた。

「と言うか、絹旗ってこんなキャラだったか？」

麻酔で感覚がないはずの背筋に寒気のような感じ、宇都宮はぶるりと身体を震わせる。

悪戯だろう。宇都宮が返信した瞬間、鬼の首を取ったように奴は高らかに笑い声を上げるのだ。

ねえ、デレたと思ったの？

中学生に下心を抱くなんてこのロリコン！

……そうだ。そうなるはずだ。

「宇都宮さん、タクシーがこっちに来てくれるので、道の脇に寄って下さいませ」

「あ、ああ」

「何やら顔色がよくないようですが」

何でもないと答えながらタクシーの後部座席に腰を下ろし、深呼吸を繰り返す。

とりあえず、絹旗は後回しだ。簡素な報告のメールだけを済ませてから、改めて白井に向き直る。

「それで、ここまで足を運んだ理由は？ ただ礼を言うためだけではないだろう」

「お察しの通りです。まずは、お互いの共通認識を増やすために私から説明させて貰います」

ずいっと身を乗り出す白井に押されるように宇都宮は首を引いた。無造作に顔を近付けるなんて、常盤台のお嬢様というお堅そうな身分に反して、結構無防備なんだな　と、どうでもいい感想を抱きながら、とりあえず宇都宮は頷いておく。

「事件の発生は七月十一日。犯人はぬいぐるみに仕込んだスプーンや、アルミニウムのようなものを用いて事件を引き起こしています。アルミニウムを基点に重力子を加速させて周囲に放出する。有り体に言えば、アルミニウムを爆弾にする能力ですわ」

「『シンクロトロン量子変速』か」

「ご存じでしたの？」

「いや、実際に目にしたことはないな。そんな能力が実在している

のを知ったのも今が初めてだ。これでも俺は物理学を専攻しているんでね。学校は三流大学だが」

白井の目が鋭く細められたのを見て取ると、宇都宮はおどけるように笑った。

「まさか、俺が犯人だと疑っているとか？」

「それは面白そうな仮説ですわね」

「冗談。レンタルビデオ店の爆弾はどうやって仕掛けたんだ？ まさか午前中からずっと店内にぬいぐるみが放置されていたと考えているわけではあるまい。あまりに大雑把で杜撰すぎる。そんな犯人が何度も犯行を成功させることができるんですか？」

「それは、カモフラージュとか」

「そもそも能力からして違う。犯人が用いるのは重力子、俺のは『バイロキネシス発火能力』もどきだけ？」

無然として答えると、白井はふう　と息を吐いた。

「もちろん、宇都宮さんが犯人でないことはすでに判明しておりますの。ただ、私を庇ってくれた宇都宮さんには悪いんですけれど、事件現場にいたレベル4の能力者が私とあなたしかいなかったから、軽く疑ってみただけですの。形式……みたいなものでも思ったださいませ」

白井は視線を正面に戻すと、両腕を組んで憤然とした様子で言う。「それに事件は昨日も起こっていますの。あなたが入院していた最中のことですよ」

「ああ、そう。趣味の悪いご質問ありがとうございました　つと」

「ふふっ、すねないで下さいませ」

ふて腐れる宇都宮に、白井が困ったように微苦笑する。

「それで、本題は？」

数瞬、時間が止まる。

タクシーの運転手は空気を読んで口を挟まず、黙々と運転していた。

白井は数拍、両目を閉じて深い息を吐き出すと、おもむろに宇都

宮の手を掴んだ。突然の行動に、わけがわからない宇都宮はなすがままに受け止めることしかできなかった。先ほどのように身を乗り出した白井が、透き通った瞳で宇都宮の顔を覗き込んでくる。

「どうやら勘違いだった……ようですよ。ええ、きっとそうなのでしょう」

「意味不明すぎてリアクションに困るんだが」

「ああ、すみませんでした。何でもありませんの」

「……何だったんだ？」

「だから！ 何でもありません！」

ムキになって怒鳴られ、宇都宮は困惑する。

「気の迷いなのか確かめるためにテストしただけですの！ 私はお姉さま一筋のはずですし、まさかそのようなことが起こり得るわけがないことは百も承知ですが、万が一と言ったこともあり得ます。もつとも、ただの幻想だったわけですが、ええそうですね改めて見てもただの冴えない男じゃありませんか」

「よくわからんが、馬鹿にされていることだけはわかった。……殴るぞ？」

「と言っわけで、風紀委員に入ってみるおつもりはありません？」

もう少し会話に脈絡のようなものを持たせて欲しいと、宇都宮は切実に思った。

呆れた目をしている宇都宮の顔を見て気まづくなっただのか、白井は若干頬を染めて咳払いする。

「あ、あの時のあなたの行動は一般人とは思えないほど適確でしたわ。それに、あなたの大学には風紀委員がおりませんの。一人しかいなかった風紀委員もサークルに合コンと、いわゆる不良学生になつて、補導される側に回ってしまったのですわ」

「……だからお前みたいな中学生がやって来たと」

「言い方が悪いのですけれど、今は援助交際の補導なんて些事に構っている暇はありませんの。先日は『量子変速』の能力について専門の方に意見を伺いに来ただけですわ。あなたのは完全に“ついて

”でしたの。……まあ、そんなことはどうでもいいでしょう。宇都宮さん、お返事は？”
「断る」

即答だった。考える必要すら感じられなかった。

風紀委員が宇都宮の目的を叶えてくれるなら話は別だ。

だが、それはない。

「もうちょっと考慮して頂けても……」

「期待を持たせるような言い方をするよりはマシだろう。これについては、どれだけ説得されようとも頷くわけにはいかないな。……

『磁気単極子能力者』って言葉に聞き覚えは？”

「……ありませんが、それは？”

「学園都市の非合法な研究成果の一つだ。街中で叫んでみるといい。アンチスキル警備員のような格好をした、まったく別の組織の人間に捕まって、闇から闇に葬られるだろうよ」

予想外の話の展開に、白井は息を呑んでいた。

タクシーが信号に引っかかり停車する。

そう言えば、運転手にも聞こえているが、まあ、口止めする必要はないだろう。

与太話にしか聞こえないはずだ。それでも言いふらせば消されるだけ。

「どんな些細なものでも構わない。俺は“それ”を探している。そして、それは風紀委員の権限が及ぶレベルの話じゃない」

「そ……それは。ええ、そうかもしません」

「理解頂けたようで何よりだよ。じゃ、俺はこの辺りで降りるから財布から紙幣を抜き取って白井に渡すと、宇都宮は鞆を持ち上げてドアを開ける。」

自宅までまだ距離はあったが、久々に街を歩くのも悪くないだろう。虚空爆破事件の犯人には個人的な恨みがあったが、道草を食っている余裕はないと宇都宮は自分に言い聞かせた。あれだけ派手にやっていれば、何時か風紀委員に捕まるだろう。そんな小物に構っ

てやる暇などない。

「それにしても」

宇都宮のような奴を、よく風紀委員に入れようと思ったものだ。少女との軽快な会話を思い出して、思わず苦笑してしまう。

その時、風紀委員の腕章を付けた男子高校生が、宇都宮の隣を通り過ぎる。余裕のない顔をしてしきりに首を左右に動かしながら走り抜けた様子からは、不穏なものを感じざるを得なかった。

宇都宮は立ち止まる。

隣には児童公園があった。

「……ッ！ ふざけるな！」

それは予感と言うよりも確信だった。

両足が無自覚に動き出す。ドッジボールをしている少年たちの中を突っ切って、ベンチで談笑している少女たちのところまで全力で駆け抜けた。仲良しの二人といった様子だ。楽しそうに笑っている二人は、ベンチの下に転がっている大量の空き缶に気付いていない。数が多すぎる！

内心でありつたけの罵声を犯人に浴びせながら、有無を言わせず二人を肩から抱きしめた。

「……ちつくしょう！ 間に合え！」

少女たちを地面に降ろしてから振り返る。爆発寸前なのか空き缶がぐにやりと歪んでいた。

すかさず右手の砲塔をベンチに向ける。

「全部、燃え尽きやがれ！」

ドカン、と。

爆弾が炸裂するような衝撃が公園を揺らした。樹木が揺れて鳥がバサバサと飛び立ち、爆風で自販機のガラスがひとりでに割れる。子どもたちは全員が尻餅を突いて、ベンチがあった方向を唾然と眺めていた。

そこには、光があった。

青白い球形の物体が、地面を削り取って淡く揺らめいている。

宇都宮が右手を握り締めると、球体は小さくなってやがて消え失せた。

「間に……合ったか……」

時間が止まっていた。誰も身動き一つしない。風紀委員ですら声をかけるのを忘れている。

その均衡を破ったのは、雪崩れ込むようにやって来た風紀委員の増援たちだった。

「宇都宮さん、これは……」

切り取られて何も残っていない地面に、白井が困惑の声を上げる。宇都宮は表情を変えずに、小さく呟いた。

「なあ、白井。この事件の犯人は、ガキの命なんてどうでもいいと思ってるのか？」

「宇都宮、さん？」

「ガキをぶっ殺して高笑いしているような腐った野郎なのかって聴いてんだ！」

地面を殴り付ける。赤熱した炎が拳を基点に広がり、宇都宮の頬を軽く炙った。

「許せないですか？」

「ああ」

「捕まえて、ぶん殴ってやりたい？」

「それどころか、ぶっ殺してやりたいな」

物騒ですわね　と白井が微笑む。

後ろ手を組みながら前に立った少女は、宇都宮を労るように優しく諭した。

「私たちは『磁気単極子能力者』なんてものはわかりませんわ。あなたが欲しがっているものを差し上げることはできません。けれど、そもそも風紀委員とはそういうものではなくて？ 何の見返りもなく、遊び回っている学生たちに奉仕する。おまけに口うるさい嫌われ者ですの」

白井は穏やかに苦笑する。

「それでも、私たちがどうして風紀委員を続けているのか。宇都宮さんにはおわかりですか？」

「……何となくは。青臭い話になりそうだがな」

宇都宮の口調にあざ笑うようなものはなかった。白井が苦笑しながら、公園の子どもたちを見回して言う。

「あなたの方こそ、我が身を省みずに子どもたちを助けるなんて、青臭い人でなくてはとでもできない行動ですわよ？」

「助けられるから、助けただけだ」

「奇遇ですわね。私たちと同じですの」

宇都宮は額に手を置いて空を見上げた。

完敗だ。まさか中学生に言い負かされるとは。

「……あ、あの。ありがとう、お兄ちゃん」

恐る恐る近付いてきた少女たちが、ペコリと頭を下げる。

白井がその頭を撫でながら、宇都宮の方を振り返る。

そして、そつと右手を差し出した。

「今日からよろしく頼みますわ」

宇都宮は先ほどベンチを消滅させた右手を眺めた。

『サークル』の汚れ仕事で無数の命を奪ってきた右手だった。そして、未来ある子どもの命を救った右手だった。

ふう　　と息を吐き出す。

「ああ、こちらこそ」

02：重力時間

はぁ、はぁ　と呼気の音が延々と続いていた。

両腕を組んで仁王立ちしている少女に見下ろされ、宇都宮はどうしてこうなったと心の中でわめき散らしている。すでに声を上げる体力すら失われ、気力で身体を動かしている状態だった。

「あと三十回！　ほらほら、残り一分ですわよ！」

「あはは……宇都宮さん、頑張つて下さい」

場所は、風紀委員の支部。

御手洗大学の教員棟の片隅にある一室で、この部屋に入った時、宇都宮は「とうとう俺の時代がやって来たか」と興奮したものだ。

大学内において風紀委員一人という状態では、部屋を私物化できるに違いない　と思っていたのだが、乱入者によってアツサリと束の間の平和は幕を下ろしていた。

風紀委員になるためには、九枚の書類にサインして、適性試験を通過、さらに四ヶ月の訓練を要する。

だが、御手洗学院大学の風紀委員不足により特例が適用され、風紀委員の資格を先に発行。訓練は新人研修と平行して行うことになっていた。そのために白井が何十枚の書類を書かされる羽目になり、宇都宮はますます彼女に頭が上がらなくなってしまったわけだが、恨み言ばかり吐かれると感謝の念も宇宙の彼方に飛んで行ってしまふ。

「残り九秒。酷いものですわね」

「俺、怪我人なんだけど……」

「かすり傷って言ってませんでした？」

ストップウォッチのタイムを不満げに眺めているツインテールの中学生は白井黒子。

部屋のPCを調整しているのが初春飾利だった。奇抜なファッションセンスの持ち主で、頭に大量の花を乗せていた。風邪気味なの

かマスクをしている。

「時間切れの私よりは凄いです。慣れればもっとタイムは縮まりますよ」

初春が回転椅子をくるりと回して振り返り、甘ったるい声を出す。

「ニコチン中毒ですわね。スタミナがなさ過ぎですよ」

「あー、疲れた。煙草吸っていい？」

「殴りますわよ！」

「冗談だつて」

駄目もとで訊ねてみたのだが、予想通り却下され、宇都宮はやれやれと嘆息した。

七月十七日。そろそろ事件発生から一週間になる。犯人も尻尾を出してもいい頃だろうに、能力の隠密性から、未だに影すら踏ませず貰っていない状態だった。

『アイテム』にいた追跡型の能力者がいれば、事件は早々に解決できるのだろうが、『サークル』の宇都宮は『アイテム』と接触を持つわけにはいかない。如何に担当者のやる気が皆無で、世間的にはすでに解体されたと思われる『サークル』であつてもだ。

絹旗は 麦野に知られたら軽く半殺しにされるだろうに。怖い者知らずなのだろう。

「とりあえず、PCの設定は完了しましたよ。こんな骨董品がまだ動いていることに驚きましたが、中にエロ動画が入っていたことに二重で驚きましたが、こんなものでいいですか？」

「とりあえず動画を再生してみるか……という冗談は置いておいて、骨董品レベルかよ」

白井に睨まれて肩をすぼめながら初春に問い返す。

「外（学園都市の外部）の企業ではまだ使っているモデルですけど、学園都市では二十年前の化石以下ですね。携帯端末の方がまだ使えると思います。モニタのサイズ以外にこれを使う理由がまったく感じられないですよ」

「エロ動画を大画面で再生できるのは重要だろう」

「宇都宮さん、とりあえず死んでおきます?」

金属の矢を取り出した白井黒子に、宇都宮はジャンピング土下座で誠意を見せた。

ガツンと目元に突き刺さった矢を見て、乾いた笑い声を漏らす。

「はあ、どうしてこんな男が」

「何か言ったか?」

「何でもありませんわ!」

なぜか頭を踏み付けられ、宇都宮は理不尽だと内心で叫んだ。

十

地面に引き倒された時から、どうしてこんな男が　と気になつて仕方がなかった。

『量子変速』の爆発から守ってくれた冴えない男。それがたった一日で退院すると聞いて、何時の間にか病院の前に立っていた時は、我ながら自分の行動がよくわからなくて驚いたものだ。手を握ってみたが、やはり理解できなかった。恋のようなものでは……ないはずだ。

ただ、興味を覚えているのは確かだろう。

(……保留と言つところですね)

宇都宮の頭をぐりぐりと踏み付けながら白井は嘆息する。

時々、白井すらドキッとさせるような真面目な顔を見せるこの男も、普段は下ネタちゃらんぼらん野蠻人だった。

「あ、あのう、白井さん。その辺りにしておかないと、地面がスプラッタになりそうなんですけど」

「え? ああ、そうですね!」

慌てて足をどけると、宇都宮はよろよろとゾンビのように立ち上がって、血が出ている鼻にティッシュを詰めた。

宇都宮は憮然とした顔をして椅子を引き寄せると、急に真面目な顔をして。

「それで虚空爆破事件の進展は？」

と行き成り話の向きを変える。

ぷっ　と二人して吹き出さずにはいらなかった。

「ちょ、鼻栓して言うことじゃないですよ！」

「まっ、間抜けにもほどがありますわ！」

「これ以上犠牲を出すわけにはいかない」

「やっ、やめっ、腹がよじれるっ！」

「あなたは私を笑い殺すおつもりですか　っ！」

三分後。

白井と初春は肩で息をしながら涙目で宇都宮を睨んでいた。

鼻栓を抜いて勝ち誇った笑みを浮かべる宇都宮に、白井は「してやられた！」と戦慄する。

「ぜーはーっ」と息を整えながら、白井はポケットから携帯を取り出した。中に入っているテキストファイルを開いてそれを読み上げる。「昨日は事件は起こってませんから、宇都宮さんが遭遇した児童公園の件が一番新しい事件になりますわね。今のところ私たち風紀委員は巡回の数を増やして、重力場の加速を観測した地点へ迅速に駆け付けることしかできませんわ」

「『量子変速』の能力者は？　そこからあたった方が速くないか？　たしかにそうですけれど、『量子変速』は珍しい能力であり数があります。そして、実用レベルに達している『量子変速』の使い手は、現在意識不明の昏睡状態にありますわ。他にも数人いますけど、いずれもこの事件のような強力な爆発は起こせないみたいですよ」

「……モグリってことか？」

「可能性はありますが、それを語ることに意味はありませんわ」

「結局は現状維持ってことか」

「と言うことで、見回りもかねてご飯でも食べに行きましょうー！」

初春が右手を挙げる。シリアスな雰囲気が一瞬間に霧散した。宇都宮と顔を見合わせて白井は苦笑する。色々と台無しだったが、始終神経を張り詰めさせてもいいことはない。ここは初春の脳天気さに便乗させて貰うことにしよう。

十

放課後だからか、繁華街には大勢の学生が往来していた。

宇都宮たちは財布の中身と相談しながらどの店に入るか意見を交わしている。中学生二人は学生寮で出される夕食があるためデザート系のものを食べたいそうだが、大学の近くで下宿している宇都宮はこの機会に夕食を済ませるつもりだった。両者の意見を取り入れ、手近なところにあつたファミリーストランに決定する。

「中華をがつつり食いたるところだったのだが」

「ジャンボパフェお願いしますー！」

「先輩の意見を少しは尊重して下さいな。あ、私にはストロベリーパフェを下さいませ」

「フィレステーキとハンバーグドリア、それとチキンバスケット」
文句を言いながらもちゃっかりと、がつつり系の料理を注文している宇都宮に、二人が呆れた目を向ける。

店員が注文を繰り返して確認するのを横目に、宇都宮はおしぼりの袋を破って手を拭き始めた。

「……先輩言うなら奢りやがれよ」

「宇都宮さん、それだけ頼んでおいて奢れとは面の皮が厚すぎですよー」

パフェが楽しみなのか初春がニコニコと笑いながら言う。

本来なら見回りをするべきなのだが、レストランで堂々とサボっていてもいいのだろうか。色々と疑問だったが、宇都宮は面倒を嫌

って突っ込まなかった。

コップの氷をバリバリと嚙って腹の虫を慰めながら、料理が届くのを待つだけだ。

「あっ、お姉さま!？」

と、各々好き勝手に無沙汰を慰めていた時、突然白井が席を立ち上がった。

気付いた時には、テーブルから白井の姿が消えていた。

超能力 白井黒子のそれは『空間転移』^{テレポート}である。

能力の強度はレベル4。転移能力者は複雑な演算を必要とするため、自分の身体を転移させることができれば、その他の条件をすっ飛ばしてレベル4に認定されるらしい。能力開発の名門、常盤台中学でも屈指の実力を持つ高位能力者と言うことだ。

そして白井は 窓の向こう側にいた。

通行人の背後に転移して背中に飛び付いたのだ。

「アイツの頭って、あんなにイカれてたっけ？」

「は、はは……何時ものことなんですけど」

気心の知れた間柄なのか、飛び付かれた少女は鬱陶しそうに白井を振り払うと、その頭に拳骨を振り下ろした。

涙目になりながら甘えるようにすり寄る白井に、宇都宮は彼女との関係を見直すべきか真剣に迷う。

もつれ合いながら二人が店内に入った直後、白井が注文したパフエが到着した。

「おっ、美味そうじゃない。一口貰うわよ」

「……っってお姉さま、全体の三分の一を一口とは言いませんの！」

でもそのスプーンを使えばお姉さまと間接キスに!!」

「アンタは箸で食べなさい、日本人なんだから」

「そんなご無体な! それでは蛇の生殺しですの!」

白井にやたらと絡まれている少女は疲れ切ったような溜息を吐き出すと、パフエをひっくり返して喉に流し込んだ。

常盤台の制服を着たお嬢様らしくない行動に宇都宮は思わず目を

擦る。家の外ではダンディなおじ様が、家の中では全裸で歩き回っていた時のような残念感だった。

「お腹壊したらアンタの所為だからね。……で、そっちの人は？」

「後輩の宇都宮日向さんですの」

「どう見ても、私より年上なんですけどー」

少女が半眼で宇都宮を見詰める。

「大学生だからな。風紀委員としては後輩って意味だろ」

「ふーん。ま、興味ないけど」

「本人を目の前に、結構ひどいと思わない？」

初春に肩をすくめて見せる。乾いた笑みが返答だった。

ようやく注文した料理が届き、宇都宮は中学生たちの会話には混じらないつもりで、さっさと料理に手を付けようとする。

「あ、唐揚げ貰うわよ」

「ふっ、百人一首を五つも暗記している俺から唐揚げを奪おうなど

笑止！」

チキンバスケットに手を伸ばそうとした少女の指先にフォークが突き立った。

むっ　と少女の額に青筋が浮かぶ。

「私は十二首覚えているわ」

「中学生の癖に生意気な！　柿本人麻呂！」

「あしびきのおー、山鳥の尾のおー……って何言わすんじゃこらあ
！」

少女の手が強引にフォークをかくぐって唐揚げに伸びるが、寸前に宇都宮はフォークを下げてバスケットに引っかけ、手元に引き寄せた。がるるる　とうなり声を上げる猛獣のように、二人は目線で威嚇し合う。

「と言っか、さっきのやり取りは何なんでしょうか？」

「お姉さま！　そんな下ネタちゃらんぽらん下衆野郎なんか、さっさとぶっ殺して下さいませ！」

初春が一人溜息を吐いていた。だが、三人とも見向きもしない。

店員がビクビクと頬を痙攣させているが、それもスルーして唐揚げ争奪戦を繰り広げていた。

「常盤台の超電磁砲を舐めんなー！」

「うるせー！ レベル5がなんぼのもんじゃー！ ……………え？」

サツと少女の手が伸びて唐揚げを捕獲。

一方、宇都宮の方は顔を青くして身動き一つしない。

「『超電磁砲』？ 常盤台のレベル5の？」

「何よ、今さら（もぐもぐ）、ビビッたって言うの？」

ブルブルと宇都宮の肩が震える。

テーブルの端を虚ろな目で見詰めながらブツブツと何事かを呟くと、やがてこれ見よがしにふつと鼻で笑った。

「常盤台のお嬢様、いわゆる完璧美少女の類を想像していたが、現実はこのものだよな。大口を開けてパフェをのみ込み、人の食べ物を手づかみで奪い取る。原始人じゃねえか。と言うか完全に女を捨ててるよな」

「な、な、何ですってえ ……！」

「お、やるか？ 百人一首なら負けないぜ！」

「だからどうして百人一首なんですか……！」

初春のツツコミが店内に寂しく響いていた。

十

商業区画を一回りした宇都宮は、手詰まり感に辟易していた。

今日は事件は起こらなかつたようだ。暮れゆく夕陽を眺め、やれやれと肩から力を抜く。

帰宅中の学生たちの波に乗って歩きながら、宇都宮はとりとめのないことを考えていた。

「『超電磁砲』か」

『サークル』の担当者から渡された危険人物リストに乗っている一人だ。遭遇したら可能な限り逃げることに。レベル4でも上位にあたる宇都宮が逃げを打つしかない超能力者。しかし、宇都宮よりもマトモな人間だった。人を殺めたことはないだろう。白井や初春とのやり取りを見ると、ただの中学生にしか見えないほどだ。

それが、裏の人間に畏怖されているとは。

「……まったく、商売上がったりだぜ」

夕陽の眩しさに目を細める。空に手をかざすと、影法師が浮かんでいるのが見えた。

学園都市がその気になれば、こうして立ち止まっている宇都宮の行動一つすら予想できるのだ。樹形図ツリーダイアグラムの設計者という並列コンピュータを用いれば、一年分の天気や、レベル5を作り出す可能性まですべて計算されてしまう。

宇都宮日向は計算されて作られた存在だった。

では、御坂美琴はどうだろう。

「……どうでもいいか。なるようになる、それだけじゃないか」

言葉にするのは、自分でも信じていないからだ。

どこまで学園都市の手の上で踊らされているのか。この思考ですら統括理事会に察知されているとするなら。

どこまで人を弄べば気が済むのか！

宇都宮の感情すら奴らは実験に組み込んで、科学の発展というレールに乗せてしまう。

「うつ、のみや？」

「……きぬ、はた？」

下宿先のアパート。部屋のドアにもたれて座り込んでいた絹旗が、宇都宮を見上げていた。

絹旗は何かを言おうとして口を動かそうとしたが、言葉にできずに俯いてしまう。

「とりあえず、上がるか？」

「風紀委員になっただんですね」

「……ああ」

「そうですね」

会話は、続かなかった。

アイテムへの勧誘を何度も蹴っていた宇都宮が、風紀委員なんて畑違いの組織にアツサリと身を置いたのだ。彼女には許せないのだから。人殺しが今さら真人間ぶるなど怒鳴りたいのかもしれない。

絹旗は立ち上がってワンピースの裾のホコリを払うと、何も考えていないアホっぽい笑みを浮かべた。

空元気だ。

くそつ　と内心で宇都宮は自分を罵る。どこまでコイツに気を使わせているんだ！

「じゃ、私は帰りますね。前々から超チエックしていた映画をビデオで借りてきたんですよ。風呂入ってからコーラでも飲んで、ポテチでも嚙りながら見ることにします」

サツと走り去ろうとする絹旗の手を、咄嗟に捕まえてしまった。

「離して下さいよ」

「ビデオ、持ってるんだろ？」

返事はなかった。

「コーラもポテチもないけどいいよな？　俺が見たいんだ。付き合

えよ」

「ははっ」

絹旗は弱々しい笑い声を零す。

「本当に、宇都宮は超自分勝手ですねえ……」

「知ってるよ」

宇都宮は少女の肩に手を置いた。

死にかけていたところを拾ってくれた。それが、絹旗最愛だった。

本来『サークル』と『アイテム』は敵対するまでは行かなくても、良好とは言えない関係だった。『サークル』が壊滅した時も、麦野沈利などは高笑いしていたのではないだろうか。目障りな奴らが勝手に自滅した。と思われていたはずだ。

しかし、絹旗は腹が破れて腸がべろんとこぼれ落ちた状態の宇都宮を、カエル顔の医者のところまで運んだのである。

何を思ったのか、麦野に知られれば殺されることだってあるだろうに。

「あんまり面白くなかったですね、この映画。超期待の新人監督つて、どこかの素人を捕まえてきたとかじゃないですか？ 映画オタが作った自主制作の駄作の方が万倍マシです！」

「夢中になってた奴の台詞じゃねえよな」

「途中で飽きて携帯ゲーム機触ってた奴が、超偉そうな口を聞かないで下さい。PC内のエロ動画を全部消しますよ？」

「それだけは勘弁して下さいお願いします！」

音速の勢いで土下座する宇都宮。

珠玉のベストコレクションは外部メモリでバックアップを取っている。たとえ消去されたとしても損害は最小限に済むのだが、それは内緒にして下手に出た。

すると自尊心がくすぐられたのか、絹旗は勝ち誇った顔をする。

芸能人が内輪ネタを繰り広げるお寒いバラエティ番組をBGMに、宇都宮は自分が食べるためではないカップ麺を作らされる。お前こそ自分勝手な奴だろうと思いながら鍋で湯を沸かしていると、テーブルの上に置かれていた宇都宮の携帯電話が鳴り始めた。

「宇都宮、超ケータイ鳴ってますよ。見ますよ見ちゃいますよいいですよー」と言うわけでオープン！」

「少しは人のプライバシーを尊重しやがれ！」

「ならもつと命の恩人を超敬うことですね！」

言い争いをしながらリビングに戻ると、絹旗が携帯を広げたまま硬直していた。

不穏なものを感じたが、声をかけないわけにはいかなかった。

「……どうした？」

「多分、宇都宮の上司の人だと思っただけですけど」

反射的に携帯を奪い取っていた。

受信していたのは数キロバイトのテキストファイル。

『磁気単極子能力者』の開発に関わっていた研究者のリストだった。

「やっぱり、まだ諦めてないんですね」

「ああ」

「超無理ですよ。手を引くべきですって。絶対、統括理事会が噛んでますから」

「それでもだ。これはケジメみたいなものだな。……アイツを見捨てた俺への」

「超救えないです」

再び、絹旗は俯いた。

自殺するようなものだということは、わかっていた。宇都宮がレベル5だったら、まだ可能性はあっただろう。

「改めて考えてみると、風紀委員というのもいいかもしれませんよ。

このまま裏から手を引けば……」

「今さら後戻りなんてできるかよ」

「宇都宮！」

大声を浴びせられて、宇都宮はハッと我に返る。握り締めた拳から血が出ていた。

「どうして私が宇都宮を助けたのか、考えたことはありませんか？」

「……それは、あれだろ。お前がいい奴だったから」

「だから、宇都宮は超お馬鹿なんですよ」

絹旗は立ち上がっていた。

穏やかに微笑まれ、返事すらできない。

彼女の雰囲気、宇都宮は完全に圧倒されていた。

「私は『アイテム』ですから。少し考えればわかるはずですよ。上から命令されて、あなたを助けたんですよ」

「……いや、でも」

ツリーダイアグラム

「樹形図の設計者の演算結果によると、『磁気単極子能力者』二人が本気で殺し合い、生き残った方がレベル5にシフトするという結果が出ています。でもあの時は本気の戦いにはならなかった。よって計画は修正され、宇都宮は生き残ったのではなく、生かされることになった。宇都宮が『磁気単極子能力者』と接触すれば学園側の思っ壺なんですよ」

初めて知らされた事実……ではなかった。

覚悟はしていた。薄々、そうではないかと勘付いてはいたのだ。

「信じたくなかった……ですか？ 超甘いですね、宇都宮」

「だけど、お前、笑ってた。怒ることもあつただろ。泣きそうになつたこともあつたし、今だって、どうして」

宇都宮は両手を握り締める。

「なんで、そんなに“悲しそう”な顔をしてるんだよ!？」

絹旗がハッと頬に手を運んだ。

「ホントに、どうして、どうして……なんででしょうね。髪はぼさぼさで服は超ダサくて、口を開ければ冗談ばかり、それで本心を隠しているつもりってのが超爆笑させてくれますよ。やめて欲しいんですよ。諦めて欲しいんですよ。もう嫌なんですよ！ 何時あなたを殺せて命令が下るか、怯えながら待つしかない私の気持ちとか、少しぐらいは考えてるって言ってるんですよ！」

「絹旗、お前は……」

絹旗が顔を上げる。涙に濡れた頬が、電灯の光を受けて細かく輝いていた。

「あはは、言っちゃった。何で、こうなっちゃったんだろ……」

いいんだ。

もう、いい。

「わざわざ俺なんかのために頑張ってくれたんだろ。感謝してもし切れねえよ。お前は俺を救ってくれたんだ。上からの命令とか、そんなのは踏ん切りをつけるための理由の一つなだけじゃないか。それに、俺はお前にだつたら殺されたつて構わないつて思つてる」

「だから、そのスカした表情が超気に入らないつて言つてんですよ」

「!!」

「うっせえ馬鹿野郎！」

ドンツ　と壁を殴り付ける。

「お前は上層部の命令を聞くだけの人形じゃねえだろうが！ やりたいことをやればいいんだよ！ 利用できるだけ利用するつて程度に考えていればいいんだ！ 俺たちは命令違反ぐらい平気でやつてるし、用事がある日には呼び出しの電話にも出ずにサボつてるじゃねえか！ それで上が何か言つてきたのかよ！」

一步、踏み出した。

二歩目で絹旗が後退る。

三步、もう少しで手が届きそうなところまで来た。

「超簡単そうに言わないで下さいよ！ 何も知らない癖して！」

「ああ、何も知らねえよ、何も聞かされてないからな！ けどな、これつてそんなに難しいことか？ 俺にはテメエが難しく考えすぎてるだけのようになしかな思えねえんだよ！」

四歩、手を伸ばす。

瞬間、絹旗の身体から圧力が吹き出す。『窒素装甲』を展開したのだ。

「全部引つくるめて俺が何とかしてやるつて言つてるんだ！ 少しは信用しやがれ！」

絹旗の腕を引き寄せる。能力は何時の間にか解けていた。

胸の中に、少女の小さな身体が収まっていた。泣き顔が上を向く。

「超、煙草臭い、じゃないですか……っ！」

「そうか」

「お父さんと同じ臭いなんですよ。もう顔も超記憶にないのに。私を捨てた癖に」

「嫌いか？」

「……ちょっとだけ、好きになれるかもしれないです」

宇都宮は、そうかと頷いた。

伸ばした手がサラサラの髪に触れる、その直前。

「茶番はこれで終わりかな？」

部屋の窓ガラスが粉々に砕け散った。

咄嗟に絹旗を壁に押し付けて身体ごと覆い被さる。背中にガラス片がぶつかった。

「地獄で泣き叫んでいる愛しの彼女を放り出して、別の女に鞍替えするなんて、宇都宮も結構やるよね」

モスグリーンのスーツの青年だった。

テレビに出ているタレントとしても通用するだろう、異様に冷たいマスクとは裏腹に、切れ長の目にはどことなく愛嬌があった。立ち振る舞いには品があり、所作の一つ一つに引き込むような雰囲気がある。男なのに髪が長く、前髪は右目の部分だけを覆い隠すように寄せられていた。

研究所で見たことがある。

「久しぶり　　と言うべきかな。わかるよね、成功作」

「工藤じゃないか。生きて……いたのか？」

そう、知らないはずがない。

同じ研究所の“サンプル”だったことがある。だからこそ、何かが決定的に間違っていた。

実験は、宇都宮は成功して生き残り、工藤は失敗して死亡した。

「そのはずなのに。」

「そう、死んでいるんだ」

「死んでいる？」

「事実、死んでいるんだよ。僕の身体は『磁気単極子』で無理やり動かしている。わかるよね。宇都宮はわかっているだろうけれど、その彼女にはわからないだろうから改めて説明してあげようか。」

「僕はね、すでに死んでいるんだ。だけど動いている。今こうして君たちに話しかけることができるのは、身体に埋め込まれた『磁気単極子』という物質のお陰さ。わかるよね？」

「死者を起こすと？ 奴らの研究はもうそこまで進んでいるのか？」

「最長稼働時間は三時間弱。到底、実用段階までこぎ着けることはできていないのだけれど、わからないよね？」

「磁石のS極とN極、両方の性質を持つ『磁気単極子』モノポールを能力者が触媒として用いて、体内の電圧を利用した加速器を用意することができる。要するに、能力の強度が飛躍的に上昇するのである。」

しかし、『磁気単極子』を完全に制御できる者はいなかった。

いずれのサンプルも数秒も持たずに自滅。肉体そのものが陽子崩壊を起こし、中性子と電子をまき散らしながら、大量のエネルギー、放射線をまき散らしながら死亡した。

現在、無能力者開発計画の遺児は、未完成ながらも比較的安定したサンプル二人。

宇都宮日向と、もう一人だけだった。

「羨ましいよ、宇都宮。君は呼吸をしている。だけど、僕は呼吸をしていない。AIM拡散力場が身体を動かしているんだ。筋肉が動いているわけではないんだ。脳が電気的な命令を発しているわけではないんだ。では、僕はどうやって動いているんだい？ AIM拡散力場に意志が宿っているのかな？ 宇都宮、わからないよね？」

「わからない」

「そうだよ。わかるわけがない。だって、聞かされていないんだ」

から。わかるよね？」

工藤は右手で顔を覆い隠した。

「そう、知ってるはずがないんだ」

「だから、何なんだよ？」

異様な雰囲気、すぐにでも応戦できるように宇都宮は身構える。

「わからないよね。虚数学区の最小単位が暴走した状態。マイクロAIMバースト。それが、今の僕ってことさ！」

「……っ、工藤！」

叫びながら飛びかかる工藤を、テーブルを蹴倒して遮ると、宇都宮は展開に置いてけぼりにされていた絹旗の手を引いて部屋を飛び出した。

ドアを開いて出てきた工藤は、寂しげな顔をしていた。

「宇都宮さん、あの超変態は何者なんですか！？ あれが宇都宮さんの探していた」

「いや、違う。その失敗作……と言っても、紛い物とはいえ『磁気単極子能力者』の一人だ。能力を使用し続けると、最終的に核爆発っぽい現象が起きて、奴の身体がエネルギー体に崩れ去ってしまうわけだが、一時的にレベル5並みの強度を手に入れている」

「レベル5って、超滅茶苦茶じゃないですか！？」

「……ああ、もう！ どうしたのか！」

宇都宮は炎をまとった右手で街灯をへし折った。

竿上の巨大鉄パイプと化したそれを絹旗に押し付けると、

「とりあえず、コイツをぶつけてみてくれ。それでわかるはずだ」

「はあ、よくわかりませんが」

困惑しながら絹旗が街灯を両手で支える。

『室素装甲』で数百キロの物体を持ち上げることすら可能な絹旗だからこそできる技だった。

だが、工藤は退屈そうに 左に避けただけだった。

緩慢な動作で“避けた”のである。

「超、出鱈目 っ！？」

遠心力を乗せて高速で振り下ろされた街灯を、眉一つ動かすことなく、膝をかがめることなく、汗一つかくことなく、服を乱すことなく、ただ歩いて躲いたのである。

見方によっては、街灯がひとりでに“減速”したように見えたりもしれない。

「やっぱり、そうなるか」

「わかるよね、無駄だと言うことは」

今度は宇都宮が炎の塊を銃弾の速度で打ち出してみるが。

工藤は右にひよいと動いて避けてしまふ。やはり、弾丸が勝手に停まったようだった。

「元はただの『重力操作』だったんだけどね。一時的にレベル5に達した今では、まったくの別物と化しているんだ。そうだね、仮に『重力時間』^{ブラックホール}とでも名付けておこうか」

「クソッ、別物にもほどがあるだろうが！」

「そこまで喜んでくれると僕も嬉しいよ。失敗作が成功作を凌駕する。今の僕には、これほど愉快なことはない。もうこれから死ぬしかない僕にとっては、それだけが唯一の救いだ。わかるよね！」

絹旗と目で合図して、二人は踵を返して走り出す。

せめてもの救いは、工藤が遠距離の攻撃手段を持っていないと言うことだった。

「逃げるだけかい？ 言っておくけれど、数時間後には僕の身体は爆発するんだよ。学園都市の学区一つを消し去るには余分すぎるほどのエネルギーが周囲にぶちまけられるんだ。被爆する人が出るかもしれない。わかるよね？」

「宇都宮さん、何かアイツ超物騒なことを口走ってやがりますがっつー!？」

「わかつてる。とりあえず、一度振り切るぞ」

無策で打破できるような相手ではない。だが、少し考えれば方法ぐらい浮かんでくるはずだ。

レベル5の第一位を除く能力者は、能力こそ出鱈目だが、人間と

しての規格を失っていない。

スタングレネードが爆発すれば気絶する。神経系の毒ガスを吸い込んだり、急所に銃弾が刺されれば死ぬ。

工藤もそこは同じはずだ。

「わかりましたよ。……信じてあげます」

絹旗は素早くそれを読み取って、こんな時だというのに、小さく笑って頷いた。

十

一歩動くだけで激痛が走った。肉体の痛みではない。強いて言うなら魂のようなものだろう。

動くべきではないものが動いている。それだけで、今にも肉体が崩れ落ちてしまいそうになる。

「苦しいよ、宇都宮。わからないよね。一緒に実験を我慢してきた間柄じゃないか。そう、僕たちは親友だったんだ。わかるよね」

もっとも、向こうは工藤のことなど忘れ去って、仮初めとはいえ自由を謳歌していたようだ。

妬ましい。

自由に動く身体が。

憎らしい。

人肌の温もりを感じることができる親友が！

「ハハツ、友達じゃないか。わかるよね。なら苦労は分かち合うべきじゃないか！」

路地を折れる。

工藤は、宇都宮を見失うことはなかった。もし引き離されたとしても、上から情報が送られてくる。

「自分勝手なことを言ってるんじゃないやねえよー！」

「勝手を言い合えるのが友人だろう。わかるよね!？」
目の前に、目視できるだけで二十発以上の炎の弾丸が広がっていた。

だが、工藤に命中するわけがない。
『ブラックホール重力時間』は時間を操る能力だ。

より正確に言うなら、ジオポテンシャル高度を操ると言うべきだろう。時間とは相対的なもので、重力と加速度は、空間と時間を歪める。例えば、一般相対性理論においては、惑星の表面と宇宙空間では、時間の進み方が異なり、惑星の表面の方が時間が進むのが遅いのである。

それが顕著に表れるのが、崩壊した恒星の残りカス、いわゆるブラックホールだ。

非常に重力が強いブラックホールの中は、時間の進行が非常に遅い。

工藤は能力を使用することにより、自分の周囲に強力な重力場を形勢。自己の周囲の相対時間を操作しているのである。

「っ！」
炎の弾丸をすべて回避した工藤を見ると、宇都宮は表情を引きつらせた。

慌てて転回して逃げようとする宇都宮に、工藤は苛立った。
故に工藤は、誘導されていることに気付かない。

「……わかるよね。僕の最後の願いを聞き届けてくれよ。頑張ったんだ。ご褒美をくれてもいいじゃないか」

そこは、総合商店だった。
入り口のシャッターが焼き切られて穴が開いている。工藤は携帯を開いた。ナビに表示された座標を調べると、小さくほくそ笑む。
逃げられる訳がないのだ。

真つ暗な店内に並ぶマネキンは不気味なことこの上なかった。

もっとも、死んでいるのに動いているリビングデッドよりはマシだろうが。

時折、思い出したように襲いかかる炎に、工藤は確信的な笑みを深める。

……もうすぐだ。もうすぐ、宇都宮に届く。

宇都宮に触れることさえできれば、奴の時間を限りなくゼロに近づけることができる。

それから、なぶり殺す。のうのうと生き残った奴に相応しい死の方をじっくりと考えるのもいい。

「はははっ」

工藤は笑い声を上げた。

マネキンの中に混じっている人物を発見したのだ。隠れて隙を窺っているつもりなのだろう。

あれだけ能力を避けられたと言うのに、未だに工藤の能力に気付いていない。

哀れを通り過ぎて滑稽だった。

「捕まえたよ、宇都宮」

「外れだよ、擬似レベル5。お前、滑稽だぜ？」

なっ　と驚愕に目を見開く。

確かにこの手で触れているはずだ。唇を一つ動かすには、この時間平面上において何十年もの時間がかかるはず。

だとすると、この声は何になる。

いや、違う。

捕まえたのは宇都宮でないのだ。とすると、先ほどの少女だろう。女を見捨てて生き残ったわけだ。予想外の親友の行動に、工藤の中で信じたくないという気持ちが見られた。そして、怒りにまかせて掴んだ首を握り締める。瞬間、その手が弾かれた。何が起こったのか理解できず、工藤の両目が見開かれる。少女の時間は限りなく減速しており、口を開くこともできず、今起きたことも認識できていない。にも関わらず、能力が発動していた。

自動防御。

ようやく状況を把握した時、工藤の頭上で炎が爆発して、スプリ

ンクラーが作動した。

店内に警報が鳴り響く。

「こんなもので、手を離すとしても　！？」

「もう終わりにしよう。お前には感謝してるよ。研究所で生きることを諦めなかったのは、お前がいたからだ。だけど、お前は死んだんだ。死んでしまってるんだよ！　お前自身で死者の尊厳を汚してどうなるんだ！」

「説教か！？　あと数時間で消滅するこの僕に！？」

「……頼むから、俺の中のお前を汚さないでくれ」

「僕、は……わからない。何で宇都宮にそんなことを言われなければならぬんだ。理不尽だ。わからないよね」

工藤は、手から力を抜いた。

宇都宮はエナメルが露出した電線を手にしていた。工藤はスプリングラーの水を被っている。宇都宮がその気になれば、いくらでも工藤を感電させることができる時間があつたはずだ。少女も巻き込んでしまうだろうが、大きく見積もっても気絶する程度の電撃。必要とあらば、宇都宮はコードを水たまりに落とすだろう。

ここまでだった。

「死にたくないんだ。わかるよね、宇都宮？」

「わかるよ。お前は何時もそう言っていたからな」

宇都宮が微笑んだ。工藤は泣きたくなる。事あるごとに死にたくないと言いつつ続けた。実験の後、誰もが疲弊しきつていて返事が返ってこないことがある。だから「わかるよね」と問い続けた。やがてそれが口癖になった。わかるよ。そう言いつつ貰えることが、どれだけ嬉しいか。

「電撃は、やめてくれないか。寒いんだ。身体中が痛くて、寒い。できれば君の炎で焼いてくれ。わかるよね？」

「ああ、わかるよ。……工藤、ありがとな」

「ははっ、苦勞を分かち合うのが親友つてもものだろう。それと、今の言葉は死ぬ前の僕に捧げてくれないか」

「いや、いいんだ。これでいい」

宇都宮の炎が、工藤の身体を包み込んだ。

肺の中まで入り込む火炎を、工藤は愛おしげに抱きしめる。

「ああ、暖かい。これで、ようやく逝ける」

工藤は両腕を広げて天井を見上げた。

洋服店の野暮ったいステンドグラスを目蓋に焼き付けると、ゆっくりと両目を閉じる。

身体がボロボロと崩れ落ちる。

そして、工藤の意識は闇に落ちた。

十

結局、あれは何だったのか。

襲撃者がこの世を去ってしまった今、それを解き明かすことはできそうにない。

「超仲のいい友達　だっただんですよね？」

「ああ、キザな奴だったよ。あとな、意外と臆病ですぐにへタれるんだ」

宇都宮は紫煙を肺に吸い込んで、ゆっくりと味わうように吐き出した。

「巡り合わせが悪かったんだろう。あんな場所に送られなければ、まっとうな人生を送っていたはずだ。イケメンだからな」

「宇都宮は『イケメンは死ぬー！』ってわら人形に釘を超打ち付けていそうですけど」

「よくわかったな」

宇都宮はニヒルな笑みを浮かべた。

絹旗は恥ずかしげに俯いて、

「でも、それでいいですよ。宇都宮がイケメンだったら、私が超困りますから」

「は？ 何か言ったか？」

「何でもないです！ この超鈍感男！」

あまりに小声だったため、よく聞き取れなかった。

聞き返そうとすると、なぜか絹旗にガーツと怒鳴られる。

「ともかく、今回のようなことは、これで終わりだと超いいんですけどね」

「それはないだろうな」

「超断定ですか」

工藤は、宇都宮の能力を探るために送られたと見るべきだろう。

最終的にもう一人の『磁気単極子能力者』の成功例と殺し合いをすることになるわけだが、その計画を樹形図ツリーダイアグラムの設計者が演算したのは何年も前のことだ。今の宇都宮の能力を打ち込んで、改めて計算し直すと言ったところだろうか。

工藤は比較的『磁気単極子』に適合した能力者なので、あれだけの能力を発揮できたのであり、そうポンポンとレベル5クラスの鉄砲玉が送り込まれることはないと思いたい。そう思わないとやってられない。

「あれが『磁気単極子能力者』ですか」

絹旗は不安げに肩を縮ませた。

「宇都宮も、あの人と同じように、能力を一時的に超引き上げることができるとはですね？ それをすると、身体が崩壊してしまうんですよね？」

「……そうなるかもしれない」

「『かも』じゃないですよ！ 駄目です、絶対に！ 使ったらぶつ殺しますから！」

即答できなかった。

別に死にたいというわけではない。死にたくないに決まっている。だが、すべてを精算する時。使わずに切り抜けられるとは思えな

かった。

工藤の言っていたマイクロAIMバースト。『磁気単極子』を使用しなければ切り抜けられない場面は、この先きつと出てくるだろう。

即答しない宇都宮に焦れて、絹旗が宇都宮の腕をつねった。

「約束して下さい。絶対に使わないって！」

「……ああ、わかったよ」

「超不服そうに答えない！ 私はもっと真摯かつ真剣な対応を求めます！」

「わかった、約束だ」

ホツと肩から力を抜く絹旗を見て、宇都宮はわけがわからなくなり、首を捻っていた。

いい奴……なのだろう。そう、きっとそうに違いない。何だかわからないけど、そう言うことにしておこう。

「本当に、約束ですから……」

腕にしがみついて心細そうな声を出す絹旗に、宇都宮の思考は暫しループを繰り返した。

【磁気単極子】

この小説では超危険な体晶のようなもの。現実世界ではまだ発見されていない。学説としては存在していなければならぬものなのだが、一度だけ実験中にそれっぽいものが装置を横切っただけである。おそらく存在するなら電子のような素粒子としてであり、固体として発見されることはないだろう。

03：量子変速

七月十八日。

午前の講義を終えた宇都宮は、ジャケット風紀委員の御手洗学院大学支部に足を運んだ。

昨日の夕方 宇都宮たちが見回りを諦めた後、また虚空爆破事件が起こっていた。携帯に送られてきたメールを見て、宇都宮はやれやれと溜息を吐く。そろそろ犯人が得意になって来たのか、事件の間隔が段々と短くなっていた。一日に一回、犯行に及んでいるといった具合だ。

指紋の認証でドアロックを解除する。

「……と言っか、だ」

宇都宮は眉間に皺を寄せる。

昨日の出来事もあって消耗していた宇都宮は、駆け足で部屋の中に踏み込むと、ソファに陣取っていた小娘の肩をおもむろに掴んで前後に揺すった。

「テメエら学校はどうした ！？」

「ひああっ！ 助けて下さいまし、お姉さまあ ！」

御坂美琴はチラリと二人を一瞥するが、どうでもいいと言っような溜息を返すと、視線をPCに戻した。

ストーリーミング形式の動画サイトでインディーズバンドのプロモーションビデオが再生されている。

美琴は眠たげに目を細めながら「やっぱりイケメンはいいわねえ」と呟いていた。

「それに比べて、どうして私の周りにいる男どもは……」

「美醜というのは脳内麻薬が作り出した幻想に過ぎないのだよ、御坂君」

「そんな感じの台詞、推理小説で見たことがありますの」

ジトツとした目を向けられるが、宇都宮は素知らぬ顔でやり過

した。

すかさず駄目出ししようとした白井を、宇都宮は再び頭を掴んで前後にシェイクする。次第に恍惚とした顔になり「あ、あ、あ……お姉さま以外にこの私が……」と口走り始める。

「何これ気持ち悪い……」

思わず手を離してしまふ。

ゴツン　と背後の壁に後頭部をぶつけた白井は、ソファを転がって悶絶した。

「今日は能力の測定日だったのよ。私たちのクラスは午前中に測定が終わったから、昼上がりなわけ」

「ああ、そう言うことか。……でもなあ、わざわざここに来ることはないだろ。お前からここが大学だってわかってんのか？」

周りの視線が気にならないのだろうか。

「それ、アンタが言うど洒落にならないわよね」

「洒落？」

意味がわかりかねて訝しげに問い返すと、御坂美琴はやれやれと両手を広げた。

「髪はボサボサで、服もダサイじゃない。彼女いない歴イコール年齢の人に言っても仕方ないかもしれないけど」

「ぶつ、無礼な！ 発言の撤回を要求します、裁判長！」

思わず両手を握り締めて力説する。カッターシャツとジーンズは宇都宮のアイデンティティだった。

すかさず白井に同意を求めるも、

「原告の意見を棄却しますの」

一瞬の迷いもなく即答される。

宇都宮は目の前が真っ暗になったような気分だった。

美琴は嗜虐的な笑みを浮かべながら、灰になっている宇都宮の肩を叩く。

「せめて私たちの隣にいても恥ずかしくない格好をしなさいってこと
よ」

「貴様らは俺にパンツを脱げと言うのか!？」

「アンタはどんな服を着るつもりだこらあ!」

美琴がぶるぶると握り拳を震えさせる。

しかし困った。

宇都宮は衣服に対する“こだわり”というものを、これまでまったく抱いたことがなかった。だから量販店の安物で済ませてしまう。それで十分満足しており、誰かが困るわけではない　　と思っ

た。それがどうやら、この娘たちには不満らしい。

宇都宮は両目を閉じた。

美琴は自分たちに釣り合う格好をしると言っていたが。

「とすると、高校時代の制服を着ればいいわけか」

「どう言う思考を辿ればそうなるのよ。アンタ大学生でしょうが」

「背広か」

「そもそも普段着じゃないわよ」

宇都宮は舌打ちした。一々注文が多い奴らだ。

一体どこが不満なのだと呟いているこの男は、美琴と白井に段々と哀れみの目を向けられるようになっていくことに気付いていない。制服、礼服と辿ってきた思考が、やがて終着点にたどり着き、宇都宮は「これだ!」と叫んだ。

「つまり、アロハシャツを着ればいいんだな!」

美琴と白井が溜息を吐いた。

駄目だこいつ、早く何とかしないと　　と言うような、マリアナ

海溝よりも深い溜息だった。

「黒子、駄目だわコイツ」

「お前の方こそ頭がどうにかしているんじゃないか。アロハシャツはハワイの礼服だぞ!？」

「だからそれはハワイでの話でしょ!？　アンタこそ頭がどうにかしているんじゃない!？」

「この分だと宇都宮さん、映画村のコスプレですら受け入れてしま

いそつですの」

白井に言われて頭の中でイメージする宇都宮。

「全然オツケーじゃないか。羽織袴がイカすぜ」

平然と答える宇都宮の左右の頬に、二人の拳骨が突き刺さる。

ノックダウンした駄目男を蹴り飛ばしながら、白井と美琴は同じ結論に達していた。

「……セブンスミスト、行こっか」

「……ですわね」

口で言っても、どうにもならないことはあるのだ。

十

学園都市には様々な交通手段があるが、最もメジャーなのは個人用のニーズに合わせることが出来るバスだろう。三人は大学のバス停から、市街地に向かうバスに乗り込んだ。運悪く大学生たちの帰宅時間に巻き込まれ、バスの座席はたちまち埋まって満員になる。

中学生二人が隣り合って座り、やや離れたところで宇都宮が孤立する。

ざまあみると言うように笑う美琴に中指を立てていると。

「そのジエスチャーにはどのような意味が込められているのかな？」

美人さんに話しかけられてしまった。

学園都市では取り立てて珍しいわけではない白衣姿で、顔立ちは整っているが、言葉にできない独特のオーラを発していた。

意外なのは だ。

研究者に対して拒否感を抱いている宇都宮が、すんなりと彼女を受け入れることができたことだった。

「子どもたちがやっているのを見たことがある。テレビや映画でも見かけるが、一向に興味がわからない」

「……あー、えっと。そうですね、研究者ならまずはご自身で考え
てみるのはどうでしょう」

「それもそうだが、すでに私なりの結論は出している」
女性は表情を変えず、淡々と呟いた。

「中指を立てた後に戦闘が始まることから、つまりあのジエスチャ
ーには武道で言う『礼』のような意味合いがあるのだと私は推測し
ている。剣道や柔道で試合前に『お願いします』と頭を下げている
だろう。あれの略式だ」

「……略式って」

宇都宮は絶句していた。

どこからか危険な電波でも受信しているのだろうか。

ファッションセンスが壊滅している宇都宮もあまり人のことが言
えるわけではない。極論になるが、二人の脳の構造が理系だからこ
うなるのだろう。

必要と思ったこと、己の興味のある分野ならとことん突き進むが、
興味のないこと、必要のないことは簡単に切り捨てる。

たとえ解答が得られなかったとしても、この女性にとってはどう
でもいいことなのだ。

「『礼』とはいかにも儒教的ですが、映画のアメリカ人も中指を立
てていますよね」

「絹の道シルクロードで運ばれたのかもしれない」

「しかし儒教は欧州には根付いていません」

「いや、近代になってからアメリカに流入したのかな。……すまな
い、降参だ。君は意地悪だな」

たかが中指を立てるジエスチャーだけで、ここまでスケールが広
がるとは。

あの中指……ある仮説によると男性器を意味しているらしい。

宇都宮はこんなことは女性の前では言いたくないと考えている。

白井や美琴になら臆面も無く解説していただろう。中学生二人は女
扱いされていないわけだ。

絹旗なら……どうなるだろうか。宇都宮は胸にもやもやとしたものを感じて、首をぶるぶると横に振った。

逡巡している宇都宮を見かねたのか。

「すまなかつた。君にもわからない質問だったようだな」

「いや、そうではなくて、ですね。意味は知っているんですよ。あれは……」

挑発だ。日本人はスキんシップのようにやっているが、外国人にやれば半殺しにされるだろう。

それを言おうとしたところで、女性は宇都宮の言葉を遮った。

「答えなくていい。私は研究者だからな。行き詰まったからと言って、安易に答えを求めるようではやっていけないんだ」

「それならいいですけど」

「もしここで君から解答を得られたとしても、私はこの問題を解決したことはない。完全に理解したわけではないのに、もっともらしい結論を得て“納得”したような気になるだけだ。人は人に物を教えることはできない。ただ自悟させる手助けをしているに過ぎない」

「何すかそれ？」

「ガリレオの言葉を多少借りてみた。……ふう、それにしても暑いな」

「まあ、満席ですから」

満員バスでは冷房もほとんど役に立っていない。

宇都宮は手の平を団扇にしてパタパタと扇ぎながら振り返る。そして。

女性がシャツのボタンを上から一つ、二つと外しているのを見て大口を開けて固まった。

周囲の目が大きく広がるのを見て、宇都宮はこのままではいけないと思いを再起動させる。

「あ、アンタは何をやってんだ!？」

「いや、暑くないか？」

「だからと言って服を脱ぐ奴があるか!？」

慌てて女性の手を押さえ付けると、不満そうな顔をされた。

ポケットの携帯が猛烈に震えるのを感じながら、宇都宮は途方に暮れる。白井と美琴が般若のような形相をしていた。

きつと後でひどいことになるのだろう。容易に想像できる未来には絶望しかなかった。

「私は特に気にしないのだが」

「アンタ、アフリカの原住民にでも混ざるつもりか？」

「それは偏見が多分に混じっているな。熱帯地域の人々が面積の少ない衣服を着ているのは、周囲の気温に適応した結果だ。紫外線の強い砂漠などでは全身を覆う衣服が好まれている。私は周囲の温度に合わせて、己の衣服を調整しようとしただけだ。何か問題でもあったのか？」

「自信满满でえらいこと言っちゃってるよこの人……」

げんなりと肩を落とす宇都宮に、女性は不思議そうに首を傾げていた。

まるで宇都宮の方が間違っていると言うような反応がひどくショックだった。

バスがようやく目的地に到着した時、宇都宮はそれを天からの救いだと思った。今なら信じていない神にも祈ることができそうだ。

ぞろぞろと出入り口から吐き出される学生を眺めながら通路が開くのを待っている。

「有意義な時間だった。では、これで失礼する」

「はあ、そうですか」

二度と会いたくねえよという言葉をそつと胸の内に収め、宇都宮は女性を見送った。

とんだ災難だった。宇都宮は嘆息する。

「覚悟はよろしくて、宇都宮さん？」

「まだこっちが残ってるんだよな……」

「サイテーよね。死ねばいいのに」

汚物を見るような目はやめて欲しい。

どうにか二人を説得しながらセブンスミストに向かう。

「大体、誤解されるような行動ばかりしている宇都宮さんがいけませんの」

「顔がアレよね。『あ、この人なんかヤバそうなことしてる』って感じで」

「そうですね。自宅にいたいけな少女を監禁していたとしても不思議ではありませんわ。何時かテレビのニュースでご近所様に『いつかやると思っていた』と証言されてしまいますの。中学のアルバムがどこからか出てきて、コメントイターに目付きがヤバイですわって唾われるんですわ」

「俺が何をしたよ!？」

あんまりな認識に半泣きになる。

が、すぐに二人が笑い出したのを見て、からかわれていたことに気付いた。

「ちくしょう、テメエら」

「あれ、白井さんじゃないですか」

鈴を転がすような声がして、三人同時に振り向くと、頭に花を乗せた少女がどうもですーと手を振っていた。

その隣にはセミロングの黒髪の少女がキョトンとしている。

「あれ？ 初春のお友達？」

「白井さんと宇都宮さんは風紀委員なんです。そして、この人が……」

初春が黒髪少女の肩に手を置いて、耳元で何事かを囁いている。

常盤台の……お嬢様が……とか聞こえて来て、宇都宮はこっそり笑った。

コイツらのどこがお嬢様だ と声高に叫びたいところだ。

不審な笑みに気付いた白井が宇都宮のケツにキックを入れた直後。

「あの『超電磁砲』の御坂美琴さんなのですっ！」

初春が美琴を指差して自慢げに紹介した。

黒髪少女が感動して美琴に迫るのを見て、蚊帳の外の宇都宮と白井はそつと笑みを交わした。

「まるで偶像アイドルだよな」

「そのお姉さまを独り占めしているのが私ですの」

さも当然のように言う黒子に、美琴がうんざりとした反応を返していた。

十

多種多様な衣類がずらつと並んでいる。見ているだけで目がチカチカとしてくるほどだった。

宇都宮はメンズ売り場にたどり着いた瞬間に回れ右をしていた。

「さて、アロハシャツを探しに行こうか」

「ここらこらっ、行き成り逃げ出したら話にならないでしょうが」
美琴に首根っこを押しられ、渋々と頷く宇都宮に、新たに加わった二人が苦笑いしている。

黒髪の少女は佐天涙子という、初春と同じ学校の友人だそうだ。

「まあ私ならこんな格好をしている人には近付いて欲しくないですけどねー」

宇都宮のハートを一瞬で打ち砕くなど、辛辣なことを平然と言う少女だった。

試しにジャケットを広げてみるが、何がいいのかまったく理解できない。夏場にこんなものを上から羽織る意味があるのだろうか。ファッションと言えばあれだ。もつと腕にシルバー巻くとかさでいいのではないだろうか。

首を捻っていると、佐天が身も蓋もないことを言い出した。

「結論としては、イケメンは何を着ても似合うんですね。と言うかイケメンが流行の起点ですから」

「イケメンじゃない奴はどんなに頑張っても真似事にしかない」と。もうアロハシャツでいいじゃん」

あくまでアロハに固執する宇都宮に、白井が見ていられないとばかりに目を覆う。

おっ、ちゃんちゃんこ　と手を伸ばそうとする宇都宮を引っ張り、試着室に押し込んだ。

「とりあえず、手当たり次第に着て頂きますの」

言葉と同時に格子模様（普通はチエックと言う）のシャツが放り込まれる。

あまりの強引さに閉口しながらシャツを広げ、宇都宮はやれやれと溜息を吐いた。半袖シャツなのに袖が肘の辺りまである。何だこりや　と思いながら着用。試着室のカーテンを開ける。

「アウト」

「ひでえ」

サツと閉じられたカーテンに涙する。

「これなんてどうでしょう?」

「まあいいでしょう。宇都宮さん、準備はよろしくて?」

「あーもう勝手にしやがれ!」

それから一時間、宇都宮は女の恐ろしさを味わった。

窓枠のホコリ一つまで目を光らせるような嚴重なチエックに、そこまでこだわるのかと驚愕させられ、最後の方には店員まで加わって、駄目だ駄目だと口を揃えて評価し続ける。素材があれだから期待できないとか、髪を切れば少しはマシになるとか、散々な言われようだった。

エロゲでは衣服に無頓着なヒロインを、別のヒロインが可愛い可愛い連呼しながら着せ替え人形にする　と言うテンプレがあるが、現実是非情だった。着せ替えイベントがこんなものになるとは。

一時間後　。

「これが限界かしらね」

「二宮君の五パーセントぐらいでしょうか。ようやく平均点ですね」

顎に手を当てて吟味する美琴に、佐天が感想を述べている。

宇都宮は鏡を見て、深々と溜息を吐いた。

彼女いない歴イコール年齢の宇都宮は超ダメ男。二週間も洗濯していないジーンズを穿いていたのです。

毎日、代わり映えのしないカッターシャツを着ている宇都宮。これが、彼の精一杯でした。

そんなダメ男を救うべく立ち上がったのは四人の女子中学生。彼女たちの手により宇都宮は生まれ変わり。

「……って何だよこのノリは!？」

「何と云うことでしょう、まるで浮浪者のようだった宇都宮さんが……って、ちよつとうるさいですの」

「パクリだろ!? いいのかこれ!？」

つかビフォーアの評価がひどすぎる。名誉毀損レベルだ。

怒りに震える宇都宮の背中を、佐天がバンバン叩きながら言う。

「これで合コンに参加できるじゃないですか。二次会に誘われない人は卒業ですね」

「ここまでやって参加レベルかよ! せめて彼女ができますくらい言おうよ!」

「叶わない願い事なんて、捨てた方がいいですよ……」

「しかもしんみりとまとめやがった!？」

遠い目をする佐天に全力でツツコミを入れる。

この一時間ですっかり打ち解けた佐天に笑われ、宇都宮は色々な意味で泣きたくなった。

財布から飛んで行く数枚の万札を未練がましく見送ると、今度はさらなる意味で地獄を味わうことになる。

そう、女性の買い物とは長いのだ。

「あ、これいいですね」

「ホントだ！……あー、値段が」

初春が手にしたのは水玉のぺらっぺらのカーディガンだった。

佐天が手に取って値札をめくり、残念そうな顔をしている。

サイズが一つほど小さいのではないかと疑ってしまう大きさなのだが、彼女たちはこれはいいものだと思っっているらしい。デブには似合わん衣装なのか　と何となく呟くと、二人に睨まれてしまった。

「外見だけでなく中身もアウト……と。こりゃ駄目ですね」

「宇都宮さん、デリカシーというものを覚えた方がいいと思います
どうしてここまで言われなければならぬのだらう。」

「デブには似合わないと言っただけだろ。お前らが着たら似合っ
ると思うよ」

「え、本当ですか？」

「嘘は言わない主義だ」

真摯に言う。すると二人は嬉しそうな悲鳴を上げながら別の売り
場に飛び込み内緒話を始めた。

ぶっちゃけてしまうと、宇都宮にはよくわからなかった。

店の外に出る。途中で高校生の男子と言い争いをしている美琴を
見付けたが声はかけなかった。

ポケットから煙草を取り出した。

口に軽く啜えて能力を使う。ライターが必要なのは便利だった。

「あれは……？」

入り口で煙草を吸っている時、店から出てきた少年を見て宇都宮
は眉をひそめる。

どこかで見たような記憶がある。眉間に手を当てて考え込むが、
思い出せなかった。

と、携帯電話が小さく震える。

ディスプレイには白井黒子と表示されていた。

『宇都宮さん、どこにいますの！？』

「店の外だが」

白井が電話越しに怒鳴り声を上げる。

『この店に爆弾が仕掛けられたようです！ 店内の人たちを外に誘導するので手伝って下さい！』

「ッ、アイツか！」

思い出した。

レンタルビデオ店でも見かけた男子高校生だ。

眼鏡をかけていた。痩せ形だった。

ビデオ店ならまだわかる。アニメを借りに来たという可能性もあった。

独断と偏見に満ちているが、宇都宮は少年のことをオタク系だと断じていた。

自分がそうだからわかる。同類には通じ合うものがあるのだ。

だが、ファッション店？

何の冗談だ。

しかも、制服を着ている。となると学校帰りである。通学用の教科書が入った厚ぼったい鞆を肩からぶら下げて、服を買いに？

宇都宮が制服姿の男子高校生を見かけたのは、美琴と言い争っていた少年だけだ。

この学生だらけの学園都市で だ。

「悪い、野暮用ができた！」

『あ、ちよつと宇都宮さん！？』

電話を切る。あの少年はまだ見失っていない。不自然なところで路地に折れたのを見て、宇都宮はますます確信を深める。

きつと、アイツが ！

宇都宮は全力で走りながら手を伸ばす。その指先が少年の肩に触れる寸前に。

ドンツ、と。

「ひゃあっ!？」

別の者と衝突した。甲高い少女の悲鳴に我に返る。

そして、宇都宮は絶句した。

「ほ……のか？」

「ひ、なたくん？」

止まない雨はないと言うが。

これはきつと、止まない雨だ。宇都宮が死ぬまで、止むことはない。
い。

かつての記憶が、頭の中に降り注ぎ始めた。

十

ずっと、比べられてきた。

弟の方が優秀だった。勉強でもスポーツでも、交友関係ですら、弟の方が優れていた。

馬鹿な親は弟にすべての期待を傾け、自分たちと似た無能な兄に同族嫌悪を抱いていた。

レベル0。無能力者。

学園都市では有り触れた悲劇。それが、決定的な亀裂を生み出した。

段々と減っていく仕送りに、中学生にして節約の仕方を覚えた。

月末などは駄菓子で飢えを満たしていた。枕を抱きしめて身体を丸め、じつと飢えに耐える夜が最も苦痛だと言うことを知った。中学校が栄養学のテストとやらで給食制を導入していなければ、きつと今頃は犯罪者の仲間になっていただろう。

家から持って来た古着はすべて売り飛ばした。

残ったのは制服のカッターシャツ、毎日洗濯する必要のないジーンズ。

それでも、だ。

文句の一つも口にしなかったのは、きつと捨てられるのを怖がっていたのだろう。

高校生になれば。

学費が上がり、昼食が弁当持参になり、教科書代すら払えないことがわかった時。宇都宮は進学を諦めて働くことを決意した。そして中学の担任に相談する。無能力者を差別している人物だったが、相談できそうな相手は他にいなかった。中学とは言え、少しは求人があるはずだ。そう言う考えもあったのだ。

そして、宇都宮は釣られてしまった。

「『無能力者特殊開発計画』と言うものがある」
都合のいいエサを目の前にぶら下げられる。

「新たに発見された素粒子を用いてレベル0の能力開発を行うという計画だ。だが、研究のサンプルが思うように集まらなくてな。一ヶ月二万円。まあ実入りは少ないが、レベルが上がれば奨学金を受けられるようになるし悪い話ではないと先生は思うぞ。もしレベルが上がれば御の字ってことで、どうだ？」

レベルが上がれば。

担任の口振りは、そう思わせるように誘導するものだった。そして、それに気付いた時には手遅れだった。

雑居ビルの一角で説明会が開かれ、別室で面接が行われる。能力を測定するという名目でよくわからない装置を取り付けられ、危険ではないと何度も念を押されながら注射器から薬剤を投与される。目が覚めたら地獄にいました。と言った案配だ。実によくできている。

「死にたくないなあ。わかるよね」

「わかるって。うるせえって」

「お前のがうるさい」

四畳の部屋に三人押し込まれ、毎日よくわからない実験が繰り返される。

三人ともぐったりと部屋に横たわっていた。

「山口の奴、脳味噌を切り開かれたって」

「頭蓋骨をぐりぐりって切り開いて？」

「そんな感じ」

「失敗してポイツ か。泣けるねえ」

別の部屋に入れられた知り合いが死んだと聞かされても、何とも思わなくなっていた。

ただひたすら死にたくないと言っただけだ。

神に祈るわけではない。強いて言うなら自らの幸運に。

神がいるなら、学園都市はとくにソドムとゴモラや、ノアの箱船のようになっていく。

「俺って、レベル3ぐらいあればいいかなって。そう思ってただけだって。他人と同じ物を欲しがってただけだって。それだけだって……」

……だってのに、この仕打ちは何だって！

親友は鼻をすすりながら語る。

そしてとうとう、同室から一人逝った。

焼却炉に投げ込まれ、骨すら残らない高温で焼かれたと言う。

本当にいなくなったのか、実感が湧いてこなかった。

「どうしてだろう。わからないよね」

「わからないな。……ただ、部屋が少し広くなった」

部屋が広くなった分だけ、ぽっかりと胸の中から大切な何かを失ったような心地がした。

だが、涙など出てこない。泣くための体力など残っていない。

ただ命が枯れていくのを感じることにできなかった。

そんな時だった。

「初めまして。小町仄科です。よろしくねっ！」

彼女がやって来た時も、何の感慨も浮かばなかった。

十

時間にして一瞬。

宇都宮と彼女の視線が交差する。

どうしてこんなところにいる。殺さなければ。今までどうしていたのか。焼き方はウエルダンがいい。

思考が混雑する。

「ははっ、やっつと、会えた……」

仄科が何かを呟いている。聞こえない。殺すしかない。宇都宮はずっと前にそのように完結している。余計な思考を挟まずに殺す。そう決めたのだ。故に右手に殺意が行き渡るのを待ち、ゆっくりと手を伸ばした。指先が仄科の頬に触れる。少しでも念じれば脳が沸騰しシナプスが凝固するところで。

背後から爆発音が轟いた。

「ッ！」

振り返る。自動ドアのガラスが吹き飛んでいた。

『量子変速』シンクロトン。虚空爆破事件がまた一つ起きてしまったのだ。

次に宇都宮は少年の方向へ振り返る。まだ間に合う。

「日向君……？」

考えている暇はなかった。

「日向君！？」

宇都宮は仄科を置いて、少年を追いかける。

背中にかげられた救いを求めるような声は、あえて無視した。

ポケットから風紀委員の腕章を取り出して腕に取り付ける。

そして宇都宮は笑みを浮かべた。凄絶な笑みだ。見ている者が恐怖に襲われるような表情。笑顔とは元来攻撃的な表情と言われているが、宇都宮の笑みはそれ以上のものだった。攻撃的ではない。殺人的だ。

「ジャッジメント風紀委員だ。逆らえば、ぶっ殺す」

宇都宮の全身から炎が吹き上がる。

膨張した大気が衝撃波となって周囲に吹き荒れた。少年が振り返

り驚愕の表情を浮かべる。

「なっ、僕には何のことだかさっぱり……」
「ぐぐだぐだ言っつてんじゃねえよ　！」

少年の腹に蹴りを入れる。蹲った少年の髪を掴んで頭を持ち上げ、鼻を狙って膝蹴りをぶち込んだ。

最後に一回、サッカーボールを蹴り飛ばすように壁にぶつける。

「逆らえばぶつ殺すって言っただろうが。テメエはただひれ伏せばいいんだ」

「ふ、風紀委員がこのようなことをしていいのか!？」

「あん？　蹴り足りなかつたか？」

「ひっ、ややや、やめろお……!」

二回、三回。少年の腹につま先が突き刺さる。反吐に血が混じっていた。

「『やめてください』の間違いだろ？　ほら、もう一回蹴るぞ」

「くそっ、無能の癖に……」

少年が鞆に手を伸ばす。あえて宇都宮はそれを見逃し、少年がスプーンを取り出した直後、それを融解させた。解けた金属が少年の手に張り付いて火傷を負わせる。少年の口から声にならない絶叫が漏れ、股間から黄色い液体が溢れ出した。そして少年は一步、また一步と近づく宇都宮に恐れ戦き、地面を這いながら逃げようとする。宇都宮は右手に炎を出して愉悦の笑みを浮かべた。

だが、それも長くは続かなかつた。

「宇都宮さん!？　あなた何をなさっていますの!？」

「……何って、何だろう？」

「やりすぎですわ!　私には憂さ晴らしに翫っているようにしか見えませんの!」

「……事実、憂さ晴らしだからな。悪かつたよ」

一気に白けた。

宇都宮は手の中の炎を握り潰す。悪かつたと思っっているし反省もしているのに、白井はそれをわかつてくれなかつたらしい。いや、

不誠実な態度だと言うことは自分でもわかっていた。だから、仕方ないのだろう。

白井は宇都宮の頬をパンツと平手で殴った。

暴走した人物を殴って正気に戻す。様式美のようなものだ。

残念ながら白井には、お願いだから目を覚ましてと言うような悲劇のヒロインぶったものはまっぴりごめんだった。

「マゾに目覚めたら責任取って貰うからな」

「……先ほどの行動は、どう見てもサディストですの。心配いりませんわ」

「ベッドの中ではマゾになるかもしれないぞ」

「気色悪いからやめて下さいませ！」

少年は虚ろな目をして、乾いた笑い声を上げていた。

白井が少年の身柄を手錠で拘束する。

携帯で本部に連絡、報告を終えると、疲れ切った溜息を吐いていた。

「ただでさえ始末書数十枚の事件ですのに、これ以上問題を起こさないで欲しいですの」

「こう言う事務って、就職した時に役に立つのかな」

「……あからさまな話題転換に、呆れて物も言えませんか」
宇都宮は背後を振り返った。

小町仄科はもういない。

十

机の上で目を覚ました。んあ、と間抜けな声を漏らしながら顔を上げる。

大学の講師が気怠そうにマイクに話しかけているのを見て、ボリ

ボリと頭を掻きながら欠伸した。講義中に寝てしまおうとは、疲れが溜まってきているようだ。真面目というわけではないがお金の大切さを身に染みて理解している宇都宮は、金を払っている授業を無駄にするつもりはなかった……はずなのだが。

最近はず調子が狂いつぱなしだ。

講義室を抜け出して、気付けに煙草を入れる。

虚空爆破事件の犯人は、あの少年で間違いなかった。精神系の能力者に調べさせたらしい。確たる証拠もなく犯人をボコボコにしまった宇都宮には、宿題として大量の報告書と反省文の提出を命じられてしまった。それは今日これから白井に渡すことになっている。

ここ二日ほどやっていなかった訓練も今日から再開だった。

筋トレに巡回のやり方など、とことん叩き込んでやりますの

と意気込む白井は、黒いオーラを発していて、傍にいた初春が美琴の背中に隠れるほどだった。

煙草の煙で肺を満たして、煙を輪っかにして吐き出した。

「器用なものだ」

「練習すれば誰でもできますよ」

振り返る。

「また会ったな、少年」

宇都宮は苦笑した。

「少年って年齢でもないんですけどね。お姉さんは、この大学の講師とか？」

「いや、私自身は別の研究施設に籍を置いている」

この間バスで会った変な女だった。

もう会わないだろうと思っていたのに遭遇してしまうとは、縁があつたと言つことが。

妙な縁だ。

わざわざ、宇都宮に会いに来て来るとは。

「何を専門になさっておられるのです？」

「AIM拡散力場だ」

「それはまた、ありきたりな」

「興味はないか？ 中々面白い学問だが」

あまり興味はなかった。煙草の煙を吸い込んで、宇都宮は空を見上げる。

「頭蓋骨を割って脳味噌を弄くつたご経験は？」

「……死体なら、研修の時に」

「それでもなお勧めようとするなら、よほど面白いのですね。

いや、皮肉ってるわけじゃないです。すみません」

「いや、謝らなくてもいい。実際、吐いた者も多いからな。あれは、しばらく肉が食べられなくなる」

煙草を灰皿に落とす。

「AIM拡散力場ですか」

「強要したわけではない。忘れてくれ」

「いえ、気にしてないです。俺は理系の方が成績よかったから物理やってるだけで、本当は文系に行きたかったんですよ。ただ、英語は普通なんですけど、文才というかセンスみたいなのが壊滅的みたいでして」

「脳に磁石を放り込めば、どこかが狂うのは当然だろう」

「……まあ、そりゃそうですね」

宇都宮は呆れ果てていた。

どうせこう言うことだろうと思っていたのだ。もし二人が再会するならば、こうなるとも。

「隠す気とか、ないんですか？」

「レポートに軽く目を通したただけだが、私が出した結論は、君がレベル4のまま『磁気単極子』を使用すれば脳を走っている電流が狂い元に戻らなくなる。可能性として最も高いのは、言語野に激しいダメージを受けて失語症になると言うものだった。肉体の崩壊については専門外なので何とも言えないが」

「ああ、そうなるんですか」

「反応が薄いな」

「使えば死ぬ力ですから。自爆覚悟で使って失語症で済めば儲け物みたいじゃないですか」

宇都宮は、清々しい笑みを浮かべた。

その時、初めて女性は痛ましいものを見るような顔をした。

「どうして、わざわざこんな話をしに？」

「私の研究内容がほんの少し流用されているからだ。自分の理論を使って他人が非人道的な実験を行っている。気味が悪いだろう？」

「あなたが俺の脳味噌を調べさせてくれと言うような人ではなくて安心しましたよ」

彼女は直接あの研究に関わっているというわけではなさそうだ。

宇都宮は安堵していた。

彼はこれまでの悲惨な経験から、善人と悪人を見分ける嗅覚というのだろうか、そんなものを身につけている。完全な善人や悪人がいないことは理解している。きつと敵意やら害意やらを肌で感じ取っているのだろう。

そして彼女は宇都宮の警戒心を潜り抜けることができる研究者だった。

宇都宮の境遇を知ってなお、その警戒網を突破できる研究者と出会ったのは初めてだ。

「木山春生だ。何かあれば頼ってくれ」

「いいのか？ ……いや、ちょ、待って！？」

感動に浸っている宇都宮だったが、次の言葉に啞然とさせられる。正確にはその行動に。

「名刺はどこだったか……」

女性 木山春生は白衣を無造作に脱ぐとポケットを探り、裏返したり引っ繰り返した。

さらに「おかしいな」と呟くとネクタイを緩めてワイシャツまで脱ぎ始めたのである。周囲の学生たちが顔を真っ赤にして目を充血させる。宇都宮は奪い取った白衣を木山に被せて、不埒な視線をシヤットアウトした。

「だからアンタはどうして脈絡なく脱ごうとするんだよ!？」

「名刺を探しているんだ。連絡先を教えておこうと思っただけ。普段はここに入れておいては？」

「だからってこんな場所で脱ぐか!? アホだろアホですかアホですわー!？」

「ああ、たしか財布に予備が入っていたな」

「そうでしたかよかったですね……っておかしいだろ脱ぐ前に気付けよ!？」

それから。

財布の中にも名刺は入っておらず、スラックスまで脱ごうとした木山を必死になって押さえ付ける羽目になった。

結局、連絡先を口頭で伝えて貰うと、宇都宮は最初からこうすればよかったんだと肩を落とす。

04：酸素操作

宇都宮の思考のリソースの大半は、携帯のディスプレイに表示された文面に向けられていた。昨日遭遇した小町仄科の情報はまだ入ってこない。今回は白井黒子からの呼び出しだった。

どうしたものかと頭を掻きながら、ふと背後を振り返る。

「煙草は高校を卒業してからにしような」

直後、学生の一人が何気なく取り出した百円ライターが、パンツと爆発した。

悲鳴を上げて「いてえよお母ちゃあーん！」と泣き叫んでいる学生たちを放置して歩き出す。

「うわあー、すご」

驚いて両目を見開いていた少女は、好奇心がくすぐられたのか、そのまま宇都宮の隣に並んだ。あまりにもちゃっかりとした態度に思わず少女の顔をマジマジと見詰めてしまう。満面の笑みが返ってきた。胡散臭い笑みだ。宇都宮は思わず苦笑する。

「決め台詞とか、やらないんですか？」

「また詰まらぬものを燃やしてしまった……」

「……かつこ悪いですって」

佐天涙子は大げさに肩を落とした。

キラキラと興味深そうに輝いていた目の色が一転、サンタの正体を知らされた子どものように失望の色に変わる。

「期待を裏切る決め台詞ありがとうございます！。と言っか、あれですよね」

「あれとは？」

「私、宇都宮さんはやればできる人だと思っていたんですよ」

「よく見ているな。褒めてやろう」

「今の会話を、どう解釈すればそう返事できるの!？」

頭を撫でてやろうと手を伸ばすが、佐天は素早い動きでサツと離

れた。素っ気ない態度に泣きたくなる。あれか。こんなスキンシップですらセクハラになるのか。最近の世の中は世知辛すぎる。混み合っている電車の中で、なぜか自分の隣の席だけずっと空いていた時のような切ない気分になった。

宇都宮は空っぽの手を眺め、胸ポケットのロングピースに伸ばす。「それで、今日はどちらに？」

「白井に呼び出されてな」

本来なら筋トレ後、街中を巡回となっていたところを、急遽予定が変更され白井黒子に呼び出されたのだ。

調べたいことがあるから付き合えと。

昨日、虚空爆破事件を解決したばかりなのだが、風紀委員に安息は許されていないらしい。宇都宮は消化し切れていない積みゲーに思いを馳せる。自宅には型落ちのノートPCがあるのだが、ここ数日はロクに手も触れていない。このまま積み上げられ続けるのだからという予感があった。

「そっちは？」

「初春がとうとう倒れてしまいました、熱冷ましを買いに。と言っても初春本人は退屈だーって言ってるので心配するようなことはありませんけどね」

「風邪か」

「そうですね」

「つまり」

宇都宮は不謹慎なことを言う。佐天がジトっとした目をした。

「学園都市が秘密裏に開発していた細菌兵器に感染しているってのはどうだ？」

「ありきたりな設定ありがとうございました。二十六点」

友人を巻き込んだ設定はお気に召さなかったらしい。

宇都宮たちは公園に入る。

待ち合わせ場所は、かき氷の屋台の前だった。どこまでついてくるつもりだと佐天に目を向けるが、彼女にはまったく悪びれた様子

がない。わざわざ追い返すのもどうかと思ったので、宇都宮は軽く肩をすくめただけで、特に何も言わなかった。邪魔なら白井が追い払うだろう。

白井黒子はかき氷のカップを片手に、御坂美琴とベンチに並んで腰を下ろしていた。

「人間の頭って意外と簡単というか、ユーモアがわかるように出来ているんです」

二人は何やら高度な雑談をしているようだった。

常盤台中学では一部の分野において大学レベルの教育を施していると聞いたことがある。卒業後すぐに社会に通用するレベルの人材を目標にしているからだ。

「このかき氷のシロップも、赤色はイチゴ、緑色はメロン、黄色はレモンみたいに、色によってイメージが決定されるわけですからね」

「色彩療法にも繋がる話だな。紀元前五百年にピタゴラスもやっていたらしい。『どんな人でも、真っ白な服を二日着ただけで風邪が治る』ってわけだ」

「ここまで来れば、私たちの脳味噌ってのは単純というより馬鹿よね」

「自分自身すら騙してしまふ。人間の業かもしれませんわね」

宇都宮はかき氷の屋台を振り返り、三百円の値札を見て絶句した。水から三百円を作り出すとは、どのようなカラクリがあるのか非常に気になる。もしや学園都市の最先端技術を使い、この世の物とは思えないほど美味なかき氷を開発してしまったのではないか。

白井たちの方を振り返る。

宇都宮は白井の前に屈み込むと、大口を開けて言う。

「くれ」

「嫌ですの」

宇都宮はチツと舌打ちした。

ドケチな奴になど気を遣う必要はないとばかりに、ベンチにどかんと腰を下ろす。押しつけられた白井は即座に文句を言おうとする

が、隣の美琴に密着しそうになり、何も考えていない幸せそうな顔になった。

ロングピースの煙をくゆらせていると、佐天が逡巡しながら屋台に向かった。

「そうか。買うのか。」

煙草一箱買える値段のかき氷を。学食のカレーライスよりも高いかき氷を。

宇都宮は戻ってきた佐天の前で口を開ける。

「くれ」

「ごめんなさい」

宇都宮はペツと地面にツバを吐いた。

直後、宇都宮の足下からガキンツ　と音がする。

恐る恐る足下を見下ろすと、金属の矢が突き立っていた。

「何すんだよ！　小便ちびりそうになつたじゃねえか！」

「下品ですわね。佐天さん、その馬鹿は放っておいていいですから」と言うか、アンタもつくづく風紀委員らしくないわよね。スキルアウトって言われても違和感ないわー。あ、佐天さん、それ一口ちようだい」

「あ、はい。どーぞ」

「……………は？」

宇都宮と白井は啞然としていた。

佐天が差し出したスプーンが美琴の口の中に収まっていた。

「お、お、お……俺には即答で断つたくせに！」

「お、お、お、お姉さまと関節キス!？」

奇声を上げる二人に、美琴は鬱陶しそうに振り返る。

「差別だ！」

「お姉さま！　ぜひぜひ私とも食べ比べを！」

「男と女なんだから差別ぐらいするでしょ。黒子も私と同じやつを注文しておいて何言ってるのよ、ったく……………」

物凄く面倒そうに対応された。

宇都宮は納得いかない。都合のいい時ばかり男女差別だと騒ぐ女どもには天罰が落ちればいいのに。

白井は地面に頭を打ち付けている。「どうしてお姉さまと同じものを頼んだんですの!？」と叫んでいる。お揃いがよかったからだろう。策士策に溺れるとやらだ。

「あはは。……いいんですか？」

「いいのよ」

手をぶらぶらと振って美琴は言うつと、

「そっぴや佐天さん、昨日言った『幻想御手』っての、もう一度詳しく聞かせてくれない？」

おもむろに切り出した。

様々な疑問が頭を駆け巡り、佐天は目を瞬かせる。

「え？ いや、えつと……ただの噂ですよ。『超電磁砲』の御坂

さんが興味を覚えるような話じゃないですし」

「ちよつと気になることがあるのよ」

「はあ、そうなんですか」

佐天は不思議そうに頷いた。

「ネット上でひっそりと広まっていて、私も半信半疑なんですけど、それを使うと何でも能力のレベルを簡単に引き上げることができるそうなんですよ。ネットの掲示板とかを見てみるといいかもしれないです。『幻想御手』を使ったという人が書き込みをしていたり、売買の取り引きをしているみたいですから」

「『幻想御手』?」

宇都宮は首を捻る。

初耳というわけではない。どこかで聞いたような覚えはある。どうでもよかったたので、情報のノイズとして切り捨てていたが、そんなものがどうしたと言っただろう。

「書庫バンクに登録された能力と、実際の能力に食い違いが生じているんです」

「誤載ではなく?」

「一件だけならそれで解決できますけど、数件になると誤載では済まされせんわね」

宇都宮は黙り込んだ。

介旅初矢。

虚空爆破事件の犯人だ。事件の動機は逆恨みだった。不良にいじめられていた自分を助けてくれなかった風紀委員を肅正してやると考えていたらしい。

能力は『量子変速』^{シンクロトロン}。書庫に登録されているデータによると、少年の能力はレベル2になっていた。レベル2。本来の能力ならあれほどの爆発は起こせないはずなのだ。だが、現実には起きていて、精神系の能力による鑑定でも少年が犯人と言いつことになっている。

能力の強度を偽装していたか、短期間にレベルが上がったとしか考えられなかった。

「それが『幻想御手』と」

「そう言うわけよ。マジネタだったらヤバイでしょ」

「すでに広まっている……わけか」

確かにその通りだ。これが学園都市中に広がったとして、どうなるか 宇都宮は小さく身震いした。

能力が上がった低レベル能力者が何を考えるのか。それは昨日の事件が示している。低レベル能力者は、高レベル能力者に恨みを抱いているのだ。低レベル能力者は、奨学金の額面からすでに差別されている。下克上を考える輩は幾らでもいるだろう。

「行くわよ、二人とも」

「こうして俺の積みゲーはますます増える っと。何時になつたら休みが取れるのか」

取り残された佐天の方を一度振り返り、宇都宮は苦笑した。悪くないと思いはじめている自分がいる。部屋に引き籠もりながら新情報を待つだけの日々より、今はよほど充実していると云えた。

どうしてこうなった。白井は額を押えて胸の底から溜息を吐き出した。

場所はチェーン展開されているファミリーレストランだった。三人のガラの悪い連中が居座るテーブルに、御坂美琴はアホっぽい笑みを浮かべて歩み寄っている。

「ネットで偶然お兄さんたちの書き込みを見て、できれば私にも教えて欲しいなーって」

猫かぶりにもほどがある。

覆面捜査は有効な手段ではあるが、どう見ても美琴に向いているようには思えない。

「あ、その美人のお姉さん。ペペロンチーノ、できればベーコン大盛りで」

「あ、な、た、も！ 何をやっているんですの!？」

宇都宮の頭を両手でぐりぐりとする。

恋人の前で他の女に粉をかけていると思った店員が、「可愛い彼女ですね」と苦笑していた。が、白井に殺意の視線を向けられて悲鳴を上げながら厨房に引っ込んだ。

一方。

美琴に媚びを売られた男たちは悪い気はしないだろうが、そう簡単に頷くほど考えなしというわけではなかった。何度も頼み込む美琴をすげなく追い払おうとしている。

「こつちも情報を手に入れるのに苦労したんでね。帰んな」

「駄目だ駄目だ。子どもはもうネンネの時間だぜ」

不良の癖にガードが堅い。女の子がこれほど懇願しているのに、口を割る気はなさそうだった。

美琴は両手を握り締めてぶるぶると震えている。

爆発寸前と言ったところだろう。不良たちをボコボコにするために店の中で暴れ回って、そして白井が始末書を書かされる羽目になるのだ。容易に想像できる未来に、白井は戦々恐々としていた。

「ペペロンチーノでございます」

「わーい」

宇都宮が嬉しそうにフォークを手にした時。

「えー、私そんなに子どもじゃないよお」

美琴が自分の尊厳をワゴンセールで売り飛ばす勢いで、アホっぽい口調で男たちにすり寄った。

白井の背筋が寒気で震える。似合っていない。あんなに気持ち悪いお姉さまは初めてだ。だが、男たちの気には召したらしく、スキンヘッドの男がだらしなく目元を緩める。

「だよなあ。俺はアンタみたいなの好みだぜ」

「ホントにー？」

「ああ。よく見れば、結構いけてるじゃねえか」

宇都宮がパスタをすすりながら「ロリコンだな」と呟いた。コイツも大概人のことは言えないと思う。

「お金なら少しは出せますけどお」

「俺は金よりも、こつちの方かねえ」

下卑た目をした男が美琴の肩に手を置くこととする。

サツと美琴はそれを回避した。そして、わざとらしく目元に手を添えて泣き真似をする。

「私、実は無理を言って学園都市に來させて貰ったの。でもやつぱり才能なくて、能力も全然伸びなくて、お父さんはさりげなく身体システムスキャン捜査の結果を電話で聞いてくるし、お母さんはあなたはやればできる子なんだからって。期待に応えなきゃって思うけど、どうしようもなくって。思わず嘘を吐いちゃって」

「おい、いきなり何言って……」

「そんな時、お兄さんたちのことを知って。もう『幻想御手』しか頼れるものはなくって。だから……」

そう言うと、美琴は胸に手を置いた。

「だから、ダメ……かな？」

迫真の演技だった。白井はテーブルに突っ伏して口から泡を吹いていた。

宇都宮がおしぼりで口元を拭う。ニンニク臭いんだよ、ペペロンチーノ。そして「アイツ、見た目だけは可愛いよな」と呟いていた。見た目だけではなく中身まで素敵なのは言うまでもないのだが、白井に反論する気力はない。

「お姉さま……」

「ま、元気出せや。パスタ食うか？」

「いいません」

女の子にニンニク系の食べ物をお勧めるとは、とことん空気が読めない男だ。

ともあれ、美琴の懇願もあつてか男たちの心は揺り動かされたりしい。小声で相談すると、一転して笑顔で答えた。金額次第では相談に乗ってやるよ。と言っている。胡散臭いが、まあいい。これで幻想御手の一端を掴んだのだ。今日の出来事は記憶に蓋をして永遠に思い出さないことにする。

と、そこで。

ツンツン頭の少年が、美琴の横から口を挟んできた。

「これこれ、そこな童子ども」

宇都宮は興味なさげにパスタを食べている。

美琴は絶句していた。

白井の身体からは魂が抜け出していた。

「寄ってたかつて女の子の財布を狙うものじゃありません」

彼らはまだ知らない。

不良たちに偉そうに説教を垂れているこの少年が、自らの未来において、どのように関わるのかを。

宇都宮は煙草を啜えた。

結局、あの後は不良たち、御坂美琴、割り込んだ少年すべてが店外に出てしまい、残された白井たちは自然と解散することになった。真つ白に煤けていた白井が無事に寮まで戻れるのか、いささか不安になったが、宇都宮にそこまで面倒を見てやる義理はない。

何より、用事があった。

携帯電話をパタンと閉じる。差出人不明の匿名メール。入念なことだと宇都宮は呆れていた。

誰もいない河川敷の土手で、煙草の葉が焼ける音が小さく鳴っている。

「『幻想御手』か……」

お手軽なレベルアップアイテム。

そんなものがあるのか。何かしらのリスクもなく強くなれるとでも言うのか。

「貴様とって『幻想御手』とはどのようなものだ？」

「俺と同じだよ」

宇都宮は嘲笑する。

相手は怪訝そうな顔をした。

「爆弾さ」

答えた瞬間、周囲に炎が溢れだし、ポツカリと二人の周囲を除いて、河川敷一面を覆い尽くす。

熱気に炙られても、二人とも表情一つ動かさない。宇都宮はポケットに両手をつっ込んだまま突っ立っている。

相手は　小さく笑う。

「いかにも、俺たちは爆弾であるな」

「アンタも失敗例か？」

「そうだ。この身はすでに朽ちたはずのもの。桃でも投げしてみるか？」

「それでアンタが帰ってくれるなら、そうしてもいいかな」

宇都宮はフィルターまで焼け焦げた煙草を投げ捨てる。周囲の炎にのみ込まれ、消し炭一つ残らない。

「んで、これはどんな趣向だ？」

「当然、実験だ」

「意味がわからん」

少年は肩をすくめる。黒い光沢を放っているナイロンのジャケットが衣擦れの音を立てた。

目の下に小さな傷跡のある少年だ。世の中のすべてが詰まらないと言っような顔をしている。

「詰まるどころ、俺とアイツが殺し合いをして、どちらかがレベル5に昇ればいいんだろ？ こう立て続けに襲われる理由がわからないのだが」

「だから、実験と言っている。最初から説明した方がいいかな？」

「そうだな」

気のない返事だった。相手も特に気にしていない。

「この研究は『無能力者特殊開発計画』という実験から始まった。

『磁気単極子』を無能力者に埋め込み、強制的に能力を開発する失敗を前提にした実験だ。無能力者など何人死んでも構わない。

そう言う思惑の下に集められたのが俺たちだ。しかし、この研究は頓挫した。失敗を繰り返し、理論や設備の不備を見直し、研究を突き詰めても、成功率は一パーセントを切っていた。これでは話にならない。採算がまったく取れないからだ」

少年は退屈そうに淡々と言う。

「研究は第二段階に移行した。奇跡的に生まれたたった二人の成功例を用いてレベル5を生み出すという計画だ。樹形図ツリーダイアグラムの設計者の演算結果、この二人が本気で殺し合えば、生き残った方がレベル5に

なるという結果が出ていた。準備のため宇都宮日向は『サークル』に、小町仄科は『グラウンド』に預けられた。自らの能力を理解しなければ、本気で殺し合うこともできないからだ」

宇都宮が気怠げに頷くのを見て、少年は続けた。

「しかし、貴様は小町仄科を殺すことを躊躇った。貴様は小町仄科に殺されても構わないと思っていた」

「俺はアイツに惚れてたからな」

「感情は理屈ではない。研究者にはそんなことはわからなかったと言ふことだな。……そして、貴様はまったく抵抗せずに小町仄科に殺さようとした。大怪我を負って死にかけている貴様を見て研究者たちはさぞ焦ったのだろうな。そして小町仄科を使つて『サークル』を滅ぼした。その思惑通り、貴様は小町仄科を憎悪することになつた」

「その言い方には語弊がある。俺は『サークル』のことなど何とも思っていない」

言われるがまま『サークル』を滅ぼした小町仄科を見て思ったのだ。たとえ小町が生き残つてレベル5になつたとしても、アイツは上の連中の言うことを諸々と聞いて、言われるがままに人を殺すだろう。今の彼女は 研究所で共に耐え抜いた時の小町仄科とは根本的に違ふのだ。そう思つたから、殺すことにした。

そんなことはわかつている。

宇都宮が知りたいのは、どうして工藤のような奴らが生み出され、宇都宮のところに来て来るのかだ。

睨み付ける視線に気付いたのだろう。少年は退屈そうな顔を、わずかに緩ませた。

「経験値が足りないんだよ」

眉をひそめる。その様子を見て、少年は満足げな顔をした。

「この演算結果が数年前のものだと言ふことを知っているな？ 貴

様が今のまま小町仄科を殺したとして、レベル5になれないという結果が出ているのだ。そして、今のままの貴様が小町仄科に殺されたとして、小町仄科はレベル5になれないのだ。ご理解頂けたかな？」

「ご丁寧に、上の連中はメタルスライムを用意してくれたと。くだらない」

宇都宮は吐き捨てた。

右手に炎を宿す。青色の炎。摂氏二千度。『バイロキネシス発火能力』とは格が違つ灼熱だった。

「もういいよ、お前。消えろ」

少年は、口元に笑みを浮かべた。

十

頭蓋骨にノコギリを当てられる。ゴリゴリと、心の底まで震え上がる異常な音色が頭の中に響き、ピンク色の粉が周囲に飛び散っていた。ピンセットとヘラのようなもので脳味噌が選り分けられ、研究者たちが意見を言い合っている。その言葉は、遠い国の外国語のようだった。

山口は笑う。

凡人は凡人らしくしておけばよかつたんだ。人生なんてこんなもの。期待しても裏切られるだけ。

たった一つの選択ミスで命を落とす、死体までリサイクルされる。「吹き荒れる！」

山口は指をパチンと弾く。

目の前に殺到していた炎。それが、かき消える。宇都宮が舌打ちするのを見て、山口の退屈は少しだけ癒された。

山口はレベル4だ。工藤よりも弱い。そして、その能力も珍しく

はあるものの強力ではない。どう考えても勝ち目などないのに、やる気が出るわけがなかった。

それでも。

それでもだ！

「雑魚なら雑魚らしく、一矢報いてやらないとな！」

「うざいつてんだ！ さつさと燃え尽きやがれ！」

足下を這うように灼熱が迫る。

しかし、それも山口に届く直前にかき消えた。

宇都宮が眉をひそめる。……まだ気付いていない。

山口は地面を蹴った。半径一メートル内に宇都宮を収めれば勝てる！

「……ッ、見え見えだクソが！」

だが、直前で宇都宮は地面を溶かし、山口の足を止めた。四千度で燃えさかる溶岩に踏み込むことなど山口にはできない。

結局のところ、山口の能力は一発芸だった。

山口の能力、『酸素操作^{オキシジェン・スター}』は酸素を操る能力だ。

元々はレベル0の『空力使い（エアロハンド）』だったが、『磁気単極子』によって強化された結果、酸素を操る能力に特化したのである。

燃えさかる炎から酸素を取り除けば、炎は燃焼を続けることができずに消え、能力の射程に入った者は、肺の中から酸素をひねり出されて窒息死する。

山口は高圧をかけた酸素を自分の周囲に展開して鎧にすることもできない。酸素にも中毒症状というものがある。酸素を過剰に摂取し続ければ死ぬしかない。

つまり、宇都宮を倒すためには突撃するしかないわけだ。

山口は小さく笑った。これでは打つ手がない。

宇都宮は舌を打つ。

「テメエ、差し違えるつもりか？」

「その通りだ。俺も連中の思惑に乗ってやるつもりなんてないんで

ね。ついでに貴様を殺してみようと思ったんだよ」

『酸素操作』の射程一メートルに、無理やりにも入り込む。

そこは きつと灼熱地獄なのだろう。熱操作によって山口の身体が沸騰するはずだ。

だが、それでいい。その時には、宇都宮の身体から酸素はなくなっている。

「付き合ってられないな」

「だろうな。だが、無理にでも付き合わせる！」

山口は踏み込んだ。迎撃の炎は 無効化する。

溶岩の地面は、強引に踏み込んだ。靴が一瞬で形を失い、皮膚の肉が持つて行かれる。

「があああつ！」

「ゾンビかよ。えげつない」

宇都宮が哀れみを込めて呟いている。

そんなものは、聞いている暇などない。足を引き抜いて、飛びかかった。

「勝った！」

宇都宮の身体に抱き付き、山口はほくそ笑む。

勝てた。勝てたのだ。

凡人でしかない自分が。 成功例の宇都宮に！

すぐさま能力を発動する。宇都宮の身体から酸素をひねり出し

「なっ、なんだ？」

瞬間、山口は強烈な違和感に襲われた。

「……これだけはやりたくなかったんだけどな」

宇都宮はやれやれと嘆息していた。

どう言うことか理解できない。

どうして、どうして。

どうして、宇都宮が五メートル先にいる。

どうして、山口は頭から溶岩に突っ込んでいるのだろう。

「お前が溶岩に片足を突っ込んだ時点で、咄嗟に足下の地面を溶かして潜ったわけだ」

「ははっ、馬鹿な。無茶苦茶じゃないか」

「四千度のマグマは俺にとってはドロドロの水みたいなものだ。肌に触れた物体の熱を常温にする演算を絶えず行っているからな。土がメッキみたいに身体にまとわりつき、固まった土を溶かす、これを繰り返すのも骨が折れる。まあ、何よりも 服が溶けるのが一番痛いわけだが」

宇都宮は 全裸だった。服はすべて燃え尽きたのだろう。

地面がゴボリと泡立ち、山口の全身をのみ込んでいく。最後まで、山口はそれを啞然と眺めていた。

「これがレベル4なわけがあるか。貴様はすでにレベル5に片足を踏み込んでいる。それが経験値不足だと？」

「もういい って言っただろ。お前は全部知らされていなかった。それだけじゃないか」

退屈だった。所詮はこんなものかと諦めの境地に入っている。

そうか 山口は皮肉の笑みを口元に乗せる。

自分は、当て馬だったのだ。

十

地中に潜る前に携帯を投げ捨てていたので幸いした。

「何で私がこんな面倒なことを……って、超変態がいた ！？」

「騒ぐな。人が来たらどうする」

「と超変態が仰っておりますが、これは今すぐ通報すべきではと言っかせめて葉っぱで隠せ変態！」

「見えそうで見えないギリギリのところが一番エロいと聞いたことがある。よって今回はすべてさらけ出すことにした」

「やっぱり超変態だった　！？」

宇都宮は耳を押えた。大声を聞きつけて誰かやってきたらどうするつもりだ。

予備のカッターシャツとジーンズに袖を通し、ホツと息を吐く。全裸というのはやはり心もとなかった。こう言うとき、絹旗という存在がいてよかったと思う。白井だったらどうしてこうなったのか問いただされていただろう。彼女には学園都市の闇には触れて欲しくなかった。

絹旗は頬を染めながら、宇都宮の方を振り返る。

「まあ、宇都宮がロリペド露出狂の超変態野郎だったとしても、私だけは見捨てませんからね」

「腹減ったなあ。財布は……あー、燃えたのか」

「……って、またこれですか！　立てたフラグを自分でへし折るとか超最低ですよ！」

ぐうつ　と腹の虫が鳴き始め、宇都宮はガツクリと肩を落した。財布に入れていた万札も残念だったが、学生証の再発行が面倒すぎる。風紀委員の腕章は　まあ、どうでもいいか。

なぜか顔を真っ赤にして怒っている絹旗に適当な返事を返すと、宇都宮は河川敷から街路に出る。

時刻は、深夜に差し掛かっていた。

「カップラーメンの備蓄はあつたかなー」

「まだそんな超栄養が偏つたものばかり食べてるんですか？　煙草もそうですし、四十歳になる前に病気で死んじゃいますよ」

「母親みたいなことを言うなよ。……って母親ってどんなんだっけ？　全然覚えてないな」

「私もそうですけどねー」

絹旗は、何も聞こうとしない。それが有り難かった。

絹旗は後ろに手を組んで、ステップを踏みながら前が出る。短い

ワンピースの裾をひるがえしながら振り返り、淡い笑みを浮かべた。

「ご飯、作ってあげましょうか？」

「いらん」

「超即決！？ いやいや、女の子の手料理じゃないですか！？」

「どうせポイズンクッキングだろ。そう言うことは、目玉焼きを作れるようになってから言いなさい」

ヒュン と拳が飛んでくる。

スウエーでかわしながら、宇都宮は見下すような笑顔を向ける。

「目玉焼きに失敗したことがある俺だから言える。あれはお前には無理だ」

「ッ！ 学園都市に何年もいれば目玉焼きぐらい作れるようになりませす！ 超簡単です！」

「ふっ、大口を叩いていられるのも今の内だ」

「馬鹿にして！ ただでは済ませませんからね！ 絶対に超美味いって言わせてみませす！」

宇都宮は一度だけ後ろを振り返った。

全身が溶けて地面と同化してしまった少年のことを一瞬だけ思い浮かべる。

彼は弱かった。そして、宇都宮の方が強かった。それだけのことだ。

「窮鼠の意地、見せて貰ったぜ」

「何笑ってるんですか、宇都宮！ すぐぬその余裕の笑みを超ぶち壊してやりますから！」

笑えないほど不味い料理が出て来ないように祈りながら、宇都宮たちは帰路に就いた。

【酸素操作】
オゾンブラスター

オゾンは酸素の同素体で、酸素と同一のものではないのだが、オキシジェンでは長くて格好が付かないため、ここはあえてオゾンにした。射程距離一メートルの制限さえなければ強力な能力だろう。

絹旗の『オフエンスアーマー窒素装甲』の亜種とも言える。

ちなみに、窒素にも中毒症状がある。いわゆる窒素酔いで、ただちに命に危険を及ぼすものではない。海を潜っているダイバーがボンベの空気（よく酸素ボンベと誤解されるが、あれは窒素と酸素の合成空気である）、しばしばこの中毒症状に見舞われる。その症状はお酒に近いと言われることもあり、楽観的になり、行動から慎重さが失われる。一瞬の判断が命取りになるダイバーにとってはかなり危険である。

……絹旗は窒素酔いしているのだろうか。

05：鋼鉄変化

カーテンを透過した朝日が、枕元まで差し込んでいた。馬鹿（侵入者）によってぶち破られた窓ガラスも、昨日ようやく業者を呼んで交換して貰っている。無駄な出費に涙がこぼれたが、夕食がもやし祭りになるにはまだ早い。レベル4の奨学金は伊達ではないのだ。宇都宮は身体を起こす。

「……寝足りない」

六時間は睡眠を取ったはずだが、疲れが抜けきっていないかった。

もつとも、今日からは夏期休暇だ。時計を見ると、午前八時。普段はこれから支度をして大学に向かうところだが、今日は思う存分寝ることができ。何か用事があったような気がするが、きつと思いつい過ぎだろう。さつきから携帯が鳴りまくっているような気がしないでもないが、間違い電話とか悪戯電話とか業者のスパムメールに違いない。

六日前は『サークル』のお仕事、五日前に虚空爆破事件に巻き込まれて入院、四日前は退院後すぐ児童公園で虚空爆破事件に遭遇、三日前は工藤と戦い、一昨日に虚空爆破事件の犯人を捕縛、昨日は山口と戦った。

もついい加減にしてくれと叫びたい。

今日は何もないのだ。何も無いことにする。ずばり引き籠もり。家から出なければ何も起こらない……はずだ。

「宇都宮、起きてますかね。チャイム五回で出て来なければ超ぶっ殺すところですが」

「結局、クレイモア（指向性対人地雷）でドアを爆破すべきだと思つよ。C4の信頼性はピカイチな訳よ」

「朝っぱらから警備員に追いかけるのは超勘弁なんですけど」

「結局、あわよくば『サークル』を壊滅させられるのに。麦野は喜ぶと思うんだけどな」

宇都宮はガバリと布団を蹴り上げた。

薄っすいドアの向こうから不穏な声が出ている。こびり付いた目垢を擦り落とすと、宇都宮はおもむろに玄関まで足を運んだ。意を決するように深呼吸して肺の奥まで空気を送り込んでドアを見据える。

向こう側に、宇都宮の平穩を打ち破る敵がいるのだ。

宇都宮は大声を出した。

「テメエら！ 今何時だと思ってるんだ！？」

時計では午前八時五分である。

今日の宇都宮は引き籠もりのため、ドアは開けず、ただ蹴り飛ばすだけに止める。

「うわっ、何なんですかも。超わけがわからないんですけど」

「八時五分だ馬鹿野郎！ 夏休み中の学生は正午まで寝るもんなんだよ！」

「超自堕落な生活に呆れて物も言えませんか。……って、何時までドア越しでやり取りさせるつもりなんですか。さっさと開けやがないとドアごとぶっ飛ばしますよ」

「お、使うの？ 結局、こう言うときはC4だよ」

宇都宮はガクリと崩れ落ちた。誰かコイツらに常識を教えてやってくれと切実に思う。

ドアを吹き飛ばされるのは流石に困る。とりあえずチェーンロックをしたままドアを開けてみると、そこには不機嫌そうにしている絹旗の顔があった。腰に両手を当てて、宇都宮を恨めしげに見上げている。まるで全部宇都宮が悪いと言うような表情だ。

コイツに合い鍵を渡せば、寝ているところを襲撃されかねない。宇都宮は背筋をゾクリと震えさせる。

そして……。

「そろそろ絹旗がキレそうなんだけど開けないの？ 結局、お土産は猫缶にしてみた訳よ。自分で食べるのは嫌だから」

コンビニのビニル袋をぶらぶらと揺らす少女が一人。

絹旗の後ろで無垢な笑みを浮かべながら、物凄く失礼なことを言っている。と言うか、猫缶って何だ。宇都宮が記憶している限りでは、あれは人間様の食い物ではなかったはずだ。普通にツナ缶を買えと言っておくべきか、宇都宮は真面目に考え込みそうになった。

「お前は、『アイテム』の？」

「フレンドだね。“様”は付けなくてもいいよ」

絹旗は私服だったが、彼女は学校の制服を着ていた。

紺色のブレザーに、深紅のリボンやスカートがよく映えている。セミロングの金髪の上に、ブレザーと同じ色のベレー帽を引っかけていた。彼女の碧眼を見るに、髪は染めたのではなく地毛なのだろう。留学生と言ったところだろうか。

「結局、C4が嫌ならこんなのもあるけど」

「待った！ 開ける、今開けるから！」

スカートの下から糸鋸を取り出したフレンドを見て、宇都宮は慌ててチェーンロックを解除する。

ずいっと差し出されたビニル袋を受け取って居間に引き返すと、二人の少女も後に従った。部屋が汚いとか男臭いとか散々な評価を下す二人はひとまず置いておき、台所で皿を取って猫缶を開けてみる。何と言うか……ここで猫缶を食べなければ何かに負けるような気がしたのだ。

居間に戻ると、絹旗がギョツとしていた。

「あ、あのう、超ありえなくないですか？」

「け、結局、お箸を三本も出す必要はないと思うよっ！」

何もおかしいことはない。三人で食べるからに決まっている。

宇都宮は部屋の隅に逃げ出したフレンドに底意地の悪い笑みを向けてから、猫缶のツナっぽい物体を箸でつまみ上げた。

「箸使わないの？ ……そうか、食わせて欲しいのか。ほれ、あーんしてみろ」

「ぐっ、さりげなく超似合わないことをしないで下さいと言うべきなんですけど、差し出された箸に魅力を感じてしまう私は頭がどう

にかしてしまったのでしょうか!? こんな状況で『あーんイベン
ト』が発生するとは、色々な意味で残念すぎます!」

「心配するなつて。猫缶つて意外と食えるらしいぞ」

「きつ、絹旗! 骨は拾つてあげるからね!」

フレンドが顔を青ざめさせたり赤らめたりと忙しそうな絹旗に声
援を送っている。

宇都宮は箸を差し出したままジツとしていた。笑顔を浮かべて絹
旗の行動を見守っている。

「ええいつ、超ままよ!」

箸が、絹旗の小ぶりな口に収まっていた。

直後、宇都宮の笑みが悪魔のアルカイツクスマイルに変わる。「
計画通りっ!」と言いそうな凶悪な顔だ。フレンドが思わず「ひっ
と息を詰まらせたのも無理はなかった。

「ははっ、やりました。超やつてやりましたよ、私……」

人間としての尊厳を捨て去ってしまったことにシヨックを受けて
いるのだろう。絹旗は腰砕けになって床に座り込んだ。

生まれたての子鹿のように足を震えさせている金髪少女に、宇都
宮はニツコリと笑いかける。

「安心しろ。トップブリーダーも推奨の品だ」

「それ猫缶だから! ドッグフード違うから!」

ガシツとアイアンクローでフレンドの頭を押さえ付ける。

「むっ、むぐっ!」

子猫のように震え上がり、瞳を潤ませて慈悲を求める少女の口に、
無情にも箸が突っ込まれた。

猫缶はそのままだと薄味で臭みが強いいため、醤油をぶっかけて熱

を通すと、どうにか食べることができた。

異様な朝食を済ませた宇都宮は、三人分のインスタントコーヒを用意すると、朝っぱらから疲れ切った様子の少女たちに目を向ける。絹旗は意識がぶっ飛んで真っ白になっており、フレンドはうつむいて鼻をすすっていた。無言でテーブルを囲むこと五分。

「で、今日はどうしたんだ？」

絹旗だけならともかく、『アイテム』のフレンドがいるのだ。ただ遊びに来たわけではあるまい。

「超端的に言くと、共同戦線を張って貰いたいんですよ」

「共同戦線……って、『サークル』と『アイテム』で？」

気を取り直した絹旗に、宇都宮は思わず聞き返してしまう。これは何かあったのようだ。と宇都宮はようやく気付いて、携帯電話に手を伸ばした。確認してみると『サークル』の担当者から電話が入っていた。

「そこまで超大袈裟にする必要はありませんよ」

絹旗がさらっと答え、怪訝そうな顔をした宇都宮に、人差し指を立てて説明する。

口を挟むのも野暮だと思った宇都宮は、素直に聞きに入ることにした。

「事の始まりは二日前、学園都市の遺伝子研究所で不老のマウスが生まれたんです。いえ、その言い方では語弊がありますね。そのマウスは通常のマウスと比べて超寿命が長いだけですから、老いから逃れることはできませんし病気にかかれば死ぬことになります。とりあえず便宜的に不老マウスと呼ぶことにしますが、そのところを誤解しないで下さいね」

「ああ、わかった」

「この不老マウスは遺伝子に手を加えられて、すべての細胞のテロメラゼが活性化しているんです」

「結局、補足するとテロメラゼは短くなったテロメアを伸ばすための酵素な訳よ。老化して細胞分裂できなくなった体細胞は、テロ

メアが短くなっているの。つまり、このテロメアの長さが細胞老化の一因ってこと。ゲノムの損傷とかも細胞老化の原因になっているから、テロメアが老化のすべてを司っているわけでもないんだけど」

フレンダが横から説明を補足する。

宇都宮は何時かに見たテレビの特集を思い出し出していた。たしか、癌について取り扱っていた番組だったはずだ。癌細胞が際限なく分裂を繰り返すことができるのも、テロメアやテロメラーゼが関与しているからだそうだ。番組は、人類がテロメラーゼを使いこなすことができれば不老不死になれるんじゃないかね　という胡散臭い言葉で締め括られていた。

「不老マウスは一つ一つの細胞の寿命が長いわけです。遺伝子学的には超凄い成果ですね」

「それはわかったが、だからどうしたんだよ？」

「通常より何倍も長生きなマウスがいたとして、各国の権力者たちはどう思うでしょうか。日本の政治家だけではなく、合衆国ユダヤ系の資本家から小国の独裁者まで、ありとあらゆる“死にたくない老人”がこの研究に超注目しているんです」

絹旗がインスタントコーヒーに手を伸ばす。

「結局、短絡的な人たちが動き出してる訳よ。研究成果が上がるのを待てばいいのに、周りに出し抜かれるのを恐れて、真っ先に不老マウスを手に入れようとしている連中もいるんだよね」

「まさか、不老マウスが狙われているとでも？」

「……そのまさかなんですよね」

宇都宮が素っ頓狂な声を上げる。正直なところ、ネズミ一匹に何やってんだと言いたいところだ。寿命が長いマウスがいたとして、人間にも同じことができると思っっているのだろうか。

二人も同意見なのか、心底馬鹿らしいと言ったような顔をしている。

「アホすぎて付き合い切れないと言いたいところですけど、実際に買収されてしまった組織もあるんですよ」

「『プール』ね。結局、昨日『スクール』の垣根帝督が潰したけど」
第二位もよくやるものだ。どんな気持ちで不老マウスを奪取しようとしていた連中を殺したのだろう。

流れるに、宇都宮もあまり人のことを笑えそうにない。この分だと垣根と同じことをやらされそうだ。

「『アイテム』にも要請が入ったんですけど、あまりにアホすぎて
麦野さんがやる気を超喪失しまして、私とフレンドだけでやってると言われまして」

そりゃ麦野はやる気をなくすだろう。何せレベル5で気位が高いのだから。

宇都宮は溜息を吐いた。

「嫌って言ったら？」

絹旗とフレンドが顔を見合わせる。

そして、同時に頷いた。

「爆破しましょうか」

「結局、C4の出番だよな」

嬉々として粘土（プラスチック爆弾）をこね始めるフレンドを、

宇都宮は慌てて取り押さえた。

十

実験動物のネズミと言えばまずモルモットを思い浮かべるが、実際はハツカネズミが使われているそうだ。

尻尾が長く、瞳が真っ赤な白色のマウスに、三人分の視線が注がれている。微妙に生暖かい目を向けられたネズミは、アホらしい迷惑のことなど意にも介さず、鼻をヒクヒクさせながらプラスチックのケージを爪で引っ掻いていた。

宇都宮は思わず息を吐いた。

「握り潰してやるのかこんちくしょう！」

「超やめた方がいいですって！ 百万ドルのネズミなんですよ！」

「うるせえっ！ 金になるネズミはミツ ーで沢山なんだよ！」

「け、結局っ！ その発言は危険すぎな訳よ！」

握り拳を振り上げる宇都宮を、絹旗とフレンダが左右から引つ張つて押さえ付ける。

研究者たちが物言いたげな目を向けてくるのを見て、宇都宮は振り上げた腕を仕方なく降ろした。マウスに限ったことではなく、小動物はストレスに弱い生き物だ。ストレスから共食いしたり子どもを食べたりすると聞いたことがある。一匹に隔離されている理由もそれだろう。

ネズミに罪はないのだ。宇都宮は己に言い聞かせる。

『アイテム』に与えられた命令は、不老マウスを防衛することだった。その間に『スクール』やら『メンバー』やらが、寝返った連中を潰して回るらしい。今日一日で解決しなければ、明日も不老マウスを防衛しなければならぬわけだ。是非とも垣根帝督には頑張つて貰いたい。

宇都宮は研究室を出ると、自販機でミルクたっぷりの激甘コーヒーを購入。

プルトップを引つ張っていると、絹旗がさりげなく手を差し出した。それを見たフレンダもおこぼれに預かろうとバンザイアタックを敢行する。

「私には何もありませんか？」

「あ、お金の臭いがする」

缶ジュース一つにがめつく少女たちを、宇都宮は忌々しげに眺めた。財布を開けると、ちょうど一本分買えるだけの小銭しか残っていない。千円札を崩すしかないのだが、宇都宮はそれを躊躇った。財布に小銭が溢れると、また喉が渴いた時、迷わず自販機に小銭を投入してしまうだろう。

宇都宮は手に持っていた缶ジュースを見詰める。

「……飲むか？」

それは、爆弾だった。

どろりとした濃厚ミルクコーヒー。砂糖をがぶ飲みするようなそれは、ただのコーヒーではない。

喫煙家の宇都宮がすでに口を付けているため、風味にニコチンがプラスされている。それはそれで問題だが、こんな男と関節キスという点の方が重要だ。どこからどう見てもセクハラである。当然、フレンダは笑みを引きつらせ、百円ぐらい出せよと言いたげな顔をしている。

「えっ？ いや、あの、えと、そのう……」

絹旗は、ゴクリと唾を飲み込んでいた。……少女よ、なぜ迷う。

やっぱ駄目か　と宇都宮は溜息を吐き、財布から千円札を取り出した。肩を落しながらジュースを選ぶ絹旗を、宇都宮は不思議そうに眺めている。彼女が落ち込んでいる理由はよくわからないが、宇都宮の発言が原因なのはたしかだ。脊髄反射で言葉を吐くのは、しばらく自重しようと宇都宮は思った。

ベンチに腰を下ろす。

遺伝子研究所。出入り口は雇われた警備員アンチスキルではないが固めており、出入りする者にはパスと指紋を求められるため、部外者は一切入ってこない。宇都宮たちは来客用のパスを与えられている。そして、不老マウスのいる研究室の出入り口は一つ。それも宇都宮たちが塞いでいる。

フレンダが宇都宮の隣に座る。

「結局さ、ポタージユがキてる訳よ。汁粉があれば最高だけど」

真夏なのにホットを買いやがったようだ。空調が効いていなければ汗だくになっているだろう。

絹旗はまだ決めかねている様子だった。宇都宮が頼んだ濃厚ミルクコーヒーを買うべきか迷っている。一口やろつかと言いつつになるが、宇都宮は慌てて口を閉じた。軽蔑の目を向けられるのはもう勘弁だ。

「宇都宮はさ、絹旗と仲いいよね」

「そうか？」

「そうだよ。アインシュタインとラッセルみたいな感じ。ヤドカリとイソギンチャク。ツーと言えばカーと言う。結局、キン肉マンとテリーマンみたいな？」

「いや、意味がわからんから」

スチール缶を二百度まで熱する。指を握り込むと、空き缶が押し潰された。

「どこ行くの？」

「煙草吸ってくる」

フレنداに言い置いてから、宇都宮は研究所の外に出た。

遺伝子研究所はセメントの塀に囲まれており、正面玄関には両開きの鉄の門がある。出入り口は警棒を手にした警備員が二人、十人の警備員が交代で周囲を巡回している。意外と手薄だった。それだけ今回の敵勢力が小さいと言うことなのだが、幾ばくかの不安を覚えざるを得ない。

煙草を啜える。

五分ほどで吸いきると、フィルターを地面に捨てる。ドラム缶型の掃除ロボットがやってきて、吸い殻を片付けていた。

二本目の煙草を唇で挟みながら、宇都宮は研究所の入り口に止まった車に怪訝そうな目を向ける。

後方から切羽詰まったような足音が響いていた。

「宇都宮！」

「火、付けちまったじゃねえか」

「超暢気なことを言ってる場合じゃないですよ！ 不老マウスが、いなくなっちゃったんです！」

煙と一緒に溜息を吐き出す。

装甲車から、続々と黒ずくめの集団が溢れだしていた。防弾用のボディアーマーで武装しているのが、およそ十五人。全員がヘルメットを装着しており、小銃をストラップで肩にかけている。警備アンチスキル

員と似たような姿だが、まっとうしている空気はまったくの別物だ。

「『ハウンドドッグ 獵犬部隊』か？」

「どうやら暑さで頭がぶっ壊れてしまったみたいですね。アレイスターの直属部隊がこんなことをする理由なんて超ないじゃないですか。あれは『コミック』の下部組織『コマンド』ですよ」

「あー、『ダストアーミー 雑兵部隊』か」

どこかで聞いたことがある。情報収集やゴミ（死体）処理をやらされていた下っ端組織が武装したものだっただか。基本的には陽動などで捨て駒にされている可哀想な連中だ。

投げ込まれたスタングレネードを炎弾で打ち返すと、宇都宮は絹旗へと振り返った。

「不老マウスは？」

「こんなこともあるのかと　　って思ってたんでしょね。センサーを埋め込んでいたみたいです」

「どうせ言ってみただけだろ。こんなこともあるのかと　　って科学者のロマンじゃねえか。いや、アニオタか？」

絹旗がどうでしょう、と肩をすくめた。

直後、パラパラパラ　　と鉛玉がばらまかれる。

「『コミック』の構成員は三人……って超熱っ！」

「あ、俺の周囲五十センチは侵入禁止な。三千度だから身体が溶けるぞ」

宇都宮に向かった弾丸は蒸発。

絹旗は『オフエンスーマー 窒素装甲』で銃弾を受け止める。衝撃が抜けたのか、彼女は少しだけ顔をしかめた。

「そんな超危険なものはさっさと仕舞って下さい！　　うっかり入っちゃったらどうするんですか！」

「そうか、お前は俺にこれを使うなと言うのか」

「う、宇都宮？」

「なら最終手段だ。絹旗シールドを発動しよう」

うひゃあ　　と悲鳴が上がる。宇都宮が絹旗を抱き上げたのだっ

た。

雑兵の連中は諦めが悪いのか、それとも弾を撃つことしか知らないのか、小銃を腰溜めに構えて引き金を引いている。

「うわ、あっ、超いたっ！ ひぐっ、や、やめて下さい宇都宮！ 衝撃までは無効化できないんですよ！」

「俺、サドなんだよ」

「………そ、それが何か？」

小動物のようにぶるぶる震えている絹旗に、宇都宮は爽やかに笑いかけた。

「結構楽しいな、これ」

「超鬼畜っ！ 地獄に落ちて死ね！」

絹旗に罵られながら雑兵部隊に突撃。銃弾を絹旗シールドで受け止め、少女の悲鳴をガン無視しつつ周囲に炎をばらまいた。後退しながら銃撃を繰り返し、装甲車に引っ込もうとする連中に、宇都宮は追いつがり、ボンネットに右手を押し付ける。そこは、棺桶だ。

あばよ。

声には出さず、口の形だけで呟く。

直後、宇都宮が手で触れていた部分が溶解。ハンドボールサイズの穴が空き、そこから炎が流し込まれる。内部が阿鼻叫喚と化し、予備の弾薬やガソリンに引火。宇都宮がバックステップすると同時に装甲車が爆発した。金属の塊が手榴弾の破片のごとく衝撃で吹き飛ばされるが、それも絹旗シールドで受け止める。

「ひぎいっ って何言わせるんですか！」

宇都宮が俺かっこいいと言うようなニヒルスマイルを浮かべた直後、その顎に拳が突き刺さった。

怒り心頭といった様子の絹旗が宇都宮を足蹴りにする。

「初めてのお姫様抱っこがこんなのって、本当に超空気読めない下衆野郎ですね！ ぶっ殺すマジぶっ殺すつか死ね！」

「ら、らめえ！ そんなに蹴られたら、もう……」

「さつきサドって言ってただろうがあああ　！」
ふざけるだけの余裕があるのは、手心を加えられていたからだろう。

駆け付けてきたフレンドが、じゃれ合う二人を頬を搔きながら眺めていた。

十

『コマンド』からの連絡が途絶えていた。

更科道満は舌打ちした。時間稼ぎが目的だったとは言え、敵の一人を負傷させるぐらいしやがれと思う。更科が閉じていた目を開けると、目の前にシトロエンが滑り込んでいた。仲間の一人、ショートヘアの少女が後部座席のドアを開けて身体を潜り込ませている。左座席の運転手が窓を開けながら、更科に向かって怒鳴り声を上げる。

「目的の物は　！？」

「ここに」

少女、蘆品蜜が右手にぶら下げていた虫籠ぐらいの大きさのケージを示した。

更科がシートに腰を下ろすと、ドアを閉める間すら惜しむように車が走り出す。

「『スクール』に追われている。このままでは逃げられん」

「運び出すのは米国のエージェントとやらに任せる。俺たちは金だけ受け取って、地下に潜ればいい。ほとぼりが冷めるまで時間はかかるだろうが、潜伏した方が安全だ」

運転手の男

大学生の戸沢が落ち着きのない様子で発言する。

更科は頭を働かせるのも面倒だったので、用意していた言葉を戸沢にかけてやった。戸沢は『コミック』の戦闘を担当しているのに小

心者なのだ。何時も彼が安心できるように、気を遣ってやらなければならぬ。

蘆品はケージの中のネズミを見て、小さく笑っていた。

こんなものが数百万ドルになるのかと馬鹿らしく思う。真面目に働いている者が可哀想に思えた。もつとも、更科たちは相応のリスクを背負っている。『スクール』のレベル5に追われて生き残ることが出来る者など、学園都市に数人いるかどうかだろう。

「可愛いね」

「そうか？」

蘆品が言葉少なに呟いたのを見て、更科は嘆息した。

会話は続かない。何時ものことだ。

蘆品は両目を閉じた。真つ暗な視界が、引き込まれるように切り替わる。レベル4の『視覚共有』アウトビジョンは他人の視界を見ることが出来る能力だった。能力をセットするためには対象に一度触れなければならず、同時に二人までしか能力を使えない。最大射程距離は五百メートル、射程から外れると能力が解除される。と制限はあるが、諜報に長けた利便性のある能力だった。

能力をセットした対象は、研究者が一人。

そして、先ほど『発火能力者』パイロキネシストらしき人物に触れていた。

「……まだ追ってこない、と」

青年の視界は、まだ研究所にあった。

肩を怒らしている少女に、弱々しく両手を伸ばして謝罪しようとしているのだ。と更科は推測した。どうでもいいことに時間を使っている連中に、更科の笑みが深くなる。これなら逃げ切れるだろう。となると、問題は『スクール』と言うことか。

「なに笑ってるんだよ？」

「逃げるのに徹すれば、『スクール』相手ならどうにでもなる。奴らに追跡系の能力者はいないからな」

「でも『アイテム』にはいるんだろ？」

更科は目を細める。そろそろ鬱陶しくなってきた。

自信に溢れた奴も嫌いだが、小心者の奴も同じくらい嫌いだ。更科は研究者の視界をカットし、戸沢の肩に触れた。

両目を閉じて、ネットで見かけた癒し系の猫の画像を思い出し、それを数秒刻みに戸沢の視界に送り込む。サブリミナル効果を狙っているのだが、所詮は気休めだ。『視界共有アウトレジョン』の攻撃手段は、グロ画像を送りつけて精神的ダメージを与えることくらいだろう。対象の視界にノイズを送り込んで攪乱することしか思い浮かばないが、前提として相手に触れなければならぬため、そのような手段に頼ることがないように手を回さなければならない。

更科は小さく息を吐いた。そんな更科に、蘆品が声をかける。

「どうするの？」

「どう、とは？」

「これが終わったら」

ああ　と更科は納得する。そして、どう答えるべきか悩んだ。

蘆品はガラスのような濁りのない瞳を向けている。

「きっと……と言うか、絶対だな。俺は何も変わらない。大金を手にしてもだ」

「そう」

「妹が、いるんだ」

よくある話だった。

更科の妹は先天的な病気を持って生まれた。治療のための薬は、この国では認められていないため出回っていない。外国の病院に入院し、そこで継続的に投薬を受けなければ回復の見込みはなかった。病人を輸送するための飛行機の手配や入院費などで数億の金が必要になる。

兄として、妹にやれたことは何一つ思い出せない。

だからこそ、何とかしてやりたかった。

更科が拳を握り締める。　その瞬間。

「見いつけた」

声を直接聞いたわけではない。姿を見たわけでもない。なのに、背筋が震え上がった。

「戸沢！」

腰を浮かせる。だが、遅かった。

正面の立体交差、その橋の上に人影があつた。風で崩れる髪を気にしながら片手で携帯を弄り、歩行者の落下防止用の手すりに座つて足を組んでいる。そんな女だつた。

直感的に頭の中にフレーズが浮かぶ。

魔女。

直後、更科たちの頭上に光が降り注いだ。

十

ドロドロに融解した車を目撃した宇都宮は、ゴクリと生唾をのみ込んだ。

フレンドが「あちゃー」と額を押える。

「結局、不老マウスまで巻き込んだじゃったかもね」

「洒落にならねえって」

そこには詰まらなさそうな顔をした少女が一人。

「二人逃がした」

携帯をスカートのポケットに仕舞いながら、自分は悪くないと主張するふて腐れた子どものような顔をしている。

誰も彼女を責めているわけではないのだが　　と言うより、恐ろしくて口を開けない。

麦野沈利。学園都市の最強の一角。レベル5の第四位。

夏物の半袖のコートは清楚な白、スカートは深紅で、その下に黒いストッキングを穿いている。見た目はただの女子高生なのだが、

その正体たるや一国の軍隊を一捻りで殲滅することができる化け物である。迂闊にナンパでも仕掛けようものなら「イケメンじゃないからパス」とあの世に送られることになるだろう。

「ど、どうして麦野さんが？」

啞然としている絹旗に、麦野は素っ気なく裏返した手を振った。

「フレンドから連絡があつてね。このまま逃がしたら『アイテム』の名前が汚れるじゃない」

「あー、それは超ご苦労様です」

「ねえ麦野、不老マウスは？」

「んー、殺してないと思うけど、あまり自信ないなあ」

毛先をくるくると指に巻きながらフレンドの質問に答えると、麦野はふと思いついたように宇都宮に目を向けた。

値踏みされるような視線を受けて、死ぬっ　と勝手に勘違いし

た宇都宮は、咄嗟に絹旗の背中に回り込んだ。しゃがみ込んで亀のように身を縮める宇都宮に、全員が失望の目を向ける。

「私、喉渴いたかも」

「俺に買ってこいと？」

恐る恐る絹旗の肩越しから覗き込むと、麦野は意地の悪い顔をしていた。

「ま、どうでもいいか。フレンド、あのネズミには発信器が取り付けられているんだね？」

「結局、研究所の方では常にモニタされています」

「なら、まだ追えるね」

麦野は嗜虐的に笑う。

「それじゃ、一方的な鬼ごっここと行きますか」

まるで遠足にでも行くような気楽そうな発言に、宇都宮は絹旗と顔を見合わせた。

今回の失態の咎めもなさそうで、絹旗とフレンドはホッと安堵している様子だ。最初に詰まらない理由で仕事をサボった麦野も、あまり人のことは言えないと思っっているのだろう。機嫌がいいだけか

もしないが、どちらにしる助かったのは事実だ。

「宇都宮だっただけ？」

「ああ、そうだが」

「ポカリ」

「……は？」

自販機を指差される。やはり、買ってこいと言うことだろう。

このアマっ　と宇都宮は内心で歯を食い縛りながら自販機に向かう。

「『サークル』の残党ね。ま、従順なら飼ってやってもいいかな」

「そりゃ有り難いことで」

「それがお前の従順な態度って言うなら、考え直さないといけないかもね」

「麦野様の慈悲深さにこの不肖宇都宮、感謝感激にございます！」

よろしい……と麦野が愉快そうに笑う。

ポカリを受け取り、宇都宮の肩をトントンと叩くと、麦野は颯爽と歩き出した。

これで、『コミック』は終わりだろう。マウスの発信器に気付いたとしても、もう手遅れだ。

一度だけ、溶解した車に振り返る。

『原子崩し（メルトダウン）』によって引き起こされた惨状を、宇都宮は目に焼き付けた。

「……あれが、レベル5か」

御坂美琴とは異なり、学園都市の闇にいる女。同じレベル5でもここまで違う。

「宇都宮？」

「いや、何でもな……っ！」

絹旗の方へと振り返ろうとするが、直後、脳内にアラートが鳴り響き、慌てて首を引き戻す。体勢が崩れそうになったが、かろうじて立て直した。

金属の槍が、鼻先を掠めた。

「……や、つてく、れたな、テメエら」

「死んでなかったのか」

男は満身創痍だった。

身体中から血を流しており、口元に真つ赤な泡が付着していた。着ている物も原始人のごとくボロボロになっている。頭髪の九割は抜け落ち、はげ上がった頭の皮がべろりと剥けていた。左目の目蓋はなくなっており、眼球がぼろりとこぼれ落ち、ひも状のものでかろうじて繋がっている。

男の残された目は、憎悪に染まっていた。

「……死んだ方がマシだな」

「どうしますか、宇都宮？」

「どうって言われてもな。やることは一つだろう」

グロテスクな物体と化した男に、宇都宮は哀れみの目を向けた。さつさと殺してやるのが慈悲だろう。

宇都宮が右手に炎を乗せる。

「名前、覚えておいてやるよ。名乗りな」

男が、喉をあえがせながら声を絞り出した。

「と……ざわ……。とざわ……。ま、なぶ」

頷いて、炎を投げ付ける。アンダースローで投擲された炎弾が男を包み込んだ。

だが、宇都宮は眉をひそめる。

金属の槍 先ほどの攻撃を思い出す。

男の身体は、金属に包まれていた。いや、身体すべてが金属に変化しているようだ。

「『メタモルフォーゼ肉体変化』か？」

宇都宮には知る由はなかったが、戸沢の能力は『トランスアイアン鋼鉄変化』。肉体を鉄に変える能力である。

麦野の『原子崩し』を、咄嗟に身体を鉄に変えることによって防

御しようとしたが、『原子崩し』は電子を“曖昧なまま”の状態に固定して操ることが出来る。曖昧なまま固定された電子は“壁”の性質を持つようになり、放たれた速度のまま対象を貫く電子線と化する。金属すら容易く貫いて溶解させるのだ。

身体を鉄にした戸沢ですらその攻撃を防ぐことはできず、『原子崩し』によつて鉄の身体は溶解、身体中の原子が破壊されていた。

「こ、ろす……」

「差し違えるつて心構えは認めるけどな」

宇都宮は手の中に白熱した球体を作り出した。

「往生際が悪いんだよ！」

戸沢の腕が金属の槍と化して襲いかかる。宇都宮はそこに球体を押し付けた。五千度の球体が鉄の槍をのみ込んで、一瞬で蒸発させる。男の絶叫を聞き流しながら、そのまま右手を男の胸に叩き付けた。

瞬間、時が止まる。

「ち、くしょう……」

泣きながら、戸沢は逝った。

胸の中をぽっかりと蒸発させ、戸沢の身体が地面に崩れ落ちる。死体を火葬しながら、宇都宮は煙草を啜えた。

十

右腕の肘から先を持って行かれていた。

更科は激痛に喘ぎ、路肩に座り込む。上着を破つて二の腕を縛り付ける。だが、血が止まらない。

「更科、ここだと処置できない」

不安そうな面持ちの蘆品に、更科は空元気を出して、この程度の怪我など何でもないと言いたげに笑いかける。

本来なら捨てるべきだ。そして今すぐここから離れるべきだ。だが、違ったら？

もし、このネズミが追跡された原因とまったくの関係だったら、道ばたに数百万ドルを捨てることになる。

「更科、どうしたの？」

「いや、えっと」

喉に声が出つかかる。心配そうな目をした少女に言うべきか否か、それだけのことで結論は出そうになかった。

巻き込むつもりか　更科は自分を罵りたくなる。

更科が計画を提案した時も、蘆品は何も言わなかった。彼女には金が必要になる理由はない。それでも危険を承知して更科に付き合ってくれたのだろう。それを裏切れと言うのか。だが、このネズミがなければ妹が死ぬ。更科は肘を握り締めて歯を食い縛った。

「大丈夫だから」

蘆品が言う。

無表情に、淡々と、しかしその声には優しさがあった。

「私は更科が決めたことなら、それに従うだけだから」

「でも、お前は　っ！」

「いいの、これで」

そんなわけがあるか。

更科は地面を残った左手で殴り付ける。……そして、決意した。

もうここまでだろう。下部組織の『コマンド』を失い、戸沢まで死んだ。危ない橋はこれ以上渡れそうにない。

「ゴメン」

「更科？」

「いいんだ。もう、いい」

呟いて、ゲージの中のネズミを見詰める。何も考えていない、生きることに必死な生き物がそこにいた。

ゴメンと、もう一度そう呟く。

そして、更科はネズミを握り潰した。手の中で肉が潰れて骨が砕ける嫌な感触が残る。

「逃げよう。二人で」

「……うんっ！」

血まみれの手を差し出すわけにはいかず、更科は失った片腕を眺めて、曖昧な笑みを浮かべた。

蘆品が憂いのなくなった太陽のような笑みを返す。

直後。

「うわー、罪悪感がすごいわこれ」

死神が、顔をしかめていた。

見えているわけではない。だが、声は別である。三次元と四次元の間にいる二人は、見てくれだけ四次元的存在に置き換えられているが、放たれた声は三次元的なものとして扱われている。

「ははっ」

更科の喉から笑いがこぼれた。

少し遅かったらしい。ネズミを潰すのがあと一分早ければ、逃げ出すことができたかもしれないのだが。

仮定に意味などない。だが、そうあって欲しいと思ってしまう。

「ネズミ、潰したぞ」

「みたいね。あーあー、これはもう完全に『アイテム』の失態だわ」
「ははっ、ざまあみやがれ」

更科は振り返らない。ずっと蘆品を見詰めていた。

彼女の瞳に恐怖はない。何を思って更科について来てくれたのか、今となっては訊ねている暇などなかった。

ただ、抱きしめる。

「ゴメンな。俺、ミスっちゃった」

「ううん。いいの」

両目を閉じる。腕の中の温もりが、更科のすべてだった。

妹のことを思い出そうとするが、顔が浮かんでこない。脳裏にも、

蘆品の顔が浮かんでいた。また笑いが漏れる。なんだよ、情けねえ。
。内心で高笑いしながら、更科は涙をこぼした。

俺、コイツのことが好きだったのかよ。

気付くのも遅すぎた。

白色の光線が、二人の身体を貫いた。

十

ファミレスに飲食物を持ち込むのはどうだろう。

宇都宮が呆れた目をしていても、その女はまったく気にせず幕の内弁当を箸で突いている。味が気に入らないのか、麦野はしきりに首を捻っていた。

「今日もハードな一日でしたー」

宇都宮はテーブルに突っ伏して言った。

毎日戦っているのではないかという勢いだ。本気でお祓いを考えるべきだろう。

「宇都宮、私のジュースも入れてきて下さい。ジンジャールで」

「“も”って何だよ。明らかにテメエだけじゃねえか」

絹旗の揚げ足を取っていると、トントンと肩を指で叩かれる。

麦野が爽やかな笑みを浮かべて、空っぽのコップを差し出していた。

「レモンティーね」

「ちくしょう！ ふざけんなよお前ら！」

コップ二つを受け取ってドリンクバーまで走り出す。店員さんの哀れみの視線が、少しだけ気持ちよかった。哀れみながらも、走るなど注意されたが。

「それで、結局『コミック』って何だったの？」

「売れ残りってことよ」

ニツコリと笑いながらコップを受け取った麦野が、フレンドの疑問に答える。

「他の組織にいたけど潰されたか解散したかで、ばらけた連中が寄せ集まってできたらしいよ。統括理事会の信認が薄いから、情報の機密レベルももちろん低い。いわゆる干された状態にあったんだね。裏にいるけど空気のように扱われてる、つまり『サークル』のこイツのような感じだったから、暴発しやすかったつと言つのもあるんじゃない？」

「担当者のやる気がなかったってことか？ それだと情報だけ入って来るからな」

「流石、空気な『サークル』の奴は言うことが違うわ」

麦野の皮肉を、宇都宮は肩をすくめて流した。

事実を言われたただけだ。気に障ったりはしない。

「それで、実際のところ絹旗とはどうなの？」

麦野に肘で突かれて、宇都宮は返答に困る。

別にどうと言うことはない。最近この手の質問をよくされるよう

な気がするが、実際に何でもないはずだ。恩人であり友人である。

ただそれだけなのだが、友達にすら見えないと言つことだろうか。

宇都宮は首を捻る。

「さっぱりわからないんだが」

全員から溜息が漏れた。

「絹旗、お前も大変ね」

「結局、さつさと捨てた方がいい訳よ」

絹旗は不機嫌そうにストローをすすっていた。

「まあ、何時ものことですから。超気長に待つことにしてます」

恨めしげに言われる理由がわからない。

宇都宮は胸ポケットから煙草を取り出しながら席を立った。

その時、ポケットの中で携帯が小さく震えた。

面倒臭そうに文面に目を通す。最初は業者のスパムを流し読みするようないい加減な眼差しが、読むに従って鋭く細められた。

介旅初矢が倒れた。

誰だっけ……と思った宇都宮だったが、その下の文面を読んで理解した。

虚空爆破事件の犯人だ。『量子変速^{シンクロナン}』で事件を引き起こしていた少年のことだろう。

「殴りすぎたか？」

見当違いなことを考えながらテーブルに戻る。

カレーを食べていたフレンドが顔を上げた。

何となくその頭に手を置いて、絹旗を見下ろす。

「じゃ、俺はこれで帰るわ」

「そうですね。今日は超お疲れ様でした」

麦野の方を振り返る。彼女は無言で右手を伸ばしていた。

携帯、と言われる。

「また何かあったら呼び出すから、さっさと出しなさい」

「うえ、マジっすか」

宇都宮が嫌そうな返事をする、視線の圧力が強まる。仕方なく取り出した携帯を渡すと、麦野は「よろしい」と笑顔になって宇都宮の携帯に自分の携帯を押し付けた。赤外線通信でデータのやり取りをしているのだろう。これで電話番号とメールアドレスが押えられたわけだ。

ダミー用にサブ携帯を持つべきかもしれない。

宇都宮は切実に必要性を感じていた。

「『サークル』はたった一人だけど、情報のバックアップは一つの組織分はあるじゃない。取り込んでおいて損はないわけよ。あ、くだらないことでメールしてきたら殺すから」

むしろ着信拒否に設定したいところだ。

宇都宮は踵を返す。

その背中に、絹旗が声をかけた。

「あ、あの、ですね……」

「まだ何かあるのかよ」

えっと、その　　と言いよどむ絹旗を促してみるが、彼女は俯いたままだった。

「何も無いなら帰るぞ」

「いえ、そうですね、今度映画とか」

「映画？」

「映画、ですね。超、すごいとか。……いえ、やっぱりいいです」

こんなところで引き下がられると気になって仕方なくなる。

麦野とフレンドが溜息を吐いているのも疑問だ。

だが、店の廊下ですっと立ったままというのも邪魔になるだろう。そろそろ出るべきだった。

店を出る直前、背後から罵声が浴びせかけられる。

「宇都宮の超阿呆！」

「……阿呆っておい」

絹旗の声にぷつと吹き出す。

外に出ると、真夏の日射しが降り注いだ。目的地は介旅が搬入された病院だ。

宇都宮の能力について。

穴のある能力ですが、一応まとめてみました。

【業火使い（フレアマスター）】

この作品のオリジナルの能力であり、『バイロキネシス発火能力』が発展した能

力とする。

『発火能力』とは科学的には物質の分子運動を高めることにより発火させる能力である。手から炎を生み出すなど、可燃物のないところから炎を出しているところから、具現化能力も有している。と禁書目録 Wiki に書かれていたため、その設定を拝借させて貰っている。

『発火能力者』は発火という現象を起こすため、たとえば炭素が含まれていない物質を燃やすことはできない。ガスは燃やせるだろうが、空気そのものの温度を上げることはできない。だが、『業火使い』は熱そのもの（分子運動）を操ることによってそれを可能とする。

……制限がないと強すぎるため、周囲の空気の分子運動に干渉できる距離は五十センチ前後とする。

なお、分子運動を“減速”させることにより、物質を冷却することもできる。宇都宮はこれを自らの能力による高温から身を守るために使っている。別作品の設定で申し訳ないが、ウィザーズ・ブレインの『炎使い』の分子運動操作能力で、空気から熱を奪って窒素の結晶を作ること一応はできる。窒素の結晶を攻撃や防御に使用するためには、強力な『サイコキネシス念動能力』が必要になるため、宇都宮に固体窒素は使いこなせない。

06：瞬間加速

原因不明、意識不明の介旅初矢が搬入された病院は水穂機構病院だった。

介旅はガラスの向こう側にいた。ICU（集中治療室）だ。死にかけの患者というわけでもないので、一週間もすれば普通の病棟に移送されるのだろう。

宇都宮は入り口で消毒スプレーを手に吹きかけてから病室に入った。

額に巻かれた包帯や顔面に貼り付けられた絆創膏が痛々しい。やはり、殴りすぎたのだろうか。

「い、いえ、頭部に損傷は……見られますね。ですが、CTスキャンでは問題がなかったのだから」

「脳は無傷と」

宇都宮はそれを聞いて安心する。

始末書が追加されるのは勘弁させて欲しい。

「意識不明ってことは、食事はやっぱり無理ですよな」

「いえ、こう言う患者のための経口摂取栄養剤と言うものもありますから。もっとも、そちらは消化器系の副作用が見られる可能性があるため、今はまだ点滴しか行っておりません。このまま回復が見られないようなら使うことも検討しなければなりませんね」

よくわからないが、医者に任せて問題なさそうだ。

寝たきりが続くと衰弱するし、何より医療費がヤバイことになる。社会の皆さんに迷惑をかけて、この上さらに親御さんまで泣かせてしまうわけだ。さっさと起き上がって貰いたいところだが、原因がわからなければ対策も取れない。現状、打つ手なしだった。

病室を出る。

すでに到着していた白井黒子と御坂美琴が、別の医者から詳しい話を伺っていた。

「もう帰っていいか？」

「駄目ですよ」

キツパリと断言される。

「アンタ、あのボコボコになった顔を見ても、罪悪感はこれっぽっちも感じないの？」

美琴に責められ、宇都宮は病室の方を振り返った。

「綺麗な顔しているだろ。こいつ……」

「死んでないわよ。と言うかアレは、綺麗な顔とは言わないの！」

美琴はノリが悪かった。介旅だから“かつちゃん”。意外な共通点にほくそ笑んだのは宇都宮一人だけだった。

さりげなく綺麗な顔とは言わない　と言っているが、結構ひどいと思うのだがどうだろう。聞きようによっては不細工と言っているように受け取れる。

「今回のようなケースは稀なんでしょうか？」

白井が医者に尋ねていた。

「稀だった……と申し上げるべきでしょうか」

「だった、とは？」

「つい先日まで、私もこのような症例は見たことはありませんでした。しかし」

医者が困惑しながら首を横に振るのを見て、宇都宮たちは顔を見合わせる。

そして、次の言葉で、三人の顔が驚愕に染まった。

「今週に入って、同じ症例の患者が次々に運び込まれてくるようになりまして」

介旅だけではない　らしい。他の学区でも意識不明の患者が運び込まれており、今のところこれら患者の症状が回復した例はない。病原菌やウイルスの類が原因になっているわけではなく、患者の身体はいたって健康だった。意識が回復しない原因すらわからないのが現状だと言う。

共通点は、現在調査中。

駄目だ。わからないことだらけだ。

「キスしたら起きるんじゃない？ 誰か立候補は」

「するわけないでしょうがっ！」

「私の唇はお姉さまだけのものですよ！」

さつと振り返った二人が、宇都宮の腹に拳をぶち込む。衝撃に、宇都宮の両目が一瞬白目を剥いた。

両手を腹に当ててダウンした宇都宮を放置して、白井は美琴と相談を始める。

「馬鹿は放つといて、これも『幻想御手』なの？ だとしたら、ちよつとこれは不味いんじゃない？」

「ですわね。今のところ情報不足で何とも言えませんが、仮にそうだとすると事態は深刻ですよ」

そう、『幻想御手』^{レベルアップ}だ。

レベル2ではありえない強力な能力を使っていた介旅も、それを使っていたのかもしれない。そして、使用者の介旅が昏睡状態にある。『幻想御手』が昏睡の原因だとしても、風紀委員に拡散を止める手立てはない。学園都市に意識不明の患者が溢れることになる。

元を絶たなければ、拡散は止まらない。

宇都宮は思案する。風紀委員としては、手を引くべきだろう。風紀委員はどこまでいっても学内の治安維持のための組織だ。学園都市の非合法組織、『アイテム』や『スクール』などが、『幻想御手』の配信者を暗殺するレベルの話である。もっとも、昏睡の原因が本当に『幻想御手』にあるならだが。

だがなあ……と宇都宮は首を横に振る。

白井や美琴は言っただけで聞くような性格はしていない。と言うか、こんな話をできるわけがない。

つまり、止められない。

「中学生に引つ張られるつても気に食わないけど、置いてきぼりにされるのも癪に障るか。しゃーない。付き合っただらうかね」

「急に偉そうになったわね。……って、何時ものことか」

「褒めるなよ」

「そして何時ものように耳も腐つてると」

美琴に嘲られても、全然へこたれない宇都宮だった。映画のアメリカ人のようにニヒルな笑みを浮かべるが、相変わらずキマっていない。本人に自覚はなさそうだ。白井や美琴が肩を落とし、それを指摘すべきか悩んでいた時。

長尺シートの床が、ハイヒールで叩かれた。

カツン　と音がして、三人同時に振り返る。

宇都宮はその人物を認めて、映画のアメリカ人のように肩をすくめた。

「また会ったな、少年」

「少年って年齢じゃないですよ。前に言いましたよね？」

彼女は先日のように白衣にワイシャツを着ていた。短いスーツのスカートから、ストッキングに覆われた色っぽい太股が覗いている。どうせ人の視線なんてまったく気にしていないのだろうな　と宇都宮は昨日のことを思い出して、疲労感に押し負けそうになった。

「情けない話なのですが、当院のスタッフの手に余る事態ですので、外部から大脳生理学の専門チームを招きました」

「水穂機構病院の院長から招聘を受けました。木山春生です」

さらに先日のことを思い出した白井たちに睨まれ、宇都宮は笑みを引きつらせた。

十

病院の出入り口に設置された喫煙スペースで、宇都宮はロングピースを啜えて物思いに耽っていた。

予期せぬ再会。三度目となると、何者かの陰謀を疑いたくもなる。これ見よがしに登場した研究者に、晴れたはずの疑念がもたげてく

るのも無理はなかった。アレイスター、統括理事会、無能力者特殊開発計画、宇都宮は常に様々な視線を意識していた。

木山春生も何者かが敷いたレールに乗せられているのか。

あるいは、レールを敷いている張本人なのか。

「こんなところにいたんですの？」

「最近は一箱をスローガンに掲げているんだ」

「そんなスローガン、ドブにでも捨ててしまった方がよろしいですわ」

煙を吐き出すと、白井黒子は嫌そうな顔をした。

最後に、煙を胸一杯に取り込んで、能力でフィルターごと灰に変える。

黒い粉がアスファルトに降りかかった。

「専門チームの方々はもう調査を始めたみたいですよ」

「サイボーグ介旅でも作ってくれたら面白いのにな」

「不謹慎すぎですよ！」

臍を蹴飛ばされそうになり、宇都宮は慌てて飛び退いた。

白井は両手をパンと叩いて格好付けると、悪いことを思い付いたような顔をする。

「そう言えば宇都宮さん、今日のトレーニングはまだ終わってませんでしたわよね」

宇都宮の喉から奇声が漏れる。白井が言っているのは腕立て腹筋などの筋トレのことだろう。

まさか今すぐやれと言っているのではあるまいか。戦慄する宇都宮に、

白井は慈母のような笑みを向けた。

「ちょうどいい機会ですわね。今すぐここで跪きますの」

「跪けておい、俺はマゾじゃなくてサドなんだけど……」

「つべこべ言っている暇があるなら、さっさと腕立てをなさいませ！」

サツと右腕を取られ、気が付くと地面に押し付けられていた。サブミッションかよこんちくしょう　と顔を青ざめさせた宇都宮が

見上げると、白井は相変わらずの柔らかな微笑みを浮かべていた。憂さ晴らしができて機嫌よさそうに鼻歌まで口ずさんでやがる。

こんなことやっぺられるかと怒鳴り付けようとする宇都宮の背中に、少女の小さな尻が押し付けられる。

「……あ、あのう、黒子さんや。これは一体何のおつもりでしょうか？」

「重り、ですわよ。ただ回数をこなすだけでは、一向に筋肉が付きませんから」

「ああ、そっか。筋肉か。なら仕方ないな」

「そうですね。筋肉なら仕方ありませんわね」

「あっはっはっは」

「うふふふふっ」

メルヘンな笑い声を上げる二人から、通行人が怯えたように顔を背けている。

直後、宇都宮はがばりと立ち上がった。

「やっぺられるかこんちくしょう！ ふざけるのは頭の中だけにしやがれ！」

「なっ、それはこっちの台詞ですよ！ 煙草ばかり吸っててスタミナは全然増えませんし、筋トレもサボりがちで貧弱なままじゃないですか。せつかくの気遣いを無碍にするなんて、本当に女心がわからないお方ですわね！」

「わかりたくもないね。つか重たかったぞバカ女。しかも安産型だったしな、ふはははは！」

「……………」

勝ち誇ったように胸を張る宇都宮に、白井は屈辱に身を震わせる。ちゃっかりと尻の感触を味わっていたあたり、転んでもただでは起きない男だった。称賛されるべき行動力だが、わざわざ口に出して言うことではない。最後の一言が多いのである。口が滑りやすいとも言う。

「宇都宮さん」

ぶるぶると震えながら、白井がスカートに手を伸ばした。

ようやく言い過ぎたことに気付いた宇都宮が、恥も外聞もなく背中を向けて病院内に逃げ込もうとするが、素早く追いついた白井が綺麗に足払いをかける。無様に転んだ宇都宮の手を掴み、白井は腕ひしぎ逆十字固めを決めた。宇都宮が悲鳴を上げる。

「いででででっ……ぱっ、パンツ見える……ってスパッツかよふざけんな！」

「ふふふっ、この期に及んでも口が減らないとは見上げた根性ですわね」

「最近の、お嬢様は……関節技を……使うのか」

しかも、関節が外れないところで技を止めている。わざわざ激痛を味わわせているのだ。

事前に金属の矢を取り出したのはブラフ。足払いに繋いでくるあたり、呆れ果てるほど戦い慣れたお嬢様である。

「サブミッションは王者の技ですの。どう足掻いても逃げ出すことは不可能ですわ！」

高笑いする白井に、宇都宮は屈辱に涙した。

ある意味で仲睦まじい二人に、美琴がどう声をかけたものかと額に手を当てて思い悩んでいる。

「アンタら何時までじゃれ合ってるつもりなの？」

「あらお姉さま、お恥ずかしいところをお見せしてしまいましたわね」

「ん、パンツ見え……って短パンかよ。最近のお嬢様はなってないな」

地面に横たわったままやれやれと溜息を吐く宇都宮の顔面に、革靴が叩き込まれた。

宇都宮は鼻血を垂らしながら、世知辛い世の中だぜと肩をすくめる。

「それで、どうしたんだ？」

美琴が親指を立てた拳を肩の向こうに向ける。

そこには、白衣のポケットに両手を突っ込んだ木山が所在なげな顔をして立っていた。

「たしか、木山さんでしたわね」

「木山春生だ。大脳生理学の研究をしている。ここまでは既知だったかな」

そこまで知っているのは宇都宮だけだ。白井と美琴は怪訝に顔を見合わせて首を横に振る。

ああ、そうか　と木山は思い出したように首肯すると、気を取り直して言葉を続けた。

「専攻はA I M 拡散力場。能力者が無自覚に放出している力のことだが……常盤台の学生さんにはいらぬ説明だな」

木山は少女二人の様子を見て肩をすくめた。

胸元にじつとりと汗が浮かんでいる。さりげなくエロかった。宇都宮の鼻血が止まらなくなる。

「風紀委員の白井黒子ですの」

「御坂美琴です」

美琴が名乗りを上げた時、木山は若干目を見張る。レベル5ともなると有名人だからこうなるのは必然だった。さっすが私のお姉さまと、自分のことではないのに誇らしげにしている白井に、美琴が冷やかな視線を向けている。宇都宮はその間、鼻にティッシュを詰めていた。

互いの紹介を終え、そこで白井は首を傾げた。

「ところで、私たちに何か用ですか？」

「いや、私自身には特に用事はないが、その彼女に呼ばれてね」
美琴が気を回したのだろう。『幻想御手』について訊ねなければいけないからだ。

心得たとばかりに白井が一つ頷き、木山に向き直る。

「暑いな……」

この時、木山の眩きを宇都宮が聞き逃していなければ、後の悲劇は避けられたはずだった。

宇都宮は止まらない鼻血に泣きそうになりながら、医者に声をかけて綿と氷を頼んでいるところである。

「『幻想御手』？」

「はい、ネットで広まっている噂なんですけど」

だが、形状不明、使用方法も不明では何とも言えない。研究者だから憶測で物を語るわけにはいかないのだろう。

白井は唸り声を上げた。できれば専門家の意見を聞きたいところだったのだろうが、どうにかして現物を手に入れなければ話は始まらないようだ。眉間に氷を押し付け、鼻に綿を詰め込んだ宇都宮も、その気持ちはわかる。閉塞した状況を打破するため、白井は必死に頭を働かせていた。

シユツ　と衣擦れの音がする。

美琴が口を半開きにして固まっていた

「ふう……暑い……」

宇都宮の鼻からドバツと綿が抜け落ちる。エロで鼻血が加速するつて一昔前の漫画じゃねーぞ　と内心で突っ込んでいるあたり、この男も混乱し切っていた。公開ストリップは三度目なのだが、慣れるものではない。と言うより慣れてはいけない。と言うかこれは死亡フラグではなからうか。

動揺した白井が、なぜか宇都宮の方を振り返る。

「あ、あわわ、て、天誅！」

「何でだよ！」

ぶん殴られて両方の鼻から血を流し、宇都宮はアスファルトに沈んだ。

血を抜きすぎたようだ。眩暈を堪えながら革張りの座席に座り、

氷の浮いたグラスの水を一息で飲み干す。

詳しい話は涼しいところかどうかという木山の要望により、宇都宮たちは場所を移していた。ファミレスである。『アイテム』の連中に入った店ではないが、最近やたらとファミレスに入っている気がする。ドリンクバーだけ注文する客に、店員さんが嫌そうな顔をするのを見届けてから、まず最初に木山が口火を切った。

「さて、先ほどの話の続きだが」

宇都宮たちは意識を切り替えるのだが。

「同程度の露出度でもなぜ水着はよくて下着は駄目なのか」

「いや、そつちではなくて」

氣勢を挫かれて肩を落とした美琴と、笑みを引きつらせた白井がすかさずツツコミを入れる。

話題はこれしかない。

「ネット上で噂の『幻想御手』なるものがあり、それが昏睡した学生に関係していると」

上の方では情報を公表して学生たちに注意を呼びかけるという案も出たらしいが、もちろんそんな現実を見ていない意見は却下されている。事態の拡大を助長するだけだ。情報の公開は『幻想御手』を手に入れて事実関係を鮮明にしてから、という結論が出ている。

問題はここだ。

「それで、そんな話をなぜ私に？」

「能力を向上させると言うことは、脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われます。ですから」

「なるほど。私にそれを調査して欲しいと」

「はい」

白井が首を縦に振る。

「構わんよ。むしろこつちから協力をお願いしたいぐらいだ」

木山がアツサリと申し出を受け入れたことで、三人は肩から力を抜いた。

宇都宮はようやく飲み物を補給できると席を立ち、ドリンクバー

の方へ足を運ぼうとする。その直前で目が合った。笑顔が返される。窓の向こうにいた少女二人、佐天涙子は満面の笑み、初春飾利は苦笑だった。

「あの子たちは、君たちの知り合いかね？」

「あー、いや、まあ」

曖昧に頷く宇都宮。店内では思いつ切り目立ってしまっており、臆面もなく恥ずかしいことをやってのけた佐天を無視してやるうかとも考えたが、流石にそれは可哀想だろう。

佐天のアホっぽい笑顔が恨めしい。

「あ、あの、宇都宮さん。何かすいません……」

「いや、いーよ。初春が悪いわけじゃないし」

店員さん呼び止めてドリンクバーの追加を頼む。いい加減に料理も頼みやがれな目をされるが、この連中はまったく気にしていない。

ドリンクバーで確保したアイスティーに、ミルクと砂糖をどばどばと大量に投入する宇都宮だった。

「男の人なのに甘党なんです。……って、まだ入れてやがるっ！

？ ガムシロップ四個って甘党どころじゃないですよ！」

「あんまり見詰めるなよ。恥ずかしいぜ」

「しかも照れてやがる気持ち悪っ！」

ハイテンションな佐天をあしらいながら、ストローを回転させてかき混ぜる。佐天はそれから好奇心に目を輝かせて、木山のことを白井に訊ねていた。白井は面倒そうに脳の学者だと説明している。

初春が首を捻った。

「そんな学者さんが、どうして白井さんたちと？ 白井さんの脳に何か問題が？」

「私の脳は問題ありませんの。むしろ問題があるとするとしたら宇都宮さんの方ですわね」

「えっ、宇都宮さん、とうとう頭がおかしくなっちゃったんですか！？」

初春の一言が思わぬ方向に話を広げてしまっていた。全員から同情の目を向けられるのは色々と納得がいかない。

まあ宇都宮さんだから　　と言う顔をされている。宇都宮はふざけんなよとストローをすすりながら憮然とする。

「たしかに少年の脳の構造は興味深いものがあるが、残念ながら今回は別件だな」

「おい興味深いって何だよ」

「『幻想御手』の件で相談していましたの」

「あー、『幻想御手』ですか。それなら……」

佐天が何かを言いかけたが、聞こえなかったのか白井がそれを遮るように返答した。

「『幻想御手』の使用者を搜索して保護することになると思いますが」

「なぜですか？」

初春に訊ねられ、白井は真面目な顔をする。

まだ調査中のため断言はできないが、深刻な副作用がある可能性が示唆されており、急速に力を付けた学生が犯罪に走っているケースも報告されている。限りなく黒に近い灰色と言ったところだろう。

宇都宮は顎に手を当てる。

「佐天、お前……」

「あつ、いや別に　　っ！」

さつき何を言いかけていたのか訊ねようとしたのだが、ビクリと居竦んだ佐天がグラスに肘を引っかけてしまう。

バシャツ　　と音がして、木山の膝元に飲み物が降りかかった。

「あー」

宇都宮は顎に当てた手を額に持つてくる。

「す、すみませんっ！」

「いや、気にしなくていい」

反射的に頭を下げる佐天を、木山はさらりと許した。

「かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば……」

この展開はアレだ。個人的には天井は三回までが限界だと思うのだが、そのところはどうなっているのだろうか。

うら若き女性が他人の目を意に介さずストッキングを脱いで生足をさらけ出している。と言うか、指が引っかかってスカートまでずり落ちているではないか。

宇都宮は思わず目を皿にする。

「だーかーらー！」

白井がどうして年上に説教をしないとイケないのかと、憤懣やるかたない様子でがなり立てている。

「人前で脱いじゃ駄目だと言ってますでしょーが！」

「いや、しかし起伏に乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは思えないのだが」

「ここに一人いるじゃありませんか！」

ガバツと指をさされ、宇都宮は冴え渡る青空のような笑みを浮かべて親指を立てた。

即座に誰かがテーブルの下から、宇都宮の足を踏み抜く。どつき漫才はそろそろやめようぜ　と虫の息を吐き出す宇都宮だったが、同情の目が向けられるわけがなく、当然のように絶対零度の視線が四方から注がれていた。バイオレンスな中学生たちから距離を取り、隅っこで激甘ミルクティーをすすする。

「趣味趣向は人それぞれですし、この男は人畜無害の皮を被った変態性欲者ですよ！」

「ひでえ」

鼻の下を伸ばしていた男には弁解の機会も与えられないらしい。

反論はことごとく無視される。

顔を真っ赤にして木山に詰め寄っている白井と佐天を眺め、宇都宮は溜息を吐いた。

翌日、部屋で積んでいたゲームを消化していた時、携帯が耳障りな着信音を鳴らし始めた。アニメキャラのネタソングである。誰だこんな着信音に設定したのは　と己自身に苛立ちを覚えながら電話を取ると、予想通りと言うべきか、風紀委員の呼び出しだった。

朝っぱらからふざけんよと本気で考えている宇都宮だったが、非常事態一步手前のこの状況で呼び出されなければ顔を出さないあたり、危機感に欠けているのか凶太いのか。おそらく両方だろう。積んでいたエロゲが尋常ではない量になったのも理由の一つである。指紋認証でドアロックを解除して、支部の部屋に入る。

「遅すぎですわ。弁解はございますか？」

「僕に会いたい”っていう願いは叶ったよ。さあ、あと二つの願いは何だい？」

神速の回し蹴りが鳩尾に突き刺さっていた。

流星はイギリスで統計が取られ、見事ワーストワンを奪い取った口説き文句なだけはある。

「ご冗談は顔だけにして下さいまし！　気色悪いにも限度がありますの！」

白井は顔を真っ赤にして怒鳴り声を上げている。

身体を張ったギャグが受けたわけだ。宇都宮は気持ち悪く笑いながら立ち上がった。

「まあ、じゃれ合いはここまでにしておこつ。こんな朝っぱらから俺を呼び出したのは、どういうわけだ？」

「……はあ、まったくあなたというお方は
肩を落とした白井が、バツと机に紙束を投げ付ける。

拾い上げて文面に目を通す。そこには日時と場所がずらずらと書き綴られていた。

「『幻想御手』の個人売買について、ネットの掲示板から拾い上げたものですの」

「よくこれだけのものをサルベージしたな。全部読むのも一苦労な量だ」

「初春を酷使しましたから」

宇都宮はパソコンテールに突っ伏した少女に同情の目を向ける。お互い、いいように使われているようだ。

「しかし、個人売買か」

「最初はインターネットで秘密裏に配布されていたんですよ。隠しページとか、本当に目立たないところで。それでもダウンロード数は五千を超えています。業者に連絡して配布場所は閉鎖して貰いましたが、もう手遅れだったみたいで、個人的に金銭で売買する人が出てきたんです」

「うわぁー」

初春の説明を聞いて、宇都宮は間の抜けた溜息を吐き出した。ここまで七面倒臭いことになっているとは。

メランコリーな気分になって、思わず椅子でぐったりとしてしまふ宇都宮だったが、その首根っこを白井が引っつかむ。

「さ、行きますわよ」

「……これ、全部回るの？」

「手当たり次第、当たってみるしかないじゃないですか。まずはできる限り拡大を止めて危険性を証明する。そこまでしないと、上は重い腰を上げようとしませんから」

「ういっす。了解」

「頑張つて下さいねー」

「初春は木山先生の見解の方をお願いしますの」

他人事のように笑っていた初春が、一瞬表情を引きつらせた。疲れた笑みを浮かべながら宇都宮たちに手を振って見送ると、初春は溜息を吐きながら受話器を取り上げる。宇都宮も引きずられながら嘆息し、初春に手を振り返した。この二人、白井様の傍若無人に付き合わされ、同族意識が芽生え始めていた。

「さて、まずは」

街中に出るまでワイシャツの襟首は解放されなかった。

十

手の中の携帯音楽プレイヤーをジッと見詰める。ほとんど重みを感じないはずなのに、あのデータを中に入れてから、異様な存在感を放ち始めていた。人気のアーティストや、マニアックなネット歌手の楽曲が入っていた時は、もつと楽しかったような気がする。

できることなら、今すぐにでも捨ててしまいたい。

遣り切れない思いに歯を食い縛る。

「……はあ」

佐天涙子は途方に暮れていた。

最初は自分でも能力者になれると喜んでいた。だが、そんなに簡単なものではないようだ。努力もせずに超能力を手に入れるなんて虫がよすぎると思っていたが、やっぱりリスクがあるらしい。それもそうだ。能力者は持って生まれた才能だけでなく、ちゃんと努力している。

……でも。

努力すら許されていない者は、この行き場のない思いをどこに持っていくべきだろうか。

「そんなっ、話が違っじゃないか！」

「っ！」

佐天はビクリと身を震わせた。

顔を上げる。不良っぽい人たちが、一人の少年を取り囲んでいた。「十萬円で『幻想御手』を譲渡するって言ってたじゃないか。冗談はよしてくれ」

「悪いがついさっき値上げしてね。コイツが欲しければもう十萬持つてきな」

「なっ！」

絶句する少年に向けて、不良たちが嫌らしい笑みを浮かべる。あからさまな詐欺だった。

金を返せと懇願する少年に、不良たちが暴力を揮い始める。腹部に膝を入れられて悶絶する少年に、リーダー格の不良が狂ったようなことを言い出した。

「お前らの能力がどれだけ上がったか、そいつで試してみろ」
何だってこんなところに行くわすのだろう。とりあえず、通報しなければならぬ。

携帯電話を取り出すが、そこで佐天はしまったと顔をしかめる。バッテリー切れ。そう言えば最近充電していない。どうしたものかと佐天は思わず頭を掻きむしりそうになる。

そして、不良の一人がそんな少女の様子に気付いてしまった。

「おい、そっちに誰がいるぞ」

背筋がスツと冷たくなった。六つの目が佐天に向いている。

「え、いや、その……」

佐天は無力だった。無能力者。学園都市の落ちこぼれ。できることなんて何も無い。

いいよね 自分に言い聞かせる言葉は、白々しかった。

「たっ、ただの通りすがりでして。これにて失礼」
逃げ出した。

こっちは数ヶ月前まで小学生。片や向こうはいかにもな三人組。絡まれているのは赤の他人。

助ける義理なんてない。……ないはずだ。ないはず、なのだが。気付けば、足は反対方向を向いていた。

「もう、やめなさいよ」

不良たちが、白けたような顔をしている。

それでも、口は勝手に動いていた。

「その人、怪我してるし」

馬鹿なことをしている。そんな自覚はあった。

目の前に、表情を消した不良の顔があった。シンナーをやっているのだろうか。抜け落ちた歯が痛々しい、そんな青年だ。平凡な中学生の佐天は目を合わせることもできない。そんな男が目の前にいる。自然と膝が笑ってしまう。ああ、やってしまった。佐天は泣きたくなかった。

背後の壁を、不良が蹴り飛ばす。工事用に立てかけられていた建材がギシギシと音を立てた。

思わず頭を抱えてしまう。

「ガキが生意気言ってるじゃねーよ。何の力もねえ非力な奴にゴチャゴチャ指図する権利はねーんだ」

「あつ、そのつ……！」

髪を掴まれ、佐天の心は屈服しそうになった。

「ごめんなさい」と。

何の非もないのに謝りたくなる。今ならまだ取り返しが付くのではないか。佐天は自分の情けなさに涙を零した。

「貰いものの力を自分のものと勘違いしているあなたたちに、彼女を笑う権利はありませんわ」

常盤台中学の制服を着たツインテールの少女が、不良たちにも物怖じせず、毅然と立ち向かっていた。

「風紀委員ですの。暴行傷害の現行犯で拘束します」

「あらら。少女一人によつてたかつてよくもまあ。女の子は優しく愛でるものだけ」

「白井さんっ！……と、宇都宮さん」

宇都宮の台詞があまりに気持ち悪かったので、名前を呼ぶ声が小さくなってしまった。歓迎されていないと受け取ったのか、宇都宮はがっかりと肩を落としていた。

「あなた、佐天さんに何かしましたの？」

「いや、そんな記憶はないが、俺、もしかしてお呼びでなかったり

？」

そんなことはない。

そんなことはないのだが。

「さて、まずはその手を離して貰おうか」

火炎の弾丸が、佐天の髪を掴んでいた青年に直進する。

青年は舌打ちして佐天から手を離し、身を屈めて火炎弾をやり過ぎた。

「よしよし、痛かったねー怖かったねー」

「宇都宮さん、私、子どもじゃないですよ……」

ポンポンと佐天の頭に手を置くと、宇都宮は情けない笑みを浮かべた。

そして、不良たちを獰猛な目付きで睨み付ける。

「何だ、ガキとダサ男かよ」

「お前らはこれから、そのダサ男にぶちのめされるんだぜ？」

宇都宮は佐天の頭から手を退けて、手の平に青く輝く炎を生み出す。

一歩、二歩と前に進みながら、佐天に向かってこう言った。

「よく頑張った。後は任せろ」

「あ、はい」

ははっ　と笑みが零れる。その笑みの意味は、自分でもよくわからなかった。

十

およそ三人。一人は『サイコキネシスト念動能力者』。そいつは白井がアツサリと潰していた。

……と言うことは、残りは二人。

「一人一殺ってところかな」

「念のために言っておきますけれど、殺したら駄目ですからね」
「わーってるよ」

と言うことは、周囲の温度を上昇させて、射程範囲五十センチ内すべての物質を燃やすと言うようなことはできないわけだ。

眩きながら、両手に炎を乗せる。拳の一撃でコンクリートを紙のように切り裂く高熱を宿しているが、相手はまったく怯まない。雑魚の癖に度胸があるなと感心しそうになったが、そうではない。単純に戦い慣れているのだ。それは、こう言うことをよくやっていると言うことだ。

シンナーで歯がボロボロになった不良は白井が相手をするようだった。

宇都宮はチェック柄のシャツを着た青年と向き合った。

「……たく、また風紀委員かよ。うざってえ」

「俺たちにとつては褒め言葉だよクソ野郎。抵抗しなければ反省文二百枚で許してやるぞ」

「馬鹿を言うな。俺はもう低レベル能力者じゃねえんだよ！」

踏み込みながら、男が拳を振った。

宇都宮は目を細める。動き事態は、特に目立ったものはなかった。喧嘩で慣らしただけの、つまりは素人の戦い方だ。直線的な動きを見切ると、進行方向を読んで足払いをかけようとする。

だが、それは空を切った。

瞬間、宇都宮の直感が危険を察知。咄嗟に片足を軸にして両腕を振りながら一回転する。

青年は流石に高温の拳に触れるのを恐れたのか、追撃はせずに引き下がった。

「動きが加速したのか？」

明らかに不自然な動きだった。発進したばかりの自動車がすぐにマックスまで加速したような動きである。

眉をひそめる宇都宮に、青年は喉から下卑た笑い声を出しながら再び構えを取った。

一瞬、全方位に向けて炎を広げてやるうかと思うが、宇都宮に手出しできなくなると、青年がどんな行動を取るか予想が付かなくなる。最悪、佐天を人質に取られることも考えられる。あの動きは宇都宮の運動神経では追いつけない。接近戦でねじ伏せるしかなさそうだ。

熱量操作では手加減できずに殺してしまう。

「今度こそ、ぶっ殺してやるよ」

「そっちは気楽でいいね」

生け捕りつてのがこれほど面倒だとは思ってもみなかった。

宇都宮はポーカーフェイスで嘲笑しながら、青年の二度目の突撃を回避。今回は逃げに徹した。

追いかけられるが、進行方向に炎を設置。

青年は追撃を諦める。攻撃方法は普通の肉弾戦だけのようなだった。

「加速する能力つてところか」

「ははっ、それがわかったところで、テメエでは手も足も出ねえよ！俺の『瞬間加速』^{アクセラオーバ}は加速度を操作する能力だ。速度つてのは時間と加速度を掛けて求められる。初速は遅くても、二秒も走ればこの通りだ」

「まるで小バエのように飛び回ると」

青年は自慢気な笑みを消した。

「本気で死にてえようだな」

安っぽい挑発に乗せられて青年が突撃する。

直線的な動きしかしていないのは、危険すぎるからだろう。遠心力に振り回されるのを嫌ったのだ。いくら高速で動けたとしても、人間の脳が処理できる速度には限界がある。気付けば壁にぶつかっていましたではあまりに格好が付かない。さながらスプラッタ映画のような光景が繰り広げられることになるだろう。

時速八十キロでも平気で動き回れるなら、交通事故は半分以上減っているはずだ。

「だがまあ、種の割れた手品に用はない。そろそろ退場してくれや」

「いやあー、ムカつく顔だなあ。殺してやりたい顔だ。何、何ですか、俺は君より格上ですって言うその顔は？」

自分自身の加速度しか操れないと言う時点で、この超能力は程度が知れている。所詮は雑魚と言うことだ。宇都宮の敵ではない。生け捕りにするために遠回りしなければならなかったが、如何様にも料理の仕様はある。可愛い後輩を泣かせた野郎どもには、きちんと報いを与えてやらなければならぬだろう。

「テメエら風紀委員はよお、いつもそんな澄ました顔をして俺たちを追いかけ回すんだよなあ。いい加減うざってえんだ。一回ぶっ殺してやりたいって思ってたんだよ！」

「残念ながら、その夢は叶いそうにないな」

「ハハツ、余裕ぶってんじゃねえつつてんだろうが！」
青年はナイフを抜いた。ここまで三下ぶつてくれると清々しいものがある。

三度目の突撃。腰溜めにナイフを抱えて突っ込む青年を、今度は正面から迎え撃った。

「っ、ハツタリか!？」

そんなわけがあるか。内心でツツコミながら、宇都宮は靴で地面をトンと叩いた。

途端、宇都宮の足下を除いた地面が融解。周囲にゴオツ と炎が広がる。

思わず足を止めた青年に、宇都宮は笑いかけた。

「お前、今ビビッただろ？」

ぐっ とうめき声が漏れる。違うとも言おうとしたのか。

だが、それは声にはならなかった。宇都宮の身体ごと捻って繰り出した回し蹴りが、青年の側頭部に直撃する。

「 がつ、テメエ！」

後退する青年を追撃。衣服を掴んだと同時に温度を引き上げる。

木綿の自然発火温度、四百二十度を優に超える六百度まで強制的に引き上げられ、チエック柄のシャツやジーンズが燃え上がった。悲

鳴を上げながら地面を転がる青年の頭を、宇都宮はサッカーボールの要領で蹴り飛ばす。

ハハツ　と笑いが零れる。

要するに、初速はほとんど変わらないわけだ。いくら加速できるとしても、動き出してから一秒経つてからでないと、鍛え抜かれたアスリートのような速度は出せない。そして、この青年は初速を高める努力をしていなかった。能力を上手く使う工夫をしていても、身体を鍛えていなければ、それは宝の持ち腐れだ。

そして、前に突っ込んでいる時に後退しようとする、能力の切り替えが追いつかずラグが生じる。前身、加速、停止、後退、加速。このプロセスを素早く行うことができないわけだ。

青年の染めた髪を掴んで持ち上げる。

皮膚の火傷は軽いものだった。身体を焼かれたのではなく、服を焼かれたのだ。皮膚に着火した　と言うことはない。二週間は入院しなければならぬだろうが、動けなくなるほどのダメージを与えたわけではなかった。

なのに、もう虫の息だ。

髪から手を離し、足を払って地面に引き倒す。

そのまま足を振り上げて、顔のあたりに狙いを付け

「駄目ですっ！」

「……離せよ」

佐天が、宇都宮の手を掴んでいた。

「もうこれ以上は駄目ですっ！」

「いや、まだ足りない」

これだけ痛めつけてもやり過ぎではない。本来なら腕の一本でもへし折っておきたいぐらいだ。最低限、風紀委員というものに恐怖を覚えて貰わなければ、コイツらは同じことをまたやるだろう。風紀委員に追い回されても悪事をやめなかったコイツらが、拘置所にぶち込まれただけで改心するわけがない。

悪には悪を。当然のことではないか。

「駄目ですって！ これ以上やると、宇都宮さんも、この人たちと同じになっちゃう！」

そんなことは、今さら言われなくてもわかっている。

ああ、それがどうしたと言いたいところだ。

「私はっ、宇都宮さんが笑いながら人を痛め付けているところなんて見たくありません！」

「見たく……ない？」

「当たり前です！ 宇都宮さんは冴えない大学生で、風紀委員で、馬鹿なことを言っつて白井さんや美琴さんに殴られて。でも、誰も宇都宮さんを嫌つてる人なんていないじゃないですか。みんな、宇都宮さんがいるから笑つていられるんです。友達なんですよ！ そんなことをすると……笑えなくなっちゃうじゃないですか！」

「勝手なことを言うなよ。お前が俺の何を知つてるつて言うんだ」

「勝手です。宇都宮さんのことなんてほとんど知りません。それが何か悪いですか？」

居直られて、宇都宮は言葉に詰まる。

佐天は大きく息を吸った。

「いい加減、目を覚まして下さい。悲劇の主人公ぶつてないで、さつさと私たちを笑わせろつて言つてるんです！」

宇都宮は動かなかつた。いや、動けなくなつていた。

白井は、介旅をぶちのめした宇都宮をどんな思いで見っていたのだろう。宇都宮はあまり考えていなかった。

結局、そう言うことなのだろう。

人殺しだから、『サークル』だから、そうやって逃げて、風紀委員のことも適当に考えていた。やりたいことをやればいいと思つていた。白井や佐天のことも、真面目に考えていなかった。クラスが変わるとまつたく会わなくなる知り合いのようなものだ。そう思つていた。

勘違いにもほどがある。

すでに佐天にとつては宇都宮はただの知り合いではなかった。言うなれば、友達だ。

「クツ、ハハハツ。そうか。そうだったのか」

宇都宮は気が狂ったように笑い出す。佐天は若干ひるみながらも、手を離さなかった。

子どもの頃は友達なんていなかった。施設の仲間みんな死んだ。だからこうやって、自分のいいところと悪いところを見てくれる友人ができたのは、初めてのこともかもしれない。

「お前は、強いな」

「……えっと？」

「強いよ、本当に。俺なんかよりも、この間違った連中よりもぶっ倒れた不良に目を落とす。」

「何の力もなくても、お前は凄いよ。現にレベル4の俺を動かしたじゃないか。お前の言葉が、俺をそうさせたんだ」

「そんな、褒めすぎですって。私なんて、そんなに凄くないですから」

「凄いつて。凄い。凄いよ。超凄い。とても凄い。凄いですね。凄いつす」

「……あもう、もしかして喧嘩売ってます？」

「いや、凄い佐天さんに喧嘩を売るなんて恐れ多い。それにしても佐天さんは凄いですね」

「あー、もうやめて下さいよ！ 殴りますよ！」

真っ赤に照れた佐天がポカポカと手を振り下ろす。

いきなり全力で蹴り飛ばさないとところが、白井にはない気遣いが感じられた。

宇都宮は凝り固まった肩をほぐしながら周囲を見回す。そう言えば、そろそろ白井の方も終わった頃だろうか。まだ戦っている最中だったら、こんなに暢気なことをしている場合ではない。

「おっ」

ビルの前にテレポートした白井に気付いて声をかけようとしたところで、宇都宮は固まった。

泡を吹いた不良の首根っこを掴んでいるのは、まあ、何時ものことだから置いておこう。

ズガンツ　と爆音が轟いて、思わずビルを見上げてしまう。

尋常ではない轟音が響いているのだが、どう言うことだろうか。

「まあ、元々取り壊す予定でしたし、よしとすることにしましょう」カラツとした笑顔で言う中学生。

その背後で、ビルが崩壊していた。

「うわぁー」

「や、やりすぎですよ。白井さん……」

正直、不良をボコボコにする方がまだマシだと思っただが。始末書的な意味でも。

「そつちも片付いたようすわね。その全裸で転がっている殿方は？」

「服を脱がないと発動しない能力だったんだ」

「……それはまた、はた迷惑な能力ですわね。私の方に当たらなくてよかったですの」

片やビルをぶっ壊す白井。片やさらりと嘘を吐く宇都宮。

佐天が二人にじとーとした目を向けるが、二人は意図的にそれを無視した。

これからどうする　とわざとらしく相談を始めていると、

「オレ、タチハ　行ける。実際に、イけば、わかるんだ……」

「気でも違ったか。やりすぎてないだろうな？」

「心外ですわね。ちょーつと脅かしただけですのに」

白井が戦った相手が、意味不明なことを口走っている。ざまあみろとか、どこかに行けるとか、わけがわからない。

無性に蹴り飛ばしたくなかったが、佐天の見える手前、流石に今回は自重しておく。

ビルが倒壊したからだろう。駆け付けてきた警備員に不良たちを

引き渡した。

「ひとまず、一件落着と」

「まだ終わっていませんけど　っ、ね」

宇都宮は白井と顔を見合わせ、互いに苦笑しようとした。が、白井が突然脇腹を抱えてうめき声を出す。

咄嗟に駆け寄って肩を支え、怪我の具合を訊ねると、肋骨を折ったかもしれないとのこと。それで平気な顔をしようとするのだから呆れるしかない。宇都宮は溜息を吐きながら、腰を低く落とした。

「何のおつもりですか？」

「乗れって言ってるんだよ。怪我人が無理をするなって」

「……まったく」

白井は弱り切った表情を浮かべる。

「不真面目で、風紀委員もやる気がないように見えて、こんなところだけはちゃんとしているんですから……」

「……實際やる気ないからな」

「本当に、わからない方ですね。仕方ありませんわ。今回だけは付き合っただけ上げます」

背中への重みは、予想以上に何も感じなかった。軽い。こんな身体で、どれだけのことをやってきたのか。

小さな風紀委員を心の中でひっそりと称賛しながら、宇都宮は歩き始めた。

「ついでに写真撮っておきましょうか。あ、私の携帯電話切れだった。白井さんの借りますね」

「や、やめなさいっ！　ぶち殺しますわよ！」

「わー、白井さん照れてる。これはぜひとも激写しなければっ！」
背中で暴れ始めてから、急に重たくなったのだが。

宇都宮はやれやれと溜息を吐いた。

病院に向かった白井たちと別れ、佐天は一人帰路に着いていた。本当なら付き添いたところだったが、怪我の具合がわからず、どれだけ時間がかかるかわからないため、佐天まで付き合わせるわけにはいかないと白井に固辞されたのである。

「宇都宮さんも、白井さんも、強かったなあ……」

助けに入ってくれた二人のことを思い出す。

『パイロキネシス発火能力』の宇都宮日向。『テレポルト空間移動』の白井黒子。共にレベル4の能力者である。

強かった。佐天では逆立ちしても勝てない能力者を、片手で捻るように倒してしまった。白井は負傷していたが、ビル一つを壊してしまった。

あれが超能力。才能の壁の向こう側。

佐天と同じ中学生で、佐天と同じ年齢で、だけど、こつも違う。能力者と無能力者では住む世界が違っている。

「涙子ー！ おひさ、終業式以来だね！」

「アケミ！ むーちゃん、マコチンも」

佐天に声をかけたのは、小学校の同級生たちだった。

「一人で何してんの？ 買い物？」

「う、うん。そんなとこ……」

佐天は曖昧な笑みを浮かべた。

事情を説明できる自信がない。それに、あまり他の人に言いたくなかった。

「アケミたちはプール？」

「それがスゲー込んでてさ。全然泳げなかったのよ」

「暑いからね。みんな手近なところで済ませようとするし」

「どうせなら海行きたかったんだけどね。あたしら補修あるしさ」

「能力の補修って納得いかないよねー」

矢継ぎ早にまくし立てられ、佐天は苦笑した。色々と言いたい愚

痴もあるのだろう。補修と言うことは、能力の才能がないと言うことである。脳をいじくって電極を通してようやくスプーン一本曲げられるようになる能力が、補修ごときで伸びれば苦労はない。

それについては、佐天も同意見だった。誰だって夏休みが減らされるのは嫌だ。

「あ、でもさ、聞いた？ 『幻想御手』っての」

「あ、知ってるー。能力が上がるって言うのでしょ？」

切り替わった話題に、佐天は笑みを凍らせた。

眉唾物の噂話として盛り上がっている友人たちに、佐天は何と言ったものかと困惑する。

「どっかのサイトでダウンロードできたらしいんだけどさ、風紀委員がそこを封鎖しちゃったんだって」

「今、すごい高値で取り引きされてるらしいね」

あんなことを聞いてしまったから、話に入っていけない。

副作用とか、犯罪とか、それだけではなく。

「涙子は聞いたことはない？」

強い　　そう言ってくれた。

凄くなって、褒めて貰った。能力とかそう言うことは関係なく、だからこそ単純に佐天のことを見てくれたのだ。

音楽プレイヤーを取り出す。中には『幻想御手』が入っている。偶然ダウンロードしてしまったものだ。

不良を痛め付けるあの人に、そんなことをすると嫌いになると言っってしまった。

これを使うと言うことは、裏切りになるのだろう。あの人に嫌われても仕方のないことだと思う。

佐天は息を吸い込んだ。

「知らないよっ！」

そう言って、微笑んだ。

明るすぎる佐天に引いている級友たちから目を離し、音楽プレイヤーのボタンを押す。

……消去。一秒もかからず、そのデータは佐天の手の中から消え去ってしまった。

これでいい。

たしかに住む世界は違うけど、何もかもが違つと言つわけではない。

能力を持っていても、あの不良たちのように振る舞う者もいる。そつなつてしまふのなら“欠陥品”で構わない。

「私がこれを使つちやうと、きつと宇都宮さんは笑えなくなつちやいますよね」

能力は持っていないけど、佐天涙子は宇都宮日向の友達なのだ。

【瞬間加速】アクセラオーバー

加速度、数式では(a)、アクセラレーション操作。

速度(v) = 初速(v0) + 時間(t) × 加速度(a)

この加速度を操作する能力。数値を上げすぎると人間の反応速度の限界により減速するのが追いつかず、壁に激突したり、地面から足がすつ飛んで転んでしまふ(バイクの転倒よりも危険)。以上から彼は常に能力をセーブしている。本格的に能力に目覚めたのは最近のため、あまり使いこなせていない。レベル3なので自分にしか使えない。サイボーグ009の加速装置の紛い物みたいな能力である。

07：感情突破

背負ったりユツクの重みに、古雅は歯を食い縛った。

中には一台の大容量HDD搭載の新型ゲーム機が入っている。他にもゲームソフトのディスクが五枚。がつつきすぎた。古雅は仲間たちにそのかさかれて、仕方なくやったと自己弁護する。こんなことになるならゲーム一本で我慢しておくべきだったと、結果論で自分を正当化させていた。

十分ほど前。

第六学区の中古ゲームショップに入った古雅たちは、仲間の一人をレジの店員の視界から遮るために、あらかじめ目星を付けていたショーケースの近くに配置に付いた。万引き防止用の警報機は電磁波マイクログラフを操る能力者により破壊。二十ギガヘルツの電磁波を浴びせかけられた警報機は完全に沈黙している。

店内は新作の発売ラッシュのため、常よりも賑わっていた。

中学生の古雅一人のことなど気に留められるはずがない　と高を括っていたのだが。

「おっ、うつのみゃんかね」

「たしか、宇宙科学の……えっと、誰だっけ？」

「それはひどいかね。流星はうつのみゃん、三次元の女はアウトオブ眼中かね」

ポニーテールのやたら疲れたような雰囲気をしている細目の店員が、ゲームソフトの空箱を棚に戻しながら冴えない青年に声をかけていた。

仲間の『電波操作』マグネトロンの能力者が、念のため店員の視界を塞ぐために配置を変える。

古雅は内心でグツジョブと親指を立てると、行動を開始した。

「それで、たまにはエロゲ以外の健全なゲームをやりたくなっただかね」

「俺だつてエロゲばつかやってるわけじゃないから。今日は『妹学園5』探してるんだけどな」

「あー、新発売の中で浮きまくってたアレかね。ギャルゲーですね、わかりますかね」

そして、古雅はゲームソフトを吟味している振りを装ってショーケースの前を横斬り、『物体^{アポト}転移』でゲーム機をリュックに転移させる。ついでに、目に付いたソフトを能力で盗み出した。興味が無いソフトでも、値段と発売日を確認して転移させる。転売するのだから内容なんて関係ないのだ。

「たしか『妹学園5』はこの辺りに……あれ？」

「どうしたんよ」

ゾクツ　と、古雅は背筋が泡立つのを感じた。

青年が探しているソフトを取ってしまったようだ。距離は六メートル。今すぐ離れたいところだったが、ここで走り出せば見付かってしまう。あくまで何気ない素振りを心がけて店内を歩きながら、入り口までの最短ルートを計算した。だが、駄目だ。どうしても青年の隣を通らなければ店から出ることはできない。

「売り切れた？ いや、あんなの買う奴なんて宇都宮みたいな変態ロリサドぐらいだし、おかしいかね」

「冗談じゃないぞ。期限ギリギリの割引券を使いたいから、できればここで買っておきたかつたんだが」

「在庫があるか確認してくるかね。……って、どうしたのかね？」

青年は目を細めていた。

ヤバイ。古雅は確信する。勘付かれた。あんな冴えない奴にバレるなんて想定外にもほどがある。

「あそこにあつたゲーム機」

そこまで言つたところで、古雅は速度を上げて青年の突破を試みることにした。青年の疑心は未だにグレー。現時点で古雅に声をかける要素など皆無のはずだ。疑わしいと言っただけでは古雅を引き留めることなどできない。他人に声をかけるのは、相当勇気がある行

動である。

大丈夫だ。問題ない。

古雅は己に言い聞かせた。

「まあ、万引きされていたとしても、警報機があるかね」

馬鹿め。古雅はほくそ笑み、青年の脇を通り抜けた。

突破に成功し、安堵しながら無力化した警報機も潜り抜けて店外に出る。

直後だった。

「マジかよ！」

仲間の一人が怒鳴り声を上げる。ありえない。目を見開くも、それは現実だった。

警報機の電子音が店内に鳴り響いていた。

青年と話していた店員がやれやれと肩をすくめる。

「よく誤解されるんだけど、そのポールはダミーかね。業界側はあえて誤解させたまま放置しているのかね。そっちの方が都合がいいからね。あ、本物の警報機がどこにあるのかなんて、わざわざ話してあげないのかね」

「随分と手癖の悪いガキだな。毛根まで焼き尽くしてやろうか」

「……『妹学園5』の危機だからかね。何時になくやる気じゃないかね、うつのみゃん」

青年は獰猛な野獣のように歯茎を露出させた。

古雅とその仲間たちは、その表情の意味をわかりかねていた。数秒経ってからようやくその意味に気付く。

笑っているのだ。

「俺の妹を返せ」

瞬間、硬直していた空気が爆発。

ひいつ　と悲鳴を上げながら、古雅は無様に転がりそうになりながら逃げ出した。

同時にアスファルトに炎の塊が着弾。古雅の足を適確に狙った攻撃だった。

蒸気を上げた地面には、サッカーボールサイズの穴が開けられている。冗談じゃない。

「クソッ、何なんだよアイツは！」

首だけで振り返る。そこには悪鬼が立っていた。

あまりの高温に周囲の空気が歪んでいる。その中心にいる青年は、両腕に青い炎を宿していた。

「俺の妹を……」

青年が地面を蹴る。両膝が笑ってしまい、古雅はその場に腰を落としてしまった。

「ひっ、ややや、やめてくれえ　！」

「返せえええっ！」

動けよ、動いてくれっ。必死に膝の筋肉を叱咤する。だが、まるで自分の身体ではなくなってしまったかのように、足の筋肉は言うことを聞いてくれない。

目前に迫る青年を見て、古雅は両腕で頭を抱えてダンゴムシのように丸くなった。

直後、地面に拳が突き刺さる。コンクリートを紙のように切り裂く高温は、アスファルトを一瞬で蒸発させた。

「うあ、あああ　！」

股間から液体が広がり、アスファルトをさらに黒く染めている。口から泡を吹き始め、古雅は意識を失った。

「やっと会えたぜ。俺の妹よ」

青年はそんなものには見向きもせず、古雅のリュックに手をかけた。

生が泣きじゃくっていたので、思わず罪悪感に囚われた宇都宮だったが、同情するような要素は何一つなかった（？）ようだ。よくわからないが。ともかく、無意識の内に万引き犯を捕まえてしまうとは、宇都宮もそろそろ風紀委員が板に付いてきたようだ。

やはりと言うべきか、あの中学生たちは『幻想御手』を使用していた。取調中に昏睡したそうだ。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「映画のペアチケットか……」

大学の知り合いのポニー女に渡された物だった。ポニー女が店長からぶん奪って来たらしい。

期限が今日までとなっているのだが、時刻は十九時。誰かを呼び出すには都合が悪い時間帯だ。携帯電話のアドレス帳を開いてみるが、宇都宮自身がぶつたまげるほどリストはスカスカだった。風紀委員の白井と初春は映画のために呼び出すような間柄ではないし、寮生なので門限があるだろう。ゼミの教授は だけの連絡用だ。ゼミ生とは社交儀礼でアドレスを交換していたが、名前と顔が一致しない。

木山や麦野の連絡先もあるにはあるが、宇都宮はそんなものは見なかったことにする。

絹旗……か。

電話は五秒で繋がった。

「ハロー、絹旗。僕は西海岸でバカンス中さ」

ブツリ と電話を切られた。

二の句を継がせないあたり、機嫌が悪いのか、それとも忙しいのか。とりあえず、もう一度挑戦してみる。

『いきなり変な冗談とかマジやめて下さいよ。宇都宮は相変わらずぶつ飛んでるみたいですけど。え、暇ですかって、そりゃウルトラ忙しいに決まってるじゃないですか。こんな時間に何なんですかもう。今日はナイトシアターで、台湾のポー監督が制作した映画が初放映されるんですよ』

「あ、そう。何と言うか、悪かったな」

『悪いと思っっているなら今度何か超奢ってくださいね。では、これで失礼します』

通話時間四十五秒。呆気なさ過ぎる。

「俺には妹がいるからな。それも五十人も。ふふふーん」

これで全滅なわけだ。絶望的な交友関係の少なさに泣けてくるが、本音を言うとは映画なんてどうでもよかった。当初の予定通り、時間の無駄なだけのB級映画などは諦めて『妹学園5』をプレイすることにしよう。三次元の連中なんてどうでもいい。時代は二次元だ。エセ3Dもありだろう。

鼻歌まで口ずさみながら、片手のビニル袋を宝物のように愛でる宇都宮。

公衆の面前で危険な発言をしている駄目男に、憐憫の視線が突き刺さる。

「……………どこから見てた？」

「妹五十人、ついに妄想の世界に旅立ってしまったんだね」

ピンク色の半袖カーディガンを羽織った女は、心底から同情するような目をしていた。

麦野沈利。

ある意味で、一番弱味を見せたくない奴である。

「絹旗には黙っておいてあげるから感謝しなさい。まあ、お前の趣味なんて私には関係ないからね、ぶつちゃけどうでもいいわ。とりあえず宇都宮は、今度から私の三メートル以内には近寄らないでよ」

「どうでもいいって言ってるけど、思いつ切り気にしてるよな」

「あー、無理。その目も駄目だ。妊娠しそうだから私を見るのも禁止ね」

「俺そこまで人間やめてませんが!？」

ひどすぎる言い草に半泣きになる宇都宮。

麦野は口元に手を当ててお嬢様チックに優雅に笑うと、宇都宮の首もとに手を置いた。三メートル以内に踏み込んでくれたわけだが、

触れられるだけで生物的な本能が恐怖を訴えかけ、冗談ではなく命の危機を覚えてしまう。三メートル離れて欲しいのは宇都宮の方だった。

「あ、あのう、どうして俺の襟首をお掴みになっておられるのですようか……」

「丁度よかった。さっきからナンパ野郎どもが鬱陶しいんだよねー。ほら、夏になると女も開放的になっていると勘違いしちゃうサルどもっているじゃない。大体はスキルアウトとかゼロ能力者のチームなんだけど、そう言う連中が今日に限って街中に溢れかえってるみたいでさ」

「集会でもするのか？」

「さあね。ライブでもやるんじゃないの？」

麦野はどうでもよさそうに言うと、宇都宮の襟首を引っ張って歩き出した。

周囲の男たちがあからさまに舌打ちするのを見て、宇都宮は納得する。盾にされたのだ。

「お前ホント羨ましい性格してるよな」

「そう？ 褒めても何も出ない……って、早速お出ましてみたいだね。じゃ、頑張つてねー」

「……歩き出して二十秒でこれかよ」

宇都宮は頭を抱えなくなつた。路地でたむろしていた集団が、麦野の姿を見付けると、ゾロゾロとまるで巣穴から出てくる蟻のように沸き出したのだ。昨今の事情を鑑みるに、『幻想御手』でレベルが上がり、それと一緒に気が強くなっている連中ではあるまいか。

「兄ちゃん、いい女を連れてるじゃねえか」

先頭に立っているのはスキンヘッドの大男だった。金属がジャラジャラとしている革ジャンに、髑髏のシルバーネックレスをしている。デスメタルと言うのか、ロックと言うのか、宇都宮にはよくわからないが、典型的なワルの顔をしていることだけは理解した。

麦野の能力は強力だが加減が効かない。

この程度の連中なら文字通り瞬殺できるのだが、殺しすぎると上
が口うるさくなる。一人や二人殺したぐらいでは問題にならないと
いう点に激しくツツコミを入れたいところだが、宇都宮にはそれを
指摘できるだけの権力がなかった。権力とはまことに恐ろしいもの
である。

「俺の上腕二頭筋（能力）は『マッスルインパクト筋肉膨張』だ。兄ちゃん、怪我した
くなかったらその女を置いてどっかに消えな」

「頭も悪そうだけど、心臓にも悪そうな能力だな」

「あー、そう言えば、ボディビルダーって心臓麻痺で死んだりす
るよね」

男の腕の筋肉が丸太のように膨張し、分厚い胸板から汗が噴き出
している。

「お前ら、俺たちも兄貴に続くぞ！」

「ああ！俺の三角筋（能力）は『マッスルリパース筋肉再生』だぜ！」

「俺は『マッスルプラス筋肉強化』だ！」

続々と出てくる筋肉たちに、宇都宮は顔をしかめた。麦野は直視
に堪えないと言うように手で顔を隠している。

さっさと追い払いなさいと命令され、宇都宮は溜息を吐き出した。

十

プスプスと煙を吹いている筋肉たちを放置して、宇都宮と麦野は
その場から逃げ出した。

炎弾でぶっ飛ばすに止めておいたのだが、やり過ぎた感はぬぐえ
ない。あまりにネタすぎる集団だったが、その恐ろしさはそこいら
のレベル4を遙に超えていた。ゲツヘツへ と勝ち誇ったように
笑いながら、オイルを塗っているわけではないのにテカテカと筋肉
を黒光りさせている。そんな筋肉が迫り来る光景は、世紀末を連想

させるほどだった。

「正直、あんな見てくれでナンパとかありえないと思うんだけどな」。それとも、最近は筋肉が流行ってるとか？」

それが事実だとすると、恐ろしすぎる世の中である。

ところで、どこに向かっているのだろう。あの麦野沈利が何の目的もなく市街地を彷徨うと言ったことをするわけがない。服とか探してるみたいない……とか言い出したら、宇都宮は目を擦ってこれは夢かと思い込もうとするところである。麦野がそんな女の子だったなら『アイテム』という組織は今頃は存在していない。

疑いに満ちた眼差しを送っていると、麦野は財布から数枚の紙を取り出した。

「これ、今日の戦利品」

映画のチケットである。奇しくも、宇都宮の手に行っている券と同じ物だった。

大方、ナンパ野郎をぶちのめした時に手に入れたのだろう。

「夏休みなのにみんな用事があるみたいだね。……ったく、ボスの命令ぐらい素直に従えっての」

「お前人望ないのな」

「あれ、宇都宮。今すぐぶっ殺したくなるような言葉が聞こえたよ。うな気がするんだけど？」

「気のせいだろ。麦野サマの呼び出しに応じないなんて、使えない下っ端ばかりだな」

あからさまに白々しく言う宇都宮だったが、麦野はそれで満足そうだった。

映画館に到着。

チケットを映画館の当日券と交換すると、麦野はソフトドリンクを購入。宇都宮はビールを頼んでみた。

「こらこら、お前も未成年でしょ」

「俺の場合はフリーパスがあるから年齢なんて問題ないんだよな」
麦野が呆れていたが、精算は無事済んでしまった。

お財布携帯で精算する場合、年齢確認はやらないことになってい
る。中の個人情報で勝手に弾かれるのだ。宇都宮の場合、携帯電話
は『サークル』の担当者が用意したもので、機密レベルが高く
設定されている。これぐらいのことは朝飯前だった。まことに権力
とは恐ろしいものである。

「こいつがあるから高校生の頃からエロビデオは見放題、エロゲも
買い放題だったんだよな。おっと、ついでにホットドッグも買って
おくか。ポップコーンも捨てがたいところだが……」

「この朴念仁は女の子への気遣いもなしか。はあ、こりゃ絹旗も苦
労するわ」

「……あれ、もしかしてこれってデートだったり　ぴぎゃああっ
！」

言いかけている途中で、麦野が宇都宮の目を指で突き刺した。

麦野はオレンジジュースをストローで吸いながら、チケットで上
映時間を確認すると、宇都宮を放置して先に行く。一人で目を押え
てもがき苦しむのはあまりに滑稽なので、宇都宮は「このビッチが
と罵りながら、痛みを我慢して麦野を追いかけた。

「ところで、何の映画なんよ？」

「さあ。興味ないから」

興味がないなら、どうしてわざわざ映画館まで足を運んだのだろ
う。つまり暇なのか。意外と暇人なのか。

室内に入り、わずかな明かりを頼りに席を探す。

「ここの暗いとエッチな気分になってこない？」

「ならない。ついでに言っとくけど指一本でも触れたら死ぬからね。
それでいいなら勝手にすれば？」

「つまんねーの」

館内にはほとんど人が見当たらなかった。宇都宮たち二人を除く
と、他に五人いるかどうかだろう。

この映画は大丈夫なのか　と心配になる宇都宮だったが、麦野
は映画の善し悪しすらどうでもよさそうだった。面白ければ儲け物、

つまらなくても想定内と言うような態度で足を組んでいる。思考が合理的すぎるのだ。こんな考え方で、生きていて楽しいのだろうか。野暮な突っ込みになりそうだから黙っておく。

前の座席に足をドカンと乗せると、宇都宮はポップコーンのしサイズカップを膝の上に置いて、ホットドッグにかぶりついた。市場価格のおよそ三倍だけあって、それ相応の旨さは保証されている。肉汁が滴るソーセージに舌鼓を打ち、時間を確認すると上映十分前。未だに客席はガラガラである。

ポップコーンは塩分たっぷり、ついでにバターたっぷり。横合いからさりげなく麦野が手を伸ばしていた。

「あ……これ……？」

最初は後ろからの声のことを、宇都宮はまったく気にしていなかった。

「んー、ちよつとこれ味が濃すぎないかな。ソフトドリンクの売り上げを増やすための姑息な作戦？」

「昔の映画館はサブプリミナルやってたみたいだからな。数コマごとにコーラの写真を混ぜてさ。もしかすると学園都市の映画館だから変わった実験に使われてるかもしれないぞ。集団心理とか、色彩の影響を分析するために、どこかの映画館が使われたつてのは聞いたことがある」

「宇都宮？」

「ちなみに、この映画館は普通の映写機を使っているが、他のところだと実験的に超巨大液晶スクリーンを使っているところもあるそうさ。思いつ切り高価で採算が取れないから、実験段階で終了しそうなプロジェクトだな」

「あー、宇都宮。詰まらない解説なんかどうでもいいから、そろそろ気付いてあげたら？」

無駄に楽しげに解説しまくっていた宇都宮に、麦野が冷や水を浴びせるように言う。柄になく熱く語ってしまったぜ　と照れ臭くなつて頭を掻いていたが、気付くとはどうということなのだろう。首

を傾げながら周囲を見回し、ちょうど後ろの座席に視点が固定される。

「……………」

「ど、どうして、麦野さん？　ねえ、宇都宮、どうして…………？」

「……………あちゃー」

麦野が額を押えた。

「あ、えっと……………奇遇だな絹旗。忙しそうだったけど、映画を見るから……………だったんだな」

「超絶B級映画ですから、この私がチェックしていないはずないでしょう。　っ！」

無理に笑おうとして、失敗する絹旗。直後、ダンツ　と席を立って出入り口に駆け出した。

上映待ちの来客たちが何かあったのかと振り返る中、麦野が腰を上げそうになった宇都宮の背中を叩く。

「ほら、さつさと追いかけなさい」

「で、でもお前は……………」

麦野は首を横に振る。

「私のことを気にしてくれるのは嬉しいけどね、優先順位を間違えてるよ」

それでも、宇都宮は動けない。そんなヘタレに、麦野は疲れたように溜息を吐いた。

「私みたいに闇にどっぷり浸っているとね、わかっちゃうんだよ。いくら努力しようとして、どれだけ頑張っても手に入らないものがある。

私たち『アイテム』に恋人がいる奴なんて一人もいない。私自身、友達って言えるような者は思い浮かばないな」

「おい、一体何を……………」

「でも、お前は違う。ビジネスライクでしか物事を見れなくなった私たちほど、闇に浸かってないのよね。宇都宮と絹旗は打算なく付き合える関係なんだから。私たちがどれだけ羨望しても手に入らないものを、お前はすでに持っているんでしょ。ならそれをドブに捨

てるようなことはするな。もう一度聞くよ。お前の一番大事なものは何？」

「……麦野、お前はもう」

「それ以上言ったら殺すからね。ほら、ポップコーン寄越しなさい」
麦野の視線は暗幕で閉じられているスクリーンの方を向いていた。
宇都宮は頷いた。

「さっさと行きなさい、この馬鹿！」

ゴメン　小さく呟いて、走り出す。麦野と大分話し込んでしまった。
見付かるかどうか　否、見付けるまで探すのだ。

十

麦野は小さく嘆息した。

「……救えないなあ。私たちも、宇都宮も」

ポップコーンに手を伸ばし、指先のどろりとした感触に顔をしかめる。カロリーはどのくらいになるのか。美女を自負する麦野にとっては、見過ごせないところだった。体重計に乗るのが恐ろしくなりそうだとわかっていても、口の寂しさは収まらない。

柄でもないことをしてしまった。

二人の関係があまりにも焦れつたくて、そして麦野が邪魔してしまつた後ろ暗さもあって、あんなことを言ってしまったのだ。麦野はそう思い込むことにした。麦野はレベル5の第四位。さらなる高みを望んでいる。今さら、普通の恋ができるとは思っていない。

それでも、羨ましいと考えてしまう。

額に手を当てた。本当にどうしようもない。こんなことは今日だけにしよう。

そう決心していると、携帯電話が震え始めた。マナー違反と知り

つつも、画面を開いて電話に応じる。

「今ちょうど立て込んでるんだけど、後にしてくれない？」

「こいつときたらー！ 立て込んでるのはこっちの方だったの。その時間を割いて電話してるんだから、素直に従いなさいよね！」

耳がキーンとして、麦野はスピーカーを遠ざけた。

『アイテム』の管理者である。

「それで、どうかした？」

『スキルアウトのクソどもが各所で蜂起しやがった。ピアホールとか駅前ロータリーとか開発途中で放置されたビルとか、とにかく人を詰め込めるところで『幻想御手』って言う意味不明な音楽を鳴らしまくって、パーティーをおっ始めてるわけ。このままだと暴走するのは目に見えているから私にも鎮圧を命じられたのよ』

「まだ何も起こってないんでしょ。放つときなさいよ。適当に警備員が片付けるでしょ」

『こいつときたらっ！ 規模が尋常じゃないんだって。ネットで集められた一般人が混ざって推定二千人！ 二千人よ二千人！ 警備員だけじゃ返り討ちに遭うから！』

麦野は溜息を吐いた。『アイテム』の仕事は学園都市の不穏分子の削除である。スキルアウトごときでは銃器で武装してテロを画策するぐらいしないと、処分の対象にはならないのだが、今回はそうは言っていられないようだ。参加者全員ぶち殺すと言うような真似は流石にできないから、適当に首謀者を探し出して処分することになりそうだ。

フレンダや滝壺を呼び出すべきか考え、一瞬で結論を出した。滝壺に体晶を使わせるにはリスクだけが大きすぎるし、フレンダの後方支援もあまり役に立ちそうにない。動かされる組織は『アイテム』だけではないだろうから、あまりこちらの手の内を見せたくなかった。

麦野の破壊力。それだけで十分。

「それで、ぶち殺し確定の奴はどこ？」

『こいつとききたらー！　つてあれ？　やるの？　やってくるの？』
「電話切るよ」

『ああ、待つて！　言います、今言いますから！』

麦野はポップコーンを宇都宮が座っていた椅子に置くと、席を立った。

そして、眉をひそめる。

『えっと、第六学区、東地区の映画館に標的が一人いるみたい。』
『スクール』の嫌みったらしい奴らよりも先にぶっ殺しなさい！　…
…おい、ここは元氣よく返事するところですよ？』

十

館内を出たところで、麦野の声が聞こえたような気がした。

「……救えないなあ。私たちも、宇都宮も」

中と外は嚴重に遮音されている。きつと気のせいなのだろう。

だが、口の中に苦いものが広がり、思わず舌打ちしてしまう。何かを選ぶと言うことは、同時に何かを切り捨てると言うことだ。宇都宮は絹旗を選び、麦野を切り捨てた。単純な優先順位の問題だけではない。『アイテム』のリーダーではなく、その部下に肩入れすると公言したのである。

集団と言うものは、簡単に、本当に簡単に崩壊する。

「仲間と作った砂場のお城は、乱入者によって超簡単に破壊されるんですよ」

絹旗はまだ館内にいた。左右の壁に巨大なポスターが貼られた廊下で、壁に寄りかかって宇都宮に背中を見せている。その姿は痛々しく、震える背中は一瞬絹旗ではないと錯覚するほど弱々しいものだった。

きつと、待つていたのだろう。

「以前、『アイテム』に勧誘しましたよね」

「ああ、憶えてるよ」

「あれ、やっぱり撤回させて下さい。宇都宮は異物なんです。かろうじて均衡が保たれていた『アイテム』をぶっ壊してしまうような超とびつきりの劇薬のようなものですよ。会ってすぐのフレンダさんと打ち解けるなんて、どんなマジックですか。麦野さんが気を許す異性の人って、そんなのがどこにいるんです」

胸を裂くような言い方だった。

絹旗へと伸ばしかけていた手が、途中で動かせなくなる。

「いえ、『アイテム』のためとか、そんなことは些細なことなんです。宇都宮が他の人と笑っているところなんて見たくなかった。ずっと私だけのものでいて欲しかった。宇都宮の笑顔は、私だけのものなんだって、超勝手に思い込んでいたんですよ！ そんなわけなのに、ありえないってわかっていたのに、どうして、どうして…」

「絹旗！」

思わず身体が動いていた。

「どうして、こんなに胸が痛いんですか！」

腕の中で、小さな背中が震えている。胸から切なさを吐き出す少女を、宇都宮は壊れ物を扱うように抱きしめた。

そして、怒鳴り声を上げる。

「俺だつてな、お前のことがわかんねえんだよ！ 『アイテム』のこと、わからねえ、わかりたくもねえ！ だけど前に言っただよな。テメエは何でもかんでも難しく考えすぎてるんだ。全部引ってくるめて俺が何とかしてやるって言っただろうが」

従業員が迷惑そうな顔をしているが、構わない。

「砂の城がぶっ壊れるだと？ それがどうしたよ。ぶっ壊れたならまた作ればいいだろ。麦野やフレンダがどうしたよ。あんなのはただのスキンシップじゃねえか。何でもかんでも惚れたとか色恋沙汰に持って行きやがって、麦野もいい迷惑だっつーの。一緒に映画見

ようとしてただけだろ。全部テメエの早とちりだ」

「う、つのみや……」

「そんなの関係ないだろ。俺と、お前には」
腕に力を込める。

「俺にとつては、他の連中なんて全員が攻略不可能のサブキャラクタ―だつての。所詮は引き立て役でしかないんだよ」

「そんな、また都合のいいことばっか言つて……」

「難しく考えるなつて言つてるだろ！」

思い切り、抱きしめた。絹旗が苦しそうにするが、身体が自然に力を込めてしまう。

「だつて俺は、お前のことが……」

「……え？」

だが、続きの言葉は出て来なかった。

下卑た視線が二人に向いている。ロビーには、やけに多くのガラの悪い連中が集まっていた。拡声器で何かを叫んでいる奴がいる。暴徒を扇動するための、演説のようだった。観衆は後で爆発させるためのエネルギーをじつと溜め込み、虎視眈々と爪を研いでいる。

そんな、馬鹿なことが。

ありえるのか。百人あまりの連中で、あんなことをするために。

「絹旗！ 耳を塞げ！」

直感で叫ぶ。だが、絹旗は困惑していて反応できない。

宇都宮は舌打ちすると、少女の手を引っ張って、来た道を引き返した。上映室の壁は遮音性が高く設計されている。そこまで音響が届くことはないはずだ。

「宇都宮、一体どうしたんですか!？」

背後から、スピーカーで拡張された轟音が鳴り始める。観衆が雄叫びを上げる。ライブで声援を送っているような盛り上がりを目に、上映室に飛び込んだ。

時間にして十秒。これで回避できたのか。疑念が頭の中を駆け巡る。

「宇都宮。ねえ、宇都宮!？」

「あ、悪い……」

事態に着いていけない絹旗はひとまず置いておき、とりあえず周囲を見回した。客席には誰もいない。なのに映画は上映されていた。不自然な光景に眉をひそめる。映画館は誰もいなくても映画を垂れ流しにするのだろうか。それともチケットは販売したが、客が入場しなかったと言うことだろうか。

映画は大航海時代、南方の島々に漂流した貿易船のクルーが、現地民と殺し合うと言ったものだった。

壮大なトランペットのファンファーレ。火縄銃が火を噴き、槍と弓を持った現地民が次々と倒れていく。

「圧倒的だろう。技術の差とはかくまで絶望を生み出すとも言うのか。これではチートコードを放り込んだゲームのようなものだ。意外性もなく、面白みもない。ただ不思議なものでね、最初だけは痛快なのだよ」

誰もいない、そう思っていたのだが、一人だけ客はいた。

暗幕の裏側に隠れていたらしい。

「無目的だったのだがね。何となくスピーカーを調べていただけなのだよ。それにしても、まさか人が入ってくるとは思ってもしなかった。それも『サークル』の宇都宮日向と『アイテム』の絹旗最愛だ。とりあえず歓迎するよ。握手でもしようか？」

モスグリーンのロングコートを羽織った男だった。コートの下は無地のシャツ、その下はジーンズである。髪は几帳面に左右で分けられていた。コートの印象が強すぎるため、社会人じみた風貌に騙されそうになる、その顔は意外と幼かった。おそらくは高校生だろう。

宇都宮と絹旗は警戒する。

少年は『サークル』と、『アイテム』と言っていた。

裏の関係者と言うことだ。

「決定的な亀裂か。できれば仲良くしたいのだけれどね。と言うわ

けで自己紹介でもしようか。僕は『ゴシック』のリーダー、蛇穴ヘビアナと言っ」

「宇都宮、コイツ何を言ってるんですか？」

「……わからないが、言えることは一つだけだ。表のアレは、お前の仕業なのか？」

蛇穴は小さい笑みを作ると、首を縦に振った。

瞬間、宇都宮の右腕が動いていた。火炎の弾丸を作り出して打ち出したのである。

「合理的な判断だ。だが、いささか荒っぽいね」

「何のために、あんなことをした？」

「一面的なものを見て怒られても困るのだがね。要するに欲望だよ」
宇都宮は舌打ちした。意識したわけではないのに、火力が勝手に上がってしまった。能力が強くなっているのだ。

そして、蛇穴の物言いも、同時に宇都宮の神経を逆撫でする。

「先天的なのだよ。人の行動は、すべて欲望に直結する。しなければ健全ではない。自己犠牲なんて存在するわけがない。存在していないわけがない。この世はすべてデジタルに考えるべきだ。誤差などあり得ない。後天的に獲得したものを、僕は容認しない。故に『幻想御手』による騒ぎに便乗させて貰ったのだよ」

「意味不明なことばつか言いやがって。結論が欲望って言われてもわかるわけないだろ。先走りすぎなんだよ」

「即物的。君は自分を納得させるための説明を求めるわけだ」

蛇穴は肩をすくめる。

絹旗が、宇都宮の腕を掴んだ。敵なのか　そう問われ、目線だけで肯定する。

「かつて、こんな研究が行われていた。感情の完全なプログラミン
グ化をテーマにしたものだ。あらゆる判断を合理的に完了させること
により、さらなる社会の発展を促すのだよ。欲望を調整すること
によって働きたくない人間が働くようになり、合理的ではない、感
情を原因とする殺人は、この世から駆逐されることだろう。そして

社会は成熟するのだよ」

まるでカルト。いや、カルトそのものだ。言うなれば行きすぎた科学信奉のようなものだろう。

「成熟するのは人々の生活だけではない。軍事的にも多大な成果を上げるだろう。社会全体の利益のために恐怖を合理的に排除された兵士たちは、かつてない精兵に姿を変える」

「あまりに人道的じゃない研究だな」

「そう、その通りだ！」

蛇穴は劇団の指揮者のように両手を広げた。語りは次第と激しく、収まりが付かなくなっていく。

「人道的！ つまらないね！ 結局、そんなもののために研究は打ち切られたのだよ。つまらない人権団体の横槍によってね。しかし研究成果は秘密裏に回収され、実際に完成しているのだよ。学習装置テストメの応用だから、原理は至極単純なのだね」

「『ゴシツク』の蛇穴。たしか……！」

「それはまだ早い」

「つ、あああああつ！」

突然、絹旗が胸を押えて床に屈み込んだ。尋常ではない汗を掻き、息も全力疾走した後のように切れ切れになっている。

能力で何かされたのだ。宇都宮は蛇穴を睨み付けた。

「貴様つ！」

「端的に言えば、僕はこの学習装置テストメントの改良版を、実用段階に持つていくために行動しているのだよ。簡単ではないことはわかっているがね。とりあえずあの暴徒どもを使って窓のないビルを取り囲んでみるさ。アレイスターが敵対するのはコストに見合わないと判断して実験を再稼働させるか、それとも犠牲を覚悟に鎮圧を命じるか。見物ではあるね」

「テストメントはそこで高みの見物つてところかよ！」

もう、限界だった。蛇穴の話の聞いている場合ではない。

絹旗が何かされたのだ。元凶を潰すのが、一番手っ取り早い。宇

都宮は絹旗を抱えて、自己の円周上から灼熱の炎をまき散らした。化学繊維で覆われた座席が燃えさかり、骨組みを溶解させながら、炎は蛇穴をも押し包もうとする。……だが、蛇穴は苦笑を浮かべた。「やれやれ、せっかちだね。大局的に物を見て欲しいのだが」

蛇穴は 何もしなかった。

指一本動かさなかったし、足で移動したわけではない。強いて言うなら、目線をわずかに動かしたぐらいだろう。

「 なっ、これは……があああああああああ！」

「感情は身を滅ぼすと言うことがある」

まさか、コイツの能力は。

宇都宮は歯を食い縛りながら、蛇穴を見上げる。

「複合的な感情は、最も処理し難いのだよ。喜怒哀楽。そのすべてを同時に引き上げると、並の人間なら五分と保たずに発狂するんだ。さて、君は何分堪えられるだろうか」

わけがわからなかった。

しがらみから解放されたように楽になったのに、身を切るような怒りがある。

笑い出したくなるほど嬉しいのに、叫びたくなるほど哀しかった。自分の身体感覚すら、覚束なくなっている。ここに立っているのは宇都宮日向なのか、それすらわからない。

「終局的、これにてチェックメイトだが、まだ発狂するまで時間はあるぞうだ。では改めて自己紹介させて貰おう。『メンタルクラッシュ感情突破』の蛇

穴と言っ

「ぶっ、コロ、す……」

「驚異的だね。まだ喋れるのか。存外にしぶとい」

蛇穴が哄笑する。指一本すら動かせなくなった宇都宮たちを見下ろし、何を思い付いたのか、ロングコートのポケットに両手を突っ込んで二人に歩み寄る。そこは温度操作の射程範囲だ。だが、能力を発動する方法がまったく頭に浮かんでこなかった。

絹旗の息が荒い。目が虚ろになっている。

「がああああああああつ！」

宇都宮は絶叫する。それぐらいしかできなかった。

「君が先に能力を使っていけば、僕に勝てたかもしれない。だが、君には僕の説明を聞くという目的があった。いや、責めているわけではないんだ。人間は社会的な生き物だからね、まず暴力から入るというのは褒められたことではない。故に、僕の能力は非常に強力であるのだよ。健全な人間を対象に選ぶ限り、僕に敵はいない」

「グッ」

鳩尾に、靴の踵が突き刺さる。

蛇穴は普通に笑っていた。学校の休憩時間、友人たちと浮かべるような表情である。

顔面に靴が振り下ろされる。常ならば屈辱に怒り狂っているところだ。だが、感情が捌ききれず、靴で踏まれることが屈辱だとしても、そのことで一々腹を立てている場合ではないと考えてしまう。「三分二十秒、そろそろ涎を垂れ流し、言葉の呂律が回らなくなってくる頃だが」

蛇穴は冷静に言う。

本当に、何もできないのか。わずかに残った悔しさが、そろそろ消えようとしていた。

「う、つの……」

「き、ぬ………はた………」

指先が、わずかだが動いた。

絹旗も同じなのか、互いの手が奇跡的に動き出す。蛇穴が眉をひそめるが、もう遅い。

手を繋ぐ。ただそれだけ。

「ハッ、ハハハッ！ 感動的！ 好き会う二人はついに結ばれたと。くだらない！」

二人の手に、蛇穴が靴を振り下ろした。

宇都宮の手の平が絹旗の手を包み込む。爪が割れ、血が滲むが、それでも手は動かさない。

「ふざけるな！ そんなものは、誤差を生むだけのバグではないか！」

「わからない……のかよ」

「暴力的！ 男女の欲望とは所有欲と性欲、それだけでいいのだ！ 愛情などと言つ詰まらないものは、計算を狂わせるだけではないか！」

感情とは喜怒哀楽だけではない。三字経で言つ七情では喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲。六情では喜、怒、哀、樂、愛、憎とされる。宇都宮は微笑する。

愛とはまた、青臭いものが出てきたものだ。愛の感情が、蛇穴の操作した喜怒哀楽の感情を上回つたと言つことだろう。愛は世界を救うと言つが、いや、ここまで臭い台詞はないか。

「何時まで……絹旗の、手を踏んでやがる」

「非論理的だ。まだ喋っているだと？」

歯を食い縛る。口から血が零れたが、気にしていられない。

「いいからさつさと、その足をどけやがれってんだよ！」

咄嗟の判断だろう。蛇穴は二人の手を踏み付けていた靴を退けて、警戒しながら数歩後退した。

だが、何も起こらないのを見て安堵している。退いてしまった己を気恥ずかしく思ったのか、頬を掻いていた。

二秒後、その瞳が見開かれる。

足が地面から動かないのである。力を入れると、ベリツと音がして靴が床から剥がれた。

「靴底を溶かしたのか！？ まさか、君はもう僕の『感情突破』から」

「覚悟しろよ。テメエは俺を怒らせすぎた」

喜怒哀楽を操る。なるほど、強力な能力だ。

だが、何時までも偉そうに語るのをやめなかったのが、この少年

の敗因になる。

強すぎる感情は、他の感情を押しつけて、強烈に主張する。

「感情を論理的に分析しすぎた。それがテメエの敗因だ。何もかもが言葉で説明できるとでも思ってたのかよ。数字にできねえんだよ、ヒトの心つてのは！」

「やめろ！ 非論理的な話など聞きたくない！」

「お前が望む世界つてのは、好きな奴と手を繋ぐのも駄目なんかよ。そんなのは理想なんかじゃねえ。テメエだけの独りよがりの幻想だ。なら俺は、そんな世界なんてぶっ潰して、コイツと手を繋ぎ合える世界を選んでやる！」

射程範囲が五十センチだったそれは、現時点で五メートルまで広がっていた。明らかに『幻想御手』の影響を受けている。一日保つかもわからないが、今はただ好都合だった。蛇穴をぶちのめすにはこれで十分だ。

「覚悟しろよ。骨一つ残さず、ことごとく灰にしてやる」

「やめろ！ それは暴力的！ 前近代的ではないか！ 即物的！ 非効率的！ 幻想的！」

イメージするために、右腕の前に突き出す。

瞬間、蛇穴の体内の水分が沸騰。脂肪が自然発火を開始する。

「ぐああああああつ！」

タンパク質を凝固させ、灼熱の水蒸気が体外に放出される。だが、残った身体の温度はまだまだ上がり続ける。まだ上がる。上がり続ける。人体の自然発火温度、四百度を突破。脂肪が燃焼し、肌から炎が吹き上がり始める。

まだ上がる。

五百度、六百度、八百度、千五百度。そして、二千度。

こんなものは、宇都宮の能力なら容易いことである。宇都宮日向の限界、最高火力は五千度。そこまでできなければ、地面を溶かして溶岩にすることなどとてもできない。瞬間的な火力なら、レベル4の中でも突出しているのである。

灰色の煙を巻き上げながら蛇穴の肉体は完全に炭化し、床に黒いシルエットを形作るようになった。

十

二十二時、麦野はビルの屋上に辿り着いていた。

映画館でスキルアウトを扇動していた『ゴシック』の構成員を瞬殺。逃走した残りの一人を追いかけてここまで来たのだが、どうも誘導された感がぬぐい切れない。学園都市の裏側に関与する者には、あまりにも杜撰な逃げ方である。わざわざ足音を聞かせてくれたわけだし、付かず離れずの距離を保っていたようだし。

「ま、どうでもいいか。お前たちはもう終わりなんだから」

「そうですね？ 別に、私が死んでも計画は破綻しないんです。リーダーさえ生きていれば、後はどうにでもなりますから」

「あー、『ゴシック』のリーダーは確か『感情突破』だったかな」
科学カルト系の研究所に所属していたが、研究が闇に葬られた時に、一緒に闇に墜ちた能力者だった。

どこの高校の物かわからない制服を着た少女は、泣き笑いのような表情を浮かべていた。感情が一定していない。『感情突破』に精神を弄られているのだろう。

「私の能力は『陽子崩壊』^{オパークロック}。物質を構築している原子には寿命があり、陽子の寿命は十の三十四乗年以上とされています。私の能力はその寿命を大幅に短縮することができるんですよ。例えば このビルを消滅させることもできますね」

「……まさか」

「ちなみに、原子崩壊が起こると電子はどうなると思います？ 取り残された大量のエネルギーは、どうなると思います？」

そっち方面は麦野の能力の性質上、よく知っている。

核爆発。

原子がぶっ壊れることにより、高熱や危険な放射線が放出されるのだ。

麦野は舌打ちした。レベル5ではあるまいし、ビル一つを丸ごと消滅させるといふのは無理だろうが、『幻想御手』を使っているとすると、ビル半分くらいまで能力の射程が広がっている恐れがある。さっさと能力を止めさせなければならぬのだが、果たして目の前の少女をぶち殺せば能力が止まるのか、そこどころがよくわからない。

「言えることはただ一つ。」

「差し違える気だつての？」

「ええ、その通りです」

絶体絶命の状況 のように見える。

瞬間、まばゆい光に包まれる。だが、麦野の顔に危機感はない。

『原子崩し（メルトダウナー）』を収束させて固定された壁を作り、それを盾にして展開。

少女の核爆発が勝つか、麦野の盾が飛び散る中性子や放射線を防ぎきれるか。

「ハッ、自爆覚悟の特攻つてか。そんなだから、テメエらは何時まで経ってもレベル4なんだよ」

ゴオッ！ という轟音と共に、ビルが丸ごと吹き飛ばされた。

あまりの威力に鉄骨が折れ曲がり、壁にヒビが入り、ビルの爆破映像のごとく屋上が下へと吸い込まれていく。

「アイツはッ！」

麦野の身体が重力に引つ張られ、ビルの天井と一緒に落下を辿る。

原子崩壊によってまき散らされた放射線を壁で受け止めながら、麦野は眉をひそめた。核爆発にしては、威力が弱い。まさか、エネルギーを“吸い取った”とでも言うのか。

飛んでくる破片を消し飛ばし、空を飛ぶ馬鹿野郎を睨み付けた。

「ごちゃごちゃ言い合ってるから何事かと思ったが、お遊戯会でもやっていたのか？」

「そんな訳ないでしょ」

純白の六枚の翼を広げた 垣根帝督。

レベル5の第二位『ダークマター未元物質』。

「死体は……この瓦礫をどけるのも面倒だ。ここは『スクール』にポイント加算ってことで納得してくれないか」

「ふざけんじやないわよ。何ならここでお前とやりあってもいいんだよ？」

「それはそれで面白そうだが、こっちもそれほど時間が有り余っているわけではないんでな」

麦野は溜息を吐いた。

今回もどうせ暗躍していたのだろう。それが失敗したか、分が悪いと判断したかで、統括理事会の疑いを晴らすために動き始めたと言ったところだ。この男が何を目論んでいるのか、知りたいとは思わないが、そろそろ鬱陶しくなってきたところである。

何時か、コイツとやり合う日が来るのかもしれない。

だが、今日はまだその時ではなさそうだ。

十

どれだけ気を失っていたのか。宇都宮は慌てて飛び起き、携帯電話で時間を確認した。

二十三時。二時間ほど気を失っていたと言うことになる。精神的な疲労がひどく、今にも意識を失って眠ってしまいたいところだった。

「……………あ」

左手が万力のようなもので締め上げられているように感じ、見下ろしてみると、静かに寝息を立てている少女がいた。

まだ『幻想御手』で昏睡したわけではないだろうが、数日もすれば病院に搬送されるのだろう。

とりあえず、携帯の着信履歴に溜まっている番号にリダイヤルする。

『宇都宮さん！？ やっと繋がりましたの。何をしていたんですか？』

「あー、こっちも色々巻き込まれてな。『幻想御手』を聞いてしまった」

『ッ！』

「いや、まあ心配すんな。んで、お前らは何やってんだ？」

風紀委員も暴徒の鎮圧に回されているのだろう。宇都宮としてはそんなことに一々関わっている場合ではなく、『幻想御手』の開発者を早急に叩いて、昏睡という未来から逃れたいところだった。

自分自身のためにも、そして絹旗のためにもだ。

『おそらく『幻想御手』は共生感覚を利用していますの。同一の脳波を持つ人間の脳波パターンを電気信号に変換。その人たちの脳波を繋いでネットワークを構築することができれば、他人の脳を何個も繋いでいる状態になりますから、能力が上がるのも納得できますわ』

「……それで？」

宇都宮は短く言った。

『えっと、“それで”とは？』

「お前らのことだから、犯人の目星も付いているんじゃないかと思つてな」

白井が困惑しながら一人の名前を答えた。

宇都宮は含み笑いを零す。何やら叫んでいる白井を無視して通話を終わらせた。

残り時間は、半日も持てばいいところだろう。『幻想御手』の昏

睡から逃れる方法は一つだけあるが、できれば使いたくないところだった。

『磁気単極子』。

脳内に独立したサーキットを構築している謎の物質を使えば、他人の脳波を押しつけることができる。

マイクローAIMバーストと工藤は言っていたが、その状態に移行して、元に戻ることができているのか。生きるか死ぬかの大博打と言ったところか。

「……宇都宮、私は」

「起きたか」

「超疲れてるみたいで、指一本も動かせませんけどね」

精神的な疲労が大きすぎるようだ。絹旗の方が、宇都宮よりも長い間『感情突破』を喰らっている。

あと三十秒も遅ければ、彼女も壊れていた。

「ごめんな、絹旗。俺、行くから」

「どこに、ですつ。一緒に、いて下さいよ」

「寝てる。起きたら全部終わってるから。俺が終わらせて来るからさ」

宇都宮は身体を起こした。握り締められた右手を丁寧に、ゆっくりと解きほぐす。

絹旗は泣きそうな顔をしていた。それでも、宇都宮は振り返らない。白井にメールを送って救急車を手配させると、右腕を振りかぶった。

ゴンツ　と爆炎が壁に衝突。外までの直通の通路を作り出す。

「好きだぜ、絹旗」

振り返り、それだけを伝えると、宇都宮は歩き出した。

メンタルクラッシュ
【感情突破】

レベル4の能力。喜怒哀楽を無理やり引き上げて感情の矛盾を作りだし、対象の心を論理的に破綻させる。ただし引き上げる感情は数値にすると均一になり、例えば対象に能力の使用した後、怒りだけが大きくなりすぎると、怒りすぎて他のことは気にならないと言うように、能力の支配から限定的に外れてしまう。

オーバークロック
【陽子崩壊】

本来はレベル3の能力だったが、作中では『幻想御手』によりレベル4になっている。

物質を構築している原子には寿命があり、陽子の寿命は十の三十四乗年以上。この能力はその寿命を大幅に短縮することができる。同時に大量の原子が寿命を迎えて崩壊することによって、取り残された大量のエネルギーは核爆発を引き起こす。崩壊させる物質の原子番号が小さいと、取り出せる電子も少なくなるため、最終的なエネルギー量は小さくなる。この能力の使用者は爆発を防ぐ手段を持っていない。典型的な自爆能力である。

マッスルインパクト
【筋肉膨張】

レベル3。強制的に筋肉を太くする能力。筋肉を動かすための糖質や脂質は普通に消費されるため持久力は皆無である。さらに使いすぎると血が筋肉に集まりすぎて貧血になる。筋肉三兄弟の中では最も火力（腕力）が強く、見栄えもするが、持久戦に持ち込まれると実は一番弱かったりする。

マッスルリパリス
【筋肉再生】

レベル2。筋肉を再生させる能力。

例えば刃物で切られても、すぐに筋肉を再生することができる。ただし、皮膚、皮下脂肪、骨、血管は修復できない。よって血は流れ続ける。骨格筋は再生できる。アキレス腱のようなものも拡大解釈しているのである。

ちなみに、筋肉は運動をすることによって千切れるわけだが、この能力はそれをすぐに再生することができる。再生した筋肉はより太くなるため、筋肉を鍛えるには適した能力である。要約するとオーバークークとは無縁と言うこと。

マッスルプラス
【筋肉強化】

レベル2。筋肉を強化する能力。『筋肉膨張』と同じように聞こえるが、その本質はまったく異なる。実は筋肉三兄弟の中では最も強力な能力である。

筋肉を強化するとは、“鍛え上げた筋肉”を構築するのである。能力を使うことによって筋トレをサボっていても、ボディビルダーになることができるわけだ。しかし、能力を切った瞬間、貧弱ボイに戻ってしまう。

この作品では『身体強化』および『肉体強化』は能力の対象を筋肉だけでなく、皮膚や骨格まで及ぶものとする。まあぶっちゃけ原理が異なっているも、引き起こされる結果はほとんど変わらないのだが。

08：幻想御手

陸橋から人影が吹き飛び、下線道路に叩き付けられる。人影は二回バウンドしながらアスファルトを転がって、建設重機に激突して動かなくなった。四肢を不自然な方向にねじ曲がらせた死体は、地面に落下するより前に頭部が失われている。啞然とした頭部は、陸橋のガードレールの下に置き去りにされていた。

「これで『フアンド』も半壊。今日は雑魚組織のバーゲンセールだな」

「『スヘアフロン第二計画』まで自分の手で潰してしまっなんて、一体どう言うわけなの？ そりゃ『メインフロン第一計画』の蛇穴は自分自身の欲望が強すぎて、私たちの思い通りに操れなかったけど、『フアンド』はまだ使い道があつたと思うんだけどな」

「今回はもう駄目だ。学園都市のほとんどの武闘派が動き回ってやる。やっぱり陽動は必要だよな」

垣根帝督は詰まらなさそうに言う。

ドレスの少女の擲掄にも気にした顔をせず、陸橋から道路を見下ろした。まだ外出規制は出ていないが、どいつもこいつも自分の命が関わることになれば、凄まじく鼻が効くようになる。深夜になってもコンビニのような明かりのあるところに集まって人様に迷惑をかけるようなゴミも、軒並み掃除されたようになっていた。

「アクセラレーター ったく、このままだと『一方通行』が絶対能力者（レベル6）になっちまうぞ。さっさとアレイスターを引っ張り出さないとけないのに、突破口がまるで見えねえ」

「苛立っているところ申し訳ないけど、そろそろ帰ってもいいかしら？」

垣根は返事をしない。

最初から仲間なんて期待していなかった。そもそもが垣根の私心から始まった計画である。最後まで付き合わせるのも酷だろう。『

スクール』は垣根帝督のために用意された組織ではあるが、ギブアンドテイクの関係が維持できなくなれば、『スクール』は崩壊するのである。

「ん？」

視線が合ったような気がした。

「あれは『サークル』の宇都宮日向か？」

全力で走ってきたのだろうか。カッターシャツの青年が息を荒げて自販機に寄りかかり、缶ジュースのプルタブを開けながら陸橋を見上げている。青年は空き缶を投げ捨てると、煙草の箱をトントンと叩き、取り出した煙草を口に咥えて少しだけ吸うと、それを放り捨てて再び走り始めた。

気付いた いや、違う。何げなく空を見上げただけか。

「……鬱陶しい野郎だな。潰しておくか？」

「やめておいた方が賢明だと思っただけだね。あれでもレベル5の候補なんだから、いらぬ騒動の火種になるわよ。……それにしても、こんなところで何をしているのかしら」

「さあな。どうでもいいじゃねえか」

「あの男が『アイテム』の急所。探っておいても損はないわよね」
ドレスの少女は蠱惑的に微笑むと、陸橋から飛び降りた。

垣根は肩をすくめると、『未元物質』^{タークマター}の翼を広げ、夜空に飛び上がった。

十

カエル顔の医者が務める病院で、白井が壁に手の平を叩き付けていた。

「あのお馬鹿っ……！」

通話が着られた携帯電話を睨み付けている。もう一度電話をかけ

ていたが、電源を切られたのかまったく繋がらないようだった。舌打ちした直後、一通のメールを受信する。

「何なの？」

「救急車の手配ですの」

なるほど、と美琴はどうでもよさそうに頷いた。

大混乱に陥っている学園都市では、救助活動もままならない状態である。救助隊員は非番の者も引つ張り出して、総出で対応している真つ最中だった。要するにあの男は、白井のコネを使って何とかしてくれと言っているのだ。

自分が乗るために頼んだ のではないだろう。

「あの馬鹿は何て言ってたの？」

「よくわかりませんが、おそらくは一人で木山のところに向かったのではないかと」

「アイツ、木山の居場所知らないわよね」

「……………ええ、そのはずですが」

著しく不安だった。

さらに宇都宮は、現在『幻想御手』の影響下にあると言う。本来ならすぐにでも病院に搬送して然るべきところだ。

美琴はやれやれと嘆息した。

「まあ、暴徒たちも何日も暴れられないんだから、そう大したことはできないでしょ」

気軽に言いながら窓を開ける。日本製の自動車の不買運動のように、若者たちが駐車場の車の上に飛び乗って、金属バッドを振り下ろし、窓ガラスを叩き割っている。暴徒としか言いようがない低劣な所業だった。

現在も『幻想御手』で昏睡した患者が続々と運ばれている。暴徒たちは搬送の邪魔になっていた。

「じゃ、黒子。頼んだわよ」

「頼んだって、お姉さま 何のことですか？」

怪訝な顔をする白井に、美琴が不敵な笑みを浮かべた。

コインを指で弾くと、窓の外に向けて狙いを付ける。直後、ドバンツ　と衝撃波が炸裂し、車を破壊していた若者たちを一斉になぎ払う。

「私も出るわ。怪我してるアンタだけじゃ頼りないからね」

「お、お姉さま……」

白井は瞳を潤ませた。

「こんな時くらい『お姉さま』に頼んなさい」

流石はお姉さま。これでこそ私のお姉さま。うっかり胸がキュンとしてしまう白井である。

「お姉さまああ！」

「一々抱き付くなつての！」

ルパンダイブで美琴の胸に飛び込もうとする白井を、美琴は鬱陶しそうに引きはがした。

十

全力で駆け続けていたからだろう。息が苦しくなっていた。

宇都宮は道路脇にあった自販機を殴り付ける。警報機が鳴り出すが、辺りは無人。貫通した穴から激甘コーヒーを抜き取ると、プルタブを開けてから、上を向いて中身を一気に飲み干した。頬からベトベトした液体が零れ、カッターシャツの袖口で拭う。袖口にコーヒーの茶色い染みが浮かび上がったが、そんなことはどうでもよかった。

あと、何時間保つのか。

『幻想御手』の脳波ネットワークがまだ不完全だった時、介旅初矢が『虚空爆破事件』を引き起こしていた時は、昏睡まで一週間前後の猶予期間が存在していた。だが、ネットワークが肥大化するにつれて影響力が大きくなり、能力が強力になるだけではなく、ネット

ワークに取り込まれるのも早くなっているようだ。宇都宮は一日……いや、半日保てばいいところだろう。

それからは、どうなるかわからない。

ロングピースを口に咥え、木山春生の名刺を財布から取り出した。レシートのゴミを捨てる時に、ついでに捨てそうになったのだが、念のため取っておいて正解だった。

研究所の所在だけではなく、本人の住所や電話番号まで記載されている。ビジネス用とプライベート用とで名刺を使い分けていたのか、それとも個人情報にまったく頓着していなかったのか。木山の性格なら、おそらく後者だろう。

「よくわからないけど、憎みきれないんだよな」

とは言え、状況によっては木山を殺さなければならぬかもしれないかもしれない。

今の内に覚悟しておかなければならぬだろう。

宇都宮が溜息を吐いた時。突如、地面に巨大な質量が落下した。ドゴンツ と、ナウマン象の足音のような効果音が辺りに響き渡る。前方に違法駐車されていた原付が、ベキベキと音を立てて押し潰されていた。漏れたガソリンが摩擦による温度上昇によって引火。地面を舐めるように炎が広がり、原付が爆発する。

宇都宮は絶句する。

『『ジャイアントメタルヒートプロジェクト 巨大機械化甲虫計画』』というものを聞いたことがあるかね』

「……地球防衛軍かよ」

と言うが、ゴキブリではない。

それは、カブトムシだった。

『簡単に言えば、カブトムシを巨大化させる計画だ。昆虫とは体長が一メートルを超えると、自身の質量によって素早く動けなくなるのだがね。その難点を解消するために、人工筋肉やマニピュレータを埋め込み、AIを搭載することにより、ある程度の自立行動を可能にしたものだ。そして、この甲虫は地下の警備に用いられることになったのだよ』

「声に聞き覚えがあるんだが、それは？」

体長は二メートル。色は銀色で、両目は赤外線を飛ばしているのか真っ赤に輝いていた。どこかに埋め込まれたスピーカーから、マイクを通したようなくぐもった声が出ているのだが、その声が先ほど殺したはずの蛇穴のものであったのである。あらかじめ録音していたとは思えないから、悪趣味な悪戯だとしか考えられなかった。

『私にはその情報は登録されていない。よってその質問に答えることはできない』

銀色のカブトムシが言う。

宇都宮は溜息を吐いた。

「要するに、俺を足止めしようってわけだ。付き合ってる暇なんてないんだがな」

大方、またぞろどこかの組織が蠢動しているのだろう。木山が『アレイスター』との直接交渉権をもぎ取ってしまう恐れがある。おそらくはこれも漁夫の利を狙っている連中の仕業だ。

右手に炎を乗せる。

六千度。すでに『業火使い（フレアマスター）』のキャパシティを超えている。

そのまま走り寄ると、巨大カブトムシはその見た目を大幅に裏切る俊敏な動きで後ろに飛びながら、ガチャンと不気味な金属音を鳴らし、外骨格から無数の金属の筒を突き出した。八つの銃口が鋭利なツノを取り囲むように配置されている。その口径はどう見ても軽機関銃のものではない。重機関銃だ。ガトリングガン

「ふざ、けるなっ！」

咄嗟に地面を殴り付ける。六千度の拳が直撃したアスファルトは瞬時に溶解。衝撃を受けて一瞬だけ波打つカーテンのように広がった。直後、発射された銃弾が第一の防御、溶岩の幕に突き刺さる。無数の銃弾は溶岩を突き抜け、そのまま宇都宮へと直進した。

正確に狙いを付けられていた弾丸は、溶岩を通過することにより弾道を狂わせていた。

無数の弾丸が明後日の方向に飛んで行くが、それでも二、三発の弾丸は宇都宮を狙う。極限まで高められた集中力で弾丸に目を凝らし、拡大した射程範囲、五メートル内の空気を沸騰させる。第二の防御によって、弾丸の熱は加速的に上昇。固体から液体へと変化する。

だが、宇都宮の能力によって周囲の大气が過熱されていたとは言え、弾丸の温度を五千度オーバーまで一瞬で加熱できるわけではない。空気摩擦によって加熱され、溶岩や高温の大气を突き抜けることによって液体に形質を変えていたが、それでも銃弾は気体にはならなかった。

銅やニッケル、鉛やマンガンならともかく、その銃弾の沸点は著しく高かったのである。

宇都宮は両目を見開いた。

「溶けない？ レアメタルか！？」

液状になった銃弾が皮膚を殴り付ける。

宇都宮は衝撃によるめき、血の混じった唾を吐き捨てた。皮膚に真っ赤な水ぶくれが浮かび上がる。深度？度の火傷と言ったところか。

『タングステンの沸点はおよそ六千度。周囲の気体を暖めただけでは、この銃弾を蒸発させることはできない』

「俺専用の弾丸ってことか」

『タングステン合金の弾頭を使用しているのは、それが頑丈だからだ。高価な弾丸をわざわざ貴様ごときに用意したと自惚れるのは結構だが、相応の実力がなければ滑稽なだけだぞ』

「滑稽なのはテメエの方だったの。安全なところから高みの見物をしているだけなのに、どうしてそんなに威張ってるんだ？」

『……………』

宇都宮はスピーカーの声は気にせず、おもむろにカブトムシへと詰め寄った。

応射により凄まじい轟音が唸り、カブトムシ側面の外骨格から薬

茨が排出されている。硝煙が巻き上がり、硫黄のような火薬の異臭が鼻に付いた。

宇都宮に向かって約百発の銃撃が繰り出される。コンピュータによって正確すぎるほど制御された弾丸が、寸分違わず宇都宮を狙い撃つ。

だが、その猛撃は宇都宮には一発も掠っていないかった。

「おい、これで終わりかよ？」

「なっ、何故だ!？」

「何故って言われてもな。銃弾の一発まで照準を定めるのは面倒だったが、『幻想御手』ってのはここまでのものなのか。演算能力が尋常じゃないほど上がってやがる」

周囲の大气から熱流動によって温度を上げることができないなら、直接温度を上げてやればいい。銃弾を個別に識別して、迎撃に分子運動操作を使用するようなことも、今の宇都宮には可能だった。

踏み込む宇都宮を銃弾が迎え撃つが、すでにその攻撃は見切っている。カブトムシが鋭利なツノを振り回し、接近する宇都宮をなぎ払おうとするが、最後の悪足掻きだった。六千度の掌底によってツノをへし折られ、機械オイルがあふれ出す。そしてカーボンナノチューブ製の頑丈な外骨格に、宇都宮の拳が突き刺さった。

「爆発しろ、虫野郎」

能力を発動。六千度の熱球をカブトムシの体内に置き去りにして、ズブリと右腕を引き抜いた。

指をパチンと鳴らすと同時に、銀色のカブトムシが真っ赤に赤熱する。

銃弾の火薬にも引火し、五秒経ってから爆発。

灼熱の風が吹き荒れ、金属の破片が辺りにぶちまけられるのを、宇都宮はさしたる感慨もなく眺めていた。だが、突然ハツとしたように驚いた時。アスファルトを割りながら突き出たツノが、宇都宮の背中を刺し貫かんと襲いかかる。どうにか刺突を回避した宇都宮だったが、前面装甲の外骨格を叩き付けられ、衝撃が臓腑に染み渡

った。

「っ、二体目かよ！」

返答は銃撃だった。狙いを定めてすかさず蒸発させるが、ズキリと脳に鈍い痛みが走り抜ける。

無駄と知りつつ撃っているわけではない。宇都宮が疲弊するのを待っているのだ。

利き腕に能力を発動させて青白い炎を二体目のカブトムシに埋め込もうとするが、その腕が途中で止まる。

「伏せなさいっ！」

来襲したのはブルドーザーだった。オレンジ色の塗装でコミカルな雰囲気を作り出しているが、あれはそんな生易しいものではない。建設重機なのに、その速度は時速八十キロ以上を超えていた。敵地に潜入しながら地雷を除去する装甲車を換装したものである。

どうしてこんなところにそんなものがあるのか、学園都市の技術はどこまで突き進むのか、ツッコミどころには際限がなかったが、とりあえず呆れ果てておくべきだろう。

装甲車の前面に取り付けられた可動式ブレードの直撃を受けたカブトムシは、二メートルほど引きずられ、おろし金と化した地面を転がされて傷だらけになる。振り上げられたブレードによって一瞬だけ宙に浮かび上がったカブトムシは、大きく吹き飛ばされながら引っ繰り返った。

「早く乗りなさい。死にたくなければね」

「……何なんだよ、お前は」

「せっかく助けてあげたのに、お礼の言葉もなし？ 何でもいいけど、死にたいって解釈していいのかしら？」

振り返る。吹き飛ばされたカブトムシが起き上がり、ボディから銃口を突き出していた。衝撃でどこかがイカれたのか動きはぎこちないが、無力化したと言うにはほど遠い状態である。さらに、ズゴオオソツ　と三体目のカブトムシが羽を広げてビルから落下し、宇都宮は表情を歪めた。

前門には正体不明の少女、後門にはカブトムシ。どっちを選ぶか。
「言われるまでもないよな」

「賢明な選択ね。面白みはないけど、まあよしとしましょう」
少女の淡泊な口振りに肩をすくめると、ブルドーザーの助手席に
身体を潜り込ませる。

華奢な体付きの少女だった。にもかかわらず、背中がぱっくりと
開いたドレスを着ている。髪はふわふわのボブカットと言うのだろ
うか。床屋のおっちゃんでは真似できそうにない、イケメンの美容
師が手を入れたようなパーマとシャギーによって、テレビのアイド
ルのような髪型になっていた。

ドレスの少女はギアを入れると、フルスロットルでアクセルを踏
み込んだ。

「お前、免許は？」

「必要なのはカードじゃないの。技術よ」

「……めっちゃ不安になってきたんですけど」
自信満々に答えるドレスの少女に、宇都宮の気力ゲージが音を立
てて減少する。

無数の銃弾が後部の装甲にぶち当たり、カンカンと情けない音色
を奏でていた。

十

前方を見据え、白井は能力を発動する。ヒュン、ヒュンと小刻み
に空を切り裂く音を鳴らしながら、歩道、手すり、自販機の上など
を、点と点を繋ぐように『空間移動』^{テレポルト}で移動する。本来なら時速に
して二百八十八キロに届く速度が出るはずだが、今は美琴を抱きか
かえており、麻酔で誤魔化しているものの骨折による痛みもあって、
演算速度が若干鈍っている。速度は時速二百キロまで下落していた

が、それでも徒歩よりは断然速い。

目指すは木山の自宅。

ポケットの中で携帯電話がメロディを鳴らしているが、暴徒鎮圧の応援要請だろうと勝手に断定しているのか、電話に出る気はなさそうだった。美琴は白井のポケットに片手を突っ込んだ。白井がひあんつ、と気色の悪い声を上げ、抱きしめている美琴に潤んだ瞳を向ける。何となく嫌な予感がするが、構っている暇はない。

「初春さん。どうしたの？」

『えっ　と、木山先生が先ほど……アンチスキル警備員と　交戦し　た模様です』

「黒子、ストップ」

途切れ途切れになるのは『空間移動』によって、電波の受信位置が次々と変わるからである。

『私たちとは別の線で捜査していたみたいで、いえ、そんなこととはどうでもいいです。木山先生が能力開発を受けたという記録なんてないはずなんです。でも、これは明らかに……複数の能力を使っています！』

「まさか、それこそありえないわよ！　木山が『デュアルスキル多重能力者』だったの！？」

美琴の唇に狙いを定め、白井の顔面が前進する。

進撃せよ（ゴーアヘッド）。正気を失った白井に気付いた美琴は、携帯電話を握り締めながら電撃を飛ばした。

「ひぎやああ！」

「アンタつてのはもう！　時と場合ぐらい考えなさいよ！」

漫画っぽい演出で黒こげになりながら、目をバツ印にする白井だったが、ギャグ補正であつと言う間に復活する。

「それではお姉さま！　時と場合さえよければ私の唇を受け入れて下さるんですねっ！？」

「いちいち言葉の揚げ足を取るなつての。……あ」

美琴の電撃によって、携帯電話が沈黙していた。

もしもーし と声をかけるが、もちろん初春の声は返ってこない。

「ご心配なく。弁償しなくても結構ですわよ。身体で払ってくれれば」

「……………」

「お姉さま？ いいんですかー、本当に熱いベーターを交わしちゃいますよー」

寝言をほざいている白井をスルーし、美琴は頭上の高速車線を見上げた。

咄嗟に電柱を蹴り上げる。革靴と鉄筋に磁力を付加し、磁界による反発すら利用しながら三回のジャンプで電柱の頂上まで登り詰めると、そこから道路を見下ろした。

瞬間、爆発。

「……………嘘でしょ」

意識せず啞然とした声が出てしまう。

無数の警備員が死屍累々と横たわっていた。周囲の建造物は軒並み荒廃し、警備員が移動に使っていた車両が逆向きに引っ繰り返っている。

「御坂美琴。学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）か」

「……………これは、アンタが」

「私のネットワークに超能力者は含まれていないが、流石の君も私のような相手と戦ったことはあるまい」

美琴はゴクリと生唾をのみ込んだ。

「君に万人の頭脳を総べる私を、止められるかな？」

白衣のポケットに両手をつっ込み、木山春生が振り返った。

いかなる能力の影響か、真っ赤に変色している瞳を向けて、木山の能力が実行される。

瞬間、周囲の大気が爆発した。

ブルドーザーがカブトムシをなぎ払う。

もうかれこれ十体目に突入しているのだが、まだ出てくる出てくる。一匹見付けたら三十匹はいるあの生物に見えてくるのも仕方がないだろう。

「で、どうするんだ？ 逃げてるだけでは根本的な解決にはならないみたいだが」

「あの虫どもを操作している張本人を叩くしかないわね。……と言うか、成り行きでつい助けてしまったけれど、私にはそこまでしてやる義理なんてないのよね」

ズガンツ とカブトムシをブレードですり潰しながら、ドレスの少女が面倒臭そうに言う。

実際問題、どうして助けて貰ったのか、宇都宮もよくわかっていない。少女自身もそのようだった。おそらくは学園都市の組織の人だから、カブトムシの操縦者を潰せば少女に評価ポイントが入るのだろうが、わざわざ宇都宮に手を貸すような理由はどこにもない。惚れたか？ と冗談で呟いた瞬間、車内に銃声が轟いた。

頭の真横を銃弾が通り抜け、防弾ガラスに蜘蛛の巣状の亀裂が生じ、跳弾がシートに突き刺さる。

「私、そう言う下品な話は好きじゃないの」

「洒落になんねえっての！ お前は好き嫌いでも人を殺すのかよ！」
「あら、争いと言うものは根本的には好悪によって行われているんじゃないかしら？ 子どものままごとのような喧嘩も、国家間の紛争も、結局はどちらも同じものよ。トレーディングカードを奪い合う子どもと、資源をめぐって争う国家。利害関係とは言っけれど、相手が自分の意のままに従ってくれるなら喧嘩にはならないわ。主

張が相反するから相手のことが嫌いになって、戦争が勃発するのよ」
「照れ隠しで饒舌になった」と。ツンデレですねわかります」

ジャキ　と銃口を米神に押し付けられる。

コイツは何を聞いていたのかと、ドレスの少女は怒りに震えていた。

「だが残念だったな。俺にはもう彼女候補がいるのだよ、ワトスン君」

「……可哀想に。現実と妄想の区別が付かなくなってきているのね」

なぜか哀れみの視線を向けられ、釈然としない気持ちになる宇都宮。その視線が宇都宮の左腕に向けられていることに気付き、何気なく見下ろしてみると、半日前に購入したゲームソフトが握り締められていた。『妹学園5』。

宇都宮は己の行動に戦慄する。蛇穴とバトルしていた時には流石に手放していたが、まさか無意識の内に回収していたのか。そう言えば、カブトムシ戦においてもなぜか左手は使わなかったが、こんな裏話があったとは。

「我ながら恐るべし。ついでにグツジョブ」

なぜか誇らしげな顔をする宇都宮だったが、急にその顔が歪められた。頭痛の波が急激に大きくなったのである。他人の脳波を押し付けられた痛みではない。それは直感だった。肥大化したネットワークが、強引に宇都宮の頭脳を取り込もうとしているのだ。

「木山がネットワークを締め上げているのか？ いや、まさか……」

根本的な疑問を忘れていた。なぜ木山はこのようなものを用意したのか、思考をまとめた宇都宮は今さらながら歯がみする。こんな出鱈目があったたまるかと叫び出したいところだった。エサをばらまいて獲物が肥えるのを待つて、ほどよく太ったところで回収したのだ。

となると、木山はもう一般人ではない。

「あの女、何をするつもりだ？」

「妄想に浸っているところを悪いんだけど、妹ゲーのことは後回し

にしてくれないかしら?」

「……あん?」

何時の間にか、およそ十体のカブトムシがブルドーザーを取り囲んでいた。

「前言撤回。やっぱり免許証は必要ね」

「お前っ、このへたっぴ! ドリフトで切り抜けるとかできねえのかよ!」

「普通車ならゲームでやったことがあるけれど、この車はブルドーザーなのよね」

「ゲームで……ってふざけんなよ! ああもう!」

時速八十キロの突撃が、並んだ二体のカブトムシによって受け止められている。続いて停車した車体に向けて、タンクステン鋼の弾丸が発車された。五秒間で二千発を超える銃撃が繰り出され、防弾ガラスが砕け散る。ドレスの少女は顔をしかめて身を屈め、ドアの装甲を盾にしているが、何時まで保つかわからない。

「っ、貸せ!」

「あっ、ちよっと!」

宇都宮はドレスの少女の左足を押し退け、クラッチペダルを踏み込むと、右手を少女の手に重ねてシフトレバーを押し戻す。頼むからエンストしてくれるなよっ と祈りながら減速チェンジでローまで戻すと、トルクがはね上がってカブトムシを押し出し始めた。

「あなた、免許は持ってないのよね!？」

「お前が言ってたじゃないか。必要なのはカードじゃない。技術なんだよ!」

クラッチを切って、少女と目配せを交わす。

少女は宇都宮の意図を明確にくみ取り、アクセルを踏み込んだ。

ガリガリガリッ とタイヤが空転するが、それと同時にカブトムシが押され始め、やがて突破に成功する。

「もうマジ勘弁してくれ」

「……まあ、いいけどね。何時まで手を握ってるの?」

ドレスの少女がそっぽを向いていた。

ああ、悪い　と呆気なく手を退ける宇都宮に、鋭い視線が突き刺さる。自分の行動の意味がまったくわかっていない鈍感野郎に、精神系の能力者であり男女間の機微においては百戦錬磨のつもりである少女でも、流石にトサカに來たようである。宇都宮の弁慶の泣き所を蹴り飛ばし、ギアをトップまで入れてブルドーザーを疾走させた。

「いつてえ！　何すんだ、よ……」

宇都宮の怒りの声が尻すぼみになる。

視線の先で、アルミ缶が光を放っていた。

美琴と木山が戦っている。

美琴の電撃が各個に打ち落とす中で、木山春生が隠していたアルミ缶を放り投げている。

口を開けたが声が出て来なかった。もう、間に合わない。

『シンクロトン量子変速』が発動し、加速した重力子が美琴に叩き付けられる。瞬間、宇都宮の脳内で、カチリと撃鉄が落とされる音がした。

十

短髪の少女が足下で倒れていた。少女の虚ろな目が宇都宮を見ると、安心したように閉じられた。

ツインタールの少女は完全に気を失っていた。外傷は特に見当たらない。

宇都宮は二人の少女を肩に担ぎ上げて、ブルドーザーの屋根に押し上げる。ドレスの少女に視線を送ると、彼女はもう好きにしろとばかりに溜息を吐いていた。

「すまない、待たせたか」

「なに、待たされるのは慣れてる。しかし女を待たせるとは、少

年も罪な男だな」

「寝めてるのか貶しているのか……まあいいや。じゃ、そろそろ始めるか」

白衣のポケットに手を突っ込んで、木山は眉一つ動かしてみせなかった。彼女の頭の中ではもう結果が出ているからだ。レベル4の宇都宮では、どうあがいても木山には敵わない。レベル5の美琴を打破した今、その仮説はこれ以上ないほど補強されている。

背後に十体のカブトムシが舞い降りる。

宇都宮は振り向きもせず、腕を一振りする。周囲に約二百発の炎の弾丸が出現。それぞれが六千度オーバーの必殺の威力を秘めた矢玉は、指をパチンと弾いたと同時に一斉に襲いかかり、カブトムシのタングステンやカーボンの装甲を障子に穴を開けるように貫いた。『幻想御手』による強化か、『磁気単極子』によるブーストか、もはや宇都宮自身もよくわからない。

木山がわずかに眉をひそめる。

「そうか。あれを使ったのか」

申し訳なさそうな顔をされるが、それは筋違いだ。使わざるを得なくなったから使ったと言うだけで、決断をしたのも宇都宮である。責任は宇都宮一人に帰結する。さらに言うなら、同情を向けられるのはひどく心外だった。哀れみとは弱者に向けられるものである。

宇都宮は瞬時に一万度の炎の剣を形成。

三発の炎弾を時間差で打ち込みながら、宇都宮は木山の懐に侵入しようとする。

「だが、無駄だ。それでも今の私には遠く及ばない」

周囲の地面が隆起して足場が不安定になり、バランスを崩して転倒しそうになったところを、念動力で操られた瓦礫が飛来する。咄嗟に炎剣の熱量を解放。一万度の炎が前方に拡散して瓦礫を蒸発させた。だが、木山は周囲の物質から液体を抽出し、それを炎に浴びせかける。

「四酸化塩素。反応遅延剤の一種だ」

IUPAC名ではテトラクロロメタン。炭素一つに塩素四つが結合したもので、かつては消火剤や冷却剤などに用いられていたが、その毒性や発癌性から使用されなくなった物質だ。辺りに異様な塩素臭が漂う中、新たに炎剣を作り出した宇都宮だったが、その隙を見逃す木山ではない。

宇都宮が汗を垂らした直後、周囲の大气が一気に爆発する。

「なっ、馬鹿な!？」

衝撃に吹き飛ばされながら何が起こったのか必死に考えを巡らせようやく一つの結論を弾き出した。木山は大气中の水蒸気を操ったのである。炎剣を水蒸気で包み込み、一度に凝縮させて、界面接触型の水蒸気爆発を起こしたのだ。確かに宇都宮が迂闊だったが、一つでも気を抜くことができない木山の能力が異常すぎる。

「『バイロキネシス発火能力』は学園都市では研究が進んでいる能力だ」

木山は手の平を宇都宮に向けた。

同時に宇都宮の周りに液状の槍が出現する。四酸化塩素で作られた槍だった。

「火を消すためには、酸素の供給を絶つ、水や冷気を吹き込んで素早く熱を奪う、反応遅延剤を使用するなど、様々な方法が研究されている。君の能力は中学生の課題にされるほどメジャーな能力だ。そんなものを見せられても、今さら面白みも何もない。『磁気単極子』で強化していても、攻撃手段がそれだけならば、恐るに足りるものではないな」

「……なら、面白くしてやるよ」

足を引きずりながら立ち上がる宇都宮に、木山が手を握り潰す。

迫り来る無数の槍の穂先を眺め　宇都宮は小さく笑った。

「フロギストン説つてものを聞いたことはあるか？」

刹那、宇都宮の身体から炎が吹き出し、槍のすべてを燃やし尽くす。炎を通り抜けて宇都宮を貫ぬくはずだった四酸化塩素の槍は、その途中で揮発し切ってしまう。

それだけではない。

木山に迎撃された炎の弾丸は、火の粉として地面に散らばっていた。

それが、一気に息を吹き返したかのごとく灼熱の火柱と化したのである。

「燃烧反応を遅延させて消化したとか言っていたが、笑わせてくれるよな。俺の炎を、そこらの『バイオロキネシスト発火能力者』と一緒にするなよ」

「だがそれでは」

「炎の認識が間違ってるんだよ、木山春生。俺の火を消したのも反応遅延剤の効果だけではなく、同時に冷気も吹き込んでいたんだよな。消化活動は炎の弱点を突くためにあらゆる手段が用いられる。

燃え広がった炎ってのはそう簡単には消えないものなんだよ。そこまでわかっているなら、あとはもうわかるだろ」

『フロキストン燃素だど？ ……そんなものがあっていいのか？』

「認めるよ、木山春生。さもないと、火傷だけでは済まなくなるぜ」
『発火能力者』の炎は可燃物のないところから作り出され、酸素の供給を断たれても燃え続けることがある。学者たちはある種の爆弾と同様に、炎の中に酸素が含まれているのだと解釈していたが、それが百パーセント正しいと証明されたわけではない。

ある学説がある。

十八世紀の始めに唱えられ、百年後に否定された説において、炎とは燃素によって燃えるというものがあつた。燃烧とは燃素の放出である。と言うのである。酸素が発見されてから次第に下火になつた学説だが、もし『発火能力者』、いや、宇都宮がこの燃素と言ふものを自在に操っているとすれば。

「馬鹿な。我々の物理法則に則らない燃烧現象。それが、君の炎だど？」

否定された法則に則つた燃烧。そんなものは科学とは言えないはずである。

だが、宇都宮の“自分だけの現実”がパーソナルリアリティがそうなっているのだから仕方がない。そもそも燃素と言ふものも『磁気単極子』でブーストし

てから知覚できるようになったのである。使用状況を限定された強化モードと言ったところだろう。酸素の供給を絶たれても鎮火しない。冷却されたとしても宇都宮が熱を送り続ければ問題なく、燃焼反応を遅延させる物質を浴びせても、そもそも燃焼の反応が現在の科学的解釈から乖離しており、フロギストン濃度が減少するわけではないので、炎は変わらず燃え続ける。

「だが、それだけでは私を超えることはできない。所詮はただの小細工だ」

瓦礫、氷の矢、土の槍、衝撃波、風の刃、あらゆる現象が宇都宮に襲いかかる。

質量を持った攻撃のことごとくを燃やし尽くすが、風の刃だけは止められない。燃焼によって酸素を抜き取るが、大気中に含まれる酸素はようやく二割に届くといったところだ。八割の威力を保ったまま風の刃はバツサリと宇都宮を袈裟懸けに切り裂いた。

ボタリ、ボタリ　と血液が地面にこぼれ落ちる。

「たしかに燃素なんてものはただの小細工だ。俺の武器はそんなものではないからな」

咄嗟に身体をずらしたため、深手になっているのは肩口だけだった。半ばまで抉られたピンク色の筋肉が露出し、パツクリと開いた傷からは血圧に任せて血が噴き出している。

それでも、宇都宮は一步も下がらなかった。

「アンタが一人の頭脳を総べると言うなら、俺は一万度の高温でそれを迎え撃つてやる！」

隆起した地面を溶解させて前進する。

「くっ、だが、私はここで退くわけにはいかない！　止まるわけにはいかないんだ！」

「何を抱えてるのが、俺にはわからないけどよ、こっちだって譲れないものを賭けているんだ！」

気絶するレベルの衝撃波が脇腹に突き刺さる。

だが、宇都宮は眉一つ動かさない。『磁気単極子』によって脳が

圧迫され、痛覚が押し退けられているようだ。

木山がレーザー状のエネルギー棒を捻り出し、宇都宮の左太股に突き刺した。

「これで熱量操作の射程範囲内だ」

肩口からドバドバと血を垂れ流しながら宣言する宇都宮。

右腕を向けて集中し、あとは木山の身体を構成している物質を、分子運動操作で無理やり熱するだけだった。

だが、あと一步のところで意識が黒く塗り潰される。

「さあ、ネットワークを……解放して、貰う……ぞ……」

血を抜きすぎた。痛覚が麻痺していた宇都宮は、そのことに気付けなかった。

視界が真っ黒になり、的を絞れなくなる。

罵声を吐きながら前のめりに倒れ、宇都宮の意識はシャットダウンした。

十

単位のために教員免許を取ってしまったため、余計な仕事を押し付けられてしまった。学園都市の教育システムを利用して捨てられた子どもたち、『置き去り（チャイルドエラー）』。身よりのない子どもたちの担任になってしまい、木山春生は途方に暮れていた。厄介なことになってしまったが、実験が成功するまでの辛抱だと割り切った。

子どもは嫌いだ。

騒がしいし、デリカシーがないし、失礼だし、悪戯するし、論理的じゃないし、なれなれしいし。

……すぐになつくし。

「センサー、私でも頑張ったら大能力者（レベル4）とか超能力者

(レベル5)とかになれるのかな？」

「今の段階では何とも言えんな。生まれ持った資質にもよるが、今後の努力次第と言ったところか。高レベル能力者に憧れがあるのか？」

「んー、それもあるけど」

教え子の女の子が言う。

「私は学園都市に育てて貰ってるから、この街の役に立てるようになりたいなーって」

木山は声を詰まらせた。親に捨てられて、学園都市からの雀の涙のような庇護しか受けないのに、そんな考えができるのか。汚れを知らず、人を誹ることを知らない。これが子ども。まるで科学の実験で新しい発見をした時のような気分だった。

半年後。

A I M 拡散力場制御実験。長い期間をかけて何度も計算を繰り返してきた。

一年も教師をやると言う弊害はあったが、これで終わり。

これでおしまいだ。

「被験者のドーパミン値低下中！ 抗コリン剤を投与しても効果がありません！」

「広範囲熱傷による低容量性ショックが！」

「乳酸リンゲル液、輸液急げ！」

「無理です、これ以上は！」

ブルドーザーの天井で美琴が目を覚ました時、どう言うわけか宇都宮と木山が戦っていた。

爆発でぶっ飛ばされてボロボロになっている宇都宮を見た時、美琴はやはりそうなるだろうと溜息を吐く。レベル5の美琴が敵わな

かったのだ。宇都宮では相手になるわけがない。美琴が意識を取り戻すまで時間稼ぎをしてくれたのは感謝してやらないでもないが。「いや、そうじゃなくて、さっきの夢は……木山の過去？」

美琴は考え込んだ。木山には教師をやっていた時代があったらしいが、夢に出てきた子どもたちは、木山の教え子なのだろうか。

とすると、木山の目的は、もしかしたら

「あ、うっ、お姉さま、もっと優しく。そんなところ、駄目ですよ」
「……………黒子、アンタって子は」

思わず隣で寝ていた白井に電撃を浴びせなくなる美琴だったが、寸前のところで思い止まる。たしか白井は『幻想御手』をアンインストールするソフトを木山から受け取っていたはずだ。美琴の電撃でそれをぶっ壊してしまうと、『幻想御手』を止める手立てがなくなってしまう。

そう言う意味では宇都宮の努力はすべて無駄だったのだが、美琴や白井にそんなことがわかるわけがない。風紀委員として木山を止めるために参戦したのだから都合よく解釈していた。

とりあえず二ヘラと気色の悪い笑みを浮かべている白井をぶん殴っておく。

「ぐふえっ、お、お姉さま!？」

「おはよう、黒子。何か申し開きはあるかしら？」

ニツコリと不自然な笑みを浮かべる美琴に、白井が表情を引きつらせる。

恐怖に萎縮する白井に拳骨を振り下ろそうとする美琴だったが、辺りに火柱が立ち上り、振り上げた手を停止させる。

そこには全身をボロボロに切り刻まれても前進するのを止めない馬鹿がいて、木山がドン引きしていた。

「あれは、宇都宮さん？」

「あの馬鹿、自分の命を盾にしてるわね……………」

木山には殺す気まではなく、言うなれば手加減されているのだが、宇都宮はまったく気が付いていない。

前々からデリカシーのない男だとは思っていたが、ここまで酷かったとは。

「宇都宮さん！」

白井が慌てて飛び出そうとしているが、美琴は回し蹴りでそれを押し止めた。悶絶する白井だったが、彼女ならきつとギャグ補正で立ち上がったってくれるだろう。気遣いゼロの“お姉さま”に白井が泣きそうな顔をするが、美琴はまったく気を遣わず、ブルドーザーから飛び降りた。

「アンタは『幻想御手』をアンインストールするプログラムを試しておいて。こっちは私が何とかするから」

「でも、宇都宮さんがっ！」

宇都宮がぶっ倒れていた。貧血で気を失ったのだろう。このまま放っておくと危ないかもしれない。

だが、今の白井に宇都宮を抱えて移動するだけの集中力が残っていないとは思えない。さっさと事件を解決して、救急車で運んでやらなければ、宇都宮はあの世にレッツゴーと言うわけだ。

「ああもっつ、あのバカっ！」

罵りながら宇都宮に駆け寄り、三河侍のごとく前のめりにぶっ倒れていた宇都宮を引つ繰り返すと、白目を剥いて痙攣していた。気持ち悪すぎて思わず手を離しそうになる美琴を、寸前のところで木山が押し止める。この男をここまで追い詰めていた張本人が何様のつもりだと目で咎めると。

「頭を揺らすな。この男の命を助けたくないなら話は別だが」

「ちよつとそれ、どう言うわけよ！」

木山は答えずポケットから取り出したループで宇都宮の瞳孔を覗き込む。

死亡確認しているようにしか見えぬ、思わず美琴は顔を青ざめさせる。

「完全に安定している……か。流石は成功例だな。もっとも、あと十分も“使っていれば”どうなったかわからないが」

「アンタ、何言ってるの？」

「知らないと言うことは、知る必要がないと言うことだ」

「そんなの勝手に決め付けないでよ。アイツがどうしたってのよ！？」

煙に巻くような言い方に、美琴はさらに問い詰めようとする。

だが、木山がそれより先に言葉を継いだ。

「いいのか？ ……見たのだろう」

「見たって、何よ」

一瞬、何の話だと訝かしむ美琴だったが即座に理解する。

「あの実験の正体は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』。能力者のAIM拡散力場を刺激して、暴走の条件を探るものだったんだ。…

…あの子たちを、使い捨てのモルモットにしてね」

「人体……実験……？ だったら、それこそ警備員に……」

「23回」

木山春生の真つ赤な瞳が美琴を射貫く。それだけで、二の句が次げなくなった。

「あの子たちの回復手段を探るための、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行うために、『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』の使用を申請して却下された回数だ。統括理事会がグルなんだ。警備員が動くわけがない」

「でも、それじゃ、アンタがやっていることも同じになっちゃう…

…」

「君に何がわかる」

美琴の正義感が、崩れていく。

「あんな悲劇は二度と繰り返させはしない。そのためだったら私は何だってする」

元々吹けば飛ぶような木っ端だった美琴のそれに、木山の信念を打倒できる力はなかった。

「この街のすべてを敵に回しても、止まるわけにはいかないんだ！」

美琴は口元を押えた。今にも嘔吐しそうな気分だった。

一万人を昏睡させて、力を手に入れた悪人だと思っていた。だが、木山はそんな単純な人物ではなかった。

「で、でも、私は……アンタを止めないと……」

本当にそれが正しい行為なのか、美琴にはわからない。

木山の目的を阻止してしまうと、植物状態の子どもたちが助からなくなる。それでいいのかと何度も自問自答するが答えなんて出て来なかった。こんな時、ツンツン頭のアイツなら何と言っのだろう。駄目だ。他人に頼ってしまうなんて、私らしくない。美琴は首を横に振った。

もついい。

面倒臭いことは捕まえてから考える。

「ぐっ、あゝあゝあゝあゝあゝ……！」

「……って、ちょっとアンタ！」

などと美琴が決意していると、突然木山が絶叫し出した。

「ネットワークの暴走！？ いや、これは、AIM拡散力場の……」

ズブリ と木山の頭から“胎児”が出現した。

母親の胎内で丸くなっているものをそのまま取り出したような、血管が浮き出たグロテスクな外見に、美琴は頬を引きつらせた。

十

腸がはみ出していたはずなのだが、腹を見下ろしてみると綺麗に包帯が巻き付けられている。

『冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）』と言ったか。長期入院の原因が全身の複雑骨折だけとは、いい腕を持っているようだ。だが、宇都宮には感謝の念などこれっぽっちもない。余計なことをしてくれ

たものだとしか思えなかった。

宇都宮が死ねば計画は中断せざるを得なくなり、小町仄科も解放される。そう言う筋書きだったのだが、どこの誰が書き換えやがったのか。

胸ポケットの辺りを探って舌打ちする。何も入っていない。

最初は『サークル』の連中に吸わなければぶん殴ると脅されて吸い始めた煙草だったが、今ではすっかり病み付きになっていた。

宇都宮は病院のベッドに寝転がった。

点滴で輸血しているようだが、これを引っこ抜けばあの世とやらに行けるのだろうか。

「自殺するならドナー登録を超お勧めしておきますが」

「まあ、あれだ。さっきまで死ぬつもりだったんだが、その場の勢いがないとやりにくいものだよな」

「超へタレですね。言い訳にしても、もうちょっとマシな言い方があると思うんですけど」

「うるせえ」

どうせ看護師が気付いて自殺は失敗するなどと考えている。

案外、心が弱つちい宇都宮だった。

「んで、お前は誰だよ」

「そこで私の名前を聞きますか。あまりの超可憐な美少女っぷりにお近づきになりたくなったとか？」

「やっぱいいや。興味ねえ」

そつぽを向いて、寝そべりながら窓の景色を楽しみ始める宇都宮だったが、頭の横にゴオツと轟音がして拳が突き刺さる。

「絹旗最愛です。忘れたら超折檻ですからねっ」

変な少女だった。

見てくれから判断するに、おそらく中学生だろう。ちっさいなあと言つのが第一印象で、やっぱり少女のことなんてどうでもいと思つていた。どんな髪型をしていたのかも、翌朝になると忘れていた。

「……ところで、何て名前だったっけ？」

もちろん翌日の夕方、学校帰りに宇都宮の病室を訪れた少女に折檻されるのだが。

不思議と少女はほとんど毎日訊ねてきた。死にかけていた宇都宮の発見者で命の恩人で、『アイテム』という学園都市の非公式組織の一つに属している。実験の関係者なのか、宇都宮を抱き込もうとしているのか、疑問ではあったがわざわざ問い質すほどのことだとは思わなかった。

用事などなくても少女はやってきた。

レンタルビデオ屋で借りてきたディスクが持ち込まれ、B級からC級まで、タイトル名すら聞いたことがない映画が病院の個室で上映される。

そんな日々を送り、気付けば一ヶ月が経っていた。

「超つまんねー」

「俺はそうでもないけどな。ほら、あと十分でこいつらエッチするぜ」

「今からズボンにテントを作ってるんじゃないですよ！五分以内に女は死にますから、行き場のなくなつた欲望はトイレで超爆発させて下さいねと言うかアメリカンサイズでびっくり！もしかして私今すんごい超ピンチですか!？」

「私の愛馬は凶暴です……って言うてみたかったり」

そんなこんなで二ヶ月後。無事にすべての骨が引っ付いて退院となった。

ロビーで看護婦さんから祝われ「もう戻って来るんじゃないよ」と婦長に背中を叩かれ。

やはり今日も少女はやって来ていた。

平日なのだが学校はサボリと言うことが。

「退院おめでとございます、宇都宮」

「……まあ、ありがとと言うてやらなくもない」

「何ですかそれ。超納得いかないですけど」

絹旗がぶくつと頬を膨らませる。

怒りながら宇都宮を見上げて。

「それで、死にたいなんて気持ちはちゃんと無くなりしたか？」

そんなことを言いやがった。

「生きて下さいね。せつかく拾った命なんですから、超大事に使いましよう。宇都宮は自分のことが超嫌いかもしれませんが、みんながみんな、宇都宮のことを嫌ってるわけではないですよ」

「お前……」

宇都宮は軽口も挟めない。

「生きて下さい。みんなのために。……そして、私のために」

最初から、見透かされていたわけだ。敵わないと痛烈に思わされる。

宇都宮はボストンバッグを背負いあげた。病み上がりの身体にずつしりとした重みがのし掛かるが、空元気で表情を取り繕い、不敵に笑いかける。

「勘違いしてんじゃねえよ。俺は自分のために生きてるんだ。他人のことなんて構ってられるか」

中学生時代に訪れる特有の精神状態……だったのだろう。

孤独かつこいい。自虐きもちいい。

そんな奴に、少女の純真な気遣いを受け止める度量はない。

意識が覚醒する。

『磁気単極子』が停止した今、宇都宮の頭脳は『幻想御手』のネットワークに取り込まれているはずなのだが、どう言うわけか『磁気単極子』が未だに回転を続けている。一瞬こいつが叩き起こしてくれたのかと錯覚したが、そんなわけはあるまい。粒子一粒に意識が宿るなんて、どこのお伽噺だ。

「……っ、血が抜けすぎだっの」

痛覚が麻痺しているため身体感覚は覚束なかったが、視界の揺れ具合から立ち眩みが起こっているのだと判断する。

上体を起こすと、視界に巨大な胎児が映っていた。

バケモノ。そんな言葉が真っ先に浮かぶ。

「すごいな、まさかあんなものだったとは。学会で発表すれば表彰ものだ」

木山春生だった。

彼女は狂ったように高笑いしていた。ズボンの後ろに挟んでいた拳銃を取り出し、銃口を米神に押し付ける。

「死ぬつもりか？」

「ああ。もはやネットワークは私の手を離れ、あの子たちを取り戻すことも、回復させることもできなくなってしまった。おしまいだよ」

「何年も我慢してきたんだよな。にしては、随分早く諦めるんだな」
「できることはすべてやった。それでも駄目だったんだ」

だから学者は嫌いだ。

自分の中で勝手に結論を出して、周りを巻き込みやがる。ここまでやったんだから、過激な手段なら統括理事会をぶっ潰すとか、穏健な手段なら親船最中を抱き込むとか、色々できることがあるだろうに。

「そうだな。もしこれから科学技術が発達して、私の生徒が目覚めますことがあれば」

「生徒って誰だよ」

「すまなかつた」と。こう伝えて欲しい」

人の話をまったく聞いていない。

前後の話の内容からおおよその事情を察することはできるが、厄介なことを頼んでくれたものだ。

宇都宮は溜息を吐いた。

「そんな面倒なことを俺なんか押し付けるなよ。どうせならテメ

エが伝えればいいだろ？」

「……だが、私は」

「アンタのことはどうにも嫌いになれなくてな。死んで欲しくないつてのが俺の本音だ。ついでに言うなら、向こうで頑張っている中学生に、間接的な人殺しの罪悪感を押し付けるのかよ」

「だが私は、取り返しの付かないことをしたんだ」

「それでも、俺はアンタに死んで欲しくない。事情なんていまいちわからないけどな、アンタがそこまでしなればならないことをやっただって、どこの誰が決めたんだよ。全部テメエで考えて、テメエで結論を出したんだろうが。まだ伝えていない言葉もあるんだろ。それも諦めてしまふのか？」

「……私、は」

「“死”なんて誰も望んでないんだ」

驚いた顔をする木山に、宇都宮は泣きそうな顔をして言う。

「だから生きてくれ。アンタの生徒のために。アイツらのために。そして、俺のために」

木山の中で時計が止まったように、彼女から動きが消えた。

彼女に悪意はなかった。だからと言って許されるような話ではないが、宇都宮はそんな木山のことが嫌いになれない。結局はそれだけのことだった。裏の世界でしくじったのなら死ぬしかないのだから、こっちは表側だ。そんな世界の法則なんて知ったことではない。

「きつついなあ。だが、脳味噌が動き続ける限り、どんなものでも焼き払ってやるさ」

歯を食い縛りながら立ち上がった。

美琴が胎児と戦っている。足手まといになるだけかもしれないが、黙って観戦しているのは宇都宮の性に合わなかった。

光弾が連続して発射される。横飛びで転がるように回避する美琴だったが、進路方向で岩石の塊が落下しようとしていた。稲妻で吹き飛ばそうかと考えるが、残骸を避けている間にどうしても移動速度が鈍ってしまう。岩石を蹴り上げて乗り越えていると、背後から迫る爆発が追いつきそうだった。

「世話かけやがって。ほらよ　　と」

ゴオツ　と岩石が刹那の間だけ炎に包まれ、火がなくなった時一緒に岩石も消え失せていた。襟首を掴まれた美琴は、立て続けに襲いかかる炎から逃れるために、すぐに解放される。胎児の円周上から射撃戦で様子を見る美琴と、真っ直ぐに前進する宇都宮、二人の移動が垂直に交わった。目配せは一瞬。振り下ろされた尻尾のような物体を、宇都宮が焼き払い、その隙に美琴がコインを弾く。音速の三倍まで加速した親指サイズの金属が、胎児の上半身を吹き飛ばした。

「やったか？　……って台詞はダメフラグだったよな」

「縁起でもないことを言わないでよ。まあ、これだけやれば大丈夫、でしょ……」

ビル一つを容易く崩壊させるほどのエネルギーをぶちこまれた胎児は、しかし動きを止めたのは十秒に満たなかった。ゴボリと沸騰した肉の断面が泡立ち、破壊された組織を再生させる。

「うっわー、まさしくバケモノだ」

「激しく同意するわ。……と言うか、大量に出血していたアンタが、どうしてこんなところにいるのよ」

「ピンチになって秘められていた力が覚醒したんだ」

「あからさまな大嘘はどうでもいいから。病院に行った方がいいんじゃないの？」

ついでに頭の病院も勧めておく。

「本気でヤバそうならそうするよ　　と」

なぎ払われた触手を、宇都宮は壁状に広げた炎で受け止める。ジユツ　と音がして触手の先っぽが消え失せたものの、連続して放たれた光の塊を見て、宇都宮は顔をしかめた。相手が大型だからか、学園都市の高レベル能力者よりも狙いが甘い。

だが、戦い方を“学習”すればどうなるか、あまり想像しにくかった。

胎児が一人のポテンシャルだけで戦っており、美琴を飛び回る羽虫としか認識していなければ、これまでの攻防でとくに致命傷を貰っていたところだろう。目標を原子炉から人間に変えていれば、宇都宮などは瞬殺されているはずだ。

「再生能力が厄介だが、そもそもA I M拡散力場の塊に肉体なんてあるのか？　細胞組織をすべて炭化させれば止まるってもものでもなさそうだが」

「そんな　ことっ、私に、わかるわけがないでしょ！」

「ああくそっ、とりあえず焼く！　すべからく焼く！　ことごとく焼く！　触手はエロゲーに帰りやがれ！」

無茶苦茶なことを叫びながら宇都宮が大量の炎の弾丸を生成、一斉に触手にぶつけた。

この男も自分の力を弁えており、美琴に本体を、それ以外の煩わしいものを自分が引き受けるとでも考えているようだ。そんな殊勝な態度に、美琴は余裕があったなら褒めてやったのと思うが、突然横殴りのベクトルの塊をぶつけられ、宇都宮の身体がぶっ飛ばされた。

「宇都宮！？」

美琴は咄嗟に身体を捻りながら飛び付き、宇都宮を受け止める。

「すまん、助かった」

「しっかりしなさいよ！　アンタが死んだら……えーっと、まあ何の問題もないか」

「少しは悲しめよ！ 仕舞いには泣くぞ！」

冗談を交わしながら、再び二手に分かれた。

先ほどの攻撃は念動力だろう。見えやすい攻撃を囿にして見えな
い攻撃で奇襲するとは、やはり段々と学習している。

電と炎を繰り返して浴びせかける二人だったが、段々と息が切れ
始める。中学生の女の子の体力と、ニコチン中毒者の心肺機能では、
何時までも走り続けていられるものではない。

そして、美琴は足をすくわれた。

触手に引っかけられて左足を捕まえられる。

「触手に捕まった美少女……訂正。別に美少女ってほどでもないか。
絵にならん」

「アンタ、後で覚悟しておきなさいよ……！」

美琴を捕まえていた触手は半ばから炎で切断されていたが、再生
して切断した箇所もすぐにくっついてしまうだろう。

そう思っていたのだが、何か様子がおかしい。急に胎児が動かな
くなったのである。

再生能力が切れた？

「何かわからないけどチャンスみたいね」

反撃の狼煙を上げるのは今しかなさそうだ。

美琴はここぞとばかりに触手を電線にして高圧電流を流し込んだ。
炭化して黒ずんだ色になり、地面に落下した胎児に、今度こそやっ
たと二人は安堵の溜息を吐こうとする。

「気を抜くな！ まだ終わっていない！」

アクティブソナーの要領で美琴の周囲に放出されている電磁波が
反射される。

美琴が宇都宮を押し倒した直後、胎児に繋がっている触手が動き
出し、地面に叩き付けられた。

「助けてくれたのは有り難いが、どうにも複雑だな。完全に足手ま
といじゃないか」

「黒子のサポートには及ばないけど、即席コンビにしてはまだマシ

でしょ。……それで、何であれがまだ動いてるの？」

不慮を叱ったのは、美琴の電流を喰らって満身創痍になっていたはずの木山春生だった。

ボロボロに破けたストッキングに宇都宮がエロい目を向けるが、とりあえず拳骨を振り下ろして黙らせておく。放っておけばまた軽口を叩いていただろう。今はそんなことをやっている場合ではない。「あれはAIM拡散力場の集合体だ。普通の生物の常識は通用しない。体表にいくらダメージを与えても本体には通用しないんだ」

「ちょ、そんなのどうしろつてのよ！」

「力場の塊を自立させている核のようなものがあるはずだ。それを破壊できれば」

再生能力が切られた胎児は、地面に蹲ってもがき苦しんでいた。文字化けしたような理解できない言語を念話でまき散らしながら、何かを主張しているようだった。能力者の挫折や苦悩、強烈な自己主張のような悲痛な叫び声である。

「じゃ、全部炭化させてみるか。やってりゃ核が露出するだろ」

宇都宮が動けなくなった胎児に両手を向ける。

生み出された灼熱の波が、前方の大気を蹂躪しながら胎児を包み込んだ。

「あれは、私が操っていた四酸化水素！」

「関係ないな。全部焼き払うって言っただろ」

胎児の全身から液体が噴き出すが、宇都宮の炎は液体の膜を貫通。胎児の体組織をことごとく蹂躪する。

しかし、一力所だけ火力が弱い部分があった。重点して守っているようだ。

そこが核なのだろう。

美琴はポケットからゲーセンのコインを取り出した。

「退がって。巻き込まれるわよ」

ピーーン とコインを親指で跳ね上げる。宙で何度も回転しながら、コインは美琴が作り出した砲台に込められた。

「AIM拡散力場の集合体か。悪いけど、“自分だけの現実”を他人に委ねるような人たちには負ける気がしないわ」

「確かに一時的に能力が上がったんだろ。もう十分だよな。後は、テメエ自身で頑張れよ」

最後の抵抗とばかりに氷の槍が打ち出されるが、美琴が操った砂鉄と、宇都宮の熱量操作によって呆気なく打ち砕かれる。

そして、ローレンツ力によって射出されたコインが胎児に突き刺さった。

「いい夢見れたかよ？」

「こんなところで苦しんでいないで、さっさと帰りなさい」

美琴に便乗した宇都宮の決め台詞が色々とアレだったが、ひとまず一件落着と言ったところだろう。

十

ブルドーザーが検問を通り抜ける。仕事熱心に通行を規制していた警備員も、出てくる車まで一々調べている余裕はないようだった。風紀委員の資格証と腕章一つでアツサリ通過できたため、身構えていた宇都宮はかえって拍子抜けしてしまい、全身から力が抜けて座席に沈み込んでしまう。

「……職権乱用だな。差し詰め風紀委員に潜り込んだ異分子と言ったところか」

「自覚はあるが、アンタにだけは言われたくないな。研究者としての大義名分に、原因究明の専門チームに紛れ込んだのもアンタだろ。患者の脳波が共通してる点について、ここまで発見が遅れたのは、アンタがチームの主任だったからだ」

「心外だな。まるで私が極悪人のような言い方だ。あの申し出は確かに渡りに船ではあったが、最初から最後まで私が仕組んだものではない」

シートの裏側の狭いスペースで木山がふて腐れていた。

その後、電池切れでぶっ倒れた美琴を放置して、宇都宮は現場を脱出した。押し寄せる警備員を見て咄嗟に木山の手を引っ張ってしまっただのが運の尽きである。官憲に対して常に後ろ暗い行動ばかり取っていたため、思わず逃げ出してしまったのだが、木山まで連れて行く必要はなかったはずだ。

そう、逮捕されてしまえばよかつたのだ。

「妹五十人って……もう手遅れなのね。どんな名医でも匙を投げるわよ」

「うるせえつての。バーチャル妹は俺のジャスティスだ」

そして助手席には『妹学園』のパッケージを勝手に開封してマニュアルを広げている少女が一人。

とつくに逃げ出したのだらうと思っていたのだが、ブルドーザーに隠れていたらしい。色々と腹黒いことを考えているようなので、とつと車から突き落としたいところだったが、深夜なのに往來には人が多い。敏感に事件解決の臭いをかぎ取って、現場に向かっている野次馬たちが通りに溢れていた。

「アンタはどうするつもりなんだ？」

「今までと変わらない。もう一度最初からやり直すさ。どこにいても理論を組み直すことはできるからな」

「でも逃げ続けるのは大変よ。風紀委員や警備員もそうだけど、学園都市にはもつと危ないのがあるのよね」

「……それが、君たちが」

学園都市の非公式組織。その全貌は宇都宮にもわかっていない。『アイテム』や『スクール』など機密レベルの高い組織でリーダーを張っていれば違うのだらうが、麦野に問い質しても語ってくれることはないだらう。知る必要がないことまで知ってしまうと、必要

なかった危険まで背負い込むことになるのである。

彼らはアレイスターの足下をほんのわずかでも動かしそうになった木山春生に注目している。

放っておけばアレイスターの番犬によって処分される。まず動かされるのは『ハウンドドッグ 獵犬部隊』だろう。間違いなく木山春生は抵抗もできずに殺される。せつかく助けてやった命だ。大人しく表側の刑務所に入って貰いたいのだが、本人にその気はなさそうだった。

「……察しが悪いわね。まあ、私はあまりお勧めしないけど」

面倒そうな顔をする宇都宮に、ドレスの少女が嘲笑うように言う。どう言うことだ　と不審そうに眉を寄せると。

「つまり彼女は『幻想御手』の研究内容を『サークル』が回収するように仕向けたいのよ」

「まさか……裏側に行きたがっているのか？」

木山は答えない。まるで、すべてを宇都宮に任せると言っているようだった。

「馬鹿な。あそこは人の命が粗大ゴミのように扱われているような場所だぞ。自衛手段も持っていないただの学者が入り込めるような世界だよ。それに、アンタは自分がやったことの重大さをまるでわかっていない。統括理事会なんてものは、ただの張り紙だ。本当の悪夢がその向こうにはあるんだぞ？」

そして『サークル』も他の組織から踏み潰されるのがオチだ。

「張り紙なら破れると言うわけだ。正攻法では何年かかるか見当も付かないからな。そうやって悩んでいる間に、あの子たちは子どもでいられる貴重な時間を失ってしまう。一人で出した結論では、もうどうにもならないんだ」

「だからって、こつち側に来るのかよ」

「おそらく木原幻生も暗部に落ちていたのだろう。敵の土俵に上がらなければ、対抗できないのは道理だな。だが強制はしない。君が拒むのなら、他の組織に自分を売り込むだけだ」

宇都宮は溜息を吐いた。ドレスの少女も呆れている。

「志は立派だけど、それは素人の浅知恵よ。あなたに求められているのは『幻想御手』を悪用することだけなんだから。やりたいことがあるみたいだけれど、弱者の小さな願望は、強者の大きな欲望によって踏み潰されるためにあるのよ」

「……確かにそうだが、いや、違うな。これは突破口になるのか？」「どうしたの？」

赤信号でブルドーザーを停車させ、宇都宮は考え込む。考えようによっては、これはむしろ好機かもしれない。『磁気単極子』の関係者とのまま睨み合いを続けるなら、こっちから揺らしてやった方がまだマシだろう。そのために、この一件を蟻のひと噛みにしてみれば……。

信号が変わったことにも気付かず、背後からクラクションを鳴らされてようやく我に返る。

「アンタの組織はどうするんだ？」

「私かしら？ まあ、私自身としては学園都市にまつわる思惑なんてどうでもいいんだけどね。リーダーが姑息かつ過激派な奴だから、あまり油断はできないわよ。取り引きでもするつもり？」

「……そうだな。こっちには『幻想御手』の研究レポートと特許を差し出す用意があるが」

「確約はできないけど、リーダーに伝えておくなら構わないわ。契約内容は……そうね、とりあえず前金で一億。月に二千万で、五ヶ月を目処に完済。その時にそっちから一億を払い戻すと言うのはどうかしら。五ヶ月の不戦協定ね」

よくわかつている。

契約と言うものは一方が打ち切ることも考えなければならぬ。少女は宇都宮に対する保証として、一億円を人質にしたのである。さらりとそんなことを言ってしまう少女が凄いのか『幻想御手』にそこまでの価値があるのか、金銭感覚が庶民的な宇都宮にはサッパリわからなかったが。

「ま、いいんじゃないか。もう貧血で死にそうなんだっての。考え

るのも面倒だ」

「いいのか？ 私みたいな者を受け入れて」

「孤独組織『サークル』はリーダーの独裁組織だから構わないっての」

木山が驚いた顔をしていた。

賽ではなく匙を投げる宇都宮。どうにでもなれと言つところだ。

デメリットばかり目立っているような気がするが、幾つかのメリットもある。『磁気単極子』という意味不明な物質にも精通している木山は、万が一のための主治医として使えそうだった。

「……あー、もう限界だ。運転代わってくれ」

ここまで来れば警備員の目はないだろう。

ブルドーザーを歩道に寄せて停車させると、宇都宮はハンドルに倒れ込んだ。

「そうか。では私が運転しよう」

木山がシートの裏側から起き上がる。

一瞬停止して何かを考え込んだかと思うと、おもむろにスカートの裾を切り裂き始めた。

「ちょ、あなた、何やってるの!？」

「治療のためだが何か問題でも？」

「あるに決まつてるでしょう!」

おいおいおい何やってんだと突っ込むところだが、ぶっ倒れている宇都宮に気付いてやる余裕はない。ドレスの少女が口をポカンと開けて呆気にとられている中、破り捨てたスカートを宇都宮の肩に巻き付け始めた。ん　と気付いた時にはもう遅い。

「うっ、これ、やば……」

ヤバイとは工口的な意味もあるが、それだけではない。

スカートにチャイナドレスよりも際どいスリットが生まれ、そこから覗いている生足に、宇都宮の下半身の海綿体に血が集まり始めた。ただでさえ出血によって少なくなっていた宇都宮の血液がアメリカンサイズな部分に集められることにより、一気に意識が遠くな

る。

「……死ぬ。マジで死ぬ。うおおおおっ」

断末魔の悲鳴を上げて、宇都宮の身体が崩れ落ちた。

09：機甲兜虫

部屋には無数のモニターが並べられていた。

唯一の光源はモニターの青白い光だけで、電球の一つもぶら下がっていない。ルームチェアに腰を沈め、両足を組んだ白衣の男は、肘掛けに取り付けられたテンキーを高速でタイピングしている。二十六桁の数字を入力し、エンターキーを叩くと同時に、天井に繋がっている機械仕掛けのアームが動き出した。

アームが運んできたのはスティック状の総合栄養食品だった。これ一本で一日に必要な栄養素が摂取できると言うキャッチフレーズとは裏腹に、実際にはサプリメントを併用しなければ、ある種のビタミンが不足してしまうのだが、男はもとよりそれを承知している。続いてアームが運んできたサプリメントをのみ込むと、ふうと溜息を吐いた。

「……配下は全滅か。やってくれるな、アレイスター」

銀縁の眼鏡をかけた、長身の初老の男だった。威圧感のある紳士と言っべきだろう。紺色のフォーマルなスーツで身を固め、肩に白衣を引っかけている。立ち振る舞いから人生観が滲み出ており、その貫禄は並のものではなかった。

友好関係にあった組織は軒並み拳を返したように敵対を表明し、今回の計画をそののかした「スクール」とは連絡が取れなくなっている。裏切ったと見るべきだろう。「ハウンドドッグ 獵犬部隊」も鬱陶しく嗅ぎ回っているようだ。

孤立無援の状況で、しかし男の表情に危機感はない。

突如、背後の壁が砕け散る。

「おめでとう。ここまで辿り着いたのは君が初めてだ」

コンクリート五十センチの核シェルター並みの隔壁があっさり突

破されたのに、それでも男の表情は変わらない。待ちわびていた来客にかけるような明るい声に、さしもの襲撃者たちも困惑を隠しきれないようだった。

「……ようやく見付けたぞ。『メタルビートルエンジニア機甲虫技師』の榊二連だな」

榊と呼ばれた男は、椅子をくるりと回転させると、侵入者の方へと向き直った。

十六才ぐらいの少年である。あどけない顔付きをしているが、それでも暗部に落ちた人間の顔をしていた。能力開発を受けていない榊には、己の腕一つで暗部を泳いできた自負がある。油断など微塵も持っていないかったが、少年を見た目で侮らないように自分を戒める。

「君はどここの組織だったかな」

「これから死に行く者に、答える必要はない」

「ああ、そう。まあ、どつちでもいいよ」

ドンツ　と響動めきが起こり、部屋の片隅に鎮座していたカブトムシが機動する。

突き出す銃口は八筒。他のものよりも銃口の数こそ少ないが、内蔵された弾丸は五十口径になっている。一発で頭蓋骨を跡形もなく吹っ飛ばせるだけの弾丸が、一斉に火を噴いた。さらにカブトムシがナイフのような鋭利なツノを振り回しながら突進する。質量二トンの金属の塊が、少年に激突した。

反応はよかった。咄嗟に右横に飛んで銃弾を避けるも、一発が右腕に直撃する。本来なら右腕が吹き飛んでいるはずなのに、何かの能力を使っているのか銃弾を弾いたのである。だが衝撃まで誤魔化しきることはできず、短い悲鳴が漏れた直後、カブトムシのツノが少年の腹を抉ろうとした。

だが、そのツノは粉々に砕け散っていた。

榊は顎に手を当て、ふむ　と考え込む。

「物質の硬さを……モース硬度を操る能力か？　ふむ、絶対防御と称賛してやりたいところだが、残念ながらここは学園都市だ。その

程度では恐るに足りないな」

少年は無傷とは言えなかった。

内蔵にダメージを受けているのか、口元からたたりと血を零している。銃弾を弾き返すことができても、五十口径の直撃は失神するほどの威力を持っているのだ。

弾丸を弾き返す。

なるほど、大した能力だ。だが、人体についてあまりにも無知である。

その程度の能力で神二連を捕まえようと思っているなら、見通しが甘すぎると説教を垂れてやるところだ。

神は彼らの目論みを探りながら、テンキーを叩いた。

同時に天井の蓋が外れ、無数の機械が飛び出してその矛先を襲撃者に向ける。

「硬度を上げても防げないものはいくらでもあるんだよ。私のテリトリーに入ってきたのが運の尽きだったようだね。ここでなら君の身体を摩擦力によって削ってやることもできるし、光学兵器によって殺傷することもできる。レーザーメス、ウォーターカッター、君はどちらをご所望かな？」

「……っ、その余裕、今から崩してやるよ！」

少年が啖呵を切った瞬間、排気用のダクトの蓋が吹き飛び、天井から年若い少女が飛び降りてきた。

ナイフを振りかぶりながら、彼女は神へと落下する。

なるほど 神は笑みを深めた。

直後、少年の反撃の拳がカブトムシに突き刺さっていた。

少年の能力『硬度変換』ハードトランスは物質の強度を操るのである。モース硬度だけを操るのではない。それは硬度だけではなく、韌性をも操ってしまう能力だった。硬い鉱石として有名なダイヤモンドだが、その韌性は水晶とほとんど変わらず、ハンマーで叩かれると簡単に砕け散ってしまうように、コンクリートの壁やカブトムシの鎧も、少年の能力にかかればガラスのようなものだった。

そして、少女の能力は『空力使い（エアロシューター）』の一種、自己を高速で移動させることに特化した能力である。空気抵抗とは低速時にはほとんど一定なのだが、高速域に入ると一気に抵抗が強くなる。それを無効化させることによって時速三百キロに達する高速移動が少女の持ち味である。

「おやおや……」

柷はそれを見ると、ふっと鼻で笑い、肘掛けのキーボードを操作する。

同時にガクン　と床が抜け落ちた。柷の身体が椅子ごと虚空に吸い込まれる。

「逃げ……た？」

ナイフを空ぶった少女が困惑の表情を浮かべる。

少年はカブトムシを破壊すると、周囲を見回し、眉をひそめた。

「これは……何だ？」

耳鳴りがしている。音響平気の類かもしてないと警戒していると、少女が何かを思い付いたように発言する。

「これ、モスキート音じゃない？　蚊が飛ぶ時に発生するような……」

言葉は最後まで続かなかった。

どこから出てきたのか、それぞれがモスキート音を発生させている小型ロボットが部屋を飛び回っていた。モデルは蚊。一匹では驚異ではないそれが、次々と現われ、やがて部屋中を埋め尽くす。個から群、群から現象に規模を上げたそれは、まるで黒い暴風のように荒れ狂っていた。

「う、わあああああ！」

少年が絶叫する。

針一本も通さない硬さの皮膚も、この敵にはまるで通用しない。

モスキートは毛穴に狙いを定め、皮膚の下の血管から血液を吸い上げる。両腕を振り回してモスキートを追い払おうとするが、焼け石に水だった。床に転がってモスキートを潰そうとするが、それでも

間に合わない。

辺りに赤い霧が現われる。

吸い出した血液を霧状にして空气中に散布しているのである。虫とは違って吸い終わりが無い吸血によって、少年の身体から際限なく血液が失われていく。

やがて、少年は動かなくなった。少女も同じように皮と骨だけになっっている。

役目を終えたモスキートは壁や床、天井に仕掛けられた巣穴へと帰って行った。

榊二連は二つの死体を見下ろし、小さく肩をすくめた。

「……………やれやれ、ゴミ処理が大変だ」

予備のカブトムシの背中にミイラのようなになった侵入者を乗せると、それを焼却炉まで運び出させる。

『ファンド』のリーダー榊二連は孤立無援だった。

だが、絶体絶命ではなかった。

「さて、それでは始めるとしよう」

榊の指がテンキーに触れる。

瞬間、モニターが切り替わった。そこには血圧や脈拍、体温などのバイタルサイン、心電図や脳波などのデータが入り乱れている。ある特定の人物の詳細データだった。

「この計画が成就すれば学園都市の暗部は私の手に。 ククッ、フハハハッ！」

十

宇都宮は悩んでいた。

うつうつ……………と。うめき声を上げている。思わぬ難題にぶつかった科学者のような苦悩の表情に、看護婦さんは声をかけるのを躊躇い、

無言でブドウ糖の点滴を交換すると逃げるように病室を後にした。宇都宮は振り返りもしない。頭を抱えてベッドをごろごろと転がり、点滴の針がぶちりと抜けて機械がピーッと鳴り出すが、まったく気にしていないかった。

「どこに行っただよ、俺のジャステイスは!？」
奇声を上げる。

機材の異常に気付いてやって来た別の看護婦が、両手を頬に当てて家政婦を見た。のような顔を見ると、慌てて引っ込んだ。二分後、若い研修医が引っ張られてくる。宇都宮の様子を見て、研修医は鎮静剤の投与を決意した。手早く看護婦に指示すると、宇都宮の頬を叩いて左目の瞳孔を確かめる。

「君、しっかりしなさい！」
「妹が！俺の妹が！」

「クソッ、患者は錯乱している！君に妹はいなかったはずだ！」
研修医の発言によって、宇都宮は急に暴れるのをやめる。ホラー映画のような不気味な動きでくると振り返ると、死んだ魚のような瞳で研修医を睨み付けた。殺意の波動を浴びせられた研修医はこの世のものとは思えない悲鳴を上げ、腰を抜かして小便を漏らしかけている。

「……………何やってんですか、あなたたちは」

「どうしよう！俺の妹が！」

「はあ、妹がいるんですか。超初耳なんですけど」

絹旗の冷たい視線を浴びても、宇都宮は止まらない。研修医の胸ぐらを掴んで揺さぶりまくっている。

そして、宇都宮はソウルフルな叫び声を上げた。

「俺の『妹学園5』はどこに行っちゃったんだ！」

「……………」

物凄い白けた顔をされた。絹旗は無言でベッドの脇にあった椅子を引き寄せ、見舞いのバナナの皮を剥いてパクリと口に入れる。

泡を吹いていた研修医はハッと我に返ったように宇都宮へと振り

返った。

「それは由々しき事態だ。もう警備員アンチスキルに連絡したのか」

「いや、警備員が助けてくれるとは思えない」

「何たることだ！ 神は我らを見捨てたか！」

「これは神が俺に与えたもうた試練なのかもしれないな。だが、負けるわけにはいかない」

宇都宮は立ち上がった。

「……どこに、行くんだ？」

「妹たちが、俺を待っているんだ」

病室を抜け出そうとする宇都宮に、研修医は親指を立てた。宇都宮はそれに答えるため、歯を見せてキラリと笑おうとしたのだが、ニコチンで黄色くなった歯のために野獣じみた獰猛な笑みになってしまった。

絹旗は振り返りもせずバナナを食べている。

颯爽と走り抜けようとした宇都宮だったが、

「うおおっ！ すってんころりんちよ！」

十歩も歩けずにバタリとぶっ倒れた。

「オオオオマイガアアッ！」

研修医が絶叫する。彼のことを密かに狙っていた看護婦たちが、気色の悪いものを見るような目をしていた。

絹旗はバナナの皮をゴミ箱に投げ捨てる。

「はぁ。何やってるんだろ、私」

彼女の疑問に答えてくれる者はどこにもいない。

絹旗は二日で回復。精神科の医師に念のためカウンセリングを受けると、すぐに退院となった。それから宇都宮が見舞いにやって来こないのを不思議に思い、絶対にぶっ殺すと意気込んで入院先に殴り込みをかけた絹旗は、そこで思わぬものを見てしまったのである。病院に搬入された直後の宇都宮の容態は、予断を許さないほど危険だったらしい。本人は貧血だと思っただけだが、実のところは出血多量で半死半生の状態だったのだ。カエル顔の医者がいなけ

れば死んでいたと言う。退院まで残すところわずかの今となつては、こんな馬鹿なことをしているが、死蝋のように青ざめた宇都宮を憶えている絹旗は、その時のことを思い出すだけで背中がスツと冷たくなる。

頭が真つ白になって、足腰が立たなくなった。

宇都宮に縋り付いて震えることしかできなかった。

自分が無力であることを、これほど実感したことはこれまでになかった。

絹旗は嘆息する。

「まったく、容体が超悪化したらどうするんですか。安静にしてないと、またぶつ倒れますよ」

役立たずの研修医を無視って、すつ転んだ宇都宮の肩に手を回した。

宇都宮は決まりが悪そうに、ぷいっと顔を逸らしている。

人間ドックで入院している中年オヤジが隠し持っていた工口本を奪取して、小児科のガキどもと鑑賞会を開いたと言う話も看護婦から伺っていた。どこで入手したのか漫画のコスプレを着込んで病室に一つずつ殴り込みをかけ「俺様の名前を言ってみろ」とヒヤッハ―なことをやったそつだ。

まるで手が付けられない悪ガキである。

絹旗は本日何度目かの溜息を吐いた。

「どうして、宇都宮はそんなにも超自由奔放なんですか……」

「いいじゃん。自由ってさ、いいもんだぜ」

ベッドに横たわり、宇都宮は窓の外を眺めた。

群青色の大空を眺めて、掴み取るように手を伸ばす。

届くわけがない。だが、宇都宮なら空すら掴んでしまいそうだと思う。思わず勘違いしそうになるほど、窓に切り取られた空は小さく、宇都宮の手の平は大きかった。人間としての器。すべてを包み込んでしまいそうな包容力。敵わないな　と絹旗は苦笑する。

「絹旗」

「何ですか？」

宇都宮は曇りのない表情をしていた。部屋を緊張感が充滿し、絹旗は大事な話をするのだからと当たりを付けると居住まいを正して聞きに入った。

あの蛇穴と言った変態科学信奉者をぶっ殺した後のこと。

宇都宮が何か大切なことを言っていたような気がするのだが、どうしてもそここのところだけが思い出せなかった。けれど、それからだろうか。宇都宮の顔を見ていると、時々ふとした拍子に顔が真っ赤になっていることがある。

理由はわからない。

あの時と同じ曇りのない顔だから　なのだろうか。

絹旗は頬に手を当てる。すごく熱かった。

どうしよう。多分、今、すごく真っ赤な顔になってる。

そして宇都宮は太陽のようにニカツと笑った。

「お兄ちゃんって呼んでくれ」

「……………」

病室の空気が一瞬で冷え込んだ。

絹旗はぶるぶると拳を震えさせる。圧縮された窒素が拳を包み込んでいた。

「どうしたんだ絹旗？　もしかして地雷踏んだ？」

「あははっ、クソお兄ちゃんはこう言う時だけは空気が読んじやうんですよねー」

「クソはいらねえよ、どちくしょうめ！　俺が何をしたって言うんだ！」

ベッドの片隅に逃げようとする宇都宮。無駄な抵抗だった。

絹旗の右腕がベッドに突き刺さる。ひいっ　と小者っぽい悲鳴を上げる宇都宮に、絹旗はニッコリと笑いかけた。大丈夫、手加減はするつもりだ。退院が二、三日遅れるかもしれないが、コイツの悪行を考えると、医者も看護婦も咎めようとはしないはず。

「宇都宮はやっぱり乙女の純情を踏みにじる変態サディストさんで

すね。実際のところ、わかってやってないですか？ まあどうでもいいです、どうせぶつ殺すだけですから。覚悟はいいですか、いいですね、いいでしょう。やっちまいましょう、クソお兄ちゃん。半殺しではなく全殺しで地獄行き超特急！ アイキルユーー！」

「ぎゃあああああ　　！」

十

「馬鹿ですの？」

「…………ごめんなさい」

第一声がそれだった。何のことで怒られているのか心当たりが多すぎて、宇都宮にはどう答えるべきかわからない。とりあえず謝っておけば許されるだろう的な日和見思考で頭を下げるが、形だけの謝罪など白井黒子にはまったく通用せず、つーんと顔を背けられてしまった。

「『幻想御手』事件の後始末で私が奔走していると云うのに、宇都宮さんは眠りこけていたわけですか。ええ、怪我ならば仕方ありませんわね。怪我ならば」

両腕を組んで仁王立ちしていた白井は、宇都宮の頭をぐりぐりと押さえ付ける。

「ですがっ！ 私が馬車馬のごとく働いていた最中、あなたは何をしてたんですの！？」

「…………えーっと、養生しました」

あからさまに目を逸らす宇都宮に、白井はガーツとまくし立てる。「嘘おっしやい！ 看護婦さんからすでに話は伺っておりますの！」

…………と言つと、手に赤いインクを塗って、トイレの鏡にべたりと貼り付けたことだろうか。いや、包帯を全身に巻き付けて、ガキどもとミイラごっこをやったのが不味かったのかもしれない。消毒用

アルコールやスプレー缶を集めてキャンプファイヤーをやるうとしたこともあった。盛大に爆発して警報機が鳴りまくり、消防車と警備員が押し寄せて来たのは嫌な思い出だ。

「ひいえっ！　どうかお許しを、お代官様！」

「ごめんあそばせ。宇都宮さんにかける慈悲は使い切ってしまったの」

白井はサイドテーブルに殴り付けるように手を置くと、ずいっと身を乗り出した。

ふあさつ、と。

ツインテールが揺れて女の子のかぐわしい香りが漂っているが、色っぽい雰囲気は微塵も感じられない。耳を引っ張られて怒鳴り声を鼓膜に叩き付けられているのである。

「看護婦さんの更衣室から下着を盗み出して、品評会を開くとは何ごとですか！？」

「あれ？　俺、そんなことやってたか？」

まったく身に覚えがないのだが。

白井に耳をさらに引っ張られ、ちよっぴり涙が出てくるが、まったく思い出せなかった。

「まあいいじゃん。若気の至りってやつだよ」

カラツと笑う宇都宮に反省の色は欠片も見当たらない。

白井は疲れたように溜息を吐いて、ドカツと椅子に腰を下ろした。お見舞いなのに患者をなぶりものにしてしまった白井は少々ばつが悪そうに咳払いすると、見舞いの袋をずいと差し出す。中身を見てみるとバナナであった。定番の果物ではあるが、コイツもバナナなのか。

「それで、具合はどうなんですの？　木山にポッコボコにされてましたけど……」

「大袈裟に構えなくても大丈夫だったの。様子見のために入院するだけで、あと少しで退院できるらしいから」

「それを聞いて安心しましたわ。……えっと、その、心配してまし

「だから」

「ぶいっと顔を逸らして恥ずかしそうに言う白井。心配していたと言うのが癪なのだろうが、恥ずかしいなら言わなければいいじゃないかと宇都宮はまったく空気を読まずにそんなことを考えていた。見舞いのバナナを嚙っていると、病室のドアがガラガラと開けられる。

「兄ちゃん、遊太郎カードやろうぜ！」

「そんなことよりエロいの見せろよ！」

「あ、えつと、お邪魔、します……」

小児科に入院しているガキどもだった。

「やんちゃ系のガキとムツツリ眼鏡の男子が二人で、一人の少女がやんちゃ系の背中に隠れている。」

「今はちよつと取り込み中だ。明日にしろつての」

宇都宮は面倒臭そうな顔をした。あまり好ましくない対応だと思つたのか白井は、ぞんざいに追い払おうとする宇都宮を咎めるように睨み付けると、ガキんちよに申し訳なさそうな顔をする。だが、ガキんちよたちに特に気にした様子はない。そんなことを気にするような間柄ではないのだ。

「うえー、何だよもう。せつかく母ちゃんが新しいパック買ってきたつてのによおー」

「そんなことよりエロいの見せろよー！」

「ご、ごめんなさいっ！」

宇都宮は鬱陶しそうに手を振った。

「さつさと病室に戻って。そろそろ晩飯の時間になるし、お前の母ちゃんが心配するぞ」

「ちえー、しょうがないなー。ところでこの姉ちゃんは兄ちゃんの彼女だよな？」

「恐いもの知らずな子ども問いに、白井は「なっ」と言葉を詰まらせる。」

「彼女なのか？」

「エロいことしてるの?」

「ごめんなさいっ! ごめんなさいっ!」

おいおい　と宇都宮は呆れてしまう。自分のことを棚に上げて、わざわざ怒らせるようなことを言うなよと思つた。まあ、子どもだから仕方ない。白井がぶち切れて『空間移動』で矢を刺す前にガキどもを病室から追い払う。真つ赤な顔をした白井は、感情を向ける矛先を失つて、上げかけていた腰を椅子に下ろした。

「……はあ、まったく。まさか私のことを彼女と間違えるなんて」「悪く思わないでくれ。アイツらも色々あるんだ」

宇都宮は枕に頭を落とした。

窓から夕日が差し込み、まぶしさに目を細める。

「あのガキども、笑つてただろ」

「え、ええ」

そう、笑つていた。

病院の常連になりつつある宇都宮は知っている。彼らはもう何年もこの病院にいたのである。

「ムツツリ眼鏡は多発性硬化症。軽度の運動麻痺だ。女の子の方は肺リンパ管筋腫症。しょつちゅう気胸でぶつ倒れるんだよ。やんちゃ系のガキは白血病。何歳まで生きられるのかねえ」

何気ない口振りから放たれた言葉に白井は絶句していた。

宇都宮はバツサリと言いつ切る。

「哀れむなよ」

「で、ですが」

それは持たざる者への蔑視でしかない。

少なくともガキどもは自分たちの境遇を可哀想だとか、ふざけたことは考えていない。

出会つた当初はそれはもう暗い顔をしていたから、何だかムカついて思わず近くにいた婦長のスカートオハチヤンをめくってしまったが、身体を張つたギャグによつて今では普通に笑うようになっていた。宇都宮が言えた義理ではないが、彼らには楽しく生きて欲しかった。

絹旗に命を拾って貰うまでは、宇都宮も根暗野郎だったわけ。

「お互いに笑顔で死ぬるといいなって、冗談交じりに言って笑い合
うんだよ。同情なんてどこにも入り込む余地はないだろ。対等に笑
い合えるダチだからな。それでもふざけたことを抜かしているよう
なら、一発殴ってやるところだ」

白井は頬を引きつらせていた。

「……それは遠慮させて貰いますの。ですが、そうですか」

「何だよ、嬉しそうに笑いやがって」

「ただ無為に日々を過ごしていたわけではなさそうですね、と。
そう思っただけですわ」

そんなことはない　と気恥ずかしく思う。

宇都宮はただふざけていただけだ。あと数日で退院するのだ。ま
た入院するとは考えたくないが、次に会える機会が何時になるのか
わかったものではない。そんなことを考えると、盛大に愉快で痛烈
な思い出を作っておきたくなったのである。慈善活動とかそんな考
えは微塵もなく、やりたいことをやっている。

ただそれだけのことだった。

「もう一ヶ月の付き合いになりますけれど、宇都宮さんのことは正
直なところ、よくわからないと言う他ないですが。ただ……不思議
な人ですわね」

「あまりにイケメンすぎて惚れたか？」

「黙りなさいフツメン」

「ひでえ」

肩をすくめた。そろそろ見舞い時間が終わりそうになっている。

「ここ数日は大きな事件はありませんから、安心して養生して下さいませ。退院したらまたしごいてさしあげますから、初春や佐天さ
ん、お姉さまも、私たちはあなたが戻って来るのを心待ちにしてい
らっしゃいますの」

「しごいて……って下ネタかよ」

ぶちっ　と、何かが切れる音がした。

素早く土下座する宇都宮に、白井は困ったように嘆息していた。

十

入院から数日後。

宇都宮は太陽の日射しに眩しそうに手をかざしながら、病院の正面玄関を潜る。刑務所から出所した受刑者のような気分だった。近くのコンビニに入ると煙草を二箱仕入れて、ついでに缶コーヒー（激甘）を補給していると、コンビニの駐車場にブルドーザーが滑り込む。

「ぶふうううう　っ？」

茶色い液体を噴き出す宇都宮。迎えに来るとは聞いていたが、こんな出迎えがあるか。むせ返りながら涙目でブルドーザーを睨み付ける。銃弾でボコボコにされたはずの車体は綺麗に修理されているが、おそらくはあの時のブルドーザー。あのオレンジ色の車体は記憶に新しい。

運転席で一仕事終えたぜと言いたげに汗を拭う女性は、木山春生。「一週間ぶりだな、少年。死にかけてと聞いていたが、どうやら元気になったようだ」

「半分以上はお前の所為だがな。……と言っか、これは何の冗談だ？」

木山は発言の意味が理解できなかったのか不思議そうな顔をする。「ああ、そうか。たしかに説明しておかなければならなかったな」「納得の行く説明を頼む」

疲れ切ったようにガクリと肩を落とした宇都宮に、木山はスカート
の端を摘むと、無表情のまま小首を傾げた。

パントマイム的一种だろうか。宇都宮は宇宙人と対面しているよ
うな気分になれる。

「やはり、似合っていないか？」

「似合って……ああ、なるほど」

ようやく木山の言葉の意味を読み取った宇都宮は、思わず苦笑してしまった。

木山の格好は何時もの白衣ではなかった。裾がレースになっている純白のチェニツクに、タートルネックの黒い半袖シャツ、腰から下はビンテージ物のジーンズで身体を装っていた。女子大生っぽい格好である。あの木山がこんなお洒落に気を遣った格好をするわけがない。と失礼なことを考えた宇都宮は、さらに推理を働かせる。おそらくブティックの店員に任せきりにしたのでらう。

「……たしかに似合ってるが、髪まで切ったのか」

ふわふわパーマがバツサリと落とされていた。木山が「ああ、これか」とこれっぽっちも未練がなさそうに、指先でショートヘアの毛先をいじっている。

宇都宮はなぜか赤面してしまう。髪を切ったのかと言うイケメンっぽい言葉が、まさか自分の口から出てくるとは、あまりにも予想外だった。こんなの俺のキャラじゃねえ。と悶絶する宇都宮に、

木山が涼しげに話しかける。

「私は警備員や風紀委員から目の敵にされているからな。さながらウォンテッド、手配書をばらまかれた犯罪者だ。機械ならともかく、人の目を誤魔化すならこの程度のことは必要だろう」

「そうですね、はい……」

「似合っているならそれに越したことはない。さて、そろそろ行くか」

「あ、お願いします」

しおらしすぎる宇都宮に木山が眉根を寄せるが、追求はせず宇都宮をブルドーザーに押し込んだ。歴とした盗難車なのだが、IDを書き換えやがったようだ。こんなもので街中を爆走するなど、変装の意味を自分から全力で放棄しているようなものなのだが、精神的に疲弊し切っていた宇都宮は何も言わなかった。

病院内では使えなかった携帯電話を手慰みに触ってみると、メールボックスに大量のメールが溜まっていることに気付く。宇都宮は軽く目を見開いた。わずか一ヶ月の間に、よくもまあ交友関係が広がったものだ。電池が切れそうになっているため、返信は後回しにしてざっと目を通す。

「……何だよこれ」

久しぶりに『サークル』に依頼が入っていたのだが、その内容がそれはもう酷い有り様だった。

凍結されそうになっている研究所からの依頼で、統括理事会の一人、潮岸の弱味を探ってこいと言うものである。切羽詰まっているのはわかるが、正気を失っているとは思えない。あの引き籠もりに関わるのは死亡フラグ以外の何物でもないため『誰がやるかクソツタレ』と担当者に罵声を返しておいた。

液晶に充電して下さいと警告文が表示され、嘆息して携帯を仕舞う。

「ん？ そう言えばどこに向かっているんだ」

てっきり自宅に送ってくれると思っていたのだが、何時の間にか高速道路に乗っている。ハンドルを握っている木原の顔を見るに、当てもなく彷徨っているわけではなさそうなのだが、宇都宮の下宿先である第五学区に向かっているわけではなさそうである。

木原は事も無げに言っただけだ。

「『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が破壊されたらしい」

「はあ？」

一瞬、頭の中が真っ白になる宇都宮。

「おいおい、マジかよ。……ってことは」

「そうだな。君の考えている通りだ」

『樹形図の設計者』は学園都市の研究基盤を一手に担っていると言っても過言ではない。その予測演算はあらゆる研究の結果をシミュレートしてしまうもので、計画のスタートやストップの判断を『樹形図の設計者』任せに行っている研究者も少なくなかった。

それ故に、正体不明の化け物、アレイスターの権力の支柱になっていると思われる。

もっとも、学園都市の技術力であれば、すぐに代替物を用意できるのだろうが。

「上層部が荒れている。下部組織への手綱が緩むほどにな」

頭の足りていない暗部の人間が、上層部が隙を見せたと勝手に勘違いするような事態になるわけだ。

『幻想御手』事件でも多くの裏の人間が暗躍していたが、今回の件においては、その程度の規模で収まってくれとは思えない。潮岸の弱味などを探っている場合ではないな　と宇都宮は皮肉の笑みを浮かべる。あの依頼は『サークル』を潰すために、誰かが仕掛けた陰謀だ。

木山はブルドーザーを加速車線に寄せると、アクセルを踏み込んだ。

時速百二十キロで高速道路を爆走するブルドーザー。何かの間違っていた。

「……ところで、裏の事情はわかったが、俺たちの行き先に何の関係があんだ？」

「しばらく身を隠すべきだと思ってな。この際だから、療養ついでに温泉まで連れて行ってやる」

は、と口を半開きにする宇都宮。

「お、温泉ですか？」

「安心したまえ。臨時収入の一億円があるからな。費用は私が持つ」

「それはどうもありがとうございます……っつておい、それは『サークル』の資本金になったはずじゃねえか!？」

「そうだな、言い間違えた。経費で旅行に行くのだから、私が恩着せがましく言うことではなかったか。ところで少年は、三日も徹夜して論文を書き直した忠勤な部下を、慰安旅行にも連れて行かないほど狭量だったかな？」

結局テメエが温泉に行きたいだけかよ　と宇都宮は力を落と
して乾いた笑い声をこぼす。

すっかり尻に敷かれていと言うか、天然の傍若無人さに引きず
られていると言うか、『サークル』を乗っ取られそうになっている
と言うか。木山の目的はたしか生徒の解放だったが、温泉に行くの
もその布石なのだろうか。いや、それは深読のしすぎだろう。

「頼りにしてるぞ、リーダー」

「もうやだ……ぐっすり眠りたい……」

愉悦の笑みをこぼす木山から目を逸らすと、宇都宮はさめざめと
泣いた。

十

ついてない。絹旗は溜息を吐きながらカブトムシを殴り飛ばした。
正式名称、機甲虫TD350。とにかくでっかいメートル五十
センチの略称らしい。ふざけているとは思いが、大質量をぶつける
突撃や、搭載している凶悪な銃器、ほんのわずかな時間だが空を飛
ぶことができる飛行能力、それらを兼ね備えた悪趣味な兵器に、『
機甲虫技師』榊二連の討伐任務を請け負った者たちが次々に倒れて
いると言う。

『アイテム』はまだ怪我人一人出していないが、それは戦闘を引き
受けているのが麦野と絹旗だけだからである。機械相手では滝壺は
能力を使えず、フレンドの爆薬はあまり効果がない。

結果的に二人で榊二連のアジトに突入することになったのだった。
「ここも超もぬけの殻と。どれだけアジトを持つてるんですかね」
絹旗たちが襲撃したアジトは、どこも無人。

コーヒーのカップが置かれてあるので手を触れてみると、まだ温
もりが残っている。ほんの少し前までこの椅子に榊二連が座ってい

ただだと思うと、絹旗の苛立ちは頂点に達した。

ゴンツ　と無秩序に並べられたモニターを殴り付ける。

「こんなことをしている暇なんて超ないんですけど……」

宇都宮の退院祝いにちよつと高めのレストランに誘ってみようかなーと思っていたのに、『樹形図の設計者』が破壊されたお陰で、学園都市の研究施設の多くで混乱が発生している。気になるあの人とお出かけするからパス　などと言った瞬間には、リーサルウェポン麦野ビームが放たれて絹旗の半身が吹っ飛んでいるところだ。下部組織の使いっ走りにも車を走らせ、本日二つ目のアジトに突入する。

「私たちの知らない裏口があるんだろうね。おそらく、もうここに榊二連は潜んでいない」

「それでも突入しないといけないんですね。超面倒なんですけど」「報酬は弾んであげるわよ。役立たずの二人分からね」

麦野は淡淡と呟いていた。

絹旗はさらに嫌そうな顔をする。それでは滝壺はともかく、フレンドからは恨み言を吐かれそうだ。

最終的に麦野が『原子崩し（メルトダウン）』で研究設備や警備装置を破壊し尽くすことになる。二度とアジトとして使えないように破壊しておくのである。

ポケットに両手をつっ込み、絹旗は左右に視線をめぐらせた。そして溜息を吐く。

通路の左右から目視できる赤外線レーザーが照射されていた。おそらくは目視できるレーザーはダミー、目視できないレーザーが隠されているのだと思われる。リンボーダンスで切り抜けると言った馬鹿なことでもできそうにない。絹旗は右手で壁をズガンツと殴り飛ばし、ベリベリと壁面素材の金属板を剥がすと、試しにそれを赤外線レーザーに投げ付けた。

案の定、警報装置が作動し天井がパカリと開いて、無数の銃口のようなものが通路の前後五メートル範囲に狙いを付けた。絹旗は身

構えるも 銃声はしない。しかし床にはボールペンサイズの穴が大量に開いていた。細い糸のような煙が舞い上がり、蒸発した金属からは焦げくさい臭いが発生している。

対人レーザー兵器。

何とも過剰な防衛装置である。絹旗の能力では突破できそうにない。

「宇都宮がいれば、全部溶かしてしまえるんですけど。はあ、超面倒です……」

絹旗は肩をすくめて来た道を引き返した。

十

学園都市のゲート。どんなトリックを使ったのか、警備員に不審がられることもなくID照会をあっさり突破してしまい、ブルドーザーは高速道路に乗って疾走する。

ツツコミを入れる気力もなくなっていた宇都宮はインターチェンジでカートリッジ式の携帯電話の充電器を購入すると、ついでに屋台風の店でたこ焼きを二つ買ってブルドーザーに戻った。軽食を済ませてから運転を再開。一時間と三十分で高速を降りると、もう少しで目的地に着くと木山が言う。

「温泉つて、入浴剤入りとかじゃないだろうな」

「私たちが行き先は天然の露天風呂だ。そこらの詐欺温泉とは違うぞ」

「料理は？」

「懐石料理だそうだ」

「ああ、そう。ところで懐石って何だろう？」

煙草を吸いながら生返事をする宇都宮。近代的な学園都市では見られない田舎風の街並みを退屈そうに眺めていると、木山が急にブ

レーキを踏んだ。タイヤが甲高い音を奏で、宇都宮は眠たげな眼を見開いて、シートベルトを外して身を乗り出した。

進行方向に銀色の塊が鎮座している。

「あの時のカブトムシか!？」

合計三体のカブトムシが一人の男を追いかけていた。

『幻想御手』事件において暗躍していた奴が使っていた兵器である。全長二メートル、タングステンの弾丸を吐き出す厄介な敵だ。『幻想御手』のブーストなしでは簡単に撃退できる相手ではない。炎弾をぶつけても外骨格を貫くには火力が足りないだろうから、近接戦闘で潰すしかなかった。

どうする　と木山が目線で問いかけてくる。宇都宮は首を横に振った。

「追われている奴には申し訳ないが、助けてやる義理はないな」

「……そうか」

第一、どうして奴が学園都市の外側に出てくるのか。技術の持ち出しは嚴重に監視されているから、強引に突破するのは上層部を納得させるだけの理由が必要になる。あるいは大義名分もなく強引に突破したとするなら、そこまでしなければならぬ理由があるはずだ。

相手は形振り構わなくなっている。無理に付き合うことはないだろう。

付き合う義理はないはずだ。

……なのだが。

「おい、何だこりゃ。ガキの玩具にしては大きすぎるなあ」

玉葱を積み込んだ軽トラに乗っていた農夫の中年男が車から降りてカブトムシに近付いている。

好奇心は身を滅ぼす。わざわざ虎穴に飛び込もうとしている中年男の姿を見て、宇都宮は舌打ちした。追われている奴だけでなく、第三者まで巻き込むつもりか。カブトムシの操車に内心の怒りをぶつけながら、宇都宮はドアを開けた。車外に出る宇都宮を、木山が

止めることはなかった。

馬鹿なことをしていると言うことは理解している。

宇都宮はお人好しではなく、利己的な人間のはずだ。それなのに、どうして、こんなことをしているのだろう。

どうして、炎剣を構えているのだろう。

「オッサン、車の影に隠れとけ。流れ弾が飛んでくるかもしれないからな」

「おい、何だよこれは。アンタはもしかして学園都市の……？」

「俺のことなんてどうでもいい。早く逃げろってんだ！」

ああ、と気のない返事をして逃げ出す中年男に、カブトムシが銃口を向けた。瞬間、タタツ　と小刻みな炸裂音が響き、三点バーストで発射された弾丸が飛来する。宇都宮は自分の身体を盾にして中年男の逃走経路を守り、二発の弾丸を炎剣で斬り飛ばした。

触れた瞬間に溶解した弾丸は、弾道を大きく狂わせて地面に着弾する。

残る一発は射程距離五十センチ内で溶解。しかし運動エネルギーは失われることなく、銃弾は宇都宮の脇腹に突き刺さった。体内に潜ろうとしているところで蒸発させて銃弾を大気中に逃がすもの、二センチほど肉を抉られてドバツと血液があふれ出す。

「　っ、己の低スペックが嘆かわしいな」

レベル4と言えば学園都市でも屈指の能力者なのだが、カブトムシを相手取るにはまだまだ不足していた。無いものねだりはできない。未だよくわからない『磁気単極子』のブーストは使う気にはなれなかった。

中年男が軽トラの影に隠れたのを確認すると、宇都宮はカブトムシの円周上を回り込むように走り出す。

追いかけるように銃弾が打ち出されるが、いずれも宇都宮が通り過ぎた後、虚空を通過するだけだった。AIが判断を切り替え、侵攻経路を先読みして弾丸を撃ち出すまでのタイムラグ。宇都宮はカブトムシの懐に入り込んでいる。ツノで攻撃しようとするが　遅

い。

炎剣がカブトムシを両断する。

熱量四千度の業火が金属の外殻を溶解させ、内部の人工筋肉繊維を焼き切った。

カブトムシに追われていた男が振り返り、信じられないと言うように目を驚かせる。

「君は……駄目だ！ 逃げてくれ！」

「うるさい！ テメエは突然舞い込んだ幸運に感謝していればいいんだよ！」

男が叫んでいるが、キレている宇都宮は言い分を無視して二体目のカブトムシに突撃する。銃弾を防ぐ手段が心許ない現状では、止まれば死ぬと言っても過言ではない。AIの弱点を突いて攪乱させることでしか勝機を見いだせないのである。

「よくわからないが、コイツらは私を狙っているようだ！ 無関係の君が身体を張る理由はない！」

「理由がないから、放っておいていいのかよ！」

二体目に炎剣が突き刺さる。熱量を解放し、カブトムシの中に注ぎ込んだ。内部を溶かし尽くされたカブトムシは物言わぬ金属の塊と化す。襲いかかる銃弾を無力化したカブトムシを盾にして防ぎながら三体目、最後の一体に牽制の炎弾をお見舞いした。

「だが……君が怪我をしてまで助けなければならぬほど、私は大した人間ではないんだ！」

「そんなに死にたいなら、俺の前なんかに見われずに、誰も見てないところで犬死にすればよかったんだ。誰にも迷惑がかからないように、ひっそりと死んでいればよかったんだ。それがわかっていたのに、テメエは無関係の誰かを巻き込むかもしれないってのに、街中で逃げ回ってたんだらう？」

直撃しても外骨格を貫くだけの火力はないのに　カブトムシは回避を選ぶ。

「生きたかったんじゃないか！　死にたくなかったんじゃないか！

それならつまらないことをグダグダと並べるよりも先に言うべきことがあるだろうが！」

熱量を計るための器官を持っていないからだ。AIで制御されているため、驚異を正しく認識するための能力に欠けているのである。横っ飛びで逃げ回るカブトムシに次々と炎弾を打ち込み、カブトムシが地面の溶解具合からその威力を認識した時。宇都宮は右手に炎を乗せてカブトムシの経路を先回りしていた。

炎弾で移動を制限させて誘導する。頭の悪い相手にしか通用しない方法である。

宇都宮は啞然と立ちすくむ男に怒鳴りつけた。

「『ごめんなさい』ってのもいいが、まず最初に『ありがとう』って言うべきだろ？」

拳がカブトムシに突き刺さる。少し遅れて爆発音が辺りに響いた。銃弾に引火して爆発したのだ。

炎に包まれながら、宇都宮は男に手を伸ばした。

「君は……」

「俺は宇都宮日向。『サークル』のリーダーだ。そっちは？」

男は自分の顔に手を当てて、啞然としながら首を横に振った。

カブトムシに追われていたからてっきり暗部の人間だと思っていたのだが、どうやらそうではないらしい。と言うか、どこか反応がおかしかった。まるで、自分の名前がわからないような感じだ。まさかと宇都宮がはっとした時、男は肩を落として、諦めに似た笑みを浮かべた。

男は汗で張り付いた緑色の髪を掻き上げながら言った。

「アウレオルス……のようだ。すまない、それ以外のことは思い出せないんだ」

宇都宮は天を見上げた。空は憎たらしいほど青々としている。

どうやら今回も厄介事のようにだった。

ハードトランス

【硬度変換】

物質の強度を操る能力。物体の硬さはモース硬度で表される硬度や、粘り強さの靱性と言うものがあり、この能力は両方の数値を書き換えることによって、物体の強度を変えることができる。強度の操作は触れた物体にしか及ばない。

包帯が腹巻きのように巻き付いていた。さらさらとしたその肌触りに何度お世話になったことだろう。せつかく退院したと言うのに、またもや風呂はお預けである。目的地が温泉と言うのも、何かの冗談にしか思えない。温泉はおまけで学園都市から離れるのが本命だとしても、これはあんまりである。

宇都宮は旅館の個室で仰向けに寝転がっていた。古ぼけた旅館で、年季の入った老舗旅館と言うよりも民宿と言った方が適切かもしれない。実際、大部屋では泡沫企業のおっちゃんたちが宴会を催しているところである。窓から外を覗くと、男性アイドルの――の物真似をしたオヤジがOLさんたちに簀巻きにされて窓から放り捨てられているところだった。

「ところで、アウレオルスだったよな？」

素早くカーテンを閉じながら宇都宮が今まで棚上げにしていた話を切り出した。

備え付けの和菓子卓袱台に広げた木山と謎の青年が振り返る。パンクなミュージシャンのような緑色の髪に、純白のスーツは潔癖症とも言えるほど汚れや折り目が見付からない。西洋人特有の切れ長の相貌は、記憶喪失だからだろうか、弱々しく歪められていた。

「ホントに何も思い出せないのか？ 出身国は？ 年齢は？ 好きなAV女優は？」

「出身国は、わからない。ここは日本……だったか。年齢も、どうだったか。そもそも、私はアウレオルスなのか。それすら自信がないんだ。好きなAV女優は……パラケルスス？」

「何だそりゃ。どこの国のポルノだよ」

「健忘症だな」

宇都宮の下ネタをさらりと流した木山が、ふるぶるとした葛餅を指で突つつきながら、聞き慣れない単語を挙げた。下品だからやめ

なさいと木山の手を卓袱台から払いのけると、彼女は葛餅に未練があるような顔をしながらも、渋々と言った様子で説明した。

「一般に記憶喪失と呼ばれるものことだよ。『ここはどこ？ 私
は誰？』と言うやつだな。ただし、記憶喪失と言うには色々と言弊がある。実際には記憶は失われておらず、思い出せない状態にあるだけのだから、誤解しないで欲しいところだ。過去の記憶を思い出せない状態を、症例から医学的にカテゴライズしたものが 逆行性健忘症」

つまり、彼のことだ。木山は言う。

「記憶には三段階のプロセスが存在する。このメモリーを脳の記憶野に見立ててみよう」

木山は携帯電話から記憶媒体のメモリーを取り出した。

「まず最初に目や耳から取り入れた情報、感じた情報についての書き込みが行われる“記録”。続いて保存した情報を保存する、つまり本棚などに収納することを“保持”。そして保存した記憶を読み込んで再生する“想起”。健忘症とはこの“想起”の部分に何らかの欠陥が生じたために起こる記憶障害の一種だ」

一気に言い切ると、木山は確認するように二人に目を向けた。

アウレオルスはちんぷんかんぷんと言った様子で首を傾げており、宇都宮は眠たげな目をして葛餅を食っていた。前者は一応は話を聞いていたからともかく、これっぽっちも話を聞いていない宇都宮には罰として太股を掴っておく。それからコホンと咳払いを挟んで、木山は話を続けた。

「アウレオルス氏は自分の記憶を思い出せない状態にある。個人的な体験や出来事、エピソード記憶が失われている。だが、そうした……例えば、アウレオルス氏。日本の通貨は知っているな？」

「馬鹿にしないでくれ。日本ドルだろう」
「えっと、たしか円だったかな？」

二人はどことなく疲れた顔をして宇都宮の嘘をスルーする。

「その通りだ。つまり社会的なエピソードについては“想起”でき

るわけだ。普通の生活を送る分には何ら問題ないだろう。健忘症の範囲は本人に関する部分だけだからな。安心してくれ。適切な投薬と催眠術などを併用することによって、徐々に記憶が戻って来るだろうからな」

「だから安心して言うのかよ？」

宇都宮はゴロリと寝転がると、ふて腐れたように言う。無視された腹いせ　と言うわけではない。

記憶喪失だか健忘症だか、そんなことはどうでもいい。

「……少年」

聞き分けのない子どもを見るような木山の視線から逃れるため、壁に寄り添うように横になった。

「忘れたい記憶だったんだろ。無理に思い出すのが、幸せってことかよ」

重要なのは一つだけ。なぜアウレオルスが記憶を“思い出せない”ようになってしまったのか。

「学園都市の暗部に追いかけていられたんだ。仲間が全滅したとか、恋人が陵辱されたとか、下手をするとパンドラの箱を開けるだけだぞ。忘れてしまった方が幸せだったかもしれないと後悔するかもしれないじゃないか。それでもお前は自分の記憶を“思い出したい”のかよ？」

「私は……自分の本心も、ここにはないんだ」

アウレオルスは両手を見詰めた。

「気付けば街中にいた。昆虫のような兵器に追いかけて回されて、そのまま死ぬと思ったんだ。あの時は、それでもいいと思ってた。自分なんて、どこにもないのだから、死んでしまっても失われるものなど何一つないのだと、そう思っていたんだ。だが……！」

その拳が卓袱台に振り下ろされて、ドガンツと大きな音が鳴る。飛び上がった宇都宮に、アウレオルスは捨て犬のような目を向けていた。

「だがっ、君に問われた！　死にたくなかったんだ！　生きたかつ

たんだ！　そして、同時にこう思った。君に助けられた私が、本当に何一つ価値のない空っぽの存在だったのか？　君に怪我をさせてしまった私が無価値だったのか、それとも助けられただけの価値があったのか、たしかめたいんだっ！」

切実な訴えに、宇都宮は首を横に振った。

「らしくないな、少年」

ああ、そうだ　と宇都宮は頷いた。

「私を止めた時の君は、もっと凜々しかったぞ」

口の端を歪める木山に、宇都宮は苦笑する。

らしくない。本当に、らしくない。

どうかしていたようだ。

何が全部受け入れてやりたいことをやっているだけだ。実際は、すべて忘れてしまったアウレオルスを、ちよつとだけ羨ましいと思つてしまつていたのだ。肩にのし掛かるプレッシャーに押し負けて、終わらない戦いの日々にはイローゼになつていたようだ。

ロングピースを啜え、能力で火を付ける。

「じゃ、これからの行動方針を決めようと思う」

「肉体労働は私の専門ではないからな。君に一任しよう」

「私に聞かれても、どう答えていいかわからないのだが……」

オツケー、他人任せな貴様らが大好きだ。宇都宮は愉快げに笑う。

「それじゃ、まずは精神科医に診て貰うつてことで。あわよくばあの虫野郎も叩き潰すぞ」

煙を吐き出しながら、宇都宮は宣言した。

十

宇都宮は眉をひそめた。電話越しまで雰囲気伝わったのか、初春がビクついたように言う。

『だ、だから本当ですよ。アウレオルスなんて名前の人は書庫バンクには登録されていません。能力開発は受けていないと思いますよ。あと留学生や講師のリストを漁ってみましたが、やっぱり見付かりませんでした』

「留学枠からではなく一般枠から入学した者や、無能力者って可能性はあるが」

『いくら私でもそこまでは調べられませんよー！』

電話越しでもわかる今にも泣きそうな様子に、宇都宮は調査を切り上げることにする。

木山とアウレオルスと話し合った後。『樹形図の設計者』が破壊され、何やら危険な臭いがする学園都市から逃げ出した宇都宮たちは、騒動が収まるまで軽率な行動は取らないことにしている。学園都市の外部と言うこともあって期待薄だが、時間を見計らって木山がアウレオルスをそこそこ信用のできる医者に診せに行くことになっており、宇都宮は『サークル』の貧弱な情報網と風紀委員の権力を利用して、拾える限りの情報を集めているところだった。

「あ、これは貧乳ツインには内緒だからな」

『わかりましたー、貧乳ツインには内緒ですね。……あ、決して白井さんのことでは　いやあー、ごめんなさいー！』

金属を引つ掻くような悲鳴が聞こえてから、不気味なほど物音がしなくなる。

沈黙が続く、宇都宮が電話を切ろうとしたタイミングで、リンと鈴を転がすような声が返ってきた。

『お電話代わりましたの、白井黒子です。本日はお日柄もよくと言うか、こうもお空が晴れ渡っていると、血の雨を降らせたくありませんわね。オホホホホ』

「……怒ってる？」

『当たり前でしょうこのお馬鹿！』

聞くまでもないことだったらしい。火山が爆発するような怒声が電話口から吹き上がっていた。

『ア・ナ・タ・は！ 一体どこをほつつき歩いてるんですの！？』
白井の怒鳴り声に、耳がキーンとする。

『退院したなら真つ先に風紀委員に顔を出すべきですわよね！？
みんな待ってるってちゃんと云ったはずですし、こつそりと退院祝
いを企画していた私の気遣いを、道ばたの蟻んこのように踏み潰す
なんて、あなたはどこまでふざけているんですか！？』

「あー、うん。そりゃ悪かったな」

『軽つ！ 謝罪軽つ！ ですよ！』

「ホントに悪かったよ。ちょっと外せない用事が入ってな。今度埋
め合わせはするから」

今回の事件はどう見ても裏側だ。風紀委員を巻き込むわけにはい
かない。

白井の優しさに付け込むようで気が引けたが、説明するわけには
いかないから、宇都宮は平謝りすることしかできなかった。口で説
明するだけならすぐに終わる。だが、絶対に口にするわけにはいか
ない。学園都市の闇に底はない。落ちれば、ひたすら沈み込むだけ
だ。

電話口の向こうから溜息が聞こえた。

『はあ、もういいです。お身体はもう大丈夫ですの？』

「……ああ、平気だよ」

脇腹に手を当てる。宇都宮は一瞬だけ考え込んでから嘘を言った。

『宇都宮さん、もしかしてっ……！』

「すぐに戻るから、極上のサーロインステーキ用意して待ってやが
れ。一枚五千円のやつだからな」

このままだとボロが出ると思い、宇都宮はまくし立てるように言
うと電話を切った。

白井は声のイントネーションだけで察してしまつたらしい。白井
が鋭敏なのか、宇都宮の嘘が下手なのか。おそらく両方だろう。も
っとも、銃弾で脇腹を抉られたとは夢にも思っていないだろうが。

宇都宮は煙草を手の平に押し付けて、フィルターを投げ捨てた。

地面に触れる寸前、ボツと炎に包まれて吸い殻が灰になる。刹那の間だけ夜闇が切り開かれ、寂れた河川敷に陰影を刻んだ。古ぼけた電信柱に留まっていた羽虫が、灯火に驚いて忙しく飛び回っている。

ふと思いついて、携帯のアドレス帳を開いた。

「……出ない、か」

コール十回で留守番センターに繋がりに、宇都宮は電話を切った。

絹旗は電話に出なかった。用事があって出られなかった。とは考えなかった。この非常事態に『アイテム』も動員されているのだろう。

「一応、惚れた相手なんだよな？ んー、と言うか、惚れるって何だ？」

告ったはずなのだが、向こうは何のアクションも起こして来ない。聞かなかったことにしてやろうと気を遣ってくれているのかもしれないし、あの時は絹旗も満身創痍だったから憶えていないのかもしれない。あえて問い質すのは今さらすぎて恥ずかしい。

どうしたものか。

途方に暮れながら、宇都宮は煙草に火を付ける。

二本目だった。溜息と一緒に煙を吐き出し、宇都宮は竹林へと踏み込んだ。

「予想通りの展開だな」

目の前には、二体の昆虫モドキが出現していた。旅館の周囲に広がる竹林で、のそりと黒い影が蠢いている。漆黒の滑らかなフォルム。細長い二本の触角が意志を持ったように小刻みに揺れている。宇都宮はとうとうやって来たかと黙りこくった。

三億年前の古生代石炭紀から連綿と続いてきた“古代の化石”。人間が滅びた後は、地上を支配するだろうと言われている種族。

「……諦めたら、そこで試合しゅ　うわああああ！ 無理！ やっぱ無理！」

それは、ゴキブリだった。

一息に生み出した火球は六つ。動揺のあまり火力調整に失敗して、何時もの冴え渡るような青色は陰りを見せており、炎は炭素を吹き上げながら真つ赤に燃え上がっている。半泣きになりながら砲丸投げの要領で火球を投げ付けるのは、ほぼ無意識の行動だった。

ゴキブリは見た目通りの機敏な動きで力サカサツと回避する。六本の足で這うような動作は、生理的な嫌悪感を催すに不足なかった。地面に激突した炎が焼夷手榴弾のごとく爆発炎上する。地面を舐めるように広がった炎が、竹林を橙色に飾り付ける。

「……どこだ？」
ビキビキ、と。

熱気によつて青竹から水分が飛び散り、ひび割れる音がそこから中から甲走っていた。火炎によつて闇夜が切り開かれていると言うのに、ゴキブリは一定の姿を宇都宮に把握させないよう、縦横無尽に動き回っている。影を捉えたと思えば、振り返った時には背後に回り込まれている。自然のカモフラージュだけではない。二体いるからこそこできる変幻自在の動きに、宇都宮は翻弄されていた。

「クソツ、鬱陶しいんだよ。こんなことなら地球防衛軍に入隊しておくんだったな」

宇都宮はのたうつ蛇のように炎を振り回した。

軽口を交える余裕は残っているらしい。と言つても、所詮は独り言である。傍から見れば痛々しいのだろうが、先週の『幻想御手』事件で最初に登場したカブトムシが、蛇穴の音声で答弁していたこともある。宇都宮はこの虫を操っている首魁に話しかけているつもりだった。

ゴキブリが飛び上がる。

体当たり。全質量を一点に集中した突撃は、マトモに受け止めれば骨折では済まないだろう。

迎え撃つのは炎剣だった。少しだけ平静を取り戻しており、色は青色。温度は三千度である。金属の装甲を容易く切り裂ける攻撃は、たとえ貫けなくても内部機関に甚大なダメージを与え、それまでの

機敏な機動を奪い取ってしまうだろう。

ゴキブリの方もその炎剣の驚異を察知したのか、AIの危険レベルを引き上げ、突撃を止めて回避を選択。ガバツと羽を広げて地面に空気を叩き付け、足のバネの瞬発力を生かして一瞬だけ飛び上がった。宇都宮は背後に流れていったゴキブリを見送ると、空を切った炎剣を引き戻す。

宇都宮は寸秒に感じた違和に眉をひそめた。

カブトムシは灼熱をまとった拳の危険性を認識するのが遅かった。迫り来る宇都宮を、むしろ好機とばかりに迎え撃とうとしていたほどだ。だからこそ、拳にボディを貫かれて大破したのだが、このゴキブリたちはどうも勝手が違う。

攻撃の機会を捨ててまで回避を選択したのである。

「AIを改良した……？」

それもあるかもしれない。だが、相手にそんなことをしている暇があったのか、どうも解せない。おそらく敵の目的はアウレオルスにある。だからこそ刺客を送ってきたのである。そして、学園都市の外部に戦力を送り出す。そんな目立つようなことを、アレイスタ―がただで許すとは思えない。

故に、『アイテム』などの非公式組織から追い回されることになるはずだ　と宇都宮は推測していた。

……と言うことは、AIは改良していないと考えるべきだ。

では、どうやって驚異を認識したのか。そこまで考えて、宇都宮は笑みを不敵なものに変えた。

二体同時の体当たりを確認した時、宇都宮は無数の炎弾を地面に叩き落とす。そして、全力で竹林を駆け抜けた。ズキツと脇腹が痛むが、足を止めるわけにはいかない。四方八方、そして中央　ひたすら炎弾を生み出し、狙いも付けずに射出する。

一分後、竹林は山火事の様相を呈していた。

ゴキブリはあてもなく動き回っている。その背中に、炎剣が突き刺さった。

爆散、炎が吹き荒れる。

二体目が驚いたように飛び上がっているが、とりあえず逃げたと
言うような動きである。

「ゴキブリの感覚器官は触覚に比重が置かれているんだってな。視
覚はほとんどないらしい。二本の触角と体毛で外敵を察知して、す
みやかに逃げ出すことができたから、恐竜が世界を支配していた頃
から存続しているわけだ。その身体の構造は生存することにかけて
はあらゆる生物を凌駕しているが、自分から攻撃を仕掛けるように
作られていない」

金属製のゴキブリは宇都宮の方向を向いていない。

「なのにテメエらは俺に攻撃を仕掛けてきたよな？」

黒い身体で夜闇に紛れて襲いかかる、言うなれば暗殺に特化した
設計による欠陥。暗視スコープの視界は解像度が悪く、最低限の動
体を察知するだけの機能しか与えられていない。彼らが敵を認識す
る方法は、おそらくは“熱”。赤外線サーモグラフィーを搭載して
いるのだ。

素早く動き回るために、カブトムシのような銃器は持たされてお
らず、攻撃手段は千変万化の動きによる体当たりのみ。暗殺仕様の
ため学園都市の外に送り出すのは簡単だろうが、あまりにも貧弱な
武装は宇都宮を相手取るにはいささか物足りない。

宇都宮の四千度の拳がゴキブリを貫いた。

ぐちゅりとオイルが漏れだし、宇都宮が顔をしかめた直後、内部
で放出された熱量によってカブトムシが溶解する。手をぶらぶらさ
せてオイルを飛ばしながら、荒れた呼吸を整える。今回の相手は危
険だった。あんなのが十体もやって来たら白旗を振っていたかもし
れない。

はあ　と溜息を吐いて、時間を確認するために携帯電話を取り
だした。

「絹旗と……木山か？」

誰かが通報したのだろう。消防車のサイレンが聞こえ始めている

ため、場所を変えながら着信履歴を調べていると、先ほど電話をかけたことに気付いたのだろう、絹旗が電話を返していたようだ。だが、リダイヤルしている場合ではなさそうだった。

木山からの着信に、宇都宮は怪訝に思う。用事もなく電話をかけるような相手ではない。

果たして襲撃があつたのは宇都宮の方だけだったのだろうか。これが陽動でなかったとは言い切れない。

「まさかっ！」

気付いた時には駆け出していた。

走ること二分、旅館に辿り着いた宇都宮は絶句する。木造の壁に巨大な穴が開いていたのである。

「こ……これは……」

木山もアウレオルスも、無事だった。パツと見では外傷はなさそうだ。

部屋の中央には、泥の塊が広がっている。

溶解した黄金だった。

畳に染み込んで湯気を立ち上らせている泥の塊の傍に、アウレオルスがへたり込んでいた。鎖に繋がれた黄金の鏝を握り締め、それを見開いた目で見詰めている。喉がカラカラに渴いていた。

「お前が、やったのか？」

「わ、私が、やったようだ……。必然、のようなものらしい。否、偶然なのか？ 我が手にこの暗器が収まっているのは必然にであり、偶然でもあると、誰かがそう言っている。小宇宙に照応する肉体、精神、魂によれば必然であり偶然であるのだと。どう言うことだ？ 目に見える霊的世界を脳内によって完全に再現することによって、既存の法則を塗り替えて独自の世界を形成する……これは何だ？ 何で私が、このようなことを“識っている”んだ？」

アウレオルスの口振りは要領を得なかった。

「私は私であり、私によって逆説的に大宇宙は完結する。……っ、何なんだこれは！？」

「落ち着け、アウレオルス氏」

青年の指先が震えている。木山はジツと物言わずに考え込んでいた。何を見たのか、宇都宮にはわからないが、取り入れた情報を冷静に分析しているようである。それでも動揺が隠し切れず、頬に汗が伝っていた。

壁の大穴が機甲虫によるものだとすると、この黄金は　おそろくは襲撃者である機械の虫。

こんな能力を、宇都宮は知らない。

携帯電話が振動していた。

ディスプレイを確認せず、電話に出る。

『宇都宮ですか！？　よかった、やっと繋がりました！』

「絹旗か」

『宇都宮？　えっと、声の調子が超おかしいですけど、何か変なエロゲでも……って、そんな場合じゃなくてですね！』

向こうも焦っているらしい。声の調子がおかしいのはお互い様だ。小さく苦笑すると、宇都宮は卓袱台に座り込んだ。

「で、どうしたよ？　雑談してる暇はないのか？」

『武闘派で知られていた『サーカス』が全滅、『トリック』はリーダーの『光子放出』を残して壊滅しました。ハウンドドッグ 獵犬部隊が六名の死者を出して撤退、木原数多が負傷。私たち『アイテム』も反撃に遭って、フレンドが軽傷を負ってます。まあフレンドは超すっ転んで膝を擦りむいただけなんですけど』

「……マジかよ」

『超マジです。絆創膏二枚では足りないって文句言ってます』

「そっちはどうでもいいから」

フレンドのことは聞き流してゴクリと生唾を呑んだ宇都宮に、絹旗が肯定を返した。

学園都市がとんでもないことになっているようだった。

『宇都宮はこっちと合流できそうですか？　一応は『サークル』って組織のトップを張ってるんです。狙われないとも限りませんから、

私たちが超守ってあげても……いいですけど？」

「いや、こっちは訳あって学園都市の外にいるんだよ」

『……それなら好都合ですね。ちよっとだけ　いや、残念なわけではないですけど。べ、別に宇都宮のことなんて、何とも思っていないですから！』

「ガビーン」

『いえ、あの、今のは言葉の文であって決して本心ではないと言うか、やっぱり本心と言うか……ああああ、もう！　宇都宮うざい超キモすぎ死ね！』

「さらにガビーン」

コホンと咳払いの音が聞こえた。

『……超すいませんでした』

「別にいいけど……それで、そっちでは一体何が起こってるんだ？」

両手を眺めて震えているアウレオルスと、静かに考え込んでいる木山の様子を視界に収めながら、宇都宮は絹旗に問いかける。

絹旗は一拍溜めてから、おもむろに切り出した。

『追い詰められていたはずの『ファンド』のリーダー、榊二連。』

メタルビートルエンジン機甲虫技師』と呼ばれている科学者が大攻勢に出たんですよ！』

直後、笛を鳴らすような噴射音が響いて、壁の大穴からロケット弾が飛び込んだ。

爆音が旅館を揺さぶり、炸裂した火薬によって破壊される。

旅館の周りを、十五体の機甲虫軍団が取り囲んでいた。

十

トタン屋根を叩く雨音のように、銃弾の雨がブルドーザーに降り注いでいた。装甲車がベースでなければ死んでいたたと宇都宮は嘆息する。無免許でハンドルを握るのは気が引けたが、カブトムシと

ゴキブリの大群に追い回されている状況では、選り好みしている場合ではない。

群の中に、ツノをロケット砲に改良したカブトムシが混じっていた。

「何時の間に改造したのだろうな」

木山が助手席で爪を噛んでいる。考える時の癖なのだろうか。

バックミラーで震えているアウレオルスを確認すると、宇都宮は肩をすくめた。

「そもそも、昆虫をモチーフにする必要はどこにある？ あんなものに大砲を積ませるなら、自走砲を改良する方がはるかに安上がりだ。近代の戦争では、兵器とは基本的に質よりも量が物を言うんだ。圧倒的な火力で目標を制圧する。高価な大砲一門より、安価な大砲三門を用意し、それに補給を途絶えさせないようにする。それが軍事だからな」

「だろうな。あんなものは、量産できるわけがない」

「それは違う。“量産”されているんだよ、あの連中は」

頷く宇都宮に、木山は目蓋を閉じて首を横に振った。

「君が遭遇した個体はおよそ二十体。学園都市でもあんな連中が暴れ回って、暗部の組織を二つも潰し、さらに猟犬部隊を退けたとなると、最低でも百体は下らないはずだ。量産体制を整備せずに、それだけの数が用意できるとでも？」

「……ちよつと待てよ」

宇都宮は耳を疑った。あの機甲虫はたしかに厄介だったが、兵器としては欠陥品である。費用対効果が最悪なのだ。あんなもので体当たりするなら車で突っ込めばいいだけの話だし、銃弾を飛ばす機能も、人間にサブマシンガンを渡した方が遙に安上がりである。

「『巨大機械化甲虫計画』だったか？ そんなものが通るほど統括理事会は馬鹿じゃないぞ」

「だろうな」

それでは、どうしてあんなものが量産されているのか。宇都宮は

訳がわからなくなり唸り声を上げた。考え事をしながらもハンドルを小さく切って高速道路のカーブを緩やかに曲がる。前方に飛び込んだできたゴキブリを挽き潰しながら、インターチェンジに突っ込んだ。

このまま逃げ続けたいところだったが、風潰しに相手にするような余裕はなかった。それにガソリンが心許ない。どうにもならないため学園都市に戻るよう進路を取っていた。『アイテム』の保護を受けることができればいいのだが、麦野がそこまで甘い性格をしているとは思えない。『スクール』から巻き上げた一億を使うことになりそうだ。

アウレオルスは未だに落ち着きを取り戻していない。機甲虫を葬った方法について問い質したいところだったが、本人がコレでは話になりそうになかった。車外に放り出したくなるほど鬱陶しいため、そろそろキレてもいいでしょうかと眉間に青筋を立てながら思う宇都宮だった。

「わ、私は……何てことを」

「おい、アウレオルス。テメエもそろそろいい加減にしろよ」

強迫観念に囚われている様子のアウレオルスに、宇都宮が苛立ちの混じった声を叩き付ける。

ビクリと揺れた青年の頬は、冷房を効かせているわけでもないのに真っ青だった。

「何かを思い出したって言うのかよ。だとしても、テメエ自身が記憶を取り戻したいって願ったんだろっが」

「わ、私は……おそらく、人殺しだ」

衝撃の事実を告白するようにアウレオルスは言う。

「……それで？」

「ああ、そうか。悪人のような顔をしていると思っていただんだ。なるほどな」

宇都宮たちの反応は冷淡だった。アウレオルスはキョトンとする。「今さら殺人の一つや二つでどうこう言われると思ってたのかよ？」

暗部の人間に追い回されているような奴が、そこらの一般ピープルと同じわけがないだろ。あるいは俺たちにビビって欲しかったのか？ それとも同情して欲しかったのか？

「わたし、は……」

「と言うか、殺人鬼よりもホモとかレイプ魔の方が恐いっての。なあ？」

「たしかに、女性としては性犯罪者には恐怖せざるを得ないが、果たして私のような者に欲情するような輩がいるのだろうか？」

木山は相変わらず的外れなことを考えている。

人殺しごときでビビっている姿を見ればわかる。コイツはそういうことに“慣れていない”のだ。そんなアウレオルスよりも、殺人に慣れきって、その行為に何の感情も抱けなくなった奴の方が恐ろしい。

「そうか。私はホモでもレイプ魔でもないが……」

アウレオルスはホツとしたような顔をしていた。

和気藹々とした空気が流れている　ところだったのだが。

「おそらくは、ロリコンだ」

「……………」

再び車内に嫌な空気が流れ出した。

発言の意味は、脈絡は、果たして言う必要があったのか、深読みしすぎて頭がパンクしそうになる。

「一心不乱に祈りを捧げている少女に惹かれていたらしい。年の頃は十三ぐらいだろうか。私はその少女に人生を賭けていたようだな

悄然？ …… 十万三千冊？ 何のことだ？」

「いや、まあ、趣味趣向は人それぞれだから」

「と言う少年もロリコンなのだな」

「　　って、うおい！」

サラッと言いのける木山に怒声を上げる宇都宮。

アウレオルスがパツと明るい顔をする。

「そうか！ 君も私と同じなのか！」

「すつげえ嬉しそうな顔だなオイ！」

子犬のような喜びようにドン引きの宇都宮。運転中でなければ手を握られているところだ。

「……ったく」

溜息混じりに呟いた時、学園都市のゲートに到着する。

そこでふと思いついた。アウレオルスは学園都市のIDを持っているのだろうか。熱源探知（IRシーカー）や磁気透視（MRIスキヤナ）によつて監視されているため、密入国はできないようになっている。そんなに簡単に入入りできるなら、密出入をビジネスにしている裏の組織は存在していない。

暴走ブルドーザーの時速百二十キロによつて機甲虫軍団は引き千切っていたが、時間が経てば追い付いてくるのは必定だ。

ヤベエぞこれは　と冷や汗を流す宇都宮だったが、木山が事も無げに言い切ってしまう。

「ああ、問題ない。すでに偽造IDを用意してある。『ゲスト臨時発行』扱いになるが構わないな？」

「サラツと言ってくれるが、そんなことができるのかよ？」

「むしろ『サークル』の権限を有しているのに、この程度のことができる方がおかしいと思えるが」

「悪かったな。どうせPCはエロ専用ですよー」

悪質なアダルトサイトに引っかけかけて、架空請求のページを見てガチでビビるような男である。

宇都宮には宝も持ち腐れな機密レベルの高い情報だが、木山はそれを水を得た魚のごとく使いこなしていた。やっぱり『サークル』を影から支配されていないかと首を捻る宇都宮。まあ、便利だから今回はお咎めなしだ。できれば許可を取って欲しいところだが。

「ともかくでかした。今度からハルミエモンと呼んでやろう」

親指を立てる宇都宮に対し、物凄く嫌そうな顔をする木山。

これが終わればどら焼きを買ってやろうと決心しながらゲートを無事に突破。ブルドーザーは疾走する。運転中なのに携帯電話を取

り出し、リダイヤル機能のショートカットで絹旗に電話をかける。マナーもへったくれもなかったが、非常事態だから容赦して貰いたいところ　だ？

瞬間、宇都宮は急ブレーキを踏んでいた。

分厚い軍用車のタイヤが溶けて、アスファルトにへばり付いている。

「おい、何だよこれは」

突破しよう　とは思わなかった。

前方五十メートル先、アンチスキルが検問を敷いた向こうに。

「……五十体と言うのは甘く見積もっていた。それでも多くとも百体がいいところだろうと類推していたのだが」

路面を覆い尽くしたカブトムシは、片手では数え切れない。

交通整理のバイトで数を計測する道具、数取器が欲しいところだ。もつとも、正確な全体数を把握したところで大した意味はない。ざっと見たところで五十体を超えている。この場所だけで、それだけの数がひしめいているのである。

学園都市全体に、コイツらがいるとすれば　。

「悪い夢でも見てるのかよ、俺は？」

「そんな……これは、私の所為なのか？」

「相変わらず鬱陶しい奴だなおい。どんだけマイナス思考なんだよ。どう見ても大量の機甲虫を操っている黒幕こそが悪いのだが、アウレオルスは無駄な責任感によって小便を漏らしそうな表情になっていた。

とりあえず、正面突破は難しそうだ。

『宇都宮、ねえ宇都宮！？』

「あ、悪い。すっかり忘れてた」

手元で鳴っていた甲高い音に、宇都宮は我に返る。

『忘れてたって何なんですかもう！……ああもう超鬱陶しいですね！　虫ごときでビビるほど私はひ弱な女の子してませんよーだ！』

ドゴンッ　と向こう側から聞こえてくる。

絶賛戦闘中の様子である。

『それで、どうしたんですか？ 私のウルトラプリチーな声が聞き
たくなつたとか？』

「はいはい寝言は後にしましょうねー、と言うかこれはどうなって
やがるんだよ？ 榊二連つてのは何を考えているんだ？」

『まさか宇都宮、学園都市に戻つて来ちゃつたんですか！？』

「うわー、何か傷付くなあその言い方は」

来ちゃつた とは、戻つてきて欲しくなかつたような言い方で
ある。

向こうに気を遣つていられる余裕がないとは言え、若干傷付いて
しまう。

『馬鹿なことを言わないで下さい！ よくわからないんですけど、
宇都宮のアパートが奴らに破壊されたんです。榊二連にとっては弱
小組織の『サークル』なんてどうでもいいはずで、自宅を潰しても
メリットなんてないのに、宇都宮の屋敷がぶつ壊された。おそらく
ですが宇都宮、超狙われてますよ』

「俺の家が、壊れた……？」

『宇都宮？』

「秘蔵のコレクションは？ 妹シリーズは？ 発禁処分にされた裏
本は？ プレミア付きのエロゲは？」

『そんなものを持ってやがったんですか！？ むしろ榊二連グツジ
ヨブです！』

「ちくしょう……榊二連め。ぶつ殺してやる！」

怨念を滾らせる宇都宮に、木山とアウレオルスが声をかけるのを
躊躇っていた。

砲弾と銃弾が飛び交う中を、四人の少女たちが駆け抜けていた。

カブトムシ型の機甲虫は、積んでいる装備により最も多くの種類が存在している。九ミリパラベラム弾を使用するカブトムシが最も多く、次に50口径マグナム弾。ライフル用の一二・七ミリNATO弾、ウランやタングステンによる徹甲弾が混ざっており、さらに二時間ほど前から大砲を積んだタイプも現われている。そのため力テゴリーで完全に分類するのは難しくなっている。

よって絹旗たちは銃弾を扱うタイプと、ツノを大砲に改造しているタイプで大雑把にわけていた。

「ああもつっ！ ウザッたい！ 機械ごときには格の違いまではわからないのかよ！」

口調が荒くなった麦野が「原子崩し（メルトダウン）」で曖昧なまま固定された粒子を照射する。

あつと言う間に溶解したカブトムシを睨み付けると、麦野は苛立たしげに周囲を見回した。カブトムシが五体にゴキブリが六体、さらに新型らしきカマキリが出現している。倒しても倒しても尽きることなく出てくる鋼鉄の虫たちに、『アイテム』のメンバーは消耗戦を強いられていた。

絹旗が無造作に踏み込みながらカブトムシを殴り飛ばす。

数発の弾丸を喰らいながらも足取りは止まらない。『オフエンスアーマー窒素装甲』

を貫きたければ、学園都市の防空部隊が使っている軍用ヘリ『六枚羽』のSRM21ミサイルでも持ってこいと言いたいところだ。それで貫けるかどうかは、試したことがないため絹旗自身もわからないのだが。

非力な少女の見た目を裏切るように、カブトムシはトランポリンのようにアスファルトの路面をバウンド、電柱をへし折りながらビルに突っ込んだ。

パンパンッ　と手を払いながら麦野たちの方へと振り返る。

その背後で、よきつと言うようにゴキブリが現われた。

「ひゃあっ！ ゴキブリ超いやあっ！」

ズガンツ　と轟音が響く。反射的に手が出た形になった絹旗は、取り乱したことを恥ずかしいと思ったのか、頬を赤く染めてコホンと咳払いする。

「大丈夫だよ、きぬはた。あれは本物じゃないよ」

「本物とか偽物とか、そんなことは関係ないんですっ！　あの超不気味なシルエットには姿形を超越した恐怖が宿っているんですよ！」

「でも、よく見るとかわいいよ？」

「な、なななっ、何を言ってるんですか滝壺さんは!？」

絶句している絹旗に、少女は不思議そうに小首を傾げていた。

こんな状況だと言うのに眠たそうにしている少女だった。髪は肩のところで切りそろえており、半袖の体操着とピンク色のジャージを着ている。狙ったような格好だが、多分この少女は何も考えていない。何気に巨乳なところもポイントである。

麦野と二人で『アイテム』の巨乳派を形成している、貧乳派の絹旗とフレンドにとっては憎むべき相手であった。……と、冗談はそこまでにしておいて。

彼女が滝壺理后。『アイテム』の構成員の一人である。

「ちよつと絹旗！　前に出すぎてるよ！」

「あ、ごめんなさい！」

サッツと後退する絹旗に合わせて、あらゆる物質を溶解させる閃光が進った。

麦野の手の動きと連動して、光が薙ぐようにスライド、同時に数体の機甲虫を溶解させる。

「アンタは『アイテム』の盾なんだからね。こんなところでみんなを失うわけにはいかないでしょ」

「おおっ、今日の麦野はよくわからないけど優しい訳よ！」

「む、麦野さん？」

単純なフレンドは騙されて喜んでいるが、絹旗は笑みを引きつらせる。

麦野がそんなことを言うのは、みみっちいギャラしか入らない仕

事のためリスクを冒す必要がないからだ。いや、ここは金額の問題ではない。

レベル5と言うヒエラルキーのトップを占めており、さらにセレブな麦野はあまりお金には執着しない。一億円とフレンドならほとんど迷わずにフレンドを選ぶが、フレンドが死ぬことよって麦野沈利の能力が強力になるなら躊躇わずフレンドを切り捨てる。

麦野はそう言う性格をしている。

騙されてはいけない。絹旗は自分に言い聞かせた。

「それにしても……榊二連ってここまでするような奴だったかなー」

「知ってるんですか、その人のこと？」

「小耳に挟んだだけだけどね」

絹旗は新種のカマキリ型が振り下ろした鎌を手の平で止めながら、カウンターで拳をぶち込んだ。

臓腑からオイルが漏れ出すあたりが無駄にリアルで気色悪すぎる。

「榊二連は兵器部門から出世した人物なのよ。駆動鎧パワードスーツの開発にも関わっていたみたい。本来なら三十代でお金ガツポリのブルジョワ生

活を送っているところだったんだけど、榊が考案した理論を誰かがパクったらしくてね。十年遅れでようやく一つの研究所を任された奴なのよ」

「苦勞人だったんですか」

「政治力はなかったみたいだけど、有能であることは確かだったみたい。ところが榊が立案した計画プロジェクトつてのが通称『巨大機械化甲虫計画』。強靱な虫の生命力と瞬発力に着目して、新世代の無人兵器を目指していたみたいけど、完成品は値段に見合わない性能の、強いて言うならよくできたロボット。計画が凍結されるのも無理はなかったんだよ」

「虫の生命力と瞬発力って……」

精密機械を積んでいる時点で、強靱な生命力は再現できない。虫の瞬発力は、あのサイズだからこそそのものであり、内部に骨格が存在しない構造では、大質量を維持することができないのである。コ

モドオオトカゲのような一部の例外を除いて、身体の横から足が出ている生物はサイズが小さい。身体の大きな生物は、縦向きに生やした足で自重を支えている。

「そう、土台無理な話だったんだよ。これで榊二連の出世コースは完全に幕を下ろしたんだけど、本人は納得できなかつたらしくてね。暗部まで真つ逆さま。私もついさっきまでは昆虫兵器で小銭を稼いでいるような小者だと思っていたんだけど」

「結局、小者が野心を燃やしてるってこともある訳よ」「それもあるかもね」

麦野は淡い微笑を浮かべた。

ふと、横合いから新手が出現する。カブトムシが三体。

銃撃しながら突撃する集団の前に、絹旗が躍り出た。衝撃が身体を貫き、歯を食い縛る。

「これだから虫つてのは嫌いなんだよね。犬や猫なら本能に従って強者に従うのに、虫は気にせず飛び回る。AI積んでるんだから、無駄なことを延々と続けるなつてのよ」

『原子崩し』がカブトムシを一掃。麦野が凝り固まった肩を解している。。

その後、マンホールを押し上げながらゴキブリが出現。

「麦野っ！ うしろ！」

フレンドが叫びながらスカートの内側から試験管を取り出し、ゴムの蓋を開けずにそのまま投げ付ける。

屈んだ麦野の頭を越えて試験管がカブトムシに命中。

だが、何も起こらない。

「っ！」

コイツ何やってんの？ な視線に堪えきれず、フレンドがレディース用の小ぶりの拳銃を取り出して三連射。十五口径の反動に涙目になるフレンドだったが苦勞は報われず、ゴキブリのボディを陥没させただけだった。

「陥没？」

デリンジャーの弾丸では傷を負わせるのがいいところだろう。だが、現実ゴキブリのボディはわずか数センチだったが陥没している。

「あはは、結局駄目だったみたいな訳よ。硝酸と塩酸、過酸化水素を配合した王水なんだけど……」

「気恥ずかしそうに言うと、フレンドは無数のラジコンカーを地面に放り投げた。

「どうやって制御しているのか、無数の小さな車たちはフレンドの持つ一つのコントローラーによって操られている。その一つがゴキブリの足下に潜り込んだ直後、真っ赤な炎が巻き上げられた。

「キャハハッ、やっぱりこっちの方が性に合ってるよね！」

フレンドは爆弾魔である。

戦車で最も弱い部分は上面と下面である。ゲリラ部隊がRPG7で戦車の天井を撃ち抜いているのも、地雷を抱えて特攻する日本兵も、この弱点を狙っているのだ。映画ではキャタピラを狙っている日本兵もいるが、そっちも効果的な妨害であると念のために言うておく。

さらに、昆虫の最も弱い部分は腹である。

強靱な外骨格に覆われておらず、すぐ近くには臓器が収められている。

フレンドのラジコンカーは、狙い違わず機甲虫の弱点を撃ち抜いていた。

「雑魚が相手だと調子に乗るんだから」

「あいたっ！」

敵を爆破したことによって悦に浸っているフレンドを、麦野が右手で呆れたように小突いている。

「大丈夫、私はそんなフレンドを応援してるよ」

「ちよつとー！ それはどう言う意味な訳よ！？」

ガーツと全身で怒りを表現するフレンドに、和気藹々とした空気が流れ始め。

激しい眩暈に襲われて絹旗はぶつ倒れた。

四肢の感覚が失われ、一瞬だけ視界が黒く染まる。フレンダや滝壺だけではなく、あの麦野でさえも膝を落としていた。

キーンとした耳障りな音色を認識して、ようやく何が起こったのか理解する。

「これは、音響兵器!？」

二十メートル先、スズムシが路上に止められていたセダンを踏み潰していた。

また新型。

一体どうなっているんですか　と内心で罵っていると。

「絹旗、滝壺を守れ!」

麦野に怒鳴られてしまう。

だが、足腰が立たなかつた。二本の足で立ち上がったとしても、身体に力を溜めることができず、すぐに転んでしまうのである。麦野は血が出るほど唇を噛んで、ようやく立っていると云ったところだった。アツサリと気を失ったフレンダが少し羨ましい。

「クソツ、コイツは今回のギャラはナシってことで……」

「麦野さん、後ろ!」

叫んだが間に合わなかつた。

耳鳴りが激しい。音が聞こえない。

誰かが叫んでいるようだが、滝壺が叫んでいるのだろうか。珍しいものを聞き逃したと少しだけ後悔する。

カマキリが巨大な鎌を振り上げている。咄嗟に打ち出した『原子崩し』がカマキリの片腕を吹き飛ばすが、敵は二刀流。動体を撃ち抜くべきではなかったかと思う絹旗だったが、こんな状態で狙いが付けられるわけがない。むしろ能力を発動させるだけの集中力を保てたことを称賛すべきだ。

「麦野さん!？」

やはり、間に合いそうにない。絹旗は唇を噛んだ。届かない手もどかしい。

そして、鋭利な鎌が振り下ろされた。

瞬間、瞬沓え渡るような青白い炎が大鎌を吹き飛ばしていた。

横合いから体当たりのように飛び込んだ影が、交差した一瞬で鎌の付け根を叩き折る。

影はそのままくると前転して、前進する速度を殺さずに突き進み、セダンに右手を突っ込んだ。

「とつとと燃えちまえクソ野郎！」

爆散。

金属片をぶちまけながら、灼熱が放出される。

アスファルトを蹴るように這い回る熱風に、絹旗は眉をひそめた。「夏場の猛暑をグレードアップさせるとか、マジやめて欲しいんですけど」

『サークル』のリーダー、宇都宮日向。

炎威を浴びながらも涼しげな風貌の青年が、ゆっくりと振り返る。ギャグ皆無のシリアスな顔に、一瞬だけドキッとする絹旗だったが、宇都宮はすぐに肩をすぼめて猫背になり、うだつの上からない大学生に戻ってしまう。百年の恋も一瞬で冷める姿だった。

「わかつてないな、猛暑の新記録を更新するためにサービスしてやってるんだよ。天気予報で四十度とか言われると逆にテンション上がったりするだろ。近所の奥様の話題の種にもなるしな。……と言うか、さっきの俺かつこよくなかったか？」

「……超台無しです」

宇都宮は絹旗たちのところに戻ると、何故か先に麦野に手を伸ばす。別に真っ先に駆け寄って欲しいなんて思っていないが、何故か納得いかない。引き上げられた麦野は不思議そうな顔を見ると、ふつと頬を緩めて困ったように苦笑する。

「馬鹿じゃない？ あの時のこと、まだ気にしていたりするの？」

「……ふむ」

言葉は嘲笑だったが、麦野の顔に相手を誹るものはなかった。

しかし、宇都宮の反応がどうもおかしい。顎に手を当てて哲学していますなポーズをしている。

「パッドはしていない……と。うーむ、サイズはDかEってところだな」

「ば、バツカじゃないの!? と言うか死ね!」

パンツと頬をぶたれた宇都宮は、まったく表情を変えずに今度は座り込んでいる絹旗の手を取ると、一気に引き上げた。強制的に立ち上がらされた絹旗は、二番目の不満を頬に溜め込んで膨らませる。

「こっちはAか。まあ俺はサイズに拘りはないから気にするなつて」

「……何でこんなことを?」

夜叉と化した絹旗に、宇都宮は爽やかに笑いかける。

「ギャグ成分が不足すると俺のストレスがマツハになって剥げるからな。最近はシリアスばつかでそろそろ我慢の限界だったんだよ。頭髪を守るためだ。我慢しておくれ」

と言うのは方便で、真相は自宅崩壊により宝物が失われて自暴自棄になっているのだが、そんなことは絹旗たちの知ったことではない。

「遺言はそれだけですか。とりあえず超死ね宇都宮! 麦野さん、

あとお願いします!」

「えーっと、毛根だけを焼き切るのって、どうするんだっけ?」

ある意味で死刑宣告である。

宇都宮は怒髪天を衝く二人を無視して今度はフレンドにちよっかいを出している。意識を取り戻したところで「ダブルAか。頑張れ!」とにこやかに言われて真っ白になるフレンド。

滝壺には無言で親指を立てていた。

白の日産マーチが勢いよく滑り込む。

「遅かったな」

「ダッシュボードを開いて配線を変えるなんて今回が初めてなんだぞ。むしろこの短時間で自動車の窃盗に成功したことを褒めて欲しい」

いところだな。……って、少年は七人も乗せるつもりか」

「俺、後部座席でハーレムやってみたかつ」

ズガンツ、と宇都宮の頭がアスファルトにめり込んだ。絹旗の『室素装甲』の拳が後頭部に炸裂したのである。ピクピクと痙攣している宇都宮の傍に滝壺が屈み込む。

「大丈夫、トランクが開いてるから」

名案とばかりに絹旗たちが便乗。車のトランクに一人の男を詰め込んだ。

十

携帯電話の着信履歴を見てげんなりと肩を落とす。白井からの着信が六度、佐天や初春からも心配されたのかメールが入っている。

美琴からは一件のみ。

『黒子にちゃんと謝るときなさいよ』と書かれたメールを見て悶絶する宇都宮。他人から氣遣われることに慣れていない、案外初心な男だった。

目が覚めると夕方になっていた。

深夜にゴキブリ二体と旅館で戦闘。逃走して学園都市に戻り『アイテム』と合流したのが昼前だから、およそ六時間ほどぶっ倒れていたことになる。身体が熱っぽいのは、アウレオルス救出時の負傷によるものだろう。枕元に置かれた構成物質に、宇都宮は苦笑した。「起きたんですか？」

「ここは？」

「『アイテム』のアジトの一つです」

なるほど　と宇都宮は頷いた。

単独で動いていた時には必要を感じなかったが、そろそろ『サークル』もアジトを用意するべきかもしれない。

「……まったく、心配させないで下さいよ。真つ青な顔をしていたから、一瞬死んでるって勘違いしそうになったんですよ？　ぐーすかと眠りこけているだけって、宇都宮はホントに超人騒がせなんですから」

「死んだフリは得意なんだ」

ブラツクなジョークは絹旗の気には召さなかつたらしい。

絹旗は不機嫌そうにベッドに横たわっている宇都宮の頬を引つ張った。あへへ、うへへ……と気色悪い声しか出せなくなり、宇都宮は抵抗の声を上げるのを諦める。パワーではこの少女に勝てそうにない。

二分間も頬を引つ張り続けていた絹旗だったが、やがて飽きたのか、ベッドの傍にあった椅子を引き寄せて腰を落とし、両手を頬に当てて宇都宮の顔をジツと眺めていた。真剣な眼差しに、宇都宮は何か不味いことをしてしまったのかと己の行動を振り返ってみる。

「超お馬鹿……」

責めるような色はない。むしろ、懇願するような声である。

「悪かった」

主語が抜けていたが、二人だけには意味が通じる言葉だった。

宇都宮は何が悪かったのかわかっていない。それでも雰囲気を察してそう言ったのである。

絹旗もどうして謝られたのかわかっていない。それでも雰囲気を察して言葉を受け入れた。

「俺は自分勝手に、馬鹿で、変態で、救いようのない偽善者でさ」

「超知ってます」

「どうしようもないんだ。それでも、お前は我慢してくれてるんだよな。悪い。やっぱこればかりはどうにもならない」

「超知ってますって。意識しないでも、身体が勝手に動いてしまうんですよね？　これでも長い付き合いなんですから、宇都宮のことなら大体わかってますよ。だから、気にしないで下さい。それは馬鹿なことばかりやってたら怒りますけれど、今さらそんなことで壊

れてしまうような関係でしたか？」

「ああ、そうだな」

頷いた。

「ゆっくりでいいか？ まだ結論は出そうにないんだ」

絹旗がよくわからないと言った顔をする。

「何のことですか？」

即座に問い返されるも、宇都宮自身、言葉で説明できそうになかった。語彙が足りないと言うのではなく、どんなことを言っても誤魔化しにしかならないと思ったからだ。

首を横に振る宇都宮に、絹旗は含むような微苦笑を浮かべる。

「宇都宮が選んだことなら、結局は何であれ超受け入れてしまおうんですけどね」

ゆったりと流れるような空気が心地良くて、宇都宮は両目を閉じた。

何を思ったのか、絹旗が宇都宮の前髪を払う。

「あー、お邪魔だったかな？」

ガバリ、と。二人は擬音語が付くほどの勢いで飛び退った。

木山とアウレオルスが居心地が悪そうにドアの隙間から部屋の中を覗き込んでいる。

「いいからさっさと中に入ってこい！」

顔を真っ赤にしながら宇都宮が怒鳴りつける。

しばらく黙り込んでいた木山だったが、やがて意を決したかのようになりアウレオルスの背中を押して、二人の前に突き出した。正確には、宇都宮の前だ。アウレオルスは捨てられた子犬のような瞳に涙を湛え、宇都宮に救いを求めるように訴えかけているようだった。

「学園都市に戻ったのでね。つい先ほど、知り合いの医者にアウレオルス氏を診せたんだが」

「……それで？」

弛緩していた空気が、強引に絞り上げられる。

ふらつく身体を意志の力で抑え付けて、宇都宮は上体を起こした。「その前に一つ。彼女に聞かせても問題ないのか？」

勿体ぶるように木山が言う。アウレオルスが堪えられないと言わんばかりに顔を背けた。

「気にするなよ。万が一の場合でも口止めが効く奴だから」

「宇都宮、私のことを超都合のいい女だと勘違いしてませんか？」

大体、私は

「結論から言うことにする」

絹旗が不服を訴えようとしますが、それを遮るように木山が言い放つ。

「アウレオルス氏は軍用クローンだ」

部屋からあらゆる音が消え去った。

10：機甲軍団（後書き）

二万文字。

一万文字でしんどいと言っていたあの頃が懐かしいです……。

今週前半はまったく筆が乗らず、これは今週の更新は無理かもと危機感を覚えていたのですが、どうにか更新することができました。

アウレオルス編、二つめ。

やっつけなサブタイトルと無理やり押し込んだコメディが浮いている話でした。

今回も長々としたものを最後まで読んで頂きまことにありがとうございます。

11：不死術者（前書き）

およそ五ヶ月ぶりの更新です。
遅くなつて申し訳ありません。

11：不死術者

軍用クローン。木山春生は重々しくそう言った。

宇都宮は黙り込む。それではアウレオルスは何者になるのか、その記憶は何なのか、疑問は尽きなかった。かつて蛇穴が自信満々に披露していた人類洗脳計画。そこでも用いられていた『学習装置』テストメントでも使って書き込まれたのだろうか。

「疑問があるんだが」

呟き、アウレオルスに視線を固定する。

動揺がまだ尾を引いているからだろうか。固くなってしまった口調に、アウレオルスは詰問されるような印象を抱いたらしい。すでに蒼白だった顔から血の気が引いて、白晳の美貌が際立っている。イケメンとはどのような顔をしても様になるようだ。

宇都宮は人差し指を立てる。

「旅館の襲撃を切り抜けた時の 敵を溶解した黄金に変えたやつは？」

「暗然……使える、としか言えない。何故だかわからないが、原理がすでに頭の中に入っているんだ」

よくわからなかった。能力者のクローンとして生産されたとする、研究者サイドが能力を伝えるようにするため、アウレオルスに何らかの処置を施したと言うことは十分に考えられる。とは言えアウレオルスに記憶が戻っていないため真相は闇に包まれたままだ。

対象を黄金に変える能力。『メタモルフォーゼ変身能力』の派生かもしれない。

「そもそも、どうして記憶を失っているんだ？ いや、逆に考えよう。お前は本当に記憶喪失なのか？」

「が、愕然……。気持ちにはわかるが、私を疑っているのか？」

「どう言っべきかな。人格に関してはある程度の信頼を置いているが、俺はお前の存在自体を疑っているんだよ」

アウレオルスはよくわからないと言いたげに首を横に振っていた。

絹旗も釈然としない顔をしている。どう言えば伝わるのか、上手い言葉が思い付かなかった。

宇都宮が言いたかったことを察してくれたのは木山だった。

「早急に精神鑑定を受けさせるべきだ　と少年は考えているのか？」

「ああ、そつか。その通りだよ。流石だな、研究者つてのは」

宇都宮は口笛を吹いて称賛した。

大前提として……そもそも、アウレオルスは失われるような記憶を持っていたのだろうか。クローン体として生産されたとするなら、かつては記憶を持っていない新品の状態だったわけだ。記憶を失ったのではなく記憶を入力されなかったとは考えられないだろうか。

宇都宮はアウレオルスを見据えた。冷や汗を流しながら狼狽えているアウレオルスに、偽っているような所作は見当たらない。それどころか、かなりテンパっている。

「ま、そんなところかな」

宇都宮はベッドから身体を起こした。脇腹には異物を埋め込まれたような痛みが残っていたが、努めて表情には出さないように意識し、重苦しい空気を追い払うように明るい声で言う。

「とりあえず飯にしようぜ。思えば丸一日、何も口にしてないような気がする」

「ご飯ですか？」

絹旗はキョトンと目を瞬かせた。それから合点が行ったように何やら一つ頷いた。

「何でもいいぞ。よきに計らいたまえー」

「意味もなくふんぞり返らないで下さい、無駄にむかつかます。と
言うかキモイ」

絹旗は唇をとがらせると、

「超適当に用意しますけど構いませんよね？」

と自信満々に胸を叩いて部屋から出て行った。

その意味深な様子に、宇都宮は置いてけぼりにされたような気分

になったが、絹旗直々に用意すると言つ発言に若干の期待を抱かざるを得なくなる。ギャルゲ脳のデータベースからささっと検索した結果によると、これはテンプレートなアレだろう。

「まさかの手料理イベントかよ！ 絹旗が『はい、あーん。超おいしいですよね宇都宮？』と言つ嬉し恥ずかしドキドキイベントですかこれは！」

とは言えだ。たしか絹旗は家庭的という設定ではなかったはず。学園都市だから一人暮らしが標準とはいえ、自分自身で料理を作らなくても特に問題ないのである。大抵の学生寮は朝晩の食事が提供されているし、レベル4の奨学金になれば、毎日外食で済ませることがができる。

もしかすると だ。

これは持ち上げてから落とす系のイベントではなからうか。

宇都宮は首をぶんぶんと振る。何だかんだで要領のいい絹旗だ。きつと料理ができるに違いない。漫画やアニメに出てくるような毒ポイスッキングクリエーター、フィクション殺料理は制作者の幻想なのである。

「愕然……。私は、ああ、私は……。誰なんだ？ ……誰なんだ？」

「お前もこつちに戻って来ような」

ポコンツ、と愚図っている野郎の頭を叩いた。目の前で延々とやられてはこつちまで気が滅入る。

アウレオルスは目尻に涙を乗せて、恨めしげな目を宇都宮に向けた。

「お前の問題は悩むだけ無駄だと思うぞ。まあ、あれだ。人間、腹が減つてるとネガティブになりがちだからな」

「陶然、それは詭弁でしかない。私の絶望が食物によって癒されると？ そんな滑稽なことがあつて堪るか。それでは獣。本能によって欲望を満たしただけに過ぎない」

「あつそ」

無碍にされたと思ひ、すねる宇都宮。しかし、アウレオルスは「だが」と独白のように言葉を紡いだ。

「……そのはずなのに、どうして私は君の言うことをもつともだと思っっているのだろうか」

「最初から素直にそう言っておけよ、ったく」

笑い合う二人。友情が生まれたような気がした。

「お待たせしました！」

「おお、早かったな。と言うか、早すぎじゃね？」

部屋に戻ってきた絹旗が運んできたものを見て　宇都宮の表情が凍り付く。

「と言うわけでオートミールですよ皆さん！」

絹旗が両手に抱えていたのは大量の缶詰だった。

「学園都市の軍事部門が開発した栄養満点かつ超最悪なぶつちやけと吐瀉物にしか見えない完全食品でございます！　あまりに不評すぎて超値崩れしていたところを買い叩いたんですけど、やっぱりあまりに不味すぎて倉庫に埋もれてたんですけどねー」

「ガツテム！　手料理イベント自体が幻想フィクションだったわけだ！」

「啞然！　やはり食物ごときでは私の絶望は癒されないようだ！」

息をぴったりと合わせて猛抗議する二人に、絹旗は笑顔でフックとポディーブローを叩き込んだ。

十

と言うわけで、作戦会議パート2である。

「現在地は『アイテム』のアジト、第十九学区の隅でいいんだよな」
「アジトってほどのものじゃないけど。結局、所詮は使い捨ての隠れ家なんだけどね」

さらりと言つてのけるフレンドだった。『サークル』は壊滅時にそう言ったものを没収されているため、こう言う時に『アイテム』が羨ましくなる。

「……と言つかさ、何やってんの？」

「何って、晩ご飯だけど？」

さらりと言つてのける麦野沈利だった。彼女はシャケ弁を箸で突いている。「やっぱ味が違うなー」とか言っているが、これは怒ってもいいのだろうか。

姿が見えないと思っていたら、こいつらコンビニに買い出しに出かけていたらしい。非常事態なのにマイペースすぎる。

恨めしげに絹旗を睨み付けると、彼女は気まずそうに明後日の方向を向いて口笛を吹き始めた。あまりに不味すぎるオートミールは二口で断念したと言うのに、食欲はまったく沸いてこなかった。栄養満点という点だけは認めなければならぬだろう。

……そろそろ話を進めよう。

この場には『アイテム』『サークル』の一同が揃っている。トアウレオルス

麦野から聞かされた話をまとめると、敵の親玉の名前は神二連。

『ファンド』のリーダーだが、すでに手駒の能力者は他の組織によって消されているそうだ。『ファンド』が神のワンマン組織だったため予想以上のしぶとさを見せているものの、いずれ追い詰められるのは目に見えている。

「だけど、奴は強気すぎる。真つ昼間の市街地に兵隊を放つなんて正気じゃないな」

「本当に気が狂ってる？」

滝壺理后が小首を傾げた。彼女自身すら信じていない、希望的観測だった。

「それで、結局どうする訳よ？」

「一つ思い付いたことがあるんだが。……いや、やっぱナシで」

「超意味深な言い方をされると気になるんですけど。『実は何も考えていませんでしたー』なんてことはありませんよね？」

不満げに追及の手を伸ばす絹旗に、ミスった　と宇都宮は舌打ちする。

しかし『アイテム』の少女たちに（滝壺を除く）「さっさと見え

やコラ！」的な目で睨まれた。

「その前に調べておきたいことがあるんだが」

「いいからさっさと吐きなさい。ぶち殺されたくなかったらね」

「……はい」

レベル5の威圧に負けて、宇都宮は泣きそうな顔をしながら答えた。

つまりだ。

学園都市の技術である機甲虫を学園都市の外部に持ち出してまで求めた。それがアウレオルスだ。アウレオルスは軍用クローンである。もしかするとアウレオルスは創造主の元から逃げ出したのではないだろうか。そして、その創造主とやらが榊二連である可能性は高いと宇都宮は推測している。

アウレオルスは気が付いた時には都市の外で虫に追いかけていたらしいが、催眠術やら何やらを使えばその記憶を思い出させることができるかもしれない。可能なら精神系能力者に見て貰いたかったが、宇都宮の知り合いに信頼できる精神系能力者はいない。『マネジメント 人材派遣』の連中に頼んだとして、もしアウレオルスの記憶から爆弾が掘り出された場合、最悪『サークル』が潰される。

「だから信頼できる医者に診せ」

「ああ、なるほど。超囃捜査ですか」

「確かにこのまま手をこまねいていても事態は好転しそうにないしね。調子に乗ってる榊二連を叩き潰すために、その話『アイテム』も一枚噛ませて貰うよ」

「結局、たまには宇都宮もいいことを言う訳よ」

「……どんまい、うつのみや」

口をポカンと開けて啞然としている宇都宮をそっちのけにして話は勝手に進んでいく。

「あの、皆さん？ それは俺も考えないわけではありませんでしたけど、あまりにもリスクが高すぎると言いますか……」

「時間がないのよ」

「……え？」

短く告げる麦野沈利に、宇都宮はポカンと硬直する。

時間によって追い詰められるのは榊二連の方ではないのか？

「榊二連の暴拳は、多分だけど時間稼ぎだと思う。数年がかりで準備していた榊二連は、何回も拠点を変えて追跡を振り切っているけど、防衛能力を持つ拠点なんて何個も持っているとは思えない。自暴自棄になっている、余命を引き延ばそうとしている、これならまだいいよ。だけど時間を稼ぐことによって、この状況をひっくり返せるという確信が榊二連にあるとするなら　どうなるのかな」

そんな宇都宮の考えを嘲笑うかのように、麦野は淡々と現実を語った。

深読みのしすぎだと笑い飛ばせば、どれだけよかっただろう。

表情を引きつらせているのは宇都宮だけではなかった。キョドっているアウレオルスは置いておいて、木山や滝壺の表情は最初から一定しているのだが、絹旗は笑顔で固まってしまっており、フレンドは口元をひくつかせていた。

「ええつと、それって実は超ヤバかったりするんですか？」

「ハウントドッグ『ハントドッグ 猟犬部隊』がやられた時点でとくにヤバイよ。それ以上のことなんて考えたくないな」

「……やるしかないってことか」

宇都宮は拳を握り締める。『サークル』には『ファンド』殲滅の命令は下りていない。だが、アウレオルスと言うカードを握っておきながら榊二連の暴拳を許してしまったとなれば、最悪『サークル』の解体すら考えられる。それは木山春生を学園都市の闇に引き渡すことを意味する。……だからと言って、アウレオルスを『アイテム』に押し付けて傍観に徹することができるほど宇都宮は非情になれそうにない。

「さて、そろそろ出発しようか」

麦野はゆったりとした自然体でさらりと言うと、さっさと一人で部屋を出て行く。それに少し遅れて『アイテム』の三人が後を追い、

宇都宮も立ち上がるうとしたのだが、ふらりと身体がよろめいた。脇腹の傷と疲労で膝から力が抜けたのである。

「宇都宮!？」

四つん這いに倒れかけていた宇都宮に気付いた絹旗が慌てて駆け寄り、支えようと肩に手を触れた瞬間、彼女は不安げな眼を驚きに見開かせた。

参ったな　と宇都宮は自嘲するかのよう^にに微笑みを浮かべる。

「何ですかこれは！　超すごい熱じゃないですか!？」

抗生物質を飲んでいるから感染症の心配は少ないだろうが、宇都宮は発熱していた。本来なら今すぐ入院するべき怪我である。無理を押し通しているのだから熱ぐらい出るだろう。

「大丈夫だつて。心配しすぎだ」

「で、でも……」

痛みには慣れてしている。苦しいのも慣れてしている。

すぐに立ち上がって薄っぺらい笑みを浮かべた宇都宮の瞳に、泣きそうな顔をした絹旗が映っていた。

十

パワードスーツ

駆動鎧を着た男からの報告を、木原数多は黙したまま聞いていた。ヘルメットを被っているため表情は窺えないが、震えそうになる声を押さえ付けていることが窺える。彼らは恐れていたのだ。機械の敵ではない。目の前の、白衣をまとった研究者を。

木原数多は無防備だ。護身用の拳銃を持っているが、駆動鎧ならば抜く間すら与えず殺すことができるだろう。

それでも木原の手下は主に刃向かうことはない。彼らはただの番犬で、主の命令を忠実に遂行する兵隊だからだ。しかし、それだけではない。とても殺せそうにない、圧倒的な彼我の差を感じさせる

ような、そんな雰囲気の木原がまどつていたからだつた。

「おいおい、何をそんなにビビってるんだ？」

「あ、いえ」

木原は気圧されている部下を、自動車の後部座席から睨め付ける。さつさと言え、この役立たずが　と侮蔑を露わにした態度に、部下はまるでこの世の終わりのような絶望の声を絞り出した。

「ポイントレィフのアジトも外れでした。数時間前まで使用していた形跡はありましたが、足止め用かと思われる機甲虫が三体ほど配備されていただけです。なお、その際に部隊の者が三名重傷を」

「余計な説明はするなつての。つたく、テメエの所為で脳の記憶野に無駄な情報が混じつただろうが。あん？　責任取つて死んでくれるつてのかよ？」

「は、え？」

「はい無能確定。お前、もういいよ」

木原の頭の中で、目の前の部下を次の作戦の弾避けに使うことが決定される。

命運が尽きそうになっていることに気付いていない部下は、鯨張つた態度で敬礼してから持ち場に戻つていった。その背中に漂っているのは安堵である。救いようがない馬鹿だよなあ　と木原は表情一つ変えずにそう思い、小型端末のモニタに視線を戻した。

現在、木原数多がひきいている『ハウンドドッグ 獵犬部隊』は壊滅状態にある。

壊滅。そう、まだ殲滅されたわけではない。戦力の五割が病院や焼却炉に行ったただけだ。人数の減つた小隊をバラして再編する程度の作業など、木原数多なら三十分もかからない。たしかに戦力は低下しているが、驚くべきことに（木原にとっては当たり前のことなのだ）作戦能力は未だに失われていないのだ。

木原自身も肩に三発の銃弾を浴びて病院に担ぎ込まれたが、学園都市の最先端医療によって復帰している。中世までよく使われていた焼灼止血法は、レーザーメスで毛細血管をピンポイントで焼き付けて止血する手法へと進化しており、塗布された軟膏は感染症を完

全に防止する。たとえ“身体に風穴が開いていても”、命さえあればどうとでもなるのだ。麻酔で思考が鈍ることだけが難点だった。

「この程度の怪我、負傷には入らねえんだよ」
判明している残りのアジトは三つ。

しかし、そこに榊二連はいないだろう　と木原は考えている。

「榊二連よお、テメエはちつとやりすぎた」

次も空振りだろう。……だが、意味はあるのだ。

木原の部隊は“猟犬”である。逃げ場を一つずつ潰して追い詰める捕食者である。

奴の目的は想像は付く。

「ご自慢の機甲虫を使って非公式武装組織を潰して学園都市の戦力をすり減らす。その結果によってアレキスターに交渉を持ちかけ、最大戦力を有する暗部として君臨する。しかし、それでは見通しが甘いと言わざるを得ない。おそらくはまだ、切り札を切っていない兵隊で追い詰めて奥の手を使わせることもできるが、それではただでさえ減ってしまった戦力が消し飛んでしまう。」

「そう言うわけだ。せいぜい頑張って奴を追い詰めてくれや、ガキども」

木原の端末には、機甲虫と戦闘を開始した能力者たちの映像が映っていた。

十

作戦は単純だった。

宇都宮、麦野、絹旗の戦闘に長けた三人が街中に繰り出して機甲虫を呼び寄せる。滝壺も最悪の事態に備えて手元に置いておきたいと言つ麦野の判断により、三人に同行している。

アジトのある第十九学区は再開発に失敗して急速に寂れてしまっ

た学区である。潜伏できる場所が存在しているのは敵にとっても明白であろう。その捜索のために機甲虫が放たれていることは確認済みである。コンビニの買い出しはそれを確かめるためだった……とは言い訳のように聞こえたのだが。

木山、アウレオルス、フレンダはアジトで待機。非戦闘員とその護衛である。

しかし、これは偽装だった。

外から派手な爆音、破砕音が聞こえてくる。アウレオルスはゴクリと生唾を呑み込んだ。

囿にされる恐怖はあった。

「うわわっ、やっぱり見付かっちゃう訳よ！ いや作戦通りなんだけど」

フレンダが悲鳴を上げる。

入り口に配置していた対地雷クレイモアが炸裂したのだ。

先頭の一体が中破するものの、これで居場所がバレた。すぐさま後続がアジトに入り込む。

「アウレオルス氏。一つ言っておかなければならないことがある」

木山春生が相変わらずのつかみ所のない顔をして、しかし真っ直ぐにアウレオルスに言った。

「死ぬなよ。君は自分の命に執着していないように見える。人生を持つていないのだからそれも仕方がないのだろうが、君が死ぬば少年が悔やむ。自分の力が及ばないために死んだのだと、あらぬ罪を被ろうとするだろうからな」

「……約束はできない」

「そうか」

木山は表情を変えずに答えた。しかしアウレオルスは続ける。

「だが、努力はしよう」

「そうか」

それに、逃げ場などどこにもない。榊二連が勝つにしろ破れるにしろ、事件が収束した時にアウレオルスが浮いてしまう。順当に考

えるならアウレオルスは廃棄処分されるのだろう。現在も『サークル』の庇護を受けているから生きていられるだけのことで、もし『サークル』が合理的な組織だったなら、わざわざ不確定要素を抱えることなどせずに、とうの昔に処分されている。

宇都宮の手前そう言わなかっただけで、『アイテム』はアウレオルスを殺しておくべきではないかと考えたはずだ。

だから感謝しよう、宇都宮日向に。

作戦が失敗すればアウレオルスは死ぬだろう。だが、彼を恨むこととはないと誓っておこう。

「……あー、結局トラップは全部スルーな訳よ。じゃ、後は頑張つてよね」

フレンドが面白くなさそうな言つてすぐに、壁から電動ノコギリのようなものが突き出した。

真つ赤な火花を飛ばしながら、四角に切り取られる壁を長め、アウレオルスは覚悟を決める。

『これでチェックメイト。わざと追い詰められたように見えるのだが、奥の手でも残しているのかな？』

「寂然。残念ながら、お手上げた。どうやってこの場所のことを？」
『この状況で外出した三人のお陰だよ。近くに隠れ家があると思つて探索の数を増やしただけさ。もっとも、私はまだ疑っているのだがね。いや、これは疑いと言うよりも確信だろうな。健気なことではないか。発信器でも付けて本当のアジトを突き止めようとしているのだから？』

「それは」

『まあ、どちらにしろやることは変わらない。君たちの思惑によつて私の計画が崩されることなど、絶対的にあり得ないのだからね。さて、まずは邪魔者を消しておくとしようか』

ジャキツ　とカブトムシから銃口が飛び出す。

殺意の塊は木山とフレンドの向けられていた。フレンドが「ひいっ」と情けない悲鳴を上げる。

「待て！ そつちがその気なら、私にも考えがある！」
言いながら懐から取り出したものを米神に押し付ける。機甲虫が
『ほう』と感心するように声を上げた。

拳銃。

『自害するつもりかね？』

「そうだ。恩人の彼女たちを害すると言つなら、私は引き金を引く
ことを躊躇わない」

『ククツ、ハハハツ！ 健気だ！ 実に健気だ！ 作り物の人形が
人間の真似をしようと云うのか！』

「同然！ 私は人間だ！」

『違う。研究素体だ』

冷徹に吐き捨てる。お前は生き物ではなくモルモットだと、そう
言っているのだ。

『だが、たしかに今貴様に死なれば面倒なことになる』
「なら」

瞬間、カブトムシの前面がカパリと開いた。ボルトが吹き飛び、
爆圧で飛び出したのは捕縛用のネットである。

アウレオルスはそれを為すがままに受け入れた。手足の自由が利
かなくなり、『瞬間錬成^{リメン・マグナ}』も使えなくなつたが、彼は仲間を信じてい
た。

そして、アウレオルスは目を閉じた。

木山とフレンドダを守りきつたと信じて 直後、二つの銃声が耳
朶を打つ。

「なっ、約束が！」

『約束などしていない。私は“死なれば面倒なことになる”と言
っただけだぞ？』

背中冷たいものが走り抜ける。

それは怒りだ。卑劣な敵への殺意だ。

床に広がっていく血だまりを見て、アウレオルスは榊二連を殺す
と決意した。

手術室に入った二人を、宇都宮は為す術もなく見送ることしかできなかった。

「俺の所為だ」

「違う。作戦を考えたのは私だ」

それは違う。宇都宮が巻き込んだのだ。作戦に異を唱えなかったのだ。

何ガリアリティを出すために非戦闘員と護衛を置いておく　　だ。とつくに榊二連に後がなくなっていることはわかり切っていた。

榊二連の善意に期待した？

どこのどいつだ、そんな馬鹿は。……そう、宇都宮日向だ。

「俺の所為だろうが馬鹿野郎ッ！」

壁を殴り付ける。

宇都宮は怒っていた。自分自身に対してだ。

何度も、何度も、壁を殴り付ける。それは不甲斐無い自分を責めるための自傷行為だった。

「やめて下さい！」

パンッ　と頬に熱が走る。絹旗が泣きそうな顔をして、振り抜いた右手を抱きしめていた。

「壁殴って自分を超痛め付けて、それで満足するんですか？　今やらないといけないのはそんなことなんですか!？」

「……すまん」

我に返る。

そう、そんなことをしている場合ではない。意図的にそう仕向けたのだが、アウレオルスが敵の手に落ちてしまっている。言い方は悪いが、こうしている間にも時間は刻々と過ぎていく。

後はカエル顔の医者に任せるしかない。

「うつのみや、手を出して」

「ん？ ああ、悪いな」

どこから持つて来たのか、救急セットを取り出した滝壺が宇都宮の手を取った。消毒液が吹きかけられて痛みが走り、顔をしかめる宇都宮を余所に、手際よく包帯が巻き付けられていく。わざわざ宇都宮の馬鹿の後始末をさせてしまい、申し訳なさど気恥ずかしさどで、宇都宮は開いていた手で頭を掻いた。穴があつたら入りたい気分だ。

処置が終わつて顔を上げると、そこには慥然とした絹旗がいた。

「むむむ、何だかわかりませんが超ム力つきます」

「そんなことはどうでもいいから、さつさと話を進めるわよ」

そんなことつて……と不満そうにごねている絹旗をスルーして、

麦野は携帯の画面にGPSを表示させた。

「アウレオルスに取り付けていた発信器はまだ外されていない。場所……第十学区の霊園みたいね」

「霊園ですか？」

「もしかすると、地下に空洞でも広がっているのかもしれない。榊二連の本拠地つて考えてもいいんじゃないかな」

「……つてことは」

「これは誘われてるね。榊二連はアウレオルスを手中に収めて、切り札を手に入れた可能性が高い。ここで一つ提案」

麦野が立てた人差し指に、三人の視線が集中する。

「わざわざ真正面からぶつかつても得られる物は少ないし、ここは他の組織が手を出すのを待ってみない？」

「それは」

アウレオルスを見捨てる と。

麦野は平然とそう言った。あまりにも冷徹な一言に、宇都宮の思考が真っ白になる。

理屈はわかる。組織のリーダーとしての当然の判断だ。そもそも

見え透いた罫に飛び込むなんて、自殺行為もいいところだろう。

それでも。

それだけは。

「絶対に、嫌だ」

それは子どもの我が儘のようで、呆れたのだろう。麦野は小さく嘆息する。

「仲間を見捨てるなんて死んでも御免だ。『アイテム』がやらないなら俺一人でやる」

「仲間、ね」

出会ってまだ間もない人間のことを仲間だと、宇都宮は思っていたのだ。そして、仲間を 木山を撃った奴を野放しにすることは宇都宮は絶対に認めるつもりはない。

覚悟を露わにした宇都宮を、麦野は手のかかる子どものように見ている。一応宇都宮は年上なのだが。

「まあ、さっきの話は冗談なんだけどね」

「え？ あれね？ 麦野さーん？」

「私が他の組織に手柄を譲るわけなんてないし、フレンドが撃たれたのに何もしなかったら、第四位が神二連に負けたってことにされかねない。やることは最初から決まってるのよ」

いや、だったらさっきの提案は何だったのかと。

ガクリと肩を落とす宇都宮に、絹旗が小声で耳打ちした。

「麦野さんなりの優しさだと思いますよ」

「んな馬鹿な。あれはサディストだろ。優しさなんて絶対にないだろ」

「いや、私もそう思ってるんですけど、今回は宇都宮、超怪我人じゃないですか。熱もありますし、宇都宮を言いくるめて病院に置いていこうって思ってたんじゃないですかね？」

ボソボソと囁き合う二人に、滝壺が振り返って言う。

「二人とも。それ、聞こえてるみたい」

「え？」

病院の壁がどろりと溶解している。

「誰が優しさなんて絶対にないだつてえ？」

笑顔のレベル5に、宇都宮と絹旗は「死んだな」と思った。

……時間がないつてのに何やってるんだろう。

十

コツ、コツ……と、革靴がリズムを奏でている。

「まったく度し難いものだな、学者と言うものは」

そこは最後のアジト、第十学区の地下墓地だった。爆撃にも耐えられる核シェルターである。さらに機械による防衛装置や機甲虫が各所に配置されていた。

無数のモニタの光を浴びて露わになったの顔は　アウレオルス。

「貴様もパラケルススの子孫。学者の末裔じゃないかな？」

「“軍用クローン”の私にも先祖がいると？　いや、そもそもあの悪魔の錬金術師は学者とは言えんよ。ホムンクルスを操り、賢者の石を手に入れた。……完成された閉鎖世界『黄金錬成（アルスⅡマグナ）』の中だけの奇跡ではあるが」

吐き捨てるように言いながら、アウレオルスは背後を振り返った。青年の顔が狂気に歪む。

「お前は、何だ……？」

「貴様と同じだよ」

アウレオルスは逡巡し、狂気的笑みで答えた。

アウレオルスが二人いる。

「便宜上、アウレオルスⅡセカンドとでも名乗っておこうか。アウレオルスⅡファースト」

四肢を拘束されたアウレオルスが第一号。軍用クローンのプロトタイプである。

そしてそれを元に設計されたのが第二号、完成品だ。

二つともオリジナルのDNAを設計図にして造り上げられた軍用クローン。

榊二連はこう思った。造った本人が言うのも何だが、グロテスクだな　と。

「何故、こんなことをした？」

「それは何のことかな？」

「どうして二人を撃つたのかと云っているんだ」

アウレオルス「ファーストの声は怒りに震えていた。

榊二連の反応は冷淡だった。「ああ、そのことか」と言われてようやく思い出したほどだ。

「後顧の憂いを断っておいただけだよ。後になって邪魔になるかもしれないからね。しかし、創造主に対して随分と生意気な物言いではないかな。私がいなければ君は生まれていなかった。感謝されることはあれ、それを誹られる言われなどないはずなのだが」

「ふざけるな！」

セカンドが目線で榊に確認を求めている。さっさと処分しろと言いたげな目だ。これが究極の同族嫌悪かね　と喜劇を見るような面持ちで、榊は首を横に振った。

「別にふざけてなどいないのだがね。私は合理的な判断の下に撃つた。ただそれだけのことだよ」

言ってモニタの片隅に目を向ける。

メトロノームの針が規則的に往復していた。研究所の所長を務めていた頃に、部下の研究員が持ち込んだものだ。それがないと気分が落ち着かないという、見ているこっちまで気が滅入るような神経質な男だった。そして、その男は天才だった。

『巨大機械化甲虫計画』で失敗した榊二連の後釜として研究所の所長になったのがその男だった。

潮時なのだろう。

冷静に、そう思った。

なぜなら、榊二連は“魔術師”なのだから。

「学園都市の暗部を掌握するか、失敗して命を落とすか。学術的好奇心が沸いてくる議題だとは思わないか？」

「……思わないな」

「そうだな。そんなことはどうでもいい」

榊二連はオフィスチェアから立ち上がり、端末の入力機器に触れた。ジジジツ　と焼けるような音がして、時代がかった蛍光灯が光を放つ。

「これは」

アウレオルス「ファーストの顔が今まで以上の驚愕に染まった。

「一体お前たちは、何を……」

そこには一昔前のSF映画のような光景が広がっていた。

規則正しく並べられたガラスケースの中には、水色の溶液が満たされていた。

浮かんでいるのは　脳髄。

「臓器移植に用いられる臓器培養槽だ。新鮮な臓器は脳死者からしか手に入らないからね。ドナーを待ち続けている患者を助けるために設計された、禁忌の一手前にある機械だ。私の使い方は禁忌でしかないのだがね」

「何、で……」

アウレオルス「ファーストの掠れた声に、榊二連は微笑みながら答えた。

「実を言うと、君はすでに用済みなんだ。七十二個の脳髄を『幻想御手』のネットワークによって接続する。最初のプランでは“君がこの脳髄たちを統率することになっていたんだけど、先ほどセカンドが完成したのでね。怖じ気づいて逃げ出してしまった君のことを踏まえて、今度は『学習装置』で君よりも安定した自我を植え付けてある。絶対服従の割には扱いにくい感が否めないけどね」

「余計なお世話だ、創造主」

アウレオルス「セカンドが慥然とした顔で言い返す。

「……逃げ、出した？」

「なるほど、やはり忘れていたのか」

どうにも丸くなりすぎているなと思っただら、やはりそうだったのか　と榊二連は納得する。そう言うこともあるのだらう。絶対服従の刷り込みから逃れるには“死ぬ”しかない。

そこまで自分に従うのが嫌だったのかと残念に思っている。

「戯れは終わりだ。貴様はネットワークに干渉しかなない障害物でしかない。創造主、殺害の許可を」

「施設を巻き込むなよ」

「留意しよう」

アウレオルスⅡセカンドが歪んだ笑みを浮かべ、袖口から短刀を取り出した。

榊はやれやれと肩をすくめる。

直後　核シエルター並みの強度の壁から光が溢れ出した。

円形にくり抜かれた壁から三つの人影が飛び出してくる。

「よし、まだ生きてるな。おいおい、何だよ鳩が豆鉄砲を食ったよ
うな顔をして。作戦通りだろ？」

「誰かさんがヘタれた所為で、超遅刻もいいところなんですけどね」
緊張感がないわね。ま、どうでもいいんだけど」

険むな光を瞳に宿して、第四位は榊二連を睨み付ける。

レベル5が倒れれば、他の組織は榊二連に手を出さなくなるだらう。

「洗礼名はアントニウス榊二連」

榊二連は胸から提げていた十字架を左手で握り締める。そして右手で十字を切った。

「これより異教徒の処刑を開始する」

侵入者たちを見る目は、研究素体に向けるものと何ら変わりなかった。

榊二連が祈りを捧げるのを見ていた宇都宮は、内心で首を傾げていた。榊二連はキリスト教徒だった。それだけのことなのだが、学園都市の科学者が神に祈るといふ行為がどうにも腑に落ちない。

だが、それよりも。

「アウレオルスから離れる、木偶人形」

右手で作り出した火球をアンダースローで放り投げる。炎の尾を引きながら、火球はもう一人のアウレオルスを焼き付くさんと迫った。

火球はもう一人のアウレオルスの短刀によって打ち払われたものの、その隙に縛られていたアウレオルスに駆け寄り、指先に宿した火線で拘束を焼き切った。

背後から爆音が聞こえ、一瞬だけ振り返る。

麦野と絹旗が榊二連を護衛する機甲虫を破壊している。向こうは任せても問題なさそうだ。

「宇都宮、私は……」

「またへこんでるのかよ。木山とフレンドが撃たれたのは自分の所為だとも思ってたやがるのか？」

それは先ほど宇都宮も通った道だった。

アウレオルスが唇を噛む。 凶星 のようだが、それだけではなさそうだ。

「脳味噌がぶかぶかと浮かんでいる光景を見れば、事情はわからなくてもとにかくヤバイってことはわかる。多分これはお前と関係があることなんだろう？」

「……ああ」

「だけど、今しなければならぬのは、これを造りだしたド阿呆を

燃やし尽くすことだ。違うか？」

「ああ。ああ、そうだな。元凶を断たなければ、悲劇はまだまだ続くんだ」

アウレオルスが立ち上がり、短刀を取り出す。

もう一人のアウレオルスが…… ややししいからアウレオルス二号も短刀を構えた。

「ふむ、『瞬間錬成（リメン＝マグナ）』は使えろと。『黄金錬成（アルス＝マグナ）』のバックアップもなしによくやるものだ。それだけ我らが創造主が優れているとクリエーター言うことか。しかし試作型プロトタイプの貴様にできるのはそこまでだ」

「そちらも『黄金錬成』は使えないはずだ。幾ら七十二の脳髓を用意したとしても、発動するための時間は足りていない。宇都宮、君の炎か私の刃があれば、奴なんて敵ではないはずだ」

テンションがハイになっているのか、アウレオルスは何時もより好戦的になっていた。

わざわざそれに水を差すことはないだろう。宇都宮は一つ頷くと、両手に青い炎を乗せて、アウレオルス二号の周囲を旋回するように回り込む。

反対側をカバーするのはアウレオルスだ。

鎖に繋がれた短刀が射出され、アウレオルス二号はそれを短刀で打ち払う。

その隙。宇都宮の炎がアウレオルス二号を貫こうと迫り。

「我が身を主に捧げ、完全なる道を求める」

肌に寸前で停止した。

な、に。と、声にならない音が喉から漏れ出す。

「避ける、宇都宮！」

啞然と突っ立っている宇都宮に、アウレオルス二号の凶刃が打ち下ろされた。

「ッ！」

一瞬後に我に返った宇都宮が自爆覚悟でアウレオルス二号に炎を

ぶつつける。爆風で吹き飛ばされ、地面を転がりながらも宇都宮はアウレオルス二号を見上げ 絶句した。

無傷。アウレオルスは最初から一步も動いていない。

「あれは、能力なのか？」

「防御系の何か……いや、それはおかしい。」

短刀で斬りつけた相手を黄金に変える アウレオルスの能力はそのようなものだったはずだ。となるとアウレオルス二号の短刀にはその能力がないと言うことだろうか。

「厳然、あの短刀は私のものと同じだ」

そんな宇都宮の考えを読んだのか、アウレオルスが警告する。

あり得ないことを考えてしまう。アウレオルス二号『デュアルスキル二重能力』である、と。

「魔術を見るのは初めてか？」

一撃で仕留めると言わんばかりに必殺の刃を構えながら、アウレオルス二号が悠然と歩き出す。

真っ直ぐに伸ばされた腕から、刃が射出。予備動作の見えない攻撃に、宇都宮はほとんど勘で左側に身体を投げ飛ばした。受け身を取るような余裕すらなく、打ち付けた身体の痛みを堪えながら這うように走り抜ける。

刃が頭上を通り過ぎたのを確認し、宇都宮は炎の弾丸を投げ付ける。

「無駄だ。貴様の炎は私に届かない」

侮蔑するように、アウレオルス二号が言い捨てる。

炎の直撃を受けたはずのアウレオルス二号は、やはり無傷。衣服はそのまま、髪の毛一本すら焦がしていない。

「これは『黄金錬成』ではないのか？」

「だから何なんだよ！ アルス何とかって何だ！ 魔術って何だよ！？」

「君たちの能力開発とは別の体系を持つ、大雑把に言うと魔法使いのようなものだ。しかし、クソツ。何の術式を使っているんだ

「？」

意味わかんねえと吐き捨てながら、宇都宮は三度目の攻撃を叩き込む。手応えを感じる間もなくその場から離れると、アウレオルス二号の短刀が予想通り炎を突き破って飛び出した。

打つ手がない。

あれが防御系の能力だとしても、現在の宇都宮の出力では貫くことはできない。『磁気単極子^{モノポール}』を使うかと考え、首を横に振った。

『幻想御手』事件で脳に付加をかけすぎている。そろそろ休みを設けないと脳がぶっ壊れかねないのだが　暢気なことを言っている場合ではなさそうだ。

「存外にしぶとい。さっさと諦めたらどうだ？」

「言ってる、木偶人形。油断していると焼き殺されることになるぞ？」

「私を木偶と？　……不快だな。不愉快極まりない。ならば先に女どもから殺してやるうか。貴様は為す術もなく仲間が殺されるのを見ているんだな」

頭に血が昇る。あれは挑発だ。冷静になれと自分に言い聞かせ。

いや、ちょっと待て。今のはあまりにもあからさますぎる挑発だった。それが何を意味しているのか、少し考える。

もしかすると。

打つ手がないのは向こうも同じ？

確かに、あの短刀は厄介だ。一撃必殺。しかし、当たらなければどうと言うことはない。避けられ続けている現状に、アウレオルス二号は焦れている。

麦野と絹旗が榊二連と片を付けて、こっちに駆け付けてくれれば。「言っておくが、我が創造主は私よりも優れた魔術師だ。援軍は来ないぞ」

「……ああ、そうかよ！　わざわざ説明してくれてありがとよ」
拳を握り締める。青い炎が揺らめいた。

そうだ。自分よりも年下の女の子に助けて貰おうなんて、何を情

けないことを考えてる。どうせならさっさとアウレオルス二号を倒して助けに行くと言うべきだろうに。

考える。どうすればあの防御を突破できるのか。

単純な火力が通じるとは思えない。あの防御には別次元の不可解な力が働いている。それが魔術なだろう。

飛来する短刀を、脳味噌が浮かんだ水槽の後ろを回り込みながら回避する。

「、小癩な」

短刀が水槽に突き刺さる直前、アウレオルスが鎖を引き戻した。

あの脳味噌は攻撃できないと。言い方は悪いが、クローニング技術の発達で臓器一つを生産するだけなら、それこそアウレオルスのような軍用クローンよりも低コストで量産できるはずだ。水槽ごと宇都宮を貫くと言う選択肢もあつたはずだが、アウレオルス二号は躊躇わずに攻撃を止めた。

あれが、アウレオルスと同じDNAから造られた脳味噌だとするなら。

そこまで考えたところで、アウレオルス二号にアウレオルスが射出した短刀が突き刺さりそうになり、途中で停止する。

「……あれ？ これは」

目の前の水槽に入っていた脳味噌が、ボロボロと崩れ落ちていく。慌てて周囲を見回すと、同じように崩壊した脳味噌が幾つか見付かった。

アウレオルス二号が用いていた術式は、宇都宮たちの知る由ではなかったが、『死海規定（セレク「ハヤハド」）』と言う。

聖書として扱われない偽書の一つ、死海文書を書き上げ、それを隠したクムランの共同体の術式である。彼らは祭儀を重んじ、罪の赦しの贖いを最重要視していた。そして“完全なる道”を求め、自分自身を霊的な犠牲として神に捧げたのだ。すなわち 犠牲による救済である。

本来はただ自分を戒めるだけだったものだが、共同体が戦いに巻き込まれることよって歪んだ。

共同体の一人を犠牲にすることで神の加護を得る殉教魔術。

ローマ軍に対しての備えだったと言われているが、紀元前のことなので今となつては推測しかできない。

宇都宮が声を張り上げる。

「おい、アウレオルス！ こいつが防御能力を使う度に、脳味噌がぶっ壊れてる！」

「ッ、轉るなあ！」

それまで余裕を誇っていた態度が一変する。

アウレオルス二号は鬼気迫る形相をして宇都宮の口を閉ざそうと自ら短剣を振りかぶって斬りかかった。

凶星。それを聞いたアウレオルスは、一瞬だけ躊躇いを見せたが、短刀を振り回して周囲の水槽を破壊し始めた。

「貴様ら！ やめろ！ それは黄金へと至るための標だぞ！」

見苦しさすら感じさせるほど、アウレオルス二号は無様だった。

化けの皮を剥いではまえば、うじうじと悩みがちなアウレオルスよりも、精神的な脆弱さが露呈する。分別の付かないガキが手に入れた力に酔っていただけのようにしか思えなかった。

宇都宮の目は、すでにアウレオルス二号を見ていない。

水槽に浮かぶ脳髓に向けて自己満足の言葉を放つ。もし彼らに意志があつたとしても、宇都宮は彼らを救えない。

「悪いな。許してくれとは言わない。存分に恨んでくれ」

五発の炎球が宇都宮の右手から溢れだし、宙に浮かび上がった。

アウレオルスが短刀の鎖を引き戻す。

「やめろおおおおおつ！」

七十二個の水槽がすべて破壊されるまで、一分もかからなかった。

機甲虫が錐揉み状に吹っ飛んで壁に激突、衝撃で足がねじ曲がって動けなくなつた。

すでに二十体以上の機甲虫を破壊しているのだが、敵は諦めずに兵隊を送り出している。こちらが疲弊するのを待っているのだろうか。だとしても、こつちには麦野沈利がいる。個人で軍隊と戦えると言われている学園都市最強の一角が、この程度の物量に押し潰されるわけではない。

音響兵器を有しているスズムシ型は発見と同時に麦野が消し飛ばしている。

「超歯応えがないですねー、と絹旗は肩すかしを食わされたような気分で、振り抜いた右手をぶらぶらと揺らした。白衣のポケットに両手をつっ込んでいる榊二連を観察する。やっていることが小心者じみているためか、ラスボスのような威圧感はまったく感じられない。

そのはずなのに、違和感が、なくならない。

「馬鹿みたいに突っ立ってんじゃないわよ、絹旗！」

「あ、すいません！」

天井に張り付いていたのだろう。雨のように降ってくる機甲虫は、
麦野は腕の一振りによって全滅した。『拡散支援半導体』。カ
ード状のそれは直線にしか飛ばせない光線を拡散させる。

「レベル5に物量作戦は通じないよ、榊二連？」

「慢心はよくないな、『原子崩し（メルトダウン）』」
奇襲が無に帰したと言うのに、榊二連は動じていなかった。

それどころか、逆に肩の荷が下りたと言うように、さらに余裕を深めたのである。

「やれやれ。能力者と言うものは、どうしてそこまで視野が狭いのか。まさか自分の能力を神聖視しているのではなかるうな？ 物量

作戦は通じないだなんて、救いがたい患者のようなことを言わないで欲しいものだ」

榊二連が指をパチンを弾く。

同時、絹旗たちの周囲の床がぐるりと裏返し、固定された缶ジュースのようなものが露わになった。

これは。

スタングレネード。数にして四十を超えるそのピンが、一斉に吹き飛んだ。

「……馬鹿な。そんなことをすれば」

榊二連も巻き込まれる。自分自身を巻き込んでしまう。

考えている暇はなかった。閉じた目蓋の上に腕を被せて、両手で耳を押え付ける。直後、マグネシウムの光が絹旗たちの視界を真っ白に染めた。鼓膜が破れる痛みが走り抜け、揺さぶられた脳が意識を手放そうとする。気付いた時には、地面に倒れていた。

依然、回復しない視界の中で、黒い影が動いている。

「……っ……」

何を言っているのかよくわからない。

麦野が無事だったのか、それとも宇都宮が駆け付けたのか、儂い希望はすぐに裏切られた。

段々と見えなかったものが見えるようになり、影が鮮明に姿を変えていく。

純白の白衣に身を包んだ男が、自分たちを見下ろしていた。

「ふむ、まだ気絶していないのか。それが君の能力なのかな？ ま

あ、どうでもいい」

「……どう、して」

「不思議かな？ 音響炸裂弾を受けたはずの私がなぜ無傷なのか」

確かに榊二連は耳栓も特殊眼鏡も使っていなかったのだ。

榊二連が倒れた絹旗に右手を向ける。対する絹旗は何もできない。頼むから立ち上がれと祈り続けるだけだ。

歯を食い縛る絹旗を、ズガンツ と衝撃が殴り飛ばした。

「なるほど、自動防御か。だが無傷と言うわけでもないようだ」
絹旗は目を見張る。

榊二連の右腕から、鈍色の金属が飛び出していた。ポツカリと空いた穴は、銃口だろう。

「サイ……ボーグ？」

「御名答　　と言っておこう。人体と言うのは不便なものでね。腕一本切断しただけでもショック死してしまう。怪我を放置すれば雑菌が入り込んで細胞が壊死する。野生の獣一匹にすら劣る、完成されたとはとても言えない脆弱な生き物だ。そう、克服しただけに過ぎないのだよ」

「克服？　グロテスクな、だけじゃないですか」

「私は身体の72%を機械化しているだけに過ぎない。人工臓器が有り触れた時代において、私のような存在は大した異端とは言えないだろうさ」

「理解、できません。超……人間辞めてます」

「否、私は思考している。故に私は人間だ。君たちと同じだよ」

榊二連の右手が絹旗の頭に被さった。

口径は、おそらく五十を超えている。連続で衝撃を叩き込まれれば、いずれ能力が切れて、脳漿が飛び散るだろう。

絹旗は目を閉じた。舐めていた。榊二連を。この男は狂っていたのだ。自分たちはそれを見落としていた。

「さよならだ」

榊二連が左手で十字を切りながら宣告する。

「汚い手で絹旗に触るんじゃない！」

まったくの不意打ちに、榊二連は対応できなかった。榊二連の身体がグレネードの直撃を受けたかのように吹っ飛ばされる。榊二連は焼け焦げた白衣を破り捨てながら、器用にもバク転しながら体勢を立て直す。擬装用の皮膚がめくれ上がり、人工筋肉と金属マニピ

ユレータが露出していた。

「アウレオルスⅡセカンドを倒したとでも言うのか？ 『死海規定（セレクⅡハヤハド）』が破れただと！？」

「残念だったな。あんなものに頼っていたお前の計画は、俺たちがぶっ壊した」

「馬鹿なっ！ 有り得ん！ 能力者ごときが魔術師を倒した！？」

宇都宮日向はそれには答えず、絹旗の傍で跪いた。

「うつ……のみや」

「悪い。遅くなった」

「ごめん、なさい」

まただ。前にもこんなことがあった。その時も宇都宮に助けて貰ったのに、また迷惑をかけている。自分は足手まといにしかならぬのかと、不甲斐無い気持ちで泣きたくなる。どうして、何時もこうなるのだろう。同じレベル4なのに、『アイテム』は『サークル』よりも強いはずなのに、戦闘経験は自分の方が積んでいるはずなのに。

これでは、隣に並ぶこともできていないではないか。

「ごめん、なさいっ……！ 私はっ……！」

「謝るなよ」

そんな絹旗の唇は、宇都宮の人差し指で塞がれてしまった。

劳いでも、慰めでもない、ひどい言葉。

どこまでも優しくない、突き放しているとさえ思える言葉だった。「俺にビンタ入れた奴が、らしくないことで悩んでるんじゃないやねえよ。あと泣くなら俺の胸で泣いてくれや。ま、今はそんなことをしている暇はないんだけどな」

「……本当に、超、馬鹿なんですから」

「そうだな。でも、今はそれでいいって思ってるんだ」

宇都宮日向が、燃え盛る右手を榊二連に向ける。

榊二連が憎悪の瞳で宇都宮を睨んでいた。だが、その程度で宇都宮が退くことはない。

「終わりだよ、魔術師。お前の執念は、俺の炎で焼き尽くす」
「笑わせるな、能力者。貴様ごときが、我が計画に立ちはだかると？」

異端の能力者と、異端の魔術師が激突した。

十

開戦の合図はなかった。

榊二連が仕込み銃を放つと、それに合わせて宇都宮が踏み込みながら炎を払う。しかし、榊二連は炎の猛威をもともせず、逆に猛火に突っ込んだ。

驚愕している間すらなく、反射的に身体が動いて炎の拳を叩き込む。

「完全回帰、主が授けた救いの光に安らぎを、我が苦行に福音を」
高らかに詠唱しながら榊が投じたスタングレネードを、爆発の前に焼き払う。直後、地面が裏返って出現した機甲虫が特攻をかけた。舌打ちしながら、正面から拳を突っ込んで爆発させる。その隙を、榊は見逃さない。左腕の肘関節に仕込まれていた爆薬が炸裂し、音速に達した拳が宇都宮の腹に入った。

「ッ
ッ」

音にならない悲鳴を漏らしながら反撃を放つも、すでに榊は離脱している。左手の指先が榊の腕を掠っていたが、全身をサイボーグ化している榊には大したダメージにはならない。拳をまとった炎は避けているようだが、温度の低い炎は榊の装甲に防がれてしまう。

アウレオールの『瞬間錬成（リメン＝マグナ）』があれば　と
思うが、それは無い物ねだりだ。実を言うと、絹旗たちの危機に慌てて駆け付けたため、アウレオルス二号との戦いは未だに決着が付いていない。格好付けて登場したのはいいが、炎が通用しないなら、

アウレオルスが駆け付けるのを待つべきかもしれない。

「いや、違う」

たとえば炎が装甲の部分に通用しないとしても、榊の身体が精密機械だとするなら通用する部分はあるはずだ。

ソフトアクチュエータ

合成樹脂の人工筋肉は生身の人間よりは熱に強いだろうが、タングステン鋼ほど融点が高いなんてことはないだろう。

炎の直撃を受けて、無傷と言うことはないはずだ。

先ほど詠唱しながらスタングレネードを投げ付けていたが、あれが魔術と言うことはないだろう。

「傷を治す魔術なのか？」

「気付いたか。まあ、少し観察すればわかるだろうがね」

榊二連の身体から炎が溢れ出していた。宇都宮が浴びせた炎だと勘違いしていたが、あれは榊二連が出している炎なのだろう。焼け落ちた部分から真つ新たな金属片が現われたのである。

「聖アントニウスは病気を治す奇跡を起こし、修道士の父となった。聖アントニウス会の修道院は治療術に優れていた。私が用いているのは何の変哲もない治療術式『アントニウスの火』だよ。もっとも、生身の身体を癒す本来の術式とは、ほぼ別物になっているのだがね」
それは、機械の身体すら治してしまう、異端の魔術。

自分以外のことなどまったく考えていない、自分のためだけに考えられた低俗な魔術だった。

「だから、無駄だ」

アウレオルス二号に他人を犠牲にする魔術を与えた外道が、諦めて死ねとその目で語っていた。宇都宮の能力では勝てないと当然のように考え、榊二連は壁のように立ちはだかる。

「だから何だつてんだ。傷が治るから無敵だとも思ってるのかよ？」

それでも、宇都宮は止まらない。

理解できないものを見るように、榊二連の眉が寄せられる。

「学園都市をぶっ壊して、お前の思い通りにしてやるなんて考えて

るのかよ？」

榊二連が拳を構えた。さらに配下の機甲虫を呼び寄せろ。

宇都宮は嘲笑った。内心の不安が透けている。だから、そんなものに頼らなければならぬのだ

「お前はどこまで行っても小心者だよ。他人を犠牲にして身の安全を守りたがる、自分の命をかけて行動することできない、ただの三下じゃないか」

「黙れ」

「不安だから木山とフレンドを撃つたんだろ？ その時点でテメエの底は見えてるんだ」

六千度の炎が宇都宮の両手に集まった。

最大出力で炎をぶつける。回復する間もなく焼き払う。出し惜しみはナシだ。

それを不味いと見たのか、榊二連は機甲虫を自分の周りにかき集めた。宇都宮が攻撃を放つ前に倒そうとするべきだろうに、どこまでも小心者なコイツはこんな状況になっても自分を守ることしか考えていない。……こんな奴に、木山とフレンドが傷付けられた。

自分への怒りもある。だが、今はその怒りをコイツに叩き付ける。「無駄だ。貴様の炎ではタングステンの融点は超えられない」

「私の能力なら関係ないんだけどね」
山のように集まって壁になった機甲虫を、白色の光線が撃ち抜いた。

直後、宇都宮の炎が榊二連を包み込んだ。

膝から力が抜ける。能力の使いすぎだ。ちくしょうが と呟きながら、宇都宮はぶっ倒れた。

アイツ、また逃げやがった。

右腕が吹き飛び、片足は半ばで折れている。顔面の皮膚が剥がれて鉄板が剥き出しになっていた。

満身創痍だ。だが、この程度のことは予測範囲内ではない。

アウレオルス「セカンドの喪失は痛手だったが、あれはまた造り直せばいいだけだ。榊二連の脳があれば、あんなものは幾らでも作り出せる。

「私はどんな時でも最悪の事態を想定しているだけだ。断じて小心者などではない」

腕時計に仕込んだボタンに触れる。地下墓地の爆破装置だ。

これでいい。榊二連の計画に立ちまはだかつた障害は、これで取り除かれた。レベル5の一人を排除したと聞けば、ローマ正教も重い腰を上げて支援に乗り出すはずだ。

ホツと安堵の息を吐いて、五秒後、榊二連は異様な顔をして振り返った。

爆発音が 聞こえない。

「いい歳したオッサンが、気持ち悪い顔をするなつての。ああ、あれか。』どうして自爆装置が作動しないんだつ』つて今頃になつて驚いてるわけか。あつはつは、そりゃ残念だったなあ。あれはガキどもと必死になつて戦つてる間に解除させて貰つたわ」

「……お前は」

「つかマジで見境がなくなつてんのな。墓地を吹き飛ばしても、一般人が騒がないとでも思つてたのか？ ……つたく、面倒事はつか増やしやがつて、少しはこっちのことを考えろつての」

顔面に刺青を入れた男 木原数多が、車のボンネットに腰を下ろして、榊二連を見下ろしていた。

「ッ、機甲虫」

「馬鹿の二つ覚えみたいにそう言うだろつてのは予想できた」

呼び寄せた機甲虫が、見えない力で横から殴られたかのように吹っ飛んでいった。

「……は？」

「だからさー、この俺が無防備にテメエの前に出て来るわけがねえつてのは考え付くだろう？ 狙撃手を伏せてるだけなんだけど、そんなに驚かれると逆に興ざめなんだよなー」

ガンツ、と左腕がはじけ飛ぶ。

魔術で修復すると同時に、再び銃弾が左腕を吹き飛ばした。

一撃で脳を破壊されない理由は、魔術側への交渉用のカードにするつもりだからだろう。つまり、木原数多はここで自分を殺すつもりはない。ならば切り抜けられるかもしれ。

「あー、なるほど。その十字架が、テメエの能力の核って訳か」

そんな甘い考えは、木原数多には通用しなかった。

「ま、待て！ 私は学園都市の暗部を手中に収めるつもりだ。君が協力してくれるなら」

十字架を破壊するために、左胸ごと吹き飛ばされる。

それでも機械化された榊二連が死ぬことはない。

「このまま達磨にしてアレイスターのところまで引きずって行く。言いたいことはそこで言えや」

冷徹な宣言に、榊二連の顔が絶望に染まった。

十

最後までよくわからない事件だった。老人の妄執に巻き込まれただけなのだろうか。

判断材料が少なすぎて、事件の全容が見えてこない。榊二連は何を考えていたのか、アウレオルス二号は何だったのか、アレイスターはこの事件をどう見ているのか。『獵犬部隊』に捕えられた榊二連に問い質すことは、すでに不可能になっている。

榊二連は、もうこの世にはいないと考えるべきだろう。

「……ま、どうでもいいか」

終わったことだ。過去の人間に関わっていられるほど、今を生きるのは楽ではないのだから。

宇都宮は閉じていた目蓋を開き　すぐに閉じた。

「宇都宮、そのシヤケは私のだから手を付けたら駄目だからねー」

「結局、味噌汁は私が貰った訳よ！」

「なら私はホウレン草のお浸しを貰おうか」

どうして宇都宮の病院食が切り分けられているのだろう。漬け物と白米しか残っていないお盆を前に、宇都宮は頭を抱えて蹲った。

「だって、病院食って少ないでしょ？」

「ああ、そうかよ。聞いたこっちが悪かったよ」

罪悪感の欠片もない返答に、宇都宮の目が死んだ魚のようになる。

事件の後。

宇都宮は当然のように入院し、木山やフレンドと同じ病室に突っ込まれた。さらには我らが女帝、麦野沈利も入ることになっていたのだ。何でもスタングレネードで気絶した後、榊二連がちゃっかりと銃弾を叩き込んでいたらしい。本当にくそつたれな外道である。

ポリポリと漬け物を囓りながら、宇都宮は涙する。

さつさと退院したい　と。残念ながら、あと三日はこのままだ。

「皆さん、今日も最愛ちゃんのスペシャルなお見舞いですよー！」

「絹旗、待っていたぞ！」

救世主が到来したとばかりに瞳を輝かせる宇都宮に、絹旗はドン引きしていた。若干、何だろう……期待しているような感じだが、おそらくは錯覚だろう。と言うか、空腹で幻覚すら見えそうな宇都宮に、マトモな思考力を期待してはいけない。

「あ、えと、宇都宮？　もしかして、超お待たせしちゃいましたか？」

「ああ、待ったぞ。待ちわびていたぞ」

「そ、そんな……超恥ずかしいですよ、宇都宮」

ポツと頬を染める少女に、宇都宮は気付かない。絹旗が持ってい

た袋を引つたくりのように分捕ると、もうお前には用はないとばかりに中身を改める。

「ほほう、今日はメロンではな」

最後まで言い切る前に、宇都宮の身体が壁にぶつけられた。これで入院が一日伸びた。

笑顔で宇都宮以外の分のメロンを切り分ける絹旗に、麦野までドン引きしている光景を見て、宇都宮はようやく帰ってきたと実感する。長すぎる一日が、やっと終わったのだ。

「少年」

「ん、どうした？」

「お疲れ様だ。よく頑張ったな」

こう言う時、木山が教師をやっていたことが実感させられる。少しでもだけ目頭が熱くなってしまった。

木山春生。生きていてくれてよかったと、心の底からそう思った。

「ありがとな」

「……？ 何だそれは」

「いや、別に」

恥ずかしくなるなら言わなければよかったと思いながら、宇都宮はどんちゃん騒ぎをしている病室からそっと出て行く。

「覗きか？ 警備員に捕まっても助けてやらんぞ」

「愕然、失敬なことを言わないでくれ」

病室の外に、気まづげに中の様子を窺っていたアウレオルスがいた。女ばかりの部屋の中に入るのを躊躇っていたのだろう。宇都宮は自分のことを純情だと思っているが、アウレオルスはそれ以上だ。生まれてすぐなのだから、仕方がないと言えばそれまでなのだが。

結局、この青年は鏡映しの相手を殺せなかった。

アウレオルス二号は這々の体で逃げ出したらしい。おそらくは暗部の人間に捕まって処分されているだろう。だが、同時に考えてしまふ。

もしかすると、また会うこともあるかもしれないな と。

将来の禍根になるかもしれないのに、アウレオルスは敵を殺さなかった。それは甘すぎる選択だ。

だが、それでもいいのではないかとも思ったのだ。

「煙草、買ってこい」

「いきなりパシリ発言!？」

殺さない。宇都宮の道とは違うが、そう言う道も確かにあるのだろつ。

狼狽えるアウレオルスを見物しながら、宇都宮は小さく笑った。

11：不死術者（後書き）

どうにも中途半端な内容になってしまった感じが否めません。話を引っぱりすぎたのがいけなかったのか、神二連の小者っぷりが目立ちすぎています。自分で読んでうわぁ……ってなりました。

あと本当に遅れて申し訳ありません。

更新放置にめげずに読んで頂いた皆さまにこの上ない感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9550/>

きぬはたっ！

2010年12月22日17時40分発行